

# 奇譚クラス

◆ 新しい風俗文献誌

## 7



奇譚クラス

1971

7

雑誌コード 2805

THE KITAN CLUB

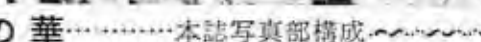
Published Monthly By Akasaka Kenji

Osaka Japan



7月号 ¥350

カメラ・ハント楽我記……辻村隆  
女体緊縛の醍醐味を語る……塚本鉄三



柔肌に喰い込む麻縄	前田真知子
首縄横臥二態	前田真知子
典型的後手縛り	前田真知子
自由な肢のたたえ	前田真知子
麻縄と絨肌の明暗	前田真知子
厳しい縄目を味う	前田真知子
準備態勢OK	前田真知子
設問縛りの表情	前田真知子

・本誌写真部構成

緊縛女体の光と影……………編集部構成

#### ·編集部構成

---

女性モデル募集

勇敢な女性の出現を望む

1999

て眞正全體の上、

意見、エッセイ、感想、戯曲など、如何なる形式でも最も得意なりとされるものを進んで御執筆下さい。

一、いづれも模倣や歪流を排して、あくまで新分の野に意欲的な野心作を求めています。この際私にようお持ち致します。

は、断って御応募下さるようお願い致します。

一、応募作品は編集部にて慎重審査の上、入選決定しました。入選作品は速かに筆者に通知致します。入選作品は折り込み対し賞金を贈呈致します。入選作品は著者は当社に移行することを前以て御承知のうえ願います。応募作品は必ず未発表の自作品

に限りません。たとえ未発表の作品でも他社へ投稿されたものはお断りします。作品の中に他人の作品を引用する部分がありましたら、出処（作者、書名など）を明記して下さい。

[illegible]

ただ早く誌上に掲載致します。  
一、懸賞応募作品は一般の原稿、読者原稿と区別するため、第一頁に「懸賞」とお書き下さい。  
二、ペンネーム、匿名は自由ですが、住所

者の氏名は必ずお書き願います。宛先は絶対にご投稿された原稿は原則として返戻は致しません故、若しご入用でしたらコッピリを

とて、おいて下さい。  
原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書箱第41号、曙出版株式会社に送付して下さい。  
送金先は、曙出版株式会社に送金して下さい。

世に於ては、これに因くま聞け致します。

勇敢な女性の出現を望む

○本誌の内容充実刷新のため、並に本誌の文獻資料性向上のため、女性の写真モデルを募ります。本誌の女性読者の方で写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか勇氣を奮つて御応募下さるよう、お願い致します。

○本誌愛読者の女性の方でしたら、国籍、年令、遠近は問いませんから御遠慮なくお申込み下さい。採用の方には壹万円以上拾万円までの謝礼を差し上げます。

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下されば幸いです。

○誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まれない方がありましたら、その旨添記して下さい願ひます。御都合に依つて分譲用又は助手介添え或はプレイのみの出演をして頂きます。その時の報酬については改めて御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに関してのお申込みは、年令、略歴の他に身長と体重をお書き添え願ひます。写真と同封下されば尚結構ですが、若しお手元に適當なものがなければ、なくとも差支えありません。

申込先 大阪市住吉郵便局私書箱第41号  
映出版株式会社編集部宛

~~~~~



本誌愛読者の美女たちの緊縛責め姿態

離島の乙女浩子嬢

芳紀まさに二十才の穢れなき乙女の肌に妖蛇の縄はからみつく。

膨満なる乳房責め

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
高村 浩子 略号八ひら

片足吊りにもだゆ

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
高村 浩子 略号八ひむ

初縛りの羞らい

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
高村 浩子 略号八ひな

縛りは大好きなの

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
高村 浩子 略号八ひれ

二十才の羞恥縛り

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
高村 浩子 略号八ひつ

恥しき緊縛ポーズ

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
高村 浩子 略号八ひよ

あどけなき妊婦

五月号のカメラハントで紹介された稚妻富田由美子さんの初産の妊婦腹とその縛りを開陳します。

臘燭責めの妊娠腹

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
富田由美子 略号八へえ

これが妊婦縛りだ

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
富田由美子 略号八へふ

前手縛りの太鼓腹

大手札二枚一組 略号三〇〇円  
富田由美子 略号八へら

臨月腹を縄で縛る

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
富田由美子 略号八へれ

稚妻の太鼓腹観賞

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
富田由美子 略号八へあ

妊婦全裸の羞らい

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
富田由美子 略号八へう

メロンのような腹

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
富田由美子 略号八へよ

一糸まとわぬ妊婦

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
富田由美子 略号八へや

ペテランと新進

Mの快味に慟哭する谷山久美子とほのかなSMに憧憬する美女前

田真知子の最新縛り責め紹介。

強烈エビ縛り地獄

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
谷山久美子 略号八ひあ

麻縄開股責め地獄

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
谷山久美子 略号八ひて

開股縛りの強烈さ

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
前田真知子 略号八ひえ

白肌に喰い込む縄

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
前田真知子 略号八ひま

後手吊上げに呻く

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
前田真知子 略号八ひの

開股責めの醍醐味

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
前田真知子 略号八ひこ

縄で汚す清纯乙女

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
前田真知子 略号八ひふ

エビ責に映える肌

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
前田真知子 略号八ひう

捕われの美女泣く

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
前田真知子 略号八ひや

夫婦プレイの華

男性のSに馴致された女性のMは次第にセックスの前戯的段階から本格的なSMプレイへと移行して絢爛たる春の花を咲かせる。

惨酷海老胡坐縛り

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
三浦 純子 略号八ひす

亀甲と後手柱縛り

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
三浦 純子 略号八ひせ

足挙げ開股を拒む

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
三浦 純子 略号八ひし

臀部責めの悦楽境

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
三浦 純子 略号八ひみ

胡坐縛りで責める

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
三浦 純子 略号八ひも

髪を掴んで苛める

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
三浦 純子 略号八ひさ

化粧室とトイレ責

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
三浦 純子 略号八ひん

股間縛りと臀部責

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
三浦 純子 略号八ひゆ

◎お申込方法◎御注文は前金にて(送料は当方負担)大阪市阿倍野郵便局私書箱14号天星社宛へ略号を記載してお申込み下さい。





## 奇譚クラブ

△第二五巻 第七号・通刊第二八一号△

### (昭和四十六年) 七月号 目次

#### △本 文△

- 扉で一言「少女の甘美な幻想」……………椎名麟一郎…(9)  
予世場氏の生活と意見「勝手なネツ」……………予世場良三…(10)  
懸賞入選創作「ある男の失敗」……………武田 兵吉…(16)  
中近東のミストレス「寝室便器」……………三原 寛…(26)  
体験と感想「私とSMとKKと」……………町 陽一…(30)  
被虐の女主従「偏僕が恋しい」……………葵 幻三…(38)  
惨酷ショートショート「屠殺されるわたし」……………小倉 幸雄…(50)  
連載・M小説「則天武后」(3)……………真砂十四郎…(52)  
女責め図絵の系譜 捕虜と女たち……………南 彦三…(62)  
魅力を秘めた若姪婦「新鮮なメロン腹」……………高野 原美…(74)  
連載小説「大 噴 火」(第三十四回)……………千葉 青鬼…(76)  
陽気な女の「北中南米ふんどし旅行」……………鈴木ゆり子…(84)  
晴着奇譚「新きものの教室」……………牧 高志…(88)  
水田真紀子「五月の頃の物語」……………水田真紀子…(98)  
告白「ゴム夫婦」……………呉無真仁矢…(100)

## 本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文庫を研究する平和で  
健康な社会生活を営む真面目な成人を対象  
として編集しておりますが、青少年の保護  
育成に關する条例には抵触しないよう、十  
分な配慮を今後更に徹底いたします。  
一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ  
ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵  
の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順  
次整えて参りましたが、更に挿入写真の検  
討及び見出し、キャッチフレーズの改訂な  
どによって趣情性を排除してゆきます。  
一、本文の内容についても、刺激の強いもの  
は極力掲載しないようにするのは勿論、掲  
載した文章は十二分に検討を加え、いやし  
くも青少年の健全なる育成に支障を与えな  
いよう努力いたします。尚、本誌の発行部  
数は最低限度にとどめ、その増大を企てるた  
めの努力はいたしません。

## 奇クサロン

(232)

- M 女性を求む……………阪田 敦夫  
夫婦ブレイとマンネリ……………阪東 太郎  
サロン楽我記(第八十五回)……………辻村 隆  
短信往来 渡部光雄氏へ……………秋田 稔  
私の願望 女装被強制……………伊勢咲通夫  
イメージ画 「重い獲物」……………線 JOE  
夫婦交換ブレイへの期待……………小山 一郎  
イメージ画 「艶夢の実演」……………あらいかず  
みさ子の五つの誓い……………佐野みさ子  
乙女哀歌 「はじらい」……………中河 ゆう  
SM替え歌 「妻は夜うめく」……………納屋 名鶴  
拝啓 奇ク 編集者殿……………山本 久男  
写真 「純子のブレイ・フォト」……………三浦 敬一  
編集部だより……………編集 部  
妻の持出しショー……………土田 純一  
再び私達のブレイ写真を……………紀川 正信  
ブレイとフォトの差 SMの美感……………国川 栄一  
パンティに想う……………松原 千次  
五月号を読んで……………京都恵夢男  
イメージ画 「ケツアツ」……………山吹 赤茶  
静子の特訓……………北川まりこ  
フォト・イラスト「哀」……………西水玉二郎  
六月号読後感 マニアのたわごと……………画竜 点晴  
美少女無惨秘帖「完全自刃」……………桐原 紫門  
フォト通信 振袖無残美……………山本 五郎

## SMカメラ・ハント△高村浩子の巻△

### 「華麗な衝撃」

- 告白「私の洗腸ブレイ」……………辻村 隆…(100)  
制作 秘密クラブブルヘル・ファイヤー……………長谷田亀治…(104)  
SM写真構成家と……………細吹悠紀夫…(108)  
しての辻村隆(3)「辻村隆研究」……………相吹悠紀夫…(108)  
連載小説「パノラマ島秘譚」(その五)……………藤見 郁…(104)  
懸賞入選告白「流れる雲に身を託して」……………荒尾 慶子…(106)  
告白「マゾ耽溺の半生」……………黒田 貴夫…(106)  
被虐の旅シリーズ「メキシコの鞭」……………由利美千子…(108)  
緊縛随想 未練果てなし……………早木 夢二…(108)  
連載創作「幻想帝国」(3)……………花影 叢…(108)  
切腹願望 懐 剣 の 妻……………浅川 則子…(107)  
連載・青春の陥穽「女子学生」……………芳野 眉美…(108)  
連載小説「花と蛇」(続編第七十八回)……………鬼六…(111)  
懸賞入選創作「ペット」(上)……………銀河 三郎…(116)  
読者通信……………編集部選…(152)
- 読者ギャラリ「無題」室井亜砂路・「荒れ部屋の  
珍客」宮城 昌子・「仕置蛇」岡 たかし・「刺痛覚」  
豪 城二・「吐いちやダメ」矢川 祥彦・「目盛貴  
め」志羽 利也・「人工美女写真」室井亜砂路・「花  
に吹く嵐」岡 たかし・「乗馬ゴッコ」春川ナミオ・  
「燭台」須坂 旭・「女王の怒り」岡 たかし  
目次カット「誘いの手付」……………矢川 祥彦  
扉カット「悦びの胎動」……………須坂 旭



# 最新撮影V異色美人モデル緊縛フォト選

Y組新百態 大手札型印画紙 (9×13種) 極鮮明焼付

各組 一枚一組 (送料共)

四組四枚 五〇〇〇円  
十組十枚 一〇〇〇〇円  
二十組二十枚 一八〇〇〇円  
五十組五十枚 四〇〇〇〇円  
百組百枚 七〇〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

いづれも直接印画紙に焼付けた極めて鮮明美麗なフォトで複写ものは一枚も含まれていません。貴重なコレクションとして永久に保存して頂くに足る優秀品であります。お申込みは大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社宛へ前金にて願います。

☆

1 台上に晒す全裸(三浦 純子)  
2 開股パイプ責め(三浦 純子)  
3 尻挙げ開脚責め(三浦 純子)  
4 二つ折り腎挙げ(三浦 純子)  
5 麻縄強烈柱縛り(三浦 純子)  
6 エビ責め縄猿轡(三浦 純子)  
7 海老縛り閨責め(三浦 純子)  
8 正面エビ強烈責(三浦 純子)  
9 喘ぐ縄猿轡痛め(三浦 純子)  
10 痛苦に耐える女(三浦 純子)

11 驚づかみの黒髪(三浦 純子)  
12 二折りの引回し(三浦 純子)  
13 開股正面逆立責(三浦 純子)  
14 豊満を縛る魔手(座間 明子)  
15 沖縄美人の表情(座間 明子)  
16 高らかに笑う顔(座間 明子)  
17 股間縛りに喘ぐ(座間 明子)  
18 美しき全裸縛(座間 明子)  
19 後手縛りを誇る(座間 明子)  
20 開股縛りに諦観(座間 明子)  
21 緊縛に悶える足(座間 明子)  
22 白肌をくびる縄(前田真知子)  
23 鏡に映るエビ責(前田真知子)  
24 全裸の美女に縄(前田真知子)  
25 さらけ出した女(前田真知子)  
26 純肌を柱に晒す(前田真知子)  
27 首縄菱亀甲縛り(前田真知子)  
28 柔肌に喰い込む(前田真知子)  
29 裸女を押込める(前田真知子)  
30 光に映える白肌(前田真知子)  
31 逆反り弓吊り責(前田真知子)  
32 責に諦観の美貌(前田真知子)  
33 開股責めの序曲(渡部 好美)  
34 蠟涙責めに哭く(渡部 好美)  
35 悦虐の開股縛り(渡部 好美)  
36 閨中の股間縛り(渡部 好美)  
37 全裸緊縛の愉悅(渡部 好美)

38 爛熟した女体責(三浦 純子)  
39 ムチ打ちの洗礼(三浦 純子)  
40 愛妻飼育の過程(三浦 純子)  
41 股間縛りの正面(三浦 純子)  
42 海老責に喘ぐ顔(谷山久美子)  
43 強烈二折り責め(谷山久美子)  
44 赤裸の尻を暴く(谷山久美子)  
45 アニマルの表情(谷山久美子)  
46 苦痛に反る足指(谷山久美子)  
47 極限の苦痛襲う(谷山久美子)  
48 悦虐悶えの果て(谷山久美子)  
49 緊縛最高の悦楽(谷山久美子)  
50 歯で咬んだ猿轡(谷山久美子)  
51 責めるの許して(谷山久美子)  
52 苦悶の末の頂点(谷山久美子)  
53 椅子開股で晒す(谷山久美子)  
54 強縛愉悅の極み(谷山久美子)  
55 大の字開股縛り(谷山久美子)  
56 情容赦ない麻縄(谷山久美子)  
57 敵しき後手縛り(谷山久美子)  
58 ムチ打ちに泣く(谷山久美子)  
59 条痕を尻に残す(谷山久美子)  
60 哀憫非情な麻縄(谷山久美子)  
61 女性自身を晒す(谷山久美子)  
62 柱に二女の連縛(好美・叢子)  
63 責め疲れた二女(好美・叢子)  
64 全裸の二女陳列(好美・叢子)  
65 高手小手を開陳(好美・叢子)  
66 椅子開股の二人(好美・叢子)  
67 連縛双丘の珍景(好美・叢子)  
68 羞恥に悶える女(叢子・好美)

69 美しき床の飾り(叢子・好美)  
70 羞らう美女二人(叢子・好美)  
71 正面相對の連縛(叢子・好美)  
72 股間縛りの併立(叢子・好美)  
73 尻も何も丸出し(好美・叢子)  
74 捕われの全裸像(渡部 川路)  
75 一体にした緊縛(渡部 川路)  
76 点火した蠟燭責(渡部 川路)  
77 足挙げ正面棒責(川路むら子)  
78 棒縛り羞恥責め(川路むら子)  
79 三本の棒で拘束(川路むら子)  
80 麗しき首縄旅情(前田真知子)  
81 伸びやかな肢体(前田真知子)  
82 一糸まとわぬ女(前田真知子)  
83 灯籠の前で縛る(前田真知子)  
84 Mを恋する表情(前田真知子)  
85 無垢の肌を麻縄(前田真知子)  
86 美は麻縄を超越(前田真知子)  
87 白肌と汚れた縄(前田真知子)  
88 金髪は縄に動く(シーラケニ)  
89 後手縛りで開脚(シーラケニ)  
90 両手挙げ美肌晒(シーラケニ)  
91 日本式胡坐縛り(シーラケニ)  
92 碧眼に驚きの目(シーラケニ)  
93 白人の肌を縛る(シーラケニ)  
94 金髪碧眼の女性(シーラケニ)  
95 高手小手に縛る(シーラケニ)  
96 諦観白人の表情(シーラケニ)  
97 投げだした全裸(シーラケニ)  
98 卓上の一輪の花(シーラケニ)  
99 豊の上に転がる(シーラケニ)  
100 縛った異国の女(シーラケニ)





須坂 旭・画

### 少女の甘美な幻想

花恥かしい乙女の描く夢の中に、凌辱されたいVとか、暴行されたいVとかいう願望がしばしば顔を出すのに驚く。嘗て『私は誘拐されたい』というイギリス映画があったが、その内容たるやSMマニアならずとも、まことにショッキングなもので、富豪の美しい一人娘が誘拐されギャング団の一味の隠れ家に監禁された上、残虐な暴行を受けるという筋書きであった。

この筋書きは少女の性的な潜在意識が生んだ倒錯的な幻想であって、パリのオッリー空港に着いた美しい少女が出迎えるに、来た運転手に誘拐されて一味の隠れ家へ運ばれるというところから始まる。

不思議な性的魅力を持つ美少女が富豪の一人娘というところから身代金目当てに誘拐されるが、娘の余りの美しさに目がくらんだギャング団の一人が美少女を半裸にして縛り上げた上、無残な凌辱を加える——という物語なのだが、この話にはオチがあって、助け出された少女がうっすらと目を開くと、スチュワーデスの「ベルトを締めて下さい」という声を聞いて現実に立ち戻るというのだ。

この『私は誘拐されたい』という題名の示す通り少女の幻想であったわけだ。

(椎名麟一郎)





# 勝 手 な ネ ヅ

予世場氏の生活と意見

予 世 場 良 三

カット・あらいかず

K誌の、代表選手格たる、辻村センセイは  
「一匹狼」であって、昔から若い柔肌を縛り  
上げヒイヒイいわすのが好きとか。

K誌の、一読者格の予世場生徒も、また、  
「一匹狼」であって、昔から若い柔肌の縄目  
は極めてお好きなのである。

「似たようなもんじゃねえか」

予世場氏は、よくそう云って、ダダをこね  
るセガレをなだめようとする。

べつに欠食させてるようでもないんだが、  
ウマクもねえ古々米ばかりじゃあ喰わした内  
に入らねえとばかりに、予世場氏のセガレは  
辻村センセイの手皿にある活き活きしたゴチ  
ソウに指を啜えて見入り、その健啖ぶりをハ

ラハラした様子で窺っているのだが、今にも  
この世のゴチソウというゴチソウが喰い尽さ  
れてしまいそうな錯覚を覚えるらしく、メッ  
タヤタラにオヤジを責めたて始める。それが  
毎月二十五日前後になると、特に激しくなる  
のだ。

「何が似てるんだよッ」

セガレがダダをこねだすと、本心を知悉さ  
れているのが分かっていただけに、予世場氏  
としては、扱いかねることが珍しくないのだ  
ある。

「オヤジ面する甲斐性もないクセに、へんな  
気休めをいってゴマカスなッ！」

「だって、おまえ。同じ人間で一匹狼で縛り

が好きちゅうトコなんぞ、まるっきり……」

「そんなのは似てるとはいわないんだッ！」

「けど実際に……」

「ただそれだけのことなら、世の中、辻村セ  
ンセイのソックリさんで埋まってらあ」

「なるほど」

予世場氏は、思わず手を拍つ想いで、文字  
通り血肉を分けて生きているセガレにやりこ  
められたことを喜ぶのである。そしてバカ親  
ぶりを発揮して、その頭を撫ぜるのだ。

予世場氏は、つい先頃、何かの本の中で、  
どなたかが書かれたものを読んだ。ただしS  
M論ではなく、大要『親バカ』とは、日頃は親  
としての權威を保っている親が、たまたま子



供にやりこめられてニヤリとすることをいうのであって、のべつ子供のわがままを叱りもせずニヤニヤしているのはバカ親である」という意味のマイホーム論で、これまた「なるほど」と妙な感服をしたことであつた。

予世場氏は、毎夜（であつて欲しいと思うのだが）ではないが、週に何度かはダダをこねてオヤジを悩ますセガレを叱りつけることが出来ず、もっぱらなだめすかすことのみに汲々としている有様で、しかも、そのダダこねの回数が少なければ、心細くなってしまうのであるから、正にバカ親の最右翼と、いえよう。

予世場氏に頭をなぜられた予世場氏のセガレは、オヤジくみし易しとばかりに、益々、図に乗って、いきり立つのである。

「ボクだって、本当に喰いたいと思うゴチソウに、たまにはありつく権利があると思う」「そりゃあ、あるとも」

予世場氏自身が思つてることだから、セガレの意見は完全に頷ける。予世場氏のセガレは、いよいよ昂然として要求する。

「だったら、一度でもプレイ中の辻村センセイのソックリさんになつてみなよ」

予世場氏はいうまでもなく、この、時には

もて余す暴れぶりを発揮する同年のセガレを世界中の何者よりも愛しているし、バカ親であらうと何であらうと、その要求は、総て同意出来る関係もあつて無条件に諾いてやりたひのは山々なのである。しかし、この件についてだけは、毎度のことながらグツと詰まらざるを得ないのだ。まことに容易ならざることだからである。そこで、情けないとは思ひながらも、ついセガレの機嫌とりに懸命の努力を払うハメに追ひこまれてしまう結果となる。

「そりゃ、そうしたいとは思ふよ」

「思うだけじゃあ駄目！ 問題は実行力の有無にあるんだぜ。しっかりしろよ、オヤジ」  
「しかしねえ。プレイ相手というものは、そう簡単には……」

「辻村センセイなら簡単だっていうのかい」

「いや、そういう訳じゃないが……つまりキヤリアと知名度の違いで……」

「要するに、オヤジには実行力がないってえことなんだろう」

「いや、俺だってチャンスさえあれば……」

「棚ボタ式の幸運が頼りってことかい」

「そういう訳じゃないが、つまり、俺には家庭というものが……」

「辻村センセイには家庭がないのかい」

「いやいや、そういう訳じゃないがつまり」

「ちいとも、つまらないじゃないかよ。そういう訳とは、どういう訳だい！」

予世場氏のセガレはしびれをきらして、真赤になった頭を振りたて、怒りを全身で現わし、もはや聞く耳もたぬ？ とばかりに、セガレ特有の神通力でもって予世場氏の脳髓に実力攻撃をかけ始めるのである。

その点、オヤジの予世場氏より遥かに実行力に富んでいるといえるのだが、予世場氏がこのセガレに苦しめられながらも、限らない愛着を覚えるのは、ダダをこねるだけこねても結局は、余りうまくもない、ごく普通の料理方法による古々米、いや古々々々米ぐらいの献立で一応、引き退ってくれるばかりではなく、ゴネ疲れて寝についてからは、却って甲斐性のないオヤジを慰めてくれる場合が多いからなのだ。

曰く「まあ、生きてりゃあ、何かいいことにぶつからないとも限らないよナア。いくら焦つてみたつてさ相手が要るこつたもんネ。なあに星の数ほども居る女の内にゃあ、ゲテモノ好みのM美女もきつと居るわサ。ま、気長に当たるのを待つてゐるこつたな。宝クジだ



って、毎回誰かが当たってるんだからよう。車になら、毎日沢山の人が当たってるしさ……と。

予世場氏は、このオヤジ思いの一面を持つセガレを、しみじみ眺めながら、その欲求を満たしてやれない不甲斐なさを謝しつつ涙ぐみ、ようし、今に見ているオレだって……と心中深く発奮するのだ。すると、予世場氏と直結した情報網を持つ予世場氏のセガレのこゝとだから、直ちに、それをキャッチするらしく寝ている頭をむっくりと上げて云うのだ。  
「いいから無理すんなヨ。いくら気張ってみたってさ、辻村センセイほど、オヤジがモテるわけやあねえだろうが」

そしてコテンと又、寝るのである。ダダはこねても、分かるべきことは、ちゃんと分かっているのだ。予世場氏は、さすがは我がセガレと、ニヤリとする。

予世場氏……もう止そう。選挙カーの連呼じゃあるまいし、予世場ヨセバと、こうるさい。

○

だいたいSMなんてものは、当人同士さえその気になれば、極めて簡単にある程度の形を成す単純なものなのである。それだけに底

も浅い。まして国法で禁じられている人身拘束云々に抵触しないような遊びとなれば、とんだ猿芝居じゃねえか。大？の男が憧れたり思い悩んだりするほどの値打ちが、いったいどこにあるってんだ。女を縛りたいなんて思うな。女というものは、裸にしたり、縄をかけたり、抱いたりするもんじゃねえ。一番よく似合う衣裳を着せて、ただ床の間へでも飾っておいて遠くの方から眺めてるものなんだ……と、私は吾が心にいい聞かして諦めようとするのだ。モテない男のヤケクソになった時の気持というものは、軍国時代的思想統制のメチャクチャな押しつけすら理解出来そうな気にもなるものらしいことを、身を以て実感する。

しかし、我欲を制して真面目？にSMなるものを考えてみると、非常に面白い（私だけ？）ことにつき当たるのである。

まず、その傾向のある者に限ったことであることは勿論であるが、如何なる精神作用の故を以て残酷形体を愛し、美を見出し、そして性衝動を覚えるのであろうか……なんてなことは、事情があって考えてはいけないうとにしている。第一、アンマ代が高い。

改めて、まず、Sという略号を持つサディ

ストについてであるが……これがまた厄介なヤツで、世界的に顔パスの利くほうのボスのS氏、つまり本家直流のサディストについてのこととなると、またもや私個人の事情によるタブー範囲に鎮座ましましておって、どうも具合がよろしくない。従って、私の事情が許しそうな、つまりテコに合いそうなS氏、

K誌上という文化住宅を居所とされるところの分家さん、もしくは遠き御親類さん御统一到、その仲間の一人としての厚誼を以て、Sと名付けることをお許し願いたいのである。イヤだといっても、そういうことにしてしまうつもりであるが、Sの名一つにしても、これほどシンドイ行数稼ぎが出来るのも面白いことの一つであろうが、要するに、Sにも幾通りかの種類ありで、K誌上のS呼号者は、厳密にいつてもいわずとも「S」に「的」なる尻尾が附随する、愛すべきスケベ人種であることは、いわずものことなのだろうと思うし、Mもまた同然ではあるまいか。

もし仮に、金策に窮して一六屋さんへ走る途中で大金を拾い、そんなものはいらないうとエエカッコしているのに、無理矢理に大枚の札金を押しつけられるような調子で、私が絶世の美女にSMプレイをしてくれと追いつ



がられるような機会が、あるわけないけど、あったとしたら、きっとその仲間入りをしてしまうだろうと自信の持てるのが、団鬼六先生を旗頭とする、ベタベタムードの、スケベ一派の流儀である。「花と蛇」道場の極意は苛責などというオツソロシイ言葉にふるえ上がる私如きカヨワキS的遊戯願望者にも、さほど特訓の必要もなく手の届きそうな気がするからなのだ。だが、誰の考えることも一緒に、志望者はワンサと居るらしい。従って入門は極めて狭き門であろうことは容易に想像されるのである。

しかし、さすがは正攻法をモットーとされていられるらしい団先生は、不正入門を謀るヤカラの間で巨額の汚れた金などが現われないうちに、チャンと月一度のプリント教材によって、入門不可能者をも慰撫される方法を探っておられるのだが、私は、この鬼六流のまことに理に叶った責め方に敬服する。すなわち、感じるべき神経を責めて感じせしめ、羞恥の道理によって羞恥せしめるという、極めて直截的にして無駄を省いた責め方に、である。

そこで、面白い？　と思うことに突き当たるわけで、私は、K誌の古い号で「鞭打たれ

る苦痛が快感にすり替わる」とか「拷問によって快美感を得る」とかいった論旨のものを確かに読んだと思うのだが、鬼六流のこの極めて人間臭い愛戯的羞恥責めの単純さに対して、それらの高度？　のテクニク派が沈黙しているのは、どういう訳だろうか。

公平？　に考えてみて、K誌の読物が異常の世界とするならば、苦を快に転じ得る感覚の不思議さが望ましいのではなからうか？

そして、そういう異質の受感性やデリケートさこそ、SM誌にふさわしい、価値のあるものといえるのではないだろうか？……と、こまでは、確か何月号だったかの編集後記に書かれてあったようなことから、まずいと思うんだが、これからが心配。思う通り書けばボツにされちゃって、今までの頭の体操がパーになりそうだから困っちゃう。

しかし、もう仕様がねえ、続ける。

少なくとも、心から尊敬する皮肉屋さん、セト・ヨシヤ氏には分かって貰えたのではないだろうか希望を繋ぐのだが、前述の鬼六流云々は皮肉のつもりである。ハッキリ云わせ貰えば、「花と蛇」なる大河小説は、正に団先生の言葉通りの「奇妙な」もので、それなりに堂々たるもので、この分野も貴重なの

ではあろうが、通常の性感覚を基礎としたポルノグラフィの変形であると思わざるを得ないのである。あの、まことに以て生理感覚に合理的な女体奉仕は、小説という絵空事であるだけに、SM界のこととしては喰い足りない人もあると思うのだが、支持票ばかりで批判票の見当たらないのが不思議な気もするのである。

然らばSM小説とは、いかなるものを指すのであるか……となると、またもや、個人の事情からのタブー範囲に入るのであるが、歩き回れる極めて狭い縄張り内での勝手なネツを吐くとすれば、性器で感じる性感はごく当然の現象なのだから、性器以外で感じる性感も重視して欲しいし、単なる諦めや慣れによる順応は一般的な理の当然であろうから、常識以外の現象、つまり、一般感覚から見て不可解と思われる心理状態の追及などもあってこそ、三百五十円が、より以上に苦もなく投げられるのではなからうか……。

さあ書いた。これでも今夜のアンマ代を覚悟して、セイ一杯お上品にヒネツたつもり。編集のオツチャンかアンチャンか知らないがボツにするならしてもらおうじゃないか……と尻を捲りたいところだが、削ってもいいか



らよろしゅう頼みます。

どうせ凝った肩だ。ついでのことにもう少し凝らしてアンマ代のコストダウンを計ることにしよう。確か去年の何月号かのサロンか何かで誰かが書いておられたと思う。

大要「毎月美しいモデルを縛っている辻村隆というのは、なんと、ワルイヤツダロウ」……というようなことを。

私はあの時、手を拍って同感した。まったく、辻村センセイという御仁は、生々しいプレイレポで私と、私のセガレに対立状態を起こさせることだけでもワルイヤツだと思っている。更に最近ではモテモテムードのノロケまじりだから、余計に罪が深いようだ。だが、こちらは小説と違ってドキュメントなのだから、多少の粉飾はあっても、ベタベタムードの方が安心出来るような気がするから妙だ。

しかし反面、負けおしきも多分にあるが、少しばかり本気で「辻村センセイは、お気の毒な奉仕者」であると思っただけである。

辻村センセイはマゾである……というところでも逆説的に表現して達観者ぶるキザなヤツと思われるだろう。私自身も、そんな気がする。だが、実態は知らず、表面に現われたセンセイのプロフィールだけで察するならば、

そう感じざるを得ない。理由を述べよう。

一つ。勿論お好きなればこそ千里も一里ではあるが、時たま拝見する楽我記でのヤツアタリから、ノルマ的になった「カメラ・ハント」の御苦労がよく分かるような気がするのだ。誌上で見る限り、モデルの発掘には事欠かぬ様子ではあっても、プレイ、DPE、原稿のルート一巡には、易々とばかりには進まぬ支障も少なくないのではなからうか。

二つ。どうせコチトラにや廻ってきつこねえからという訳じゃないが、もし本当にマゾ素質あるモデルといえども、ノッケから被縛に陶酔する女ばかりではあるまい。女性特有の焦らし作戦におつかることもあろうし、縛らせてやる式のプライド保持作戦に舌打ちする場合もある。そして何よりも私自身の感覚から推して、生理的に、女ならなんでもいというわけには行くまいと思う。六年と四カ月と二十日ぐらい女性の匂いも嗅げない環境にあったような、つまり飢えきっている状態ならともかくとして、ゲップが出るほどのモテオジサンたる辻村センセイが、ひとときのプレイといえど肌合いの良否に左右されないわけはなからうと思うのだ。今回、出た写真集の中で「ハント女性はジャスト百名」

と書かれているが、いかに博愛主義者辻村センセイでも、その大多数の肌質の総てに芯から陶酔出来たとは考えられないのだ。出来るとすれば色キチガイだ。にも拘らず、デリカチスト辻村センセイの筆は、敢えてその色キチガイを凝していられるのではないか。まことに難事業というべきではあるまいか。

三つ。私自身が非力なる故に、つい想像してしまふことに疲労の問題がある。疲労といっても、何も「百米全力疾走に匹敵」するほどの意味ではなく、純然たる労働からくる疲労のことだが、難病を抱えた辻村センセイにして、女体緊縛から始まるマゾ表情撮影迄の労働は、勿論、地獄の苦しみではあるまいが決して法楽のみではなからうと思われるのではない。しかもその目的は、酔わせしめるMの桃源境であって、捕えた女スパイの拷問ではないのである。いかに縄に対して特殊な愛着を示すマゾ女でも、気分の乗らぬ間は、痛みも苦しみもあるのに相違ないと思うが、それらを快と変じ、悦と転じせしめるのは、一に掛かってセンセイの「奉仕」以外にはないわけだ。一時期、センセイのボヤキがハント記事に混っていたのを憶えているが、私はあれを読んだ時に、読者の一人として、まことに



御苦労さんであると思い、モテない男の一人としてザミクサレと思ったものだった。しかし、フェミニストにして名ハンターたる辻村センセイは「プレイの成功」という高邁なる目的のもとに、ひたすら、縛り上げた女性に対する奉仕をなさっていられる。責めを受ける女性の、なんと幸福なることよ。

以上の三点が、こ生意気にも私が「辻村センセイはマゾである」と断じる論拠だ。それが当たっていいようにいまが知ったこっちゃないが、要するに私は、そう極めつけることによって、果たし得ぬプレイ羨望の念をゴマカスことにしているのだ。すなわち、奉仕は強いられている現実だけでケツコウ。ワテがプレイをするときにゃホイ、女は勝手に悦んでホイ、縄目の肌をくねらせてホイ、寝そべるオレに寄り添ってホイ、奴隷の奉仕をせにゃならぬホイホイ……てな具合には、ゆきゃあすまいから、無理することあねえ……と。

——私は確か、SMについて書こうと、思っていた筈だった。生意気な批判や要求、それにモテないボヤキを並べるつもりではなかった。これに初志に反する。実際はもう面倒で、どうでもいいんだが、初志を貫徹するオトコでありたい、という涙ぐましい気持もち

ヨッピリあるところを見てもらいたいから、ここで大いに無理をして元へ戻そう。

難しいことは一切、考えてはいけないことにしている私でも、Sはエゴの塊で、多少に拘らず横暴性を含有しているらしいというところや、Mは極めて順応性に富んだ従順な甘ったれではないかということぐらいは考える。

けれども、K誌に集う文化的SM族の呼び掛けでは、この考えは通用しないような気持ちにさせられ、とまどうのである。

「だれだれさん、私は貴女をこうこうして、きつとMの満足を与えて差し上げます。だから私とプレイして下さい」

「貴女のイヤがることは決して致しません」  
「プレイに入るまでに、お互いが理解出来、信頼出来るように何度かの話し合いを……」

これらの意味の、折目正しい、物の道理をわきまえた「ラブレター」がS者の発信なのだから、私の頭にある「S・アンド、エゴ」

の思想は時代遅れのものらしいし、  
「私はこうされるのが好きです。なにに責めは、いやですが、どなたか……」

という責めのオーダーがM者の方から出るのを見ると、正に平和的SMプレイというものは、平和国日本そのままのウーマン・リブ

的变化をもたらしたのらしいと認識せしめられるのである。

面白いというべきか、感心するというべきかは知らないが、少なくともK誌なる文化住宅に集うSM人士は、世の頑迷なる偉いさん方のいわれるような異端者どころか、通常ザラに居る漁色者よりも、はるかに礼儀的な道順を心得え、人間尊重が出来る者達であるといえるのではなからうか。青少年の将来を指導されるエライ人達よ、私とツレモッテ、この現実の動きを見直そうやオマヘンか。よろしおまっか、Sちゅうのは、相手の方の意志と希望を尊重し奉仕して、悦んでもらうことに努力することダッセ。ホンでもってMちゅうのは、自分は身動きもせずに、相手に、自分のして欲しいと思うことをさせてやるチュウ、コッタッセ。これでも「健全なる育成」に支障が……おまっしやるナア。Mの横暴が権力に繋がるかも知れまへんもんナア。ちょうど現在の、大多数のヨメハン族のようにナア。それでもよろしいが、どうでしょう。どなたか信頼の出来る、プライバシーを守ってくださるM女性の方、私に奉仕させてくださいませんか……アキマヘンカ、サヨカ、ホナ、サイナラ。





カット・志羽 利也

彼、武田兵助は、その日も同じ夢を見た。同じといっても型が同一なだけで筋は異なっていた。出演者も変わる。いつも通して出演するのは彼と彼女……この女性は京子と言つて、彼だけが知っている他人である。つまり彼女は彼を知らないが彼はその女の事を——たとえば夜は必ず十一時十五分に雀台の駅に

## 懸賞入選創作

## ある男の失敗

武田 兵 吉

降り、十一時半きっかりに家（つまりそれが彼の部屋の窓から二百メートル程、隔てたアパートの一室なのだが）に着き、顔を洗い、着物を脱いで体操をし、十二時二十分びったりに眠る——ということまで知っているのである。彼が彼女を観察しはじめたのは去年の夏であり、かれこれ一年近くなる。その間に

彼は、さまざまな方法で彼女の事を調べ、幾度も、触れる程近づいたこともあるのだが、まだ、その裸だけは見る事が出来ないでいる。

ここで彼の調査した彼女に関する、あらゆる資料を発表することは出来ないし、又、その必要もないだろう。話を始めるのに必要な若干の概要を述べるのにとどめておこうと思う。とは言っても、彼女について特徴的な事は、あまりない。つまり、あまり特徴のない目立たない女で、ある工場の事務員である。しかし一つだけ特技があった。高校時代にやったバレーボールで、彼女の会社の持つ、実業界でも有数なバレーボールチームの第一補欠なのである。しかし、この十九才の堂々たる体軀は、近い将来、必ずレギュラーとなることを約束していた。身長一米六四、五八キロ、B九〇、W六十、H九八。まさに巨体である。だが、彼女は自分の胸の大きいことを気にしていた。

その彼女の部屋が、彼の二階から真正面に見えるのだ。この一年来、彼の部屋から強力な望遠鏡を通し、手の届きそうなところで、この素晴らしいグラマラスな肢体が、様々な挑発を彼に行ないつづけたのである。そして、



二、三カ月の間、毎日のようにみる例の夢もその挑発の結果であり、最近、彼の平凡な妻が急に年老いて見えはじめたのは、そのためであった。もっとも妻の衰えは、それ以前からのものであり、その娘の出現によって、彼の自分の妻への平凡な淡々とした愛が、急激に増悪に近いものとなっていった事に、彼はまだ気がついていない。

武田兵助は五十四才。この年頃の男の送った、ごく普通の、しかし戦争といった大きなドラマによって半ば破壊された、ありきたりの一生の半ばを終わろうとしていた。この男の一日の生活は、多くのサラリーマン諸氏のそれと殆ど同一で、例えば朝、会社に行くまでの苦しみ、会社での人間関係、そして帰宅あるいはヤケ酒、愚痴、全てあまりに典型的で、あらゆる小説に哀しくも語りつくされている、見本のような存在なのである。

さて話を、もどそう。彼の夢は、内容はバラバラであったが、どの夢にも通じる一貫性があった。それは必ず京子が何者かによっていじめられていて、それを彼が見ている図なのである。

京子をいためつける悪者は、時にはナチのゲシュタポであり、日本の憲兵であり、特高

であり、代官であり、吟味方同心であり、戦国時代のひげ面の武将であり、中国の清明の獄吏であり、僻地の蛮族であり、アルジェのフランス軍であり、イギリス中世の古城主であり、ありとあらゆる地位の、ありとあらゆる人種の、サディストたちであった。しかし彼自身は、いつも無言の傍観者であり、決して主演者になることはなかった。劇中の人物の誰一人として、彼の存在に気づくものはない。

しかし、ここに特筆すべき事がある。一度サラセン帝国の将軍が彼を見つけ、部下に追わした事があった。その時、彼は夢中でポケットにあった氷砂糖を口に入れたのである。するとどうだ、彼の姿が瞬くうちに消えたではないか。彼は有頂天になった。これからは安心して、その氷砂糖さえなめれば相手に知られる事なく自由にその劇の様子を見ることが出来ると思ったものだ。しかし彼が、なぜ氷砂糖など急に口に入れたのか。何故そんなものを持っていたのかは、いくら考えても解らない。それは、あるいは彼の心の底で常に持っている願望が、夢の世界で実現したのかもしれない。

とにかく、そのサラセン帝国の夢以後、彼

は必ずその不思議な氷砂糖を使って夢の世界に入り込み、以前より、はるかに堂々と、あらゆるものを観察した。それは、彼が本能的に作り出した素晴らしいトリックであり、小心で平凡な小市民の、夢の中でさえ自己の社会的安全に気を配らなければならない哀しい知恵だったのかもしれない。

事実、彼は実際の生活においても、いつも自分が透明な見えざる人間になれたら、どんなにいいだろうかと思った。いや完全に透明にならなくてもいい、もし自分にあのジキル博士のように、もう一つの顔を持つことが許されるのなら、どんなに多くの抑えられた欲望を充たすことが出来るだろうと思う。彼には強姦者、ヒモ、ボン引き、などという言葉がもう一つの意味―無頼に対する羨望を持って、いつも響いてくるのだった。ああ、思うまま自由に振舞えたら。あの自分を縛っている法や、道徳から、善良な市民という仮面からぬけ出せたら、といつも彼は考えるのだった。

しかし、彼は知っている。たとえ自分が透明人間になろうとも、あの夢の中の自分のようにいつも見るだけの人間であろうことを。そして、その焦立ちが彼の老いた硬い心を暗



くする時、決まって夢の中の京子は半死半生の悪夢を受けるのであった。その日の彼の夢は、アメリカインディアンに復讐をうける女（それが京子なのだが）の物語だった。

そして、その日の夢には、かなりはっきりとした筋があった。彼はいきなりその場面が始まったにもかかわらず京子がなぜ、これらインディアンたちにひどい仕打ちをうけなければならぬかという原因を、当然の事のように知っていた。それが夢のいい処で、無駄な部分が、はぶいてある。

「おまえの父親、私の娘、殺した。おまえ、同じ目にあう」

「私の父は、そんな人ではありません。はなして下さい。何かの間違いです」

「おまえ同じめにあう。おまえの父親、僕の娘、殺して皮を剥いだ。それが本当の事。あそこにいる男、見ていて、僕に知らせた」

老インディアンは若い男を指した。今度は若い男が言った。

「俺は、おまえの父親、ジェフ・ハントレーが酋長の娘を殺したのを見た。おまえは報いを受けなければならない」

「私は知らない。知りません。ひどいことはやめて下さい」

京子は必死になって叫ぶ。しかし老酋長が手を挙げると、屈強な若者達が、憎しみに満ちた瞳を光らせながら、またたくうちに彼女を大きな木の下に爪先立ちに吊りあげる。ロープはきしんで二回程、彼女の体を廻した。

「着物、いらぬ」

今度は若いインディアンが言った。彼は再び近づこうとしている若者達を手で制して、ナイフを抜きながら近づいていく。

「なにをするの。やめて、アアッ」

首をのけぞらしながら京子は、必死に叫びつづける。ロープが、まるで、あざ笑うように震える。そのロープを繋ぎ止めている枝が揺れて、ザワザワという悲しそうな音をたてる。若者のナイフの刃が、彼女の肌に冷やかな感触を残しながら体中を動きまわる。その間中、枝は鳴り続けた。彼女は新しい場所にナイフが移るたびに「アッ」と言う軽い叫びをあげるだけで、もう声を出す勇気もない。

考えてもみたまえ、単身、憎悪に満ちた敵地にさらわれて来た身にしてみれば、その恐怖は自由な時でさえ、かなりなものと言えるはずなのに、縛られ着衣が剥がれようとしてくるのである。その恐怖たるや、女として極限のものと、言わねばならない。兵助氏の夢

は、かなり理に合った代物と言わずばなるまい。

彼女の白肌は次々に白日の下で露わになっていった。腕、足、腹、そして豊かなプリプリとした胸。それは眩しいばかりの光景であった。彼女は、ぐったりと首をうなだれている。しかし、そのフリルのついた、いかにも西部劇らしいズロースに彼の手がかかった時再びビクッと体を震わせ、今度は激しく抵抗した。彼は面白そうに笑い、背後にまわると少しづつ、その最後の布を引き下ろしていった。

これは彼女にとってもっとも羞かしい淫虐的な脱がせ方である。その中に覆われていた肌が現われる寸前に、彼女は全ての動作をやめて失神した。それは十九才の生娘には、あまりにも、おぞましい脱衣であった。

失神した彼女は、次の拷問の場所へと全裸のまま、運ばれて行った。それは丁度、木で出来た鉄棒のようなものであった。そこに子供でも、ぶら下がっていれば、なんのことはない、遊びの道具そのものなのだが、これは女にとって、もっとも激しい苦痛と羞恥をもたらす悪魔の責め具であったのだ。

全く巧く出来た夢である。



京子は背丈よりいくらか高い横木、つまり子供がぶら下がる部分に、両腕をロープで、ゆるく、くくられる。生命のない木偶をあつかうように、作業は至って容易である。やがて若いインディアンの一人が濡れた革紐を長短二本、持って来ると、急に一同の動きは活気を帯びてくる。短い二本で左右の足を別々に鉄棒の足に括りつける。

みじめに張り伸ばされた自らの体にも気付かず、女は唯一の休息に耽っていた。

今度は長い十米程もある革紐を鉄棒の前後にある立木にむすびつける。女に跨がせられた形となった濡れた革紐が一杯に引きしぼられると、二人がかりで固定された。

横から言っている彼の目には、まるで光線のように一直線に張られた革紐が、女の体を屈曲点にして鈍いV字を作っているように映った。そして、そこには全てがピンと張られた緊迫した力強さが充ちていた。

京子は体を押し上げてくる異物感に気づいて目を開けた。しばらく考えるようにあたりを見回すと、急にぴくんとして体をふるわせながら、しぼり出すような絶叫をあげた。

「キャー」

それは苦痛による悲鳴ではない。処女の羞

恥と乙女の恐怖の声であった。この段階ではまだそれ程、苦痛はないのである。しかし彼女は、革というものが乾きながら如何に縮むか知っていたらしい。そして、そのV字の角度が、より大きくなろうとする時、両足を結んだ革のロープも同様に彼女を下へ引っ張りそのV字の角度を広げまいとするのであろうその二つのパネに挟まれながら、果たしてどのような事が起こるか、彼女でなくても推して知る可しである。

彼女は二度目の失神をした。しかし今度は若い一人のインディアンによって、頭から水が浴びせられた。彼は横木の上に腰をかけ水袋を持って、苦痛から悶絶へと逃避しようになる彼女を、引き戻す役が受持ちのようだ。

草原の太陽は遮る物とてないこの大地に、情容赦なく降りそそいで次第に濡れた革を鋼のように硬くしていった。ねじれるように地面に引きつけられる女体は、逆に吊り上げようとする革紐に挟まれて、その激痛に滝のような汗を流していた。汗は豊かな胸を、尻を足を、頭髪をテラテラと輝かして、涙と共に地上に落ちていく。

「ぐぐぐ」

女は声にならない声をあげて失禁した。ほ

のかに黄色く色付いた液体は、革紐を伝わって悲しげに地上に吸い込まれて行った。かれこれ一時間、およそ体力の限界であった。しかし老インディアンは革紐を解かせることをせず、それぞれを元のよう濡らせて、苦痛を弱めるように弛めた。

女は安心したように、幾度目かの、つかの間の休息を失神によって得た。それにも増して、激しい汚辱が待っているのも気付かずに……。

兵助は、いつか自分の夢に興奮していたがそろそろとまわって革紐を結んだ立木のところにまわってみると、左右数人ずつのインディアンが立ってロープに手をかけていた。老インディアンが合図をすると、あろうことか左右のインディアンがそのロープを持って交互に引き始めたのである。

「ヒュー……ヒュー」

女は、異様な革紐の動きにつれて、のけぞるようにして絶叫した。

兵助は少し可哀想になって来た。いくら自分の夢とはいえ、あれでは死んでしまう、などと、おかしいことを真剣に考えていた。

妻の声で起こされたのはその時であった。

そのヒステリックな声は気味の悪い響きを耳



に残し、頭の中から、あの地獄絵図を奪い去っていった。彼は少し、ホッとした。

「あなた、いつまで寝ているのよ。会社に遅れますよ」

「わかったよ。何回も言うな」

彼は不服そうに答えると、のろのろと起きあがった。今日も一日が始まるのだ。

○

彼は昼食を喰いながら一心に、今朝、妻から渡された薬のビンのことを考えていた。それは外見は彼女が言ったように全くのビタミン剤である。しかし、十時の休憩時間に飲むうとして蓋を開けると、中から氷砂糖が出てきたのである。

なんということだ。彼はハッとして、思わず妻の顔を思い浮かべた。まさか女房のヤツあの夢の秘密を……。しかし夢のことなど、どうして他の人に知れることがあるう。

当惑したまま、細い字で書かれた効用書きに目を転ずる。そして我が目を疑ったのだ。

「使用法Ⅱ一生に一回のみ、服用の事。効用Ⅱ服用後、三十分して完全に姿が消えます。注意Ⅱ一度消失した体は元にもどりません」

まさか？ 彼は考えた。しかし悪戯にしては、手がこんでいる。そうだ、ためしてみればいい。何でためそう。よし、あれがいい。

彼は窓辺に熱帯魚のおいてある喫茶店を思い出した。

結論からいえば、その氷砂糖のカケラを呑みこんだ熱帯魚は、はじめケムのような霧状の物体になり、動きながら次第に消えていったのである。時計を見るとその最後の薄い輪郭が消えたのは、正確に三十分後であった。あの効用書は本当だったのである。

彼は出来るだけ目立たないように坐っていた隅の座席を、犯罪者のように怯えて立ちあがった。しかし心は、抑えても抑えても湧きあがってくる興奮で充ちあふれていた。

兵助は箸を休めて考える。消えたいのは、やまやまで。しかし、この世に未練がないことはない。消えてしまえば、だれから見られることはない。自由だ。しかし、誰にも自分を認めてもらうことは出来なくなる。憎らしいが、長年連れそって来た妻も居る。

彼の心は千々に乱れ、混乱した。たしかにそれは、岐路であった。五十四にして初めて経験する、一つの青春への岐路であった。彼は混乱しながら、いつの間にか京子の裸体を想像していた。豊かな胸、乳首、腹、大きく盛りあがった尻、足、形の良い背中等。

しかし時としてその空想が、いつか旅先で観たお座敷ストリップの花、名前も忘れないレイ子ちゃんの貧弱体と重なって、張りきっていた胸や尻が空気の抜いたように、しぼんでしまう。無理もない。二十年この方、女の裸などというものにお目に掛かったのは、妻以外には、あのレイ子ちゃんの、さみしげな姿だけなのである。否、厳密に言えば、妻は絶対、明るい所でその恥部を見せようとしなかったから、あのレイ子ちゃんだけが彼の生きた空想のたよりだった訳である。

ピンク映画もエロ雑誌もヌードカレンダーも、本心を殺して避けようとしてしまう自分の小心さが、彼には無性に悲しく思えた。自分が情けなく思えた。

他人は彼を、なんと真面目な、立派な、人格高潔な氏であろうと思うにちがいない。その人々の期待感が、更に彼の性への行動を消極的にさせた。彼は意識して雑誌のグラビアにある水着姿さえ、素通りするようになっていた。もちろん人前ではの話である。本心では、ゆっくり眺めたい気持が働いていた。しかし、そんな雑誌を買うことは出来かねたし自分の机の上に置いてあるところを想像しただけでもなんとなく妻に後めたい気がして恐



ろしかった。

しかし、彼の表面上の姿がストイックになればなる程、夢の世界は淫らなものとなっていき、益々彼を苦しめた。俺は夢にしか生きられないのか。彼はそんな時、いつも自問してみるのだった。

この氷砂糖は、あの西沢京子の部屋に通じているのだ。彼の行き詰まった現実から唯一の出口、自由への入口なのであり、その入口に入ろうとさえ決心すれば、いつでも姿を消して入ることが出来るのだった。彼は迷っていた。

「どうせ現実の中でも、消えているのと同じだ」

それが最後に出た結論であった。

○

鍵は、牛乳箱の中にあるはずだ。彼は、まわりを見廻しながら、小さな取り出し口から手を入れる。手が一瞬の間、牛乳箱の小さな床を這い廻る。あった。鍵という金属独特の冷たく重い感触が、全身に電気のようにビリビリと伝わってきた。これだ。これこそ、長い間、夢に見続けていた、自由への道案内となる、重い感触なのだ。彼の手は狭い箱の中で鍵を、しっかりと握りしめていた。

西沢京子の部屋。あの女の部屋が、この鍵によって開かれる。そう考えただけで彼の年老いた心は舞っていた。その目の前にあるドアは彼の平穏な静かな世界からの出口であり何かからの唯一の脱出口なのである。彼は、「はいれる」という興奮に胸を躍らせていたのではない。「出られる」というかつてない興奮に心を乱れさせていたのである。今その脱出口が、この鍵によって、十センチに満たないこの小さな金属によって開かれることが確約されているのである。

鍵は多少の危惧にうち震えながら鍵穴に這り込んだ。ゆっくりとひねる。軽い抵抗感の後、無事に一回りした。

さあ開けよう。さあ開こう脱出口を。この息ぐるしい現実から異質な世界への通路が目の前にあるのだ。何をためらっているのだ兵助。おまえはもうだれからも監視されることのない、見えない人間になるのだぞ。

彼は鏡の前に立っていた。自分が入ろうと意を決して以来、どの様にして、この鏡の前にまで来たのかは、まるで記憶がないのだ。その一、二分の間の彼の記憶は、彼の思考から完全に欠落していた。ただ気がつくとな彼は水の入ったコップを手に鏡の前に立っていた

のだ。とにかく夢中になって扉を開け、中に這入り、灯をつけ、コップをつかんで一杯の水を飲んだことだけは確かなようだ。

もう一度鏡を見る。ワイシャツとネクタイその上に帽子を、ま深にかむった彼の顔、興奮に上気して赤らんだ、恐らくこの世で見る最後の顔が、灼けつくような視線で彼自身を見つめている。

彼はポケットの中で薬瓶を握りしめた。この氷砂糖を飲めば、もう決してこの世に姿を見せることはない。永遠にこの空気に同化してしまうのだ。そう考えながら、帽子をとると、彼はじっと自分の顔に見入りながら「この顔にも、おさらばだな」心の中でそうつぶやいた。

ふっと気がついて時計を見ると、もう十一時近い。しまった。彼女が帰り着くのは十一時半。だから、もう氷砂糖を飲まないと大変だ。彼は、あわててその氷砂糖を口へ放り込むと、ごくりと飲み込んだ、甘いかたまりが食道を下がって行く。しばらくは何の変化もない。たしかに、あの魚は消えた。俺が消えないはずが……。突然、彼の顔は色彩を薄れさせていった。しめた。しかし、うまく、うまく消えるだろうか。彼はまだ心配だった。



十分たった。鏡を覗くと、彼の姿はタバコの煙の塊りのように白っぽいボーとしたものとなっている。彼は一応、安心をする。大丈夫だと思ふと急に、今度は新しい期待がムクムクと起きはじめる。この部屋が、あの部屋なんだ。彼は、しみじみと見回していた。

全てが彼の思った通りである。ピンクの花柄のカーテン。小ざれいな洋タンス、博多人形、埋まりこんでしまいそうなダブルベッドスツール、可愛いアップリケのついた、クッションのあるソファ、しゃれたカサのついた電気スタンド、少女好みのカレンダー、白い花瓶、白百合の花。

全てが、めくるめくような華やかさで彼を圧倒していた。それに、この匂い。なんていうピチピチとした女の匂いだらう。これこそまさしく、あの若々しい艶やかな肌から直接ただよってくる香りだ。むせるような女の匂いだ。彼は思わず、その匂いに眩暈にも似た陶酔を覚えた。そして、その香りに耽溺するように、何回も、何回も素晴らしい若い香気を、むさぶるように、のみ込んでいた。

子供のようにカーテンにじゃれついたり、ベッドの上で跳ねてみる。ふと、年甲斐もなく、という妻の、つぶやきが、心の中から聞

こえてくる。ハッとして長年の習性的な、とりつくろった身構えになってしまふ。

しかし彼は、すぐに気をとりなおして、つぶやくのだ。『僕は、もう誰にも見えないのだ。もう、どんなにハレンチなことをやっても、誰も何も言わん。僕は、やりたいように出来るんだ』

やがて、その自由を得た興奮が納まると、再び彼は慎重になる。女を迎える準備をしなければならぬ。彼は全裸になると衣類を持ってきて大きな紙袋に入れ、テラスに出した鍵を用心深く、もとの牛乳箱に落とし込むと内側からドアをロックした。

時間が、そのまま止まってしまったような待ち遠しさであった。兵助は彼女の可愛いオルゴール時計を見る。十一時二十分。今頃、彼女はあの駅前の通りを歩いているだろう。タバコ屋の角を曲った。右手に大きな柿の木のある家が見える。左手にやがて酒屋が見えてきた。

その時点では、彼の空想と現実とは、まったく一致する。それが今、彼にあたえられた唯一の納待できる暇のつぶし方と思えた。しかし彼の頭の中の彼女が、まだアパートの前の植込みを歩いている最中に、現実の彼女

の気配がドアの外に迫ってきたのである。

彼は、狼狽した。彼女が、あの芳しい肉体を持った彼女が、今この部屋に入ってきてこうとしている。彼の前に実在の姿を見せようとしている。そう考えると、たちまちにして全ての筋書きは敗軍の作戦図のように乱れ、姿の見えない將軍は気の毒な程とり乱してしまったのだ。

カチッという音とともに扉は開かれた。闇の中で、まさぐる指がスイッチを押す。部屋は再び灯をともした。その彼女の行為を彼はじっと息を殺して見つめていたにもかかわらず、いざあかりがつくと突然、光の前に引き出されたような、うろたえに襲われ、思わず顔をかくした。彼は今、全裸で彼女の前にいるのだ。

そろそろと顔を上げると、彼女の様子をうかがう。彼女は平然としている。やはり見えないのだ。彼女には、やはり彼が見えないのだ。彼は喜んだ。ついに、彼の夢は確約されたのである。とたんに彼はホッとした、ため息を一つ、洩らした。それは明らかに誰も居ないはずのこの部屋に、人の気配を作り出してしまった。しまったと彼は思う。しかし、この危機は、彼を完全に冷静にさせる機会に



変わった。

彼女は、ちょっと眉をしかめると、部屋の中を、見回した。だが、誰も居よう、はずはない。やがて、女は服を脱ぎスリッパ一枚になると、洗面所へ入る。手を洗い、歯をみがき始めた。

それらの一連の動作を見ながら彼は、ますます冷静になっていった。そこには、あのとり澄ました女の表情はなく、生きている女の姿があり、世間の視線を離れ、人の見ていない場所である動作独特の、いやらしい大胆さがあったからである。

たしかに女は美しいし、体も素晴らしい。その胸の肉付き、ウエストのくびれ、腰のふくらみ、ふくろはぎのしまりぐあい……どれ一つをとっても、若い艶やかな水々しさが満ちているのは事実だった。しかし、そこにはあの夢で出あった肉体の媚びるような内面の緊迫……つまり羞恥の風情は見出せなかったのだ。だらけきって疲れたような、ふてぶてしさのみがみなぎっていた。それは明らかに彼が妻の中に見た、タルミと同質なものであった。

しかし、その色気のなさを割引いても、なお彼にとって、この女は素晴らしい。後向き

になった女の腰に、スリッパを通してパンティの線が浮き出して、その花柄が透けて見える。彼は、もう誰に遠慮することなく、その腰の線に見入っていた。

やがて京子はスルスルとスリッパを脱ぐと洗濯機の中に放り込む。ブラジャーも、はずしパンティも取る。驚く程、あっけなく全裸になった彼女を、もちろん兵助は喰い入るように見つめている。

ああ、なんという幸せ。なんという素晴らしいスリル。なんという自由。パンティに手がかった時のときめき。そして、それが引き下ろされた時の素晴らしい興奮。もっともその素早さは何かあっけない気がしないでもない。いかにも、あっさりしている。レイ子ちゃんのように媚びることもない。しかしそれは、この際、いささか贅沢な不満と言わずばなるまい。

彼女は脱いだパンティの臭いを嗅ぐようにちよつと鼻に近づける。やはり何か醒めさせるような要素が、この状態にはある。と彼は思った。彼女は全くの全裸で、彼の前に立っているのだ。と、いくら自分の心に言いかけせても、京子がパンティのゴムに手をかけた時程、彼は興奮できない、どうしても完全に

酔いきれない要素、一点の醒めが彼の心の中に小さな穴を作っていた。「なんだ、これならスリッパと変わらない」そんな気持が心のどこかで言葉となり、全てを当惑させていた。

と、急に彼女は振り返ると、彼の方へ向かって歩き出した。彼は、あわてて退く。胸の大きな二つの膨らみが、歩きたびに無粋にユサユサと揺れ、何の覆いもない前身のかげりは折角の美身を生々しく下品にしていた。

彼は、がっかりした。やっぱり何かがかけている。全てが、あまりに、あからさまだ。そんな贅沢な不平を、もう一度、心の中で洩らしつつ見詰める中で、女は全裸のまま、鏡台の前に坐ると、乱暴な動作で化粧を落としていく。そのすべやかな肌を見るべく、彼は更に女の側に寄って、又もガッカリした。憧れたその肌は、遠くで見える程きれいではなかった。まるで古女房の肌と同じじゃないか。これならレイ子ちゃんの方が余程いい。背中に赤いニキビが吹き出ている。腕は付根まで毛深い、足もスネ毛は、さすがに、きれいに剃ってあるが、パンティのゴム跡がくつきりとついた尻は、男のそのように凹凸がはげしい。汗疹のような、つぶつぶもある。



まるで夏ミカンの外皮の様なのだ。むっくりと鏡台のスツールから、こぼれる肉塊は、たるんで椅子のへりを隠していた。鏡に写っている乳房は、異様に大きく垂れ下がって、乳首は乾いたようにくろずんでいるし、胸と胸の間に大きな黒いほくろのようなアザがあった。まるで女房とそっくりだ。しかも、いささかの羞恥心もなく、生活と肉体の臭いをプンプンさせた、まったく修飾されていない、あけっぴろげの動物の牝の姿そのままだ。

それは肉体のヌード以上の精神のヌードである。そして、その精神のヌードには、彼のみならず、世の亭主どもが、いつもヘキエキさせられているはずである。

しかし彼は自分の中に湧き上がった失望と興奮めが、女の最も奥ぶかい秘境に接してないための不満によるものだと思いがいしていた。彼はその不満を解消しようと務めた。しかし彼の目指す秘境は太い円柱によって遮られていた。床の上に寝転がってみる。やはり、駄目だ。彼は焦り始めた。

女が急に立ち上がった。その拍子に手鏡が彼のへばりついている床へ落ちた。実は手鏡は彼の手を、すりぬけて床に落ちたのだ。しかし、一点に注意を注いでいた彼は、自分の

手を手鏡が通過して行った事など知る由もなかった。ただ、その音にびくっとして体をふるわせ、それを拾おうと彼女が手を降ろした時に、あわてて手を引っ込めただけだったのである。従って彼は、その現象が、いかに重大な意味を持つかという事にも気付かなかったのだった。

彼の不満解消の為の努力は、寝ころがったり、ひざまずいたり、立ちあがったり、這ったり、いやはや、大変なものであったが、目的は果たせなかった。しかし、皮肉にも、その追跡に再び興奮していたのだ。

女は裸のまま、ベッドをなおしたり、紙クズをひろったり、机の上を整えたり、服をたたんだりするのだが、見えそうで見えない。クソッ、なんとかして」と意地になった時彼の体の中を、再び戦慄のような何かが走った。それはもはや、彼にとって目的の変わった一種の遊戯だった。とてつもなく愉しい、追いかけてこだった。長いあいだ忘れていたかくれんぼの興奮だった。

しかしやがて、脇道へそれていた彼のその最後の欲求も、満たされる時がきたのだ。女が美容体操を始めたからである。それは、時たま見たテレビの深夜に放送されるベッド体

操なるものに似ていて、両足の上げ降ろしから始まった。

彼は思わず、うめいた。なんと素晴らしいなんという眺めだろう。女は今度は、うつ伏せになると足首を持って引っ張る。丁度逆エビのような恰好である。その姿勢に彼は、よだれを垂らさんばかり見入った。夢の中に出てきた彼女のいじめられる姿が、そこに少しばかり現出したからだだった。やがて、それが済むと、女は少し、うつぶせのまま息をととのえ、足を伸ばしてペタリ坐った。そのままた二、三回、腿に頭をつける様に屈伸する。

彼の見たいと夢で望んでいたものが、今、眼前にある。彼はフッと息をついた。ついに最後の目標に接して、思わず知らず嘆息したのだ。一分、二分、女は片足ずつ腿に頭をつけている。彼は目を皿にして見入った。

しかし、すぐに妙な倦怠にも似た気持が彼の心に湧き上がって来た。それは目的が達せられた後の独特な虚無感のようでもあり、なんとなく、がっかりしたような気分だった。

女は、まだ一心に体操を続けているが、彼はもう情性で、それを眺めているだけで、つきあげるような焦立たしさが、心の中で渦まき始め、脳髓を混乱させていた。あんなに憧



れ、あんなに魅力的だった彼女も、古女房やレイ子ちゃんと少しも変わらないじゃないか……そんな気持が抑えても抑えても心の中に溢れて来るのを止めることが出来なかった。

最後に残された方法は夢の中の悪人がやったように、彼女を騙ることだけだ。彼は迷った。そんな事をしたら、女は、きっと助けを呼ぶだろう。声は聞こえないにしても、逃げられたらどうしよう。なあに、縛ってサルグツワを噛ませればよい。しかしこのワシに彼女を縛ることが出来るだろうか。女は暴れるだろう。必死になって抵抗するだろう。この大きな若い健康な女に抵抗されて、男とはいえ非力な老いたワシに、とりおさえることが出来るだろうか。

しかし老人の焦立ちは、最早そのような冷静な思考に従うことを許さないとところにまで膨張していた。結局、彼は思った。ワシは相手に見えないのだ。見えない相手から逃げる事は可成り難しいはずだ。それに逃げられても元々だ。新しいのを探せばいい。

そう決心すると彼は、急に勇気づいた。立ち上がると、一米と離れていない女に若者のように飛びかかった。しかし次の瞬間、彼はもんどりうって床の上にころがっていた。彼

は一瞬ギョツとした。彼は女の肉体を通過してしまったのである。そんな馬鹿な事が。彼はうろたえながら、今度は女の髪を掴もうとした。だが、手は空を切って空振りした。おかしい。ゆっくりやってみよう。彼は手を女の肩にたしかに置いて愕然とした。あろうことか、感触というものが、まるでないのだ。何の抵抗もなく、腕が女の体を突き抜けるのである。どうした事なのだ、一体これは。彼は慌てた。半ば無意識で、目についた長い柄のホウキに飛びついた。しかし、またもや手は、それに全く、ひっかからずに空をきるばかりである。

だが、勢い余った彼は、ドウと壁にぶつかった。コンクリートの壁だけは感ずることが出来るらしい。ならばベッドはどうか。彼は勢いこんでベッドまで走って行った。しかしそのベッドをも通過してしまった自分に気づいて恐怖を覚えた。ついさつきまで、たしかに寝そべっていたベッドなのに……。

そうだ、あの氷砂糖は、完全に効くまで三十分かかると効用書に書いてあった。だからベッドに寝ている時は、未だ完全に消えてはいなかったことになる。そして完全に消えると共に、ワシは肉体というものの存在を全く

失ってしまったのだ。触覚の中で確認できるような生身を失ってしまったのだ。何ということだ。相手がワシを見ないのはいい。そんな事は、いつものことだ。しかし生活の臭いのするものに触れることすら、できないとは……。どうしたらいいのだろう。これでは幽霊と変わらない。俺は生きたまま、幽霊になってしまったのか。

彼は声をあげて泣きながら、いつかベッドに埋まって寝息をたてている女に向かって、力の限り突進した。

○

兵助の死体は、京子の部屋の下で見つかった。京子の部屋は荒されている様子もなく、彼が何故、彼女の部屋から全裸で階下へ飛び降りたのか警察は、いぶかしがった。

もちろん、京子も一応、調べられた。しかし彼女には、動かせないアリバイがあったのだ。同僚であり、チームメートである二人の女性が、残業で遅くなった彼女と共に寮に泊まり、その夜は、彼女がアパートの自室へは帰らなかったことを、寮の管理者と共に証言したのだった。

遺留品は、彼の衣類とビタミン剤の瓶が一つであった。

(終)





私がその旅行に出かけたのは、何かを捜し求めていたからである——。

それが何かは、私にもはっきりと判ってはいた訳ではない。ただ中近東の国に行けば、私の憧れ続けていたもの、私の胸の奥底に秘められていた欲望を満たす、何かを得る事が出来るのではないかという気がしたのである。

私は発禁の秘密文庫で読んだのだ……中東の美女達が、現代でも自由を奪われた卑屈な男共や奴隷共に対して残忍で支配的な儀式をとり行なうという話を……欲望に目を見開いて私は頁から頁をむさぼり読み、こんな女王様の前にひざまずいたら、どんな気がするだろうと想像して、興奮に身慄いしたり、剥き出しの背中に鋭い鞭の第一撃を待つ恐怖に、すくみ上がったたりしたものだったのである。私は、どのようにして彼女に御奉仕したら

— Translation from "Garden of pain" —

(BIZARRE LIFE Vol I No II)

寝

チ  
エ  
イ  
ン  
バ  
ー

室

便

ポ  
ツ  
ト

器

三 原 寛

カ ッ ト ・ 岡 た か し

よいのだろう。どのようにして彼女の前に這いつくばればよいのだろう。どのようにして彼女の如何なる、そしてあらゆる御要求に応じればよいのだろう……。

彼女が残酷で、傲慢で、そして私の身も心も永遠に支配される限りである。

私は一銭たりとも無駄にしないようにして長い間、貯金を続けた。そして、ある記念すべき日に、私は旅客機の乗客となったのである。苦痛の試練の未知の深みに向かっての、私の異国風な旅の首途なのだった。

私は、その場所の名をここに記すことは禁じられているのだが、少なくとも、これだけはいえる——それは東洋と中東の文化の交流地——怪奇と神秘が日常茶飯事になっているところ——女性が未だにヴェールの蔭から、長いまつげの眼を覗かせて無言の欲望をささ

やくところ——である。

私は、自分が特殊の「お仕置」に対して、その生贄になる気のあること。また、相応しい女王様に対して全身代を貢ぐ気であることを言い広めたのだ。

やがて、反応があった。

「スウリラが今夜、彼女の庭園で貴方に会います」

その男は、そう言うてうなずき、市場の人の混みの中に消えて行った。私は彼を引きとめて、くわしく説明を求めるひまがなかったが本能的に何かを感じとった。そして私は間違っていないかったのである。

その夜、ホテルの私の部屋の扉に静かなノックがあった。開けてみると、顔を透明なヴェールで覆った若い女性が入ってきた。「これを、お着け！」



彼女は、かたく包装された包みを私に手渡しながらか命令した。私は包みを開いて息をのんだ。私の前には、私が夢見続けてきた、奇異な革の衣裳があったのだ。

「服をお脱ぎ、急いで！」

また、彼女が命じた。私は恥かしさに、いようもなく当惑したが、命令に従った。

私が全裸になると、彼女は私の腕に手をかけた。

「かみそりは？ かみそりを、お貸し！」

私は息をのみ、彼女がその鋭い刃物で何をするつもりなのかを想像して、恐怖にとらわれた。

「奴隷は奴隷らしく、体毛をきれいに剃ってしまつてからでないと、スウリラ様の前に出ることは許されないわ」

私は合点した。……勿論、多年渴望して来たものが満たされるのなら、何であろうと従う気だった。

彼女は、私の体中に石鹼を塗りつけ、剃り始めた。

「さあ、私の持つて来た衣裳を、着けていいわ！」

ゴムのパンティは、私の臀と腰をピッチリと包み、私の皮膚の色にピッタリと融け合つた。私の両腕は背中にして手錠をかけられた。両眼は黒革の目かくしで覆われた。頭からマントをかぶせられた。

そして私は部屋から連れ出され、非常階段を下りて、下に待たせてあった車に連れ込まれた。何処へ向かつているのか、もちろん見当もつかなかったが、やがて車が止まり、私はひっぱり出された。目かくしがはずされ、私は美しい館の庭園に連れてこられたのを知った。高い石壁で三方を囲まれ、そして他の一方が館になっており、輝く硝子で仕切られていた。その硝子越しに、私は部屋の中を見ることが出来、一人の女性、その場に君臨している女性を見ることが出来たのである。

この女神様こそ、スウリラその人に他ならないことが私には判った。彼女は、私がそれまでに見たこともないほどに、素晴らしく美しかった。漆黒の髪は長く艶やかに肩に流れていた。両眼は燃える石炭のように私に向かい催眠術のように私を捉えた。彼女の裸身を見て、私の両頬は赤く火照った。僅かに薄い黒の胸着と黒のストッキングが身を覆っているのみだった。腰のまわりには厚い黒革のベルトをしめ、彼女の乳白色の両腿にフサが垂れていた。私は声もなく、彼女が硝子の扉を開いて庭園に踏み出してくるのを凝視した。

「お前が私に仕えたいという男か？」

彼女が尊大に質問した。

「ハイ……」

私の声は息がつまって、かすれた。

「だったら、仕えるんだわね」

彼女は無感動に続けた。

「ただし、いっておくけど、あたしに仕えるということは、非常な痛さや苦しさに耐えるということなんだからね。いいつけには、質問なしに従うこと。お仕置きや屈辱は、文句をつけずに甘んじること。命令を待ち、その命令は、どんなものであっても、あたしのお慈悲だと思ふこと。でなかったら、お前の命はないものと思いなさい」

「ハ、ハイ、どんなことでも、おいいつけ通りに……喜んで奴隷になります、女王様の従順な……」

私は震え上がりながら答えた。

「従順な寝室便器さ！」

彼女は私の言葉のあとを引きついで、意地の悪い笑みを浮かべた。

彼女が手を二度拍つと、ヴェールで顔を覆っただけの裸の女性が二人あらわれた。

「ひざまずいて！」

スウリラの一喝で、私は地面に這いつくばった。地面にはセメントにフックが打ち込んであるのに気がついた。私の両腕には頑丈な金属製の腕輪がはめられ、スウリラの指示で腕輪の鎖がフックに固定され、両足も同じように金属製の輪をはめられて、その鎖をフックに固定された。私は大の字に、はりつけになつて、身動きも身を守ることも、逃げることも出来なくなった。



「私のムチを！」

スウリラが侍女の一人に命じた。

彼女は、やがて黒いヴェルヴェットの箱を抱えて戻ってきた。スウリラは箱のふたを開け、黒い革のムチ——柔軟で、しなやかな、そして威嚇的な、先が何本にも分かれたムチを、とり出した。彼女は私の前まで歩いてきた。彼女のハイヒールの爪先が私の顔の直ぐ前に近づいた。

「お舐め！」

随喜にむせんで私は、唇を黒い革に押しつけた。私の口が滑らかな彼女の靴革を味わっているとき、私の心臓は破れんばかりに鼓動が高まっていた。

「その調子！」

スウリラの気に入ったようだった。

「もっと色々覚えることね。さあ、これからお前が悲鳴をあげないで、どのぐらい苦痛に耐えられるか見ることにしようじゃないの」

突然、彼女は私の裸の背中に力一杯、ムチを振り下ろした。私は苦痛にうめいた。体がはね上がり、鎖が両足に喰い込んだ。

「なんだ、弱虫め！ あたしのいいつけに背いたら、どういうことになるか、今に思い知らせてやるから。声を出さずに苦痛に耐えろといわれたら、お前はその通りにするんだ！ でないと、二倍も痛い目にあうんだ」

彼女は不機嫌にののしりながら、私の剥き

出しの太腿の裏側を、残酷に打ちのめした。

私は歯を喰いしぼり、たとえ死ぬほどの痛さにも、ひと声も洩らすまいと覚悟した。

彼女は靴の鋭いヒールを私の肩の肉に、えぐりこみながら言った。

「その調子。覚えはじめたようね？ ごほうびに、私の靴とストッキングを脱がさして上げるわ」

二人の侍女が私の枷を外した。血を流しながら弱々しく私は這いずって行って、女王様の御命令を実行し始めた。急に私はバランスを失ってよろめき、彼女の足に頭を当てた。

「このバカ！ 言われたことが出来ないのかい！ いいつけを守れないのかい！ あたしの御機嫌を悪くしたら、どういうことになるか、教えて欲しいんだね！ 許しもなく、あたしの神聖な尊い肌に触れるなんて！」

私は四つん這いのまま、彼女に髪を掴まれて部屋の中に引きずりこまれた。木製の台の上に、私は仰向けに両足を開いて鎖で縛りつけられた。残忍な笑みを浮かべながら、スウリラは私の上に身をかがめて、私のゴムのパントリーの上縁に親指をひっかけ、ぴっちりとした、そのパントリーをひきおろし始めた。彼女はパントリーを腿のところまでひっぱり、それから膝まで、ひきおろした。彼女は私を見て、大声をあげて嘲笑した。二人の侍女も、私の剥き出された裸を見て笑った。私は羞恥

で真赤になった。私は彼女等の視線から逃れようとした。台の上で反転しようとしたが、私の剥き出しの興奮、私の当惑は隠すすべもなかった。スウリラはムチを振り上げ、私の剥き出しの腿に打ち下ろした。冷酷な革ムチが私の肉に喰い込み、私の下腹部に残忍に切り込んで、痛さに私は泣き叫んだ。

「裏返しになさい！」

スウリラの命令で、あつという間もなく、私は木台の上に、うつ伏せにされ、私の裸の腎がムチの下に全く無力な生贄として、さらし出されていた。今やスウリラは魔女の苛烈さで私に対していた。彼女は私の腎と腿の裏を、打って打ちまくった。私の背中は赤いみみずばれで一杯になり、腎の皮膚は切り裂かれた。

「お、お許しを……もう、許して。もう我慢出来ません。お、お許し……」

私は泣き叫んだ。

「あたしのいったこと、何でもやるかい？」  
スウリラは、ムチを私の顔の前にかざしながら、たずねた。

「ハ、ハイ。どんな、おいいつけでも従います。質問も躊躇もなしに、なんでもいたします。ですから、もう、お仕置きだけは、お許し下さい。お願いです」

「今に判るわね……」

女王様は尊大に答えて、私の鎖を解くよう

に侍女に命じた。

「四つん這いになれ！」

大急ぎで私は、彼女の命令に従った。

——もう二度と、彼女の怒りの拷問の味を知りたくない……。

彼女は、すらりとした足をあげて私の体を跨いで私に馬乗りになった。

「私の馬におなり！」

そういつて彼女は、私のお臀を平手で大きな音を立てて叩いた。私は彼女を背中に乗せて部屋をぐるぐると這い廻り、このように美しく尊い女王様<sup>ミストレス</sup>に御奉仕できる光栄と恩恵に對して、幸福に浸った。彼女の手が私の臀に鳴るたびに、私は速度を早めた。侍女たちが見守っている前を、私は女王様<sup>ミストレス</sup>を背中に乗せて部屋を何度も何度も廻った。私は一生の中で、こんな辱かしめを受けたのは初めてだった。恰も本物の馬のように、お臀を打たれてスウリラに背中を跨がられて這いまわる私のみっともなさを、侍女達は嘲笑しながら眺めているのだった。それにもかかわらず、これこそ、私の生き甲斐であることも自覚していたのだ。スウリラにお仕えし、彼女の美の前に這いつくばり、彼女の奴隷、玩具となり、そして、それが彼女のお望みであるなら、寝室便器<sup>チエンバーポット</sup>にですら……。

「何でもすると言ったわね！」

スウリラが、又意地悪い笑みを浮かべた。

「何だか食べ過ぎて、トイレに行きたくなくなわ」

そして彼女は急に、四つん這いの私の前に立ち上がった。

「何でもするんだわね。さ、お願いおし！」

彼女の意図を察して、私は真赤になった。

私は彼女の手から垂れているムチに目をやった。

「女王様<sup>ミストレス</sup>。どうか、お慈悲ですから、食べさせて下さい！」

「食べるって、何を食べるの？」

スウリラが嘲弄的に問い返す。

「女王様の……どうか……」

「あたしの何を食べたいのか、はっきりおっしゃい！」

「女王様の……を、どうか、食べさせて下さい！」

二人の侍女が、もう我慢出来ないというように吹き出した。

「ふふふ、そんなに食べたいのか？ いいわこっちにきて！」

私は、また髪を掴まれ、四つん這いで浴室の中に引きずりこまれた。便器に跨がったスウリラの前に私は、ひれ伏した。彼女の靴の鋭いハイヒールが、私の両肩の肉をえぐる。彼女の排泄物の落下する音に続いて、放尿の音が聞こえる。私は、じっと、ひれ伏し続けた。急に後ろに回ってスウリラに背中を蹴ら

れ、髪を掴んで引き起こされた。

「中のものを両手で、すくい出しなさい！」

彼女の命令で、私は両手を揃えて、さし込み、すくい上げたものを捧げ持った。そして

私は女王様<sup>ミストレス</sup>と二人の侍女の見ている前で、およそ人間として最高の……いや最低の恥辱と屈辱を味あわされたのである。

私は、お仕えするというのがどういふことなのかを、身にしみて思い知らされた。私は絶対の服従を覚えた。私は女王様<sup>ミストレス</sup>の、あらゆる気紛れ<sup>カピム</sup>、あらゆる欲望をお慰めすることを学んだ。

スウリラは、私にとって、私の女神、私の生命、私のすべての生き甲斐となった。

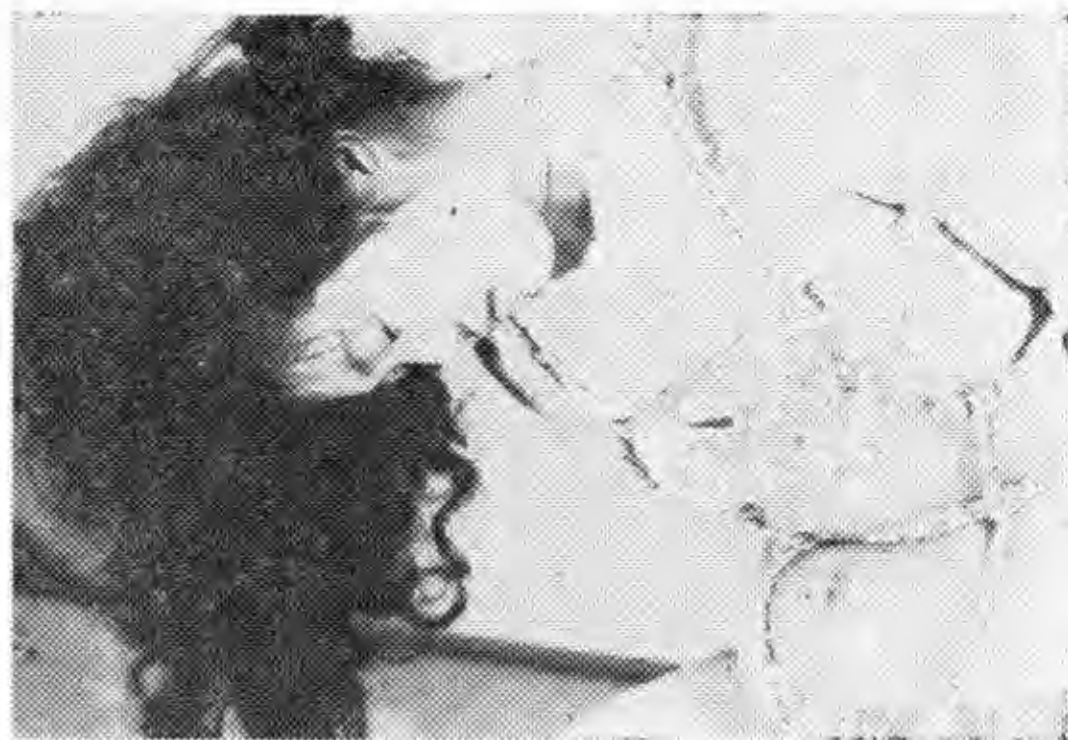
私は彼女の足許に這いつくばり、寝室便器<sup>チエンバーポット</sup>としての役割を果たすために、生きてゆくのだ。彼女のベッドの傍の床に侍って彼女の命令を待ち、私が最後の息を引きとるまで、お仕えするのである。

もう私は、もとの人生には戻らない。スウリラの完全な、そして全面的な支配から逃れる気は毛頭ないのだ。女王様<sup>ミストレス</sup>なしには、彼女の鞭の痛さなしには、彼女の革に包まれた、おみあしなしには、そして彼女に便器扱いされて、彼女の排泄物を口にする屈辱感なしには、私はもう、生きてゆけないのである。

——完——



一宮百合子



— 幼なき頃 —

私はSなのか、Mなのか、考えてみても結論は出ない。こうして自分の恥部をさらけ出すことから考えればMかもしれない。

だが目覚めたのは、たしかにSとしてであ

体験と感想

# 私とSMとKKと

町 陽 一

った。

KKとの付き合いも長いのだが、良いモデル、好きな作家、画家、現在のKK誌への感じなどを、私の体験と共に、ここに記してみたいと思う。云うならば、この手記は、SMと共に歩んで来た私の半生記とも、云えるものだ。

私が本来のSMに目覚めたのは、記憶にある限りでは相当、幼い頃のような。とすると私は生まれながらにSMの性質を持っていたのか……。幼い頃から火刑の絵等を描いていた私だが、体験に似たことは小学校六年生までなかった。いやチャンスはあった。

真夏、同級生の女の子二人と遊んでいた時その女の子の弟が仲間に加わっていた。田舎

のことである、男二人はパンツ一枚だった。

遊びは当時のヒーロー、ターザン。まず、その弟の方がターザンになった。勿論、当時、血を沸かさせられた映画だけにストーリーもそのまま拝借する。悪漢共と斗っていたターザンが、背中を短刀で刺されて気を失う。その間に立木に縛りつけられ、ターザンに危機が迫る。ターザンは胸にかかった縄を引き千切ってしまうのだが、その腕力だけで縄を切る所が実に印象的だった。そこで、そのシーンを再現しようという訳だ。

背中を刺されて倒れたその弟を、立木に後手縛りにしたのだが、裸で縛られているのを見て、私は随分うらやましく思ったところを見ると、Mの血は矢張り流れていたらしい。

だが、それを表面に出すことは極端に羞かしかった。「縛る」とか「括る」とかいう言葉さえ口に出せなかった。だから次にターザンの番が私にまわってきて、私は縛られなかった。どうにか言を左右にして逃げてしまったわけだ。

この時、遊んだ女の子の一人を縛ることになったのだが、これは後で述べよう。

小学校の六年生の時、級に一人私の好きな可愛い子がいた。M子と呼んでおこう。(実際の話なので、本名を出すと他人に判って、御当人に迷惑がかかることになるので、それは避けたい。だが、これを、もしその人が読めば、私が誰だか直ぐに判る筈だ)

M子は小柄で丸顔の愛らしい子だった。放課後、私は仲間二、三人と一緒に、彼女を教室に閉じ込めたのだ。窓には鍵をかけ、入口には教卓を置いて開かないようにして、つかまえて来たM子を後手に縛りつけたのだ。勿論、遊びなので、彼女も暴れもしないし、無理に紐から逃れようともせず、むしろ捕われの身になるのを、望んでいるかのようにであった。勿論、これは、本当のSMではないのかもしれない。子供の心には、SMが、ひそんでいるといわれる。それが遊びに表われたと

見るべきかもしれない。だが、そこには矢張り、好みがある。同じ級にH子という美しい子がいた。今思っても、級の写真を見返しても、顔立ちもH子の方が良い。背丈もM子と同じ位だ。ただH子の方が細身だ。このH子も一度、縛ってみたが、興が乗らずに、早々に切り上げてしまった。

探偵ごっこで後手に縛られて行く子。運動場の片隅で柱に縛りつけられていた子。私はいずれも正視出来なかった。だが、気を外らすことも出来なかった。ボール等を追いながら、どうしても、そちらの方に視線が行ってしまうのだった。それが男の子だったのか、女の子であったのか、記憶にない。幼い子には性がないとも云われるが、そのためであるうか。

縛り縛られているのを羨ましく思いながらも、他人の前では、その言葉すら、口にすることが出来ず、他人が口にするのを聞いてさえ、敏感に反応したものだ。私のSMの芽は矢張り、日蔭で育ったもののようなのだ。

初めてのプレイメイトは幼女だった。私が中学生になってから、近所の小学生の愛らしい幼女を私が一人の時、家に呼び込んだ。彼女はJ子といい、今では母親になっている。

J子は私に警戒心を抱かず、いうままに裸になった。女としての何らの印も見られない体だった。私はJ子を縛った。勿論、彼女が私にとって最初の女体だった。被縛女体の美しさ等、全く判らないまま、私は縄をかけていた。私の体も縛らせた。だが異性に責められる楽しみではなかった。私はJ子の体の成長を見たいと思った。この胸のふくらむ具合、女になって行く様子、何もしらない私はそれを見たかったのだ。だが、J子はいつしか遠のいて行った。私に異性を意識したのか遊びに異常性をかぎつけたのか……。

J子と前後してプレイをしたのがT子だ。T子は同級生、ターザンごっこの仲間だ。色の白い丸顔の子だ。さすがに彼女を裸にすることは出来なかったが、庭の木蔭で、互いに縛り合ったものだ。

「Tちゃん。シバルとククルと、どっちが好き？」

「え？」

「どっちの言葉の方が好き？」

「そうね、ククルの方が良いかな」

T子の白い肌に、紐の跡が、くっきりと残っていたのが思い出せるようだ。

この頃に読んだ本の中で、二つだけ、女性



## 一 宮 百合子



の責めのシーンが印象に残っている。

一つは中国の物語。捕われの娘が後手に縛られ、馬の背に腰を縛りつけられ、上体は馬の尻の方に倒され、そのまま馬を暴走させられる。長い黒髪がなびき、弾みながら女体が荒野を流れるというようなものだったが、後手に縛られた上、上体が空にのけぞるように縛りつけられたら、どんな気持ちになるだろうと、私はその気分を想像し味わおうとした。だが未だに判らずにいる。

もう一つは、武家の娘が立木の根元に正座させられて縛りつけられている。当時、縛り絵等めずらしく、しかも、子供には手に入らない。この本の表紙には、その娘が後ろ手に

縛られているのを後ろから描いた絵が彩られていた。私がこの本を買ったのは、この表紙のためだろうと思われる。その証拠に、このストーリーは全く覚えていない。

中学一年生の時、同級生の同性とプレイをするきっかけが二、三度あった。二人の相手と、一対一で腕を縛るだけだが、この頃、初めて私は肉欲を覚えたのだ。だが、私はホモではない。この時以来、同性とのプレイは全くないし、するつもりもない。

高校に入ると欲望は高まって、良い恰好をしたがる精神、変な罪悪感、ロマンティックな少女趣味等から無理に押えつけていた。高校では一度だけ、女生徒が縛られているのを見た。階段を降りて来る

三人の女性、その中央の女性の手首が前で縛り合わされていたのだ。チラと見た瞬間、私の息は一瞬、止まった。恐らく、顔も紅潮したに違いない。だが、私は足早に立ち去った。本心では、じっとみつめていたかったのに。

## — 目 覚 め —

一番、精神的に変化の多いはずの中、高校生時代に、私に変化はなかった。ただ、失恋を繰り返したに過ぎなかった。その代わり、大学に入ってSMの花は一度に開いたのだ。

一年の同級生、その下宿の隣の部屋には先輩が住んでいた。その本棚を見た時、私は完全に上気してしまった。現実感、溢れる三枚の縛り絵。手はふるえ、息は荒くなり、恐らく目も充血していたに違いない。一糸まとわぬ豊満な女体。その体に、深々と窪みを作った細目が喰い込んでいる。苦悶の表情の美しさ。私はその本の題名を頭に刻みつけた。もっとも、これはKK誌ではない。現在、新書版で当時の名作を復刊させている月刊誌だ。

それまでの私は、SMは異常であり、絶対に他人に話すべきことではない。私は精神異常なのか。私だけが、こんなことに興味を持っているのだ……と何度悩んだことだろう。だが、この本のお蔭で、仲間がいることを知った。本が出版されているということは読者がいるということだ。この本は私の悩みに救いを与えてくれた。もっとも、完全に救われた訳ではない。その後、現在に至るまで、何

度、罪悪感を抱き、何度、資料を焼却したとか。

その翌日から私の古本屋漁りが始まった。その気になって探すと随分、見つかった。その一冊に、表紙に少女が牢に閉じ込められている絵があった。鉄格子を握った少女の衣服は破れ、右の丸い乳房が露出している。この雑誌のテーマは暗かった。日蔭のものだった。だが、私はこのムードが好きだった。プレイという言葉を知らない私は、責め手と女との間には、憎しみに類したものが存在するものと思っていたのだ。これも本当の経験がないためだったのだろう。

KK誌に出会ったのは、古本屋の店頭だった。慣れない名なので疑問を感じながらも購入して頁を繰った時、私は自分のカンが外れていなかったことを知ったのだ。今にして思えば白表紙以前の本を、今持っていれば貴重な資料になったろうにと、残念な気がする。大学の四年間、私はKK誌だけで暮した。プレイの相手を求めるには気が弱過ぎた。

体

験

そして、最初のプレイ、それは大学を出てから数年、経ってからのことだった。

相手は私より三つ下のF子。いきなりプレイに持って行った訳ではない。その前に会った時にKK誌を見せ、SMが決して異常なものでないということを、二時間くらいにわたって話したものだ。

その当日、約束より少し遅れて彼女が家に来た。勿論、家には私一人だ。最初は着衣のまま後ろ手に縛った。抵抗はない。縄を解きながら脱がせて行く。不思議なくらい抵抗しない。上体は、すっかり剥き出しになった。美しい体だった。後にも先にも、上体の美しさでは、このF子に勝る女には会ったことがない。あくまでも白い肌、艶があり、肌理の細かい肌。胸のふくらみは、とりたてて豊かではないが、形が良く、蕾は薄紅に美しい。その肌を宝物を扱うように縛って行った。肌が白いから縄目の跡は美しく、体が柔らかだから縄は深く喰い込んで行った。

F子で、もう一つ記憶に残っているのは、両手を上から吊るようにして縛った時のことだ。露わになった腋の下に、私は理想的な陰を見たのだ。濃過ぎもしない。かといって病的に薄くもない、柔らかく適当な陰を作った腋に、思わず口を寄せてしまったものだ。

F子には私を縛らせもしたが、彼女の場合

は何といっても被縛の姿が一番美しかった。唯、残念だったのは、全裸にできなかったことと、写真を撮っておかなかったことだ。あの肢体をカラーで記録しておけば、素晴らしい資料になったろうに、今では帰らぬ愛だ。彼女は一児の母になっているという。

F子と余り間を置かず巡り逢えたのがT子だ。彼女はF子と対照的なタイプだった。白く肌理の細かな肌で線の細いF子。野性的な、たくましさを持ったT子。T子は、すでに男を知っていた。だが、T子はプレイによく協力してくれたが、最後の時、T子は、自分にはSMの興味は全くなかったと告げた。それまでのプレイは全て、私への協力に過ぎなかったのだ。

それにしても、T子とのプレイは印象が強かった。体つきも、たくましいので腕力もあった。私が逆海老縛りのまま吊り上げられたこともあった。一瞬ではあったが、吊り責めの恐怖と快感を味わえたのだ。

写真を撮ったのもT子との時が最初だ。カラーでは手に負えないが、モノクロなら素人ながらDPEが出来る。T子は写真写りが良かった。出来上がった写真を見て、そのボリウムと胸の美しさに感心したものだ。



後ろ手に縛って正座させたT子を、斜め後ろから撮った写真。上下に縄を喰い込ませた乳房。T子とのカメラ・プレイは神戸のホテルだった。山手にある大きなホテルで、室内も小さいながら庭のついた広い部屋だ。カメラにタイミングを外されるため、それまでよりも時間は長くかかった。縛り上げてはシャッターを切り、ポーズを変えてはシャッターを切る。鞭をふるっても、次のシャッター・セツトのため、長く続ける訳には行かない。だが、ポーズだけは色々変えられた。

実際にプレイをしてみると頭の中で考えていたほど変わったポーズはとれない。夢中になればなるほど時間が短く、ポーズの変化も少ない。だが、この日は後ろ手縛りから始まって海老縛り、逆海老、両手吊り、簡単に出来る様々なポーズを考え出したものだった。

T子と会った頃だったろうか、KK誌のフォトを集め出したのは……。短篇を投稿し出したのも、この頃だったと思う。だが、ある期間が過ぎてしまうと、急に自責の念にとらわれて焼却してしまう。いや、自責ではなくあきてしまうのかもしれないが、還らぬことながら、今迄フォトに費した費用を考えてみると、相当なものになるだろう。もっとも、

それだけ貯金がふえているということにはならないだろうが……。

M子……そう、彼女がいた。彼女とは一回きりのプレイだ。アルサロで出会ったM子はしなやかな体つきの、どちらかといえば色黒の子だったが、どんなきっかけだったか、縛りの話になった。

「私も縛られたことがあるわ」

「え？」

私の目の色は変わっていたに違いない。

「お客さんに？」

「ううん、子供の頃」

「なんだ……でも、誰に？」

「お祖母さんに」

「悪戯をして？」

「そうね。荒縄で後ろ手に縛られたわ」

「そのまま？」

「そう、縛られたまま、放っておかれたわ。一度、外の電柱に縛られた」

「誰にも見つからなかったの？」

「近所の人が見つけてくれて、お祖母さんにあやまってくれたわ」

「大人になってからは？」

「ないわ」

「してみないか」

「いいわよ」

話は簡単に進んだ。閉店後に会うと、

「こんな簡単に、ついて来ちゃあいけないのにね」

といって笑った彼女は、可愛らしかった。過去の話は聞かなかったが、経験はあったようだ。いつもボールペンを胸元にさしているため、彼女の胸に二、三カ所、インクの跡がついていたのが印象に残っている。

色は黒いが、肌理は細かく、プロポーションは美しかった。乳房は予想以上に大きく、形は整っていた。一枚を残したまま後ろ手に縛り、柱に立ち縛りでカラー写真のシャッターを切る。カラーはその時が初めてで、これはKK誌に現像をお願いしたが、結局、焼いては頂けなかった。カラーが終わってから、最後のものを取り、縦縛りにしてから机の上に立たせた。幸い部屋には横木があったので思い切り吊り上げるようにして縛り、台を外した。その途端彼女の口から悲鳴が洩れた。

「痛い、早くして。痛いわ」

この表情、このポーズ。これは最高のものだった。縄が伸び、M子は爪先立ちになった為、本格的な吊りにはならなかったが……。

海老責めにした時の、しなやかさ。腕を上

## 梨花 悠起子



げて縛った時の腋毛の美しさ。時間の経つのが速かった。

後で聞いた話によると、M子はレズだという。それにしても、よく協力してくれた。彼女とのプレイが一回だけだったのは、今でも心残りだ。その後、店に行った時、こちらの無神経な行動がM子に気を悪くさせてしまいそれっきりになってしまった。かえすがえすも残念に思う。

その後、プレイ・メイトが見つかるまで随分、間が開いたようだ。他のアルサロでプレイ出来そうな相手には出会ったのだが、タイミングが悪く結局、実行には至らなかった。現在までのところ、私にとって最後のプレイ・メイトはK子だ。小肥りのK子。一番数

多くプレイをしたK子。相当、積極的だったK子。一番グラマーだったK子。鞭打ちも本格的にした。SMの話も相当、出来た。

SMの相手には、一時的でも良いが好意を持たなければならぬ。しかし、私の場合、愛情を持ってしまえば、もうその相手とは離れられなくなってしまう。K子との間が、その意味で一番、危険だった。

K子とのプレイの回数が一番、多かったにもかかわらず、今、こうして記そうと思っていても、変わったことが何一つ、思い出せないのだ。方法も後ろ手縛りと鞭打ちに終始した。パリエーションがなかったのは、どうしてだろうか。そのポリウム故か？ そうではあるまい。それ以外の心理的なものが多分に作用していたと見る外はない。

一児の母となったK子。一番新しかったからだけでなく、印象に残っている。

## △KK誌の

## こと▽

この手記を書き始め

た時は、プレイの話だけで、三十枚くらいにはなるのではないかと思っていた。ところが書きつくして、現在、十八枚だ。自分では自分なりに相当プレイをしたつもりだったが、整理してみると、ほんの遊びに過ぎなかったことが、判った。現在プレイ・メイトがないから……（金を出せばあるが、これでは後が空し過ぎる）今、プレイ話の続きを書く当てもない。

だが、ここまで来たのは、矢張りKK誌があったからだと思う。

白表紙以前からのKK誌、最近のKK誌には遊びの要素が非常に多くなって来ている。以前は、例え遊びと判っていても、写真等、はつきりと苦悶の表情があった。最近のKK誌を、ある水商売の女の子に見せたところ、SMに、あまり興味を示さない彼女だが、はつきりと、あまり皆、楽しそうな表情をしていると、いい切った。もっと苦しうにしている普通ではないか。これでは縄をかけられているだけで縛られているという感じがしないというのが彼女の意見だった。カメラマンが悪いのか、モデルの責任か。彼女の意見はある程度、真実だと思える。モデルがMなら喜びの、そうでないなら、苦痛の表情が出る



べきではなからうか。

その点、さすがに梨花嬢の表情は素晴らしかった。グラマーではないが、しなやかな肢体と美貌で、一番ファンが多かったのも彼女ではなからうかと思う。勿論、私もその一人だ。彼女は、プレイと関係なしにでも一度、会ってみたかったのだ。彼女によって、それまで不可能とも思っていた責めが実現出来たといっても、あながち過言ではないと思っている。

梨花嬢が長期に亘るアイドルなら、一宮百合子嬢は、短い夢だった。彼女のカラー写真を手にした時、私の息は一瞬、止まったようだ。今まで数多くのムード写真は見た。だが彼女の写真ほど、私にショックを与えたものはなかった。まだ幼なさの残っている体。それでいて、女の魅力をたたえている彼女。簡単な後ろ手縛りだけだったが、それだけに余計、体の美しさが表われていた。いわゆる美人ではなく、グラマーでもない彼女だが、思わず抱きしめたくくなるような愛らしさがあった。もし、私が独身時代に彼女に会っていたら、私の人生は大きく変わっていたらう。それだけに、辻村氏の行った行為は許せない。憶えている読者の方もいらっしやると思う。

辻村氏が彼女とのプレイで、彼女の被縛姿を彼女自身のカメラで撮ったということだ。しかも彼女の視力を奪った状態で……。私は辻村氏に何の恨みもない。一面識もないので、どんな人物かは、判らない。プレイ・メイトに、仕事上とはいいいながら、うらやましく思っている。だが、この行為だけは、どうしても許せない。一宮嬢に夢中になっていればこそである。

プレイは、相互の信頼が必要である。特に女性がMの時は、自分の全てを賭けることになるのだ。辻村氏は、その信頼を裏切った。その後の彼女の消息は聞かないが、普通の女性であるなら、K K誌に近づくことはないだろう。いや、S Mにさえ……。さらに男性にも嫌悪感を抱くことにさえなりかねない。もし一宮嬢が、その後、辻村氏の前に現われたのだったら、私の怒りが少しは柔らぐかもしれない。しかし、そうなると今度は、嫉妬心に似たものを抱くかもしれない。

モデルの名も知らない頃、私は一葉の写真をはっきりと覚えている。K K誌のものと確信しているが、何せ大分前のことだ。もし他誌であったら、お許しを……。

上半身むき出しで後ろ手に縛られた女性。

正座している女性の後ろに立つ男が、黒手袋をはめた手で片方の乳房を鷲づかみにしている。白い肌と黒い手袋、その対照の美しさ。近頃のK K誌には、このような美しさが少なくなつたようだ。モデルの変化、縛り方の変化だけでなく、一寸した考えによって、もっと残酷美とでも云うようなものが出てくるのではないだろうか。

### ――夢 数 々――

今まで書き記したように、少ないながらもプレイ・メイトがあつた私だが、S Mに関しては、満足してはいない。良きパートナー達であつたが、心からS Mを理解している彼女達ではなかった。

本当にS Mを理解している、いや、S M傾向の女性が実在するのだろうか。カメラ・ハントの候補者が後を断たないことが実在の証拠だという人もあるだろうが、どうも自分に関係がないと、実感が湧かない。K K誌ではないが、プレイ・メイトを求めたこともあったし、呼びかけに応じたこともあったが、いずれもナシのつづて、となってみると、ますます信じられなくなってくる。特に、二代前半の女性では、理解するのが無理なのだ。

ろうか。最初にも書いたが、私はSなのかMなのか判然としない。だが、どちらにしてもプレイ・メイトの最高は女学生としている。

中年の男は女学生を求めるというが、私は最初から女学生に夢を抱いていた。特にセーラー服の女学生がプレイ・メイトになれば、いうことはない。夏、電車の中で前に女学生が立ち、半袖のセーラー服の袖口から、腋の下の蔭が見える状景の何と美しいことか。

セーラー服姿は、写真でも入手しにくい。外見は女学生でも中身がひねすぎて、がっかりするのが普通だ。これは年令的に不可能だろうと思う。あとは、自分で撮るか、素人写真を手に入るかだ。自分で撮るには、今のところ相手が見つかりそうにない。そうなるを実際にプレイをした人をお願いする他はないのだが、本当に女学生とプレイをして写真まで撮っている人なんかいるのだろうか。

大分、前のKK誌で、作者の名前は忘れたが、少女のSM画を描いておられた方があった。まだ未成熟の少女。現実には、かなえられにくい夢だけに、この絵は美しかった。この作者の活動期間は短かったようだが、今一度、あの絵を見たいものだと思う。

SMファンの方は、プレイ・メイトに困っ

ている人が大半だろう。従って、そういった会の結成を求める声も大きい。だが、これには全面的に賛成しかねる。もし会のようなものがあるならば、確かに、相手を見つけるのは楽になるだろう。同じ傾向の人達の集まりなので、楽しんでプレイが出来ようだろう。だが、それだけに極端に走る傾向もある。それに、何といっても、SMはまだまだ世間の裏の世界だ。そのグループの中に一人でも心の汚れた人がいたら、その他の人は大いなる迷惑を受けることになる。矢張りプレイ・メイトは個々に見つけるものではなからうか。

SMプレイに写真は付き物だ。プレイがなくても写真だけという人もあるだろう。だがDPEの点で困る人が多いと思う。カメラは初心者でも充分、写るものが出てくるが、DPEは簡単にはいかない。ポラロイド・カメラという手もあるが、これは少し高価につき過ぎる。又、DPEの出来る人でも、カラーとなると不可能だ。そこで、信頼出来る人をお願いしたくなる。KK誌でも前に短期間、引き受けておられたようだが、これは続けて欲しい。その時の料金も、細かくKK誌に発表して頂ければ、利用者も多くなるだろう。私も、すぐに利用したい一人だ。

SMカレンダー。これは私の初期の投稿に書いたことがあった。毎月、違った縛りで、冬の雪上の縛り。春のピクニック姿。ショート・パンツにノースリーブ。リュックを背負わせたまま後ろ手に縛り山道を歩かせる。夏のピキニの縛り。キャンプでの縛り。秋の紅葉の中の縛り。テニス服の縛り。クリスマスで、縛られたサンタクロース……一週間ばかり考えたものだが、それ以後、実現されるようなムードもない。例え、壁にかけるような大きな物でなくても手帖ぐらいのサイズでも良い。誰か作ってくれる人はないものかと思う。また、プレイは別にしても、写真だけでも撮ってくれないものだろうか。実費で、しかも信頼出来る人をお願いしたい。Mとしての私は、若いうちに自分の記録を残しておきたい。この肉体に衰えが見えないうちに。

KK誌は、今のままで進んで欲しい。唯、個人的な感情だが、「花と蛇」は、もう終わるべきではないか。この作品は私も好きだ。見事な作品だと思う。だからこそ、そう思っているうちに終わって欲しい。最高調は長く続くはずはない。下り坂になってから終わるのでは、あまりにも、みじめだ。後を引くうちに終わって欲しいと思う。

(終)





カット・緑 JOE

1

「お宅へ来るお客さん、あれは一体どういう人たちの」

「買い物などで顔を合わせると、ご近所の奥様方は判で捺したように、そうお訊ねになります。そのたびに、わたくしは、

「そんなことは全然、存じあげませんわ。わたくしは、ただの小間使いですから」

「そうお答えすることにして居ります。小間使いなんて大層、古風な言葉だと笑われそうですね、わたくしはこの呼び方が一番好きなんです」

もし、<sup>ほんとう</sup>真実のことをお話したら、お上品で良識的とやういう奥様が、そろって腰を抜かすか、失神なさることは請け合いと申せましょうから。

「でも、変ねえ。あんな美しい方の所へ、見るからに気味の悪い男の人ばかり……」

眉を顰めてうなずき合う表情には、わたくしがお仕えている女主人に対する羨望と申しますか、妬みと申しますか、むしろ敵意と呼んでもよさそうなものが、はっきりと読み取れます。

奥様族とはいっても、所詮は平凡なサラリーマン家庭の主婦として、その日その日の暮



らしに追い回されている人々の目には、わたくしの御主人様のような優雅そのものの生活は、望んで得られぬ夢とでも申しませうか——そんな風に映ったにちがいありません。

遠慮のない方は、

「二号さんじゃないの」

などとも訊ねられます。

四六時中、小間使いに侍かれて、匂うばかりの和服を着こなした女の一人暮らし——常識として、そう考えるのも不思議ではございません。ですから、わたくしが、

「いいえ、うちの御主人様は、そのような方ではございませんの」

とお答えすると、どなたも当ての外れた落胆の色を浮かべます。

「じゃあ、お金持の未亡人なのね」  
したり顔に仰言る方もあります。

「はい。お金持ですわ、とても。——でも今までに、旦那様をお持ちになったことは一度もございません」

どうやら、良識的奥様族の推理力も、このあたりで壁に突き当たり、わたくしも、それ以上は、おつき合いしかねます。

よしんば、このかたがたが百万年も論議したところで、わたくしの御主人様について鶴の毛ほども理解することなどはあり得ないのでございますから。

## 2

「ねえ、綾」

御主人様が美しい横顔をお見せになり、  
「今夜はカシムが来るんだから、お前も念入りに磨き上げておかなきゃね」

そう仰言って、突然クツクツとお笑いになりました。

明るいバスルームの程よく温ったタイルの上に両膝をつき、笑うたびに小刻みにふるえる白い陶器のようなお背中を、香りのよい石

鹸の泡でいっぱいにながら、わたくしは思わず顔を赧らめて居りました。

「カシムの奴ったら……お前がお気に入りらしいことよ」

「奥様ったら——」  
わたくしは、つい、はしたない声を出してしまいました。

「だって、お前を鞭うつ時の目つき……でも綾には、わからないわね」

御主人の声を聞きながら、その時、何の予告もなく、わたくしのからだの中心部に、突き上げるような疼きが走りしました。標本のように広げられたわたくしの極小部分に、針穴を通すような正確さで降り注いだ鞭の灼けつく感覚が突如よみがえったのでございます。

わたくしたちが「カシム」と呼んでいる醜悪な佻僂男の鞭は、それはもう芸術品という言葉が、ぴったり。もちろん、カシムはプロですから、当り前といってしまえば、それまでですけど、どんな小さな目標からも一ミリと外れ<sup>はず</sup>ない正確さは、ただただ、驚くばかりでございます。しかも、わたくしのからだの中でも、わたくし自身しか知らないような部分までの確に探り出して、隠微な責めを繰り返し、恥かしい声をあげさせるのです。

「あら、どうしたの、急にモジモジして……」  
御主人様は、まだ悪戯<sup>いたづら</sup>っぽい笑顔を漂わせながら、クルリと向き直りました。

「わかった、思い出しているのね。いやな娘ね——」

それと同時に、わたくしは「呀っ」と叫びました。御主人様の細い指先が、わたくしの乳房を掴み、五つの爪が食い込むほど、ひねったのです。

「まるで小さな悪魔みたいに、可愛らしいからだをしているよ」

たちまち、わたくしのからだは、石鹼に濡れた柔らかい両腕の中に抱き締められていました。こうなると、もうわたくしは駄目なのです。うっとり<sup>うっとり</sup>と瞼を閉ざした、わたくしの唇を御主人様の熱い唇が塞ぎ、ふるえる全身を、やさしく這い廻る柔らかい掌を意識しながら、わたくしは遺瀨なく喘ぎ始めます。

「この肌ね、カシムを恋しがっているのは」  
御主人様の手が触れ、芳しい息が耳許にかかるのを感じた時、早くも最初の陶酔が、わたくしの四肢に走りしました。

## 3

正直のところ、わたくしは御主人様の年齢



を知りません。わたくしがお側で暮らすようになって、もうずいぶんになるはずですが。にもかかわらず、美しい肢体のどんな微細な部分にも、それと変わったところを見つけてくことは出来ません。ですから、初めてお目にかかった時が何歳で、現在は何歳になるのか、見当さえ、つかない道理です。

そればかりではありません。どんな美しいものでも永いことと見ているうちには新鮮さも失われるでしょうし、それなりの欠点も見えて来ると申しますが、わたくしの御主人様に限って、それはウソです。永い間、身近にお仕えしている、わたくしの目にさえ、見るたびに瑞々しく、見るたびに新鮮で、昨日感じた美しさと、今日感じる美しさが違っており、毎日毎日が、初めてお会いするような、おどろきと讚美の繰り返しでございます。ですから、わたくしには御主人様との生活が、一体どれくらいになるのか、それさえ思ひ出すことが出来ません。

象牙のような湯上がりの肌をマッサージして差し上げながら、今また、わたくしの胸は新しい讚美の気持ちに満たされて居ります。よく「夢のような」とか「この世のものではない」とかいう形容が使われますが、御主人様

の美しさに対する、わたくしの貧しい表現としては他に思いつける言葉はございません。

マッサージが終わると、全身に限なく香水を擦り込んで差し上げ、そのまま素肌の上に目の覚める様な緑のケープを着せかけます。羽毛のように軽く、透きとおったケープは、御主人様の白磁の裸身を足首まで、ふんわりと覆います。

つぎは、わたくし。つい先刻、バスルームで受けた愛撫の余燼が、けだるく燃り続ける五体に万遍なくオーデコロンを振りかけ、燃えるような緋色のケープを纏いました。

時計の針は午後七時十五分前――。

あとは、待つばかりです。

人間ひとりとは楽々と、はいれそうな巨大なトランクを提げ、醜い肉塊を背負ったカシムが地獄の使者のように現われるのは、もう直ぐです。あのトランクの中に、ぎっしりと詰まった世にも恐ろしい道具の数々――それらを見ただけで、わたくしの全身の血が妖しく騒ぎ立ちます。その一つ一つには、人間のありとあらゆる苦痛が込み込んでいるのです。もし、あの中の一極くありふれたものでも、口さがない、ご近所の奥様族に一目見せたら、それだけで気が遠くなるでしょう。

にもかかわらず、御主人様もわたくしも、それを待っているのです。私は、もう小刻みに四肢がふるえています。多分、御主人様も同じ気持ちであろうことは、白々と緊張した横顔から察せられます。

時計の針がカッチリと七時を指しました。

## 4

ご年配の方はロン・チェニイという性格俳優が演じた「ノートルダムの尙僂男」という映画をご記憶でしょうし、そうでない方もイギリスの名優チャールズ・ロートンやアンソニー・クインが扮した尙僂の寺男カシムの無気味な姿を覚えていらっしゃると思います。

けれども、たった今、わたくしたちの眼前に立ちはだかっている尙僂男の醜怪さばかりは、どんな名優が扮装の妙を凝らしても、とうてい創り出すことは不可能でございます。う。なぜなら、わたくしたちの「カシム」は本物なのです。人工のメーキャップの限界を超えた真正正銘の化け物なのです。

片目は瀬戸物のように白く剥き出した義眼ですが、それよりもっと身の毛のよだつのが崩れた眼窩の底に深々と埋没して燐光を放つ生きている方の眼です。ひしゃげた鼻の下か

らニューツと突き出した黄色いヘラのような前歯から、絶えずヒューヒューと音を立てて吐き出される悪臭——それだけでも、この世の醜さを、すべて引き受けたようなカシムですが、さらに彼の宿命を象徴しているのは、その肉体です。一メートルもあるかと思われ肩幅の中央に摺り鉢を伏せたように盛り上がった肉の塊り。しかも彼の全身には体毛というものがなく、薄気味わるいほど白々とした膚が上気して来ますと、その肉塊だけが奇妙な淡桃色に染まり、まるで湯上がりの処女の肌を見えるような錯覚にとらわれます。

現在、黒いタイツを穿き上半身を露わにしたカシムのそれは、じっとりと汗ばみ、磨いたようにテカテカと光っています。彼が身動きするたびに不均衡に、発達した瘤のような筋肉が勝手に活動して歪んだ贅を作ります。

御主人様とわたくしは、すでに一糸も纏わぬ裸身を後ろ手に括られ、両足首にも固く縄をかけられて、床に跪かされています。

わたくしたちが演じているのは、断頭台のシーンです。御主人様は身分の高い貴婦人、わたくしはお側仕えの侍女、そしてカシムは首斬り役人といった役割りです。

その昔、日本では土を盛り上げることから

「土壇場」と呼ばれましたが、わたくしたちが引き出されたのは、中世ヨーロッパ風の断頭台で、恰度、囚人の首を載せる部分が窪んでおり、その周辺にドス黒い血が無慙に、こびりついています。また、その傍には、これもベツトリと血塗られた斧が立てかけてありますが、これらの血は、むしろ本物ではなく演出効果を高めるために彩色したものです。とはいえ、見ただけで背筋が寒くなるような雰囲気醸成するには充分でした。

首斬り役人は先ず後ろ手にされた貴婦人の縄目をムズと握み、断頭台の前に引きずり出します。足首を括られておりますから、柔らかな下肢が、むごたらしく床を擦って、美しい囚人の猿ぐつわの奥から、耐え切れぬ呻きが洩れます。

「ムムム……」

紅唇を裂き、頬が歪むほど喰い込んでいるのは、特異な舌押えのついた革製の猿ぐつわで、同じものをされているわたくしには、カシムがどんな目的でそれを考案したか、よくわかるのです。

## 5

ふだんは鍵をかけたままの、二十畳敷ほど

の洋間。家具および造作と名のつく物は何ひとつない長方形の四面には完璧な防音装置。しかも隅々まで行き渡った間接照明——それが、わたくしたちの「演技の部屋」ですが、この部屋の特に変わっている点は、プロマイド撮影室のように四方の壁から天井、床にいたるまで黒一色に塗りつぶされていることでしょう。これは、わたくしたちがこの部屋にはいる場合は殆どが全裸であること、つまり他の一切の形状や色彩を排除して、最も単純化されたコントラストによってプレーの構図を効果あらしめようという意図で設計されたものと思います。

断頭台は、黒い部屋の中央近くに据えてあり、そこでは、いまカシムの首斬り役人と御主人様の貴婦人とが、無言の争いを続けています。

恐怖に身を悶え、必死にあとずさりしようとする貴婦人の背中を、面倒とばかり首斬り役人が蹴りつけました。

「ムウッ」

と呼吸が詰まって、思わず上半身を丸めます。その髪の毛を驚愕みにしてグイと引き起こすと、黒い布で手早く目隠しします。

「う……」



哀れな小羊は、なおも最後の抵抗を試みますが、首斬り役人は容赦のない力で、いまにも折れそうな細々とした首を断頭台の窪みに押しつけました。骨の鳴るような音がして、白い首筋に、ベツトリと断頭台の血が付きます。さらに首斬り役人が片足を上げて踏みつけますと、ふるいつきたいほど恰好のいいお尻を高々と持ち上げた羞かしい姿勢のまま、もうビクとも動けない貴婦人——それを心地よげに見下ろして、カシムが初めて口をききます。

「いいザマだ。きさまらのために、オレたち平民は永いあいだ犬畜生のような目に会わされて来たんだ。思い知るがいい」

その凄みのきいた声といい、憎々しげな言葉といい、カシムの台詞は堂に入ったものでございます。

「ムムム……」

犠牲者の咽喉からは、くぐもった呻きが、わずかに聞こえるばかりです。とは言いましても、こちらの方は演技ではありません。極端に捻じ曲げられた全身から、膏汗が滲んでいるのが、それを物語っています。

「覚悟はいいか」

首斬り役人の一つしかない目がキラキラと

光を増します。

目も口も覆われた御主人様の顔の中で、二つの鼻孔だけが別の生き物のようにヒクヒク動いているのが、奇妙に官能を咬りました。

首斬り役人は、立てかけてあった斧を取り上げ、指の腹で切れ味を確かめながら呟くのです。

「ふむ。まだまだ切れるわい。正直のところひと思いにスパツと落としては味もソッケもねえ。骨皮を半分切り残して、ブランブランぶら下がるところを見物衆のお目にかけてえもんだが……。おい、貴様は運がいいぞ。苦しまずにカッコよく死ねるからな」

首斬り役人は、血塗れの斧の側面でピタピタと犠牲者の頬を叩きます。その顔まで血に染まった貴婦人の姿は、いっそう凄惨なものになりました。

「さあ、最後のお祈りでもしろ」

両腕の筋肉がモリモリ音を立てるように動くと、首斬り役人は、ついに斧を高々と振り上げました。

「たあッ」

気合とともに、ハンマーのような両腕が渾身の力で振り降ろされるのを見た瞬間、わたくしまでが猿ぐつわの中で「ムワッ」と叫ん

で、目をつぶってしまいました。それは、何とも恐ろしい一瞬でした。わたくしの網膜に鮮かな血を噴いて転がる御主人様の首が、はつきりと映りました。

迫真の演技というのでしょう。誰だって、まさかあの斧が、スポンジ製だなんて……。

## 6

カシムはプロの鞭打人<sup>ウィップパー</sup>として、時間決めて契約し、依頼客の希望にに応じて、さまざまのサディスティックな状況を作り出すわけでございます。ウィップパーと申しまして、もちろん鞭打ちだけが、すべてではありません。殊にカシムは、その外観の特異さに加えて、レパートリーも豊富な一流の技術者というところで、礼金も法外に高いと申すことですが、御主人様は彼が、ことのほか、お気に入りなのです。

カシムのレパートリーの一切は、その超大型のトランクにぎっしり詰められています。彼は死刑執行人、魔女審問官、拷問役人、奴隷商人、盗賊、ネロ、十字軍隊長、地下牢の牢番、ナチの収容所長など、考えつくほどの凡ゆる酷薄な役柄を演じますが、それに応じて御主人様とわたくしも、女囚、女スパイ、

魔女、異教徒の姫君、女奴隷、ユダヤ人の姉妹、ハーレムの女からジャンヌ・ダルクやマリー・アントワネットにまで扮するわけですが、そうした状況設定のすべてが、このトラシク一つによって行なわれるのです。中世風のいろいろな枷、革から髪の毛にいたるロープ類、鉄球付の足輪、首輪、金属製・木製・生ゴム製など、二十種に余る呪口具、さらに窄衣、貞操帯、クサリ褌、奇妙な仮面などのほか、さまざまな目的に使い分ける何十本もの鞭、竹鋸、まさかり、青竜刀、釘抜きなど見るからに恐ろしい拷問具、それに医療器械や人造血にいたるまで、とても数え切れないような謂わば商売道具を常に持ち歩いて、わたくしの御主人様のような顧客を巡回しているカシムが、週に一回、金曜日の午後七時という、判で捺したように、その醜怪きわまる姿が巨大なトラシクとともに、こつせんと現われるようになって、もう数年にもなりましようか。

「世にも醜い男の犠牲になる、世にも美しい女」という異常なイメージが、御主人様を、この上ない興奮に駆り立て、狂気のような陶酔に導くのを身近で目撃するうちに、わたくしまでが知らず知らず、そうしたアブノーマ

ルな状況下で被虐を求め、骨の融けるような悦びに浸る女になっていたのでございます。

## 7

突き刺すような鋭い痛みを意識を取り戻した時、わたくしは両腕を天井に吊り上げられ左右に割り広げられた両腕の爪先が辛うじて床に触れていました。

突然、ヒュッという短い唸りとともに、わたくしは「ウッ」と、のけぞりました。眼前に仁王立ちになったカシムの手に、よく撓う犬鞭が握られています。と気がつくより早く再び切り裂くように風が鳴って、鞭の先端がわたくしの乳房の頂を、かすめました。

「ああッ」

猿ぐつわのない、わたくしの咽喉から、今度は大仰な悲鳴が、ほとぼしります。それは射撃の名手のような鮮かさで、小さな熱さの中心を的確にとらえます。灼けるような熱さがジーンと、からだの芯に滲みとおり、無意識の呻きをあげる、わたくしの下肢を狙って、一転した鞭が掬い上げるような曲線を描きました。

「アウッ」

充分にひらかれた両腿を、それは疾風のよ

うに走り抜けたのです。一瞬、わたくしの全身がピーンと反り返り、ロープがはげしく震えます。

カシムは、一撃のあとの余韻を愉しむように、やや間をおいて、わたくしの反応を観察しております。彼の一つ目が、ちゃんと見通しているように、わたくしのからだの奥深いところに燃え残っていた陶酔の火が再び、めらめらと吹き上がって来ました。

御主人様とわたくしは、つい最前、カシムの淫虐な鞭に翻弄され、殆ど前後して失神したのでした。ふたりは向かい合わせに、両腕を頭上で一緒に括られ、四本の足首も、まとめて緊縛され、さらに、お互いの口と、からだを、特殊な器具で連結されたのです。その器具というのは、むかし大奥などで女同志が密かに用いたといわれる秘具で、現在でもレスビアンに愛用されている、あれに似たものです。一方は、ふたりを同時に啞にさせる猿ぐつわの役を果たし、もう一方は……ご想像のとおりです。

それでなくても、はだかの前面をびったりと合わせて、御主人様の芳しい香りと、統のような肌の感触に恍惚となっていたわたくしは、お羞かしい話ですけれど、はやばやと四



肢が痺れ、気が遠くなりかけました。そこへ鞭が降って来たのです。イボイボのあるゴム製の鞭は、ふたつの臀部だけを目標に、しかもリズムカルに降り注ぎます。おしりの肉を削ぎ取られるような衝撃が炸裂するたびに、わたくしたちの五体に痙攣が走り、それがお互いのからだの内部に微妙な感覚を伝え合うのです。鞭は、しだいにスピードを加え、しまいには現在どちらが持たれているのか区別がつかなくなりました。連絡された、ふたつの裸身は、もう間断なく牽<sup>ひきつ</sup>れ、のたうち、汗みどろになって、ゴロゴロと床を転げ廻りました。

やがカシム自慢の集中打が始まります。先端に直径一センチほどのゴムの玉がついた鞭が、サツと肌をかすめたかと思うと、そのゴム球は的確に、小さな的をとらえます。この鞭の効果は、御主人様もわたくしも、口の中のものを力いっぱい噛みしめ、獣のような呻きを洩らしつつ、何度となく忘我の境へ追い上げられたことでも、お判りいただけだと思います。

御主人様とわたくしは、床の上に重なったまま、遂に気を失ったのですが、見れば御主人様は、部屋の中央に、あられもなく仰臥し

たままです。

いつ引き離されたのか、いまは、わたくしひとりが吊られて、鞭打たれているのです。

わたくしは、すでに自制できないほど燃えあがりながら、この時フツと、バスルームの中で御主人様が仰言った言葉を思い出しておりました。

（お前を鞭打つ時の、あいつの目つきったら……カシムは……お前が、お気に入り……）

眼をひらくと、びっくりするほど間近にカシムの顔がありました。

（この男が……わたくしを……）

と思った瞬間、ひときわ鋭く、熱い衝撃が襲いました。

「ヒューッ」

わたくしは何とも羞かしいこの日一番の悲鳴をあげてしまいました。それが沸騰点になったと申しましょうか、あとはもう止めどもなく、身も心も、とろけ始めました。

8

いつの間にか御主人様が床の上に半身を起こして、わたくしたちを熱視<sup>ねつし</sup>めていました。

わたくしと連結されていたものを握りしめ、わたくしを、いたぶり続けるカシムの後ろ姿

にジッと視線を注いでおりましたが、わたくしの喘ぎが急速に昂まると、それに誘われたように、よろよろと立ち上がりました。

御主人様は一步一步、踏みしめる歩き方でわたくしたちに近づいたと思うと、いきなりカシムの背後から、とびかかったのでございます。不意をつかれて振り向くひまもないカシムの、汗に塗れてテラテラと光った肉塊をラグビーのタックルのように両手で抱え込みました。と同時に御主人様は、それに頬ずりし、鼻を押しつけ、はげしいキスを浴びせ始めるのでした。それは、まるで食べてしまいうような勢いで、狂いのような喘ぎさえ、咽喉を洩れて来ます。ところがカシムは、ちょっと唇を歪めただけで表情も変えず、白い裸身を背中へしがみつかせたまま、わたくしへの作業を再開しました。そうになると、御主人様の懸命の努力にもかかわらず、淡桃色に照り輝く肉の小山は、カシムの動きとともに、じっとしてはおらず、そのうえ、しとどの汗で滑りますから、ツルリツルリと両腕の間を抜けて行きます。それを追いかけては取り纏ろうとする必死の御主人様を、抑<sup>おさ</sup>えようように、ひよいと逃げる肉塊——それは珍妙な、しかも狂気じみた鬼ゴッコにも似ていました。

眼前に展開される光景を、うつつにながめながら、その間、わたくしは何度、羞かしい声をあげたことでしょう。

「ウッ、ウッ」という、はげしい呻き声に、ふと気がつくと、床に胡坐をかいたカシムの背に御主人様が、びったりと、はりつき、いまは自分だけのものとなった背中の肉塊に、長々と伸ばした紅い舌を這わせているのでした。ピチャピチャという湿った響きとともに噴き出す汗と御主人様の唾液とで一層、てらてらと光るピンク色の肉塊は、一種の官能的な美しささえ、感じさせました。

突然、御主人様が立ち上がりました。と思うと、まるで馬にでも跨がるようにその背中の小山に腰を下ろしたのでございます。汗ばんだ陶醉の表情を、うっとり仰向けて恍惚境を彷徨う御主人様を目のあたりにした時、わたくしの身内にはじめて嫉妬に似た衝動が頭をもたげていたことを、告白しないわけにはまいりません。

## 9

プロレスなどという言葉が日本人の耳にはまだ新奇に聞こえた終戦直後、米軍基地の近くなどで、小規模な興行が行なわれていたと

いうことです。プロレスといっても、多少の経験があるGIの力自慢が寄つての真似ごとみたいなもので、いわばセミプロとでも申しましようか。

「ヘラクレス」も、そうした素人レスラーの一人で、日本で除隊になったのちも本国に帰らず、折柄、日本国内に根を下ろしたプロレス興行の前座試合などに出ていたと聞きますから、ひょっとしたら顔を憶えておいでの方もあるかと思ひます。が、やがて観客の目が肥えてまいりますと、所詮は素人レスラーの半端な業では通用しなくなり、マットから姿を消したと申しますが、その元黒人兵がどんな経緯で、御主人様の雇われウィッパーになったのか、その辺の事情は、わたくしにもわかりません。

リング上で暴れていた頃、一メートル九六センチ、二四五ポンドと称した黒い巨大な姿が、カシムと同様、週に一回、わたくしたちの前に現われるようになったのは、そう古いことではありません。

ヘラクレスは、もちろんその道のプロではございませんから、数々の責め具を使って変化のあるレパートリーを展開するというわけにはまいりません。むしろ、御主人様の指示

のままに、何とか自分の役割を果たしているといった、あんばいですが、そのどこもない無器用さ、荒削りな力が却って新鮮さを与えカシムのように凡てに手慣れたプロとはまた違った迫真力を感じさせるといふことで、御主人様もそれが気に入っていたのでしよう。

とはいえ、何を措いても彼のすばらしさはわたくしたちが「ヘラクレス」と名づけた、その肉体の図抜けた見事さでございます。

磨き上げたブロンズの光沢を持った漆黒の肌、すでに四十を半ば過ぎてはいるはずなのに衰えの影さえ見せない筋肉の締まり、それがギリシャ彫刻のようなプロポーションに集約されて、巨大な動く芸術といった表現がびつたり、フツと吸い込まれるような美しさでした。

ヘラクレスが黒い芸術品なら、御主人様はさしずめ白い女神と申せましよう。ですからこの対照の妙ともいふべき両者が相対した情景は、何とも明状しがたい妖しい美の極致を展開し、思わず恍惚と見とれてしまうほどでございます。

## 10

毎週火曜日がヘラクレスとの一夜に充てら



れていますが、正直に申しまして、わたくしにとってはカシムの場合と異なり、朝、目がさめた時から身内の血が騒ぐといったことはありません。それというのも、火曜日のわたくしは終始、第三者としての役割しか与えられず、手持ち無沙汰をかこつことが多いからです。それが御主人様の命令かどうかは知りませんが、ヘラクレスは、わたくしに一顧の関心すらしめさず、その荒々しい情熱を御主人様ひとりに注ぎます。わずかに介添えとしての役が済んでしまうと、もうわたくしは無視され、黒と白の描き出す官能的な構図を虚しく傍観するよりほかないのです。その構図が、あまりに烈しく、みだらな時など、床の片隅にひとり満たされぬ思いに悶え、みずからの手で我身を責めることさえございます。

今も今とて、わたくしは二人の世界から全く締め出され、忘れ去られております。

カシムとは違って、糸クズ一つ、身につけないヘラクレスの漆黒の巨体が、黒人特有の墮せっぽい臭気を発散しながら、床に仰臥する御主人様に迫ります。幅の広い衝立のような背中が、汗で黒光りして、先刻までのプレーのはげしさを物語っています。

わずかに両の乳房を上下させ、目を閉じて

次のプレーを待つ御主人様も、もちろん生まれたままの姿でございます。

ヘラクレスが、ゆっくり近寄るにつれて、御主人様の白い裸身のあちこちが期待と緊張にヒクヒク痙攣するのが、わたくしには、よくわかります。

てのひらと爪の部分だけが、気味のわるいピンク色をした、黒い大きな手が、鉄枷のように御主人様の細い首にかかりました。

## 11

カンニバリズム

食人の欲望というのがありますけれど、それを裏返した潜在的欲望みたいなものが多かれ少なかれ女性の中にはあるのではないでしょうか。「自分のこんなに美しくやわらかい肉体をムシヤクシャと食べられたら……」という秘かな空想が、からだの芯を熱くするというナルシズムとマゾヒズムの複合したようなもので、ヘラクレスを相手にする時の御主人様の異常な興奮は、それに裏づけられていると申せましょう。

あの漆黒の肌からのぞく、印象的な真っ白な歯――何もかもを噛み砕かずにはおかきうな、刃物にも似た大きな歯によって、引き裂かれ、食い千切られるという被虐的な空想

が、御主人様の五体おこりを檻のようにふるわせるのでございましょう。

「ウウウッ」

黒い指が、じわじわと、その輪を締めつけて行くにしたがって、猿ぐつわのない御主人様の唇から苦悶の呻きが洩れ、満月のように咬い腹が反り返ります。それでも委細かまわず、黒い輪は喰い込んで、たださえ細い首がそのまま、ちぎれてしまうのではないかと思われるほどのです。

「ムウウ……」

美しい顔は真赤にふくれ、歪み、空気を求めて二つの鼻孔と、紫色の唇が大きく開かれます。飛び出した眼球めだまは、もう何も見ていません。白い両手がヘラクレスの逞しい胸を掻きむしり、優美な下肢が、みだらな線を描いて宙に躍ります。

黒い岩のようにさえ見えるヘラクレスの陰で、白い裸身が妖しく苦悶するのが見えました。と同時に、今まで滅茶苦茶に空を蹴り宙を掴んでいた手足から一度に力が脱け、全身が一本の棒のように静止しました。

わたくしが未だに分らないのは、この時御主人様が、ほんとうに仮死状態となるのかそれとも手のこんだ演技なのかということ

す。演技というには、あまりにも真に迫っていますし、かといって実際に失神してしまっ  
ては、それ以後のプレーを愉しむことが出来  
ないわけですから。

ヘラクレスは満足げに唇をゆるめ、ピクとも動かない美しい肢体に眼を注ぎます。その唇から、気味のわるい色をした舌がペロリとのぞきました。恰度、獲物を前にゆっくり愉しむ猛獣のように舌なめずりをしながら、白い肌を万遍なく嗅ぎまわります。

しばらくしてヘラクレスは、あられもなく開放された御主人様の両足首を左右の手でムズと握み、軽々と引き上げました。御主人様の裸身は、たちまち逆様となって宙に浮き、ダラリと下がった両手の指先と、豊かな黒髪の先端だけが、わずかに床に触れているだけです。ヘラクレスは、両手に握った左右の足首を、玩具みたいに捻じたり閉じたりして弄びます。そのたびに、弓のように反った御主人様の白い腹部が膨らんだり凹んだり、ゴム人形を思わせる動きをしめすのですが、それは何とも猥雑な光景でした。

いまやヘラクレスの両の拳は肩の高さまで引き上げられ、御主人様はがっちりと宙に固定されました。

ヘラクレスは、らんらんと光る目を、吊り下げた御主人様のからだに注いでいたかと思ふと、突然、大きく口を開いてガッと噛みつきました。

「グエツ」

気絶しているはずの御主人様の咽喉から、叫びとも呻きともつかぬ声がほとばしり、下にした頭から吊り上げられた足の爪先まで、恐ろしい痙攣が走ります。

洞穴のように開いた口の、ステーキを連想させるような唇、強靱な舌、石器に似た歯による人肉の、むさぼりが始まります。

ガッガツという音を立てて、忙しく上下する黒い咽喉の動きとともに、御主人様の五体が縮んだり伸びたり、ねじれたり反転したり、唇からは絶えず悲鳴と呻吟と喘ぎが交錯して、それが段階的に高まって行きます。先ほどまで力なく垂れ下がっていた御主人様の裸身は振り子のように激しく揺れ、黒髪の束が床を掃きます。

と、突然――

「グワッ」

という咽喉を割り裂くような音がして、仁王立ちになっていたヘラクレスが、わずかによろけました。

カシムの時と同様、プレーは明け方近くまで続けられるのが常でしたが、ヘラクレスが帰ったあとの、この索莫とした空しさはどうでしょう。カシムは一度だって、わたくしにこんな思いをさせたことはありません。わたくしは、いつも満ち足り、幸福感に溢れて、虚脱した肉体を床に横たえたまま彼を見送るのです。この時ばかりは、世にも恐ろしく醜いカシムの顔が、何といとおしく見えることでしょう。

いま、羽根を奪られた鳥のように身も世もなく崩折れた御主人様の、快楽に濡れた裸身をたすけ起こしながら、わたくしの心の中には、埋めようのない黒い穴がポツカリと口をひらいているのでございます。

魂の脱けた白い肉体から快楽の痕をすっかり洗い流してさしあげたあと、御主人様に背を向けて、自分の体を洗う時など、今更のよう烈しい自己嫌悪に身ぶるいいたします。

「終わったら、こわい目で見ていたことね」

美しい四肢を伸び伸びと湯舟に沈めながら御主人様が笑いかけます。自分とヘラクレスとの狂態に注がれていたわたくしの表情を、



御主人様は、ちゃんと知っていたのです。心の中まで見すかされたようで、わたくしは居たたまれない羞かしさに口竅りました。

「こわい目だなんて……」

「いいのよ、いいのよ。お前の気持は分かっているの。ヘラクレスは、カシムのようにはいかないからね」

御主人様は湯舟を出ると、温く濡れた両腕で、わたくしの肩を優しく抱き寄せました。

「さみしかったろうね。あたしが、埋め合わせしてあげようか」

熱い息が、わたくしの髪を撫で、豊かな乳房が触れるのを感じると、もはやわたくしの胸の中からは、つい最前までの、ちっぽけな僻みや佻しさなどは、忽ち吹き飛んでしまうのでした。御主人様は、つねづね、わたくしを可愛がってくださり、自然レスピアンのような関係になっていたことも、白状しなければなりません。ただ御主人様と、わたくしの場合、愛情表現の形というものが終始、一方的でした。と申しますのは、内容こそ違え愛撫するのは何時でも御主人様で、わたくしは、どんな時も受け身で、悦びに四肢をふるわせ、遣る瀬ない悲鳴を洩らすだけです。います。

興にのると、御主人様は、わたくしを縛ったり、鞭打ったりすることもあります。生まれたままの姿にした、わたくしに羞かしいポーズをとらせたり、とても口では申し上げられない様なことを強制したりもいたします。カシムのように目の眩む強烈さや淫靡な苛酷さは、もちろん、ありませんが、自分が讃美し敬慕する美しい同性に責められるということは、また違った甘美な陶酔に心を痺れさせわたくしは泳え性もなく甘えた悲鳴をあげてしまうのでございます。

## 13

「お前は、カシムに惚れてるだろう」

素肌の上に粗い網タイツをびっちり纏った御主人様は、わざと蓮葉な言葉で、後ろ手に括られた裸のわたくしをいたぶります。

もう戸外は明るくなっているでしょう。わたくしたちはバスルームを出ると、再び「黒い部屋」へ戻りました。御主人様の仰言るわたくしへの「埋め合わせ」のために――。

わたくしはといえば、妖しい美しさをたたえた御主人様のサディスティン姿に、ついついと見惚れてしまう始末です。

「きりきりと白状おし」

御主人様が手にした撓やかな鞭の、ヒューッという素振りの音を聞いただけで、わたくしは、もうゾクゾクと血が熱くなって、甘えるように首を横に振ります。ヘラクレスとのプレーで御主人様の汗と体臭を、たっぷり吸い込んだストッキングが、わたくしの口を満たしていますから、もちろん言葉にはなりません。わたくしは「いいえ、いいえ」とオウムみたいに繰り返します。

「嘘をお吐き。とぼけたって、この猥らな尻が甘ったれたカッコするのを、ちゃんと見たんだよ」

言い終わらないうちに、ピシリと派手な音を立てて最初の一撃が、わたくしの臀部に落ちて来ました。

「ムウッ」

痛さというより、その一撃で、わたくしの全身の血がカッと燃え上がりました。あまりにも烈しいプレーを目前にしながら、終始、疎外され続けて来たわたくしのからだの中で、鬱勃と排け口を求めていた被虐への欲望に点火された、かたちとなったのです。

「ほら、ご覧――」

またピシリと鞭音を立てた御主人様は、「カシムの名を聞いただけで、そんなに嬉し

そうにしてるじゃないか。このいたずらものめ」

そう言うと、ブーツの底で、わたくしを仰向けに転がしました。

「その様子じゃあ、よほど、うれしくって御機嫌になってるんだらう。正直にお云い。さあ、お云いったら」

鞭の先端が、わたくしの内腿を離させようとしています。これがカシムの場合ですと、わたくしが、どんなに力をこめて抵抗しようとしても、その神技的ともいえる鞭の洗礼を受けると、自分の意志や努力とは全く別のところで、彼の思いのままにされてしまうのですが、御主人様の鞭は、むしろそうしたわけにはまありません。

わたくしが頑なに膝を閉じたまま、鞭に耐えているのに業を煮やし、

——ご投稿下さる方へお願い——  
各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かず送付されると、稿料送呈その他で整理がつかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメージ画も）毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。

「おや、どうしても強情を張るつもりだね。

お前がその気なら、逆さに吊っても割り裂いてやろうじゃないか」

と、凄みをきかせます。けれども、台詞ばかり恐ろしげでも、そこは女の力、逆吊りになど出来るものではありません。それを知っているわたくしは、いわば裏づけを持たない言葉だけに観念して、御主人様の言いなりになるというのが、毎度繰り返されるパターンとでも申しましょうか。

正直に言って、出来ることなら自分から力を貸してでも逆吊りにしてほしいのが、わたくしの気持です。あのカシムの容赦ない苛烈さと、骨の髄まで軋むような迫力には、とても及びますまいけれど、心から憧れ、お慕いする御主人様に一度でも逆吊りにされ、責められたら——そう願望しながら、いつもママゴトのような、なれ合いに終わってしまう御主人様とのプレーには、やはり空虚な物足りなさ、もどかしさを感じないわけにはまいません。

14

近頃のわたくしは、もはや一筋縄ではいかないほど被虐のよろこびに馴らされてしまっ

ております。

自分のどこに、そんな血があったのか、われながら恐ろしく、おぞましく思いながらもわたくしの肉は、皮膚は、本物の——プロの鞭の味を忘れられなくなってしまったのでございませう。

お恥かしいことですが、現在のわたくしにはカシムが来る金曜日だけが、この世で最上の生き甲斐なのでございます。

わずか一週間が、まるで百年も待つように感じられ、その間、わたくしのからだの、どんな繊細な部分も知り尽くしたカシムの鞭を想い起こすだけで、全身の血が騒ぎ、熱くなります。

御主人様が仰言るように、わたくしはカシムを恋してしまっただけでしょうか。それは自分でも、よくわかりませんが、わたくしの肉体が、官能のすべてが、カシムの鞭がなくては生きてゆけない被虐の性に作り変えられてしまったことだけは、たしかに間違いございません。

こうしている現在も、ただただカシムが恋しい、死ぬほど恋しい——わたくしなのでございませう。





惨酷シヨート・シヨート

# 屠殺されるわたし

小倉 幸 男

「これはこれは、可愛いメスばかりだな」  
「しかもよ、皆いい肉付きじゃないか」

こんな声をききながら、わたしたちは狭い部屋のなかで、身体と身体とを寄り添いながら、これからの運命よかれと願っていた。

捕われの身となった以上、覚悟はできているが、全員が死罪とは限らない。特に選ばれたものは「メス」の特権により、三食ひるね付きとはいかなくとも、十分な食と住とを与えられ、安楽に暮らせる可能性もあるのだ。

一列に並んだ仲間たちは、次々と隣の部屋に消えていく。死と生との別れ目だ。とうとう、わたしの番がきた。

一歩なかに入った瞬間、いちろの望みも消えた。やはり、ここは処刑室であった。いや、処刑というより、屠殺と呼んだほうが正しい。それほど無造作に殺されている。

一方の壁にそって、みるも無惨に、赤裸にひきむかれた仲間たちが、ズラリと首を吊られた恰好で並んでいる。またその横の隅では腹をたち割られ、内臓をえぐりだされた首のない胴体が、血しぶきと共に、そこそこに散乱し、彼女たちの首はとみれば、これはまたひどい待遇。いくつもまとめて大バケツに投げこまれていた。

「いよいよ、わたしたちの『屠殺』がはじまった。なんと首の骨を折って殺すらしい。」

大きな強い仲間を、ひとつとらえる。ぎゅっと押えられてしまうと、もうジタバタしても逃れるスべはない。そのまま首を後方へ荒々しく押しまげられると、無気味な音と共に、頸骨は案外簡単に折れてしまうのだ。それこそ、グウとも云わずに……。

後頭部が背中になでくっつき、グッタリと

なった胴体を、無造作に床に投げだし、次の犠牲へと、うつる。あれよあれよというまに死体が山をなしていく。

たまには変わった殺しをしてみたいのか、首も前方に曲げている。彼女はバタバタと身をふるわせ、必死にのがれようとするが、敵の力は、はるかに強い。クツ、クツと、かすかな声もれる。敵の腕に力こぶが盛り上がっているのを見ると、首の骨を前方に折るのは、後方に折るより数倍の力を要するらしいということは、殺される彼女の苦悶も数倍というわけだ。現に彼女の隣で後方に折りつけているやつの中には、この間に三つの死体がつみ重ねられている。

とうとう首の骨がポキリと音をたて、額が胸にピッタリと、くっついた。ぐいと、もうひと押し、顔が完全に胸に埋まる。彼女は、その後も数秒間、ピクリ、ピクリと身をふるわせていたが、やがて動かなくなってしまうた。

「やれやれ、やっと、くたばった」

ドサリと死体が投げだされた。敵も疲れたらしく、大きく一息ついたが、すぐ次の犠牲をひつつかみ、今度は、首を後方に折りまげ簡単に片付けてしまう。

仲間のなかには、すきをみて逃げだしたのもいたが、逃げきれぬわけはない。彼女は全力で走ったつもりだろうが、簡単に追いつ

かれた。敵はすばらしく大きな刀を、さっと彼女めがけて振り下ろす。パツと血しぶきが上がり、哀れ彼女の細首はポロッと前に転がり、首を失った胴体は、尚も二歩、三歩、走ったが、バタリと前に、のめり伏す。

彼女の胴体は、みせしめのためか、横木から血の滴るまま二本の足を束ねての逆吊りにされた。首は、どうも価値を認めてくれぬらしい。ポンと蹴とばしたから、どこかに転がっていつてしまった。犬がくわえだした首もあったし、鑑賞品になど、なれそうもない。

次の組は、なんと処刑前に身につけたものを、むしりとり、赤裸にされていた。それでも手つとりばやく片付けているから、まだ幸運というべきか。

身体をおさえ、首をのけぞらせ、鋭い刃を咽喉のあたりにギシリと切りこむ。彼女は、この一撃で悲鳴ひとつもあげることができずヒクヒクもがいているが、それもつかの間、バタリとも動かなくなってしまう。敵はすぐ次の犠牲をひつつかみ、その咽喉に刃を入れる。なんと、あざやかなことか。彼女をクルリと横だおしにしギューとおさえつけ、一気に咽喉を、搔っ切る。切り口から断末魔の呼吸と共に、プップッとお音をたてて血泡がふきだし、とびちる血汐は床を染めていく。

次に刃を当てられた彼女は、手を放されても倒れなかった。両足を、しっかり踏んばっ

ている悲壮な姿。だが敵は、それに少しの同情をしめさず、再び首をつかんで横にグルリとまわす。恐ろしい叫びがあがったが、それにもかまわず無惨にもネジ切ってしまった。

これらは、まだ序の口であった。

首をたたき落とした胴体の、両足を一本ずつ股のつけねから、はずしているのや、胸から腹にかけてズバリと刃を入れ、グイと左右にひらき、なかをひっかきまわしているのがある。

心臓や肝臓などが、とり別けられる。腸管がぬきとられる。それでも、卵巣などは相当の価値を認めてくれるようだ。腎臓がまた予想以上の評価であった。

或はまた、むし焼にされるものもある。パベキューにされてしまうものもある。どうやら、わたしたちは、生命を奪われるだけでなく、食べられてしまうらしい。

わたしは蛇のエサとなった仲間を知っている。蛇の両目でみつめられると、これがみこまれたというのか、彼女の身体はすくんでしまっ、身動きもできずにいた。蛇は、そんな彼女をみながら、ゆっくりと近づき、彼女をグルグルまきとするや、ギューギューと締めつけたから、たまらない。骨も肉も砕け、あっけなく、こときれた彼女は、ただ一塊の肉となって、蛇の口の中へ消えていった……野犬におそわれ、鋭い歯と爪のため、身体

をズタズタに引き裂かれ、むさぼり食われた仲間もいる。たわむれの射撃の的にされ、全身数十発の散弾を身にうけて相い果てたものもある。どうして、わたしたちは、こんな目に合わねばならぬのだろう。

ぼんやりと、こんなことを考えている中、わたしだけが残されていた。

「これで終わりだな。ほう、すばらしいプロポーションだ。今日の最高じゃないか」

ほめてくれたのはうれしいが、そのあとがよろしくない。

「役得だ。われわれでいただく」

賛成。生きたまま、水から煮るのが、いちばんうまいというぞ。

いくつかの手が、わたしを捕えた。けんめいにもがき、あばれてみたが、だめ。たちまち身体を覆っていたものをむしりとられ、恥かしい赤裸とされ、多くの射るような視線を感じ、その場に立ちすくんだ。

両足を一つにたばね、ブランと逆吊りにされる。このまま大釜に投げこまれるのだ。それが熱湯なら、わたしの生命を瞬時に奪ってくれるだろうが、水から徐々に煮られては、たまったものではない。この美しいわたし、肉やその他の内臓も、ほどよく煮られ、敵の食欲を満たすこととなる……。

ああ、なんだって、わたしはニワトリなんかに生まれたんだろう。



カット・岡 たちし

連載 M 小説



7

# 則 天 武 后

(3)

真 砂 十 四 郎

禁されている元の王皇后、蕭淑妃の二人だったのです。

武昭儀様の皇后御即位によって、大量の恩赦減刑が行なわれました。示達を受けた罪人たちは、いずれも武皇后様の御聖徳に深く感謝いたしました。しかし、誰にも彼にも見さかない、お恵みをお与えになる武皇后様ではございません。ご自分のおためにならな

い人物に対しては、厳しい態度をおとりになって、いささかも、ご寛容の処置は、おとりになりませんでした。その第一のお手がのびたのは、今は名誉も位も奪われて座敷牢に監

ある日、宮廷の奥で高宗帝は、思いがけず王、蕭両女の閉じこめられている部屋の前をお通りになり、二人の様子を、ごらんになりました。見れば卓も椅子もない部屋の中で、床には敷物もなく、その冷たい床の上に二人が、やつれはてて坐っているのです。

高宗帝は思わず二人に、お言葉をおかけになりました。

「王皇后よ、お前はこんな扱いをされているのか。敷物もない床に坐っていては身体も冷えるだろう。病気になるはしないか？」

ああ、可哀そうなことをした……という自責の念に似た思いで、高宗帝は二人に同情のまなざしを注いだのです。

思いもかけぬ帝の声をきいた王皇后は、懐かしさのあまり、その場に泣き伏しました。

「陛下よ、今は位を奪われて皇宮の宮婢となった私に、おやさしいお言葉をかけていただき、その嬉しさに、ただ泣くばかりでございます。こんな身になりはてましたのも私の宿命のなせる業。今はすべてをあきらめて、この部屋で朝夕を過ごすほかはございません。陛下が、もし私たちを可哀そうとおぼしめしたなら、せめて世を捨てた私たちが、この部

屋で来世を願う仏へのおつとめができますよう、小さな仏壇をもうけて下さい。お願いいたします。そして、この部屋を回心院と名づけて下さいませ」

王皇后は、とぎれとぎれに皇帝に嘆願しました。皇帝も、その哀れさにほだされて、ただ「うん、うん」とうなづくばかりでした。

出来るなら、この格子の柵もとりはずし、自由に他の部屋へも庭へでも出て、日月の光をあたえてやりたい……と、思いになりましたが、皇帝は中の二人に、やさしい目を注いでうなづくのみで、その場を去りました。

帝のお心のうちでは（この皇宮内では、もうもゆくまい。出来るなら何処か都から離れた暖かい地方へ二人を送って、小庵でも建ててやり、そこでどかに余世を送れるようにしてやりたい）と、思いになったのではないのでしょうか。

私でも、そう考えると……帝のお心も、それに違いありません。ですが、武皇后様のお心は、まったくもって非凡であり、私ごとき浅はかな感情では、はかり知れぬ奥ぶかい智慧が、みなぎっておられるのです。

帝が奥殿で王、蕭両女に会って話を交されたことが、侍女の口から、すぐ武皇后様に伝

わりました。

「あんだ、きょう、奥殿へいったの？」

「う……いや、別に……」

武皇后様に、きつく訊ねられると、とかく口ごもってしまう帝なのです。

「王と蕭の二人に会ったんじゃないの？」

ああ、会ったよ……と言ってしまえば、それまでのものを、帝の答えは口ごもりながら「いや、会ってはいない……」

でした。皇帝につく私ではありませんが、きかれた以上、きっぱりと「ああ、会った。部屋の中を見たが、あれでは可哀そうだ。と

いって、お前にしても王、蕭両女が、この同じ皇宮内で暮していることは好ましくあるまい。桂州か振州か、南方へ流して小庵でも建ててやり、そこで余世を送らせようと思う」とでも仰有れば、武皇后様もお躊躇のお心持ちを抱かれるのではないか、と思うのですが「会っていない」というお答えをうけた以上帝は二人の今後について関知しないという意志を表示した事になってしまいました。

「ああ、そう……。それならいいのよ」お二人の間に、両女の話は、それで終わってしまいましたが、両女の運命は、これでまったく決まってしまうました。

翌日、武皇后様の内命で、王、蕭両女は両手を後ろ手に縛られて武皇后様のお部屋へ連行されました。彩り美しい絹張りのお椅子にゆったりとおかけになった武皇后様の前に二人は縛られたまま床の上に坐らされました。

「王、蕭の二人。お前たちは、もう皇后でも夫人でもないだから、あたしが、お前たちにふさわしい名前を授けてやる。王、お前は麟（うわばみ）氏。蕭、お前は梟（きよう）氏だ。よ。麟も梟も今は宮婢の身だから、二人ともこれから、あたしの侍婢として仕えよ、と命令したら、お前たちは、ありがとうござ

います、と伏拝して従わなければならないことは分かってるわね」

武皇后様は椅子の背に、ゆったりとおからだをもたらせて、床に坐っている両女をお見おろしになりました。

私は（おやおや、そうすると王皇后も蕭夫人も、これからは私の仲間だ。いかにして武皇后様にお仕えるか、いかにしてご満足を得られるよう、お勤めするか。これから私がお勤めの仕方を両女に教えこまなければいけない）などと一瞬、思ったのですが、実は武皇后様のお考えは初めから決まっていた、これは単に両女をおからかいになった、



いわば戯れのお言葉にすぎなかったのです。

王女は下を向いたままでしたが、蕭女の方は王女より気性の勝った女性でした。

「いやなこった。お前の侍婢になるくらいだったら、池にとびこんで、死んでやる」

こう言い放って横を向きました。武皇后様はくすりと、お笑いになって、

「なに？ 死んでやるといふのかい……。よし、それなら望みどおり死なしてあげよう。お前たちは重い罪を犯した罪人なんだよ。い

つ、死刑にしてもいい女なんだよ。死刑にされるより、自分で死ぬというのなら、自分で

死ぬるようにあたしが取り計らってやろう」

武皇后様は、こう仰有って、侍女たちを呼びました。

「この二人の手を後ろに縛ったまま、足は膝で折りまげて、踵をふとももにつけるようにくくりつけてしまえ。そして二人を、あたしの牢獄の中に落とすこめ」

侍女たちは武皇后様のご命令のまま、二人に縄をかけました。そして、その二人を牢獄の中に入れる役が私でした。牢獄とは、もちろん武皇后様ご専用のお廁のことです。出来るなら自分が入りたいくらいで、こんな役目は私は苦手なのですが、武皇后様のご命令は

絶対です。

二人を穴の中にいれるのは大へんな仕事でした。以前の李義府のときは足も自由でしたので、自分で身体の均衡を保つことが出来ましたが、今度の二人は手を後ろ手に、足は膝を折りまげてくっついてある身体なので、自分一人では均衡がとれないのです。私は長い間かかって、二人を向かい合わせに胸と胸と重ねる形をとらせ、二人が支えあって立っている姿勢をつくりました。膝立ちしている両女の胸の辺りまで、武皇后様の御浄水の溜りがありました。二人がそのまま胸と胸と支え合っていて立っている分には、どうやら生きておられますが、今夜……といっても、ひとばんぐらひは眠らずにもすませましょう。しかし二日たち、三日たち、二人のうち、どちらかが眠りこんだら、或いは眠らずとも、疲れきって、どちらかが身体の姿勢をくずしたら、二人とも、たちまち前へ、のめって、御浄水の中に顔を埋めてしまうのです。

二人をこうしておいて武皇后様はその夕べも、その晩もお廁にお入りになられました。「どう？ 蟒と梟の二人。そこで二人仲よくあたしのお酒の中につかって暮らすのよ。冷たいお酒を飲みたかったら、下をお向き。温

かいお酒を飲みたかったら、上をお向き。それでも飲み足りなかったら、二人とも中へ首をつっこんで、蟒うわばなのように飲みほしたらいいのよ。お酒は、いくらでもあるからね。そして二人とも骨の髄まで、お酒をしみこませて死んだら、梟、お前も満足なんだろ」

王皇后は、もうあきらめきって顔もあげませんでした。しかし若い蕭淑妃の方は髪をふりみだし、目も吊りあがり、悪鬼の形相で上を見上げました。

「お前は来世、鼠に生まれかわれ。私は猫に生まれ変わって、お前を食い殺してやる」

「ほほほほ、あたしは、お前を梟だといったのに、お前は猫だというのかい……。それじゃ猫の大好物のまたたびをお前にやるからありがたく頂戴して食べるんだよ」

上からまたたびに似た固形物がポトリと落ちてきました。蕭淑妃は顔をそむけて避けましたが、その避けた頭の上へ、顔の上へ、温かいお酒が、ふう、ふうと振りそそがれたのです。

李義府のときと違って、壺の中は鬼気が満ち満ち、さすがに私も目をそむけましたが、ご自分に益とならぬ人物への武皇后様の徹底したご所業には、まったく頭が下がる思いで

した。

三日目の朝、私は御浄水の中に頭をつっこんだまま息絶えている二人を発見しました。早速、武皇后様にお伝えしますと、「ふふん……」とお笑いになって「どこか山の中へでも運んで、二人を埋めておやり」と仰有いました。私には、まったく苦手のつとめですが是非ありません。私は柔らかい草の生えた土を選び、二人を手厚く葬ってやりました。

このことは侍女の口からでも伝わったのでしようか、宮廷内の、ひそひそ話の種になりましたが、何故か高宗帝はこのことについて一言も武皇后様に仰有らず、武皇后様もまた一言もお触れになりませんでした。すべてがうやむやのうちに、済んでしまったのです。

8

前に申しましたように、柳積、猪逐良らは武皇后様のお怒りにふれて都を追われましたが、長孫無忌をはじめ、韓緩、来済らは武皇后様の反対派とはわかっておりますものの、なんら積極的行動もあらわさず、煮えきらぬ態度のまま勤務をつづけていましたので、武皇后様も様子をこらんになっていたのではし

うか、これというご沙汰もおとりになりませんでした。従って政治をとりきめる重臣会議も、依然として、これらの者が出席しておりましたが、しかし欠員になった柳積、猪逐良の代わりには許敬宗、李義府の二人が、とつてかわって加わるようになりました。

従って重臣会議の人員は長孫無忌、韓緩、来済、許敬宗、李義府。それに中書門下三品の干志寧。三公司空の李閔が都に滞在のときは李閔も加わって七名。この七人を下に従えた玉座に高宗帝がおつきになるのですが、このころから高宗帝はご健康がすぐれず、会議を欠席されることが間々ございました。しかし、そのときは帝のご代理として武皇后様がご出席されて、玉座におつきになりました。

玉座にゆったりとお腰を下ろされた武皇后様から一段下がった下座に無忌や韓緩らが居並んで、ご臨席の武皇后様を、うやうやしく拝礼してから会議が始まるのです。彼らの不満な胸のうちは察するにあまりありますが私には玉座にお腰を下ろされた武皇后様の尊いお姿が目につかんで、はるか離れた別室で三拝九拝して伏し拝みました。

会議は、まず許敬宗が議題を提案して、それを一同が審議することになるので

すが、無忌らはどう思っているのか、ほとんど意見らしい意見は述べませんし、それに高宗帝のときは、ご決裁が長びきますが、武皇后様は、いいものはいいい、わるいものはわるいの、ご決断が早く、

「それはいいことね。その実施の準備は、どのくらいかかるの？」

「十日間もあれば大丈夫でございます」

「では、来月から実施しましょう。許敬宗、お前がその仕事に当たるように……」

「は、かしこまりました」

という具合で、議事は迅速に、はかどってしまします。韓緩や来済は「皇后、それは高宗帝にご報告してから、ご決裁をおとりになるのが順当ではございませんか」と言いたいのは山々なのでしょうが、黙々として聞いているだけなのです。

もちろん、皇帝のご代理として玉座におつきになっている武皇后様なのですから、そうご決裁なさったら、皇帝のご決裁と同じことなのは言うまでもありません。それよりも、皇帝といえども武皇后様がこうするとお決めになったことに、そむくことが出来ない実情を無忌ら一党は何となく知りながらも、その動かすべからざるお二人の間柄を分かっている



ないのです。考えたら気の毒な連中というかはありません。

会議は特別な議題がないかぎり、一か月に一回ですが、武皇后様がご代理として出席あそばしてから以後、高宗帝がご出席のときも武皇后様もご一緒に臨席するようになりました。従って玉座も並んで二座設けられ、その場合も「そうだな、これはどうしたものかな？」と帝が武皇后様にうかがいをたて、武皇后様は「それは、国民に不評を買いますよ。おとりやめにしなければいけませんわ」と、お答えになって、それが結局、決裁になるのです。

許敬宗が議題を提出しました。『皇太子廢位の件』です。

高宗帝の皇太子は、帝が即位するとき既に決められておりました。それは陳王李忠ですが、王皇后に子がないことから伯父の柳積が心配して、王皇后と関係の深い劉氏と高宗帝の間に生まれた忠を皇太子に推薦し、長孫無忌がこれに賛成して即位されたのです。この忠皇太子が廢されることは、武昭儀様が皇后様になられた上は当然のこと、許敬宗が会議の議題に持ちだすまでもなく、廢位は時間の問題でした。関係の深かった王皇后は殺さ

れ、推薦した柳積は失脚して都を追われる。

それに第一、現在の武皇后様には帝との間の皇子弘様がいられるのです。皇太子の椅子に綿々としていたら危ない……李忠派の人々が考えるのは当然です。忠はそのとき八才でしたから、これは側近の家臣がそう考えたのでしようが、皇太子退位を自ら申し出て、家臣数人とともに都から姿を消してしまったのでした。行方不明とは、ふとどき至極である。この上は忠の皇太子位を廢し、武皇后の御子代王李弘を皇太子にすべきである……という許敬宗の提案でした。

武皇后様は黙っておりましたが、高宗帝は心のうちで（そうした方が無難だろう）とお考えになったのでしよう。その提案を、そのままお許しになりました。李忠は位を剝奪されて庶人となり、改めて武皇后様の第一皇子代王李弘様が皇太子となられたのでした。

弘様はそのとき五才でしたが、弘様についてはお生まれになった月日を逆算してみますと、武皇后様が昭儀として皇宮にお入りになる以前のご懐妊ということになり、おそらく武皇后様が尼として感業寺におられたときにおみごもり遊ばしたものだと思われます。しばしば感業寺を訪れた高宗帝が尼の武昭儀様と

お寺の一室で……と、私ばかりではありませんまい、誰しも指を折れば、思い浮かぶことですが、もちろん、そんなことを口にする者は一人もありませんでした。まあ柳積や猪逐良らの茶のみ話には恰好な話題だったかもしれないが……。

これは閑話休題……。余計なことを申しましたが、私にとっては聖神皇后様でございませう。お好きな時に、お好きなことをなされる武皇后様が、ただお尊く拜されるだけで茶のみ話とは恐れ多いというほかはありません。

柳積や猪逐良といえば、既に都から追放されましたが、この二人のご処分だけで、お止まりなさっている武皇后様ではございませう。きっかけは韓緩の直訴事件でした。

武皇后様をさしおいて、皇帝に何と進言したところで、どれほどの効果があるのか……と私は呆れるのですが、彼らは未だに分らないのです。皇帝に直接、嘆願すれば、皇帝が、そのまま、ききいれてくれるとも思ったのでしようか。武皇后様のおいでにならないうときをみはからって、韓緩と来済が帝に謁見を申し出たのです。

「微子去って殷の国ほろび、張華とどまって晋の綱紀乱れず。故なくして旧臣を追放する

僕のイメージ画集『無

題』室 井 亜砂路



ことは、国家の福を追放するのと、同じことです」

これは後日、許敬宗様から聞いたそのときの進言だそうですが、つまり皇帝は故なくして猪逐良を追放した。彼を追放することは国家の福を追放するようなものだ、だから逐良を即刻、赦免して都に呼び戻してやって下さい……ということだそうです、帝は黙って

きいていらただけで、そうしようとも、しないとも仰有いませんでした。

その答えは数日後に返ってきたのです。韓緩と来済は、ひそかに魔王忠と通じ、唐朝の滅亡を謀っている、という理由で、韓緩は振州に、来済は台州へそれぞれ追放——という勅令が発せられたのでした。そのうえ、以後、終身朝見を許さず、という特別なご

処分までつけ加わっていたのです。真相は、勿論、帝のご処分ではありません、武皇后様のご処分です。何も発言せず、のらりくらりとしている間、どうやら身の安全を保っていた二人でしたが、武皇后様は二人の動くのを待っていられたのです。盲態蠢動するや、たちまち大きな反動が返ってきたのでした。

雉子も鳴かなければ獬豸もこれを射てません。逃げようとして叫鳴して却って標的となる……というところでしょう。いや鳴かずとも、これを射つ武皇后様なのです。黙々として、なんの発言もしなかった長孫無忌も、李義府などと違って武皇后様にとっては（この男は事あれば、あたしに叛逆する男、あたしの味方にならない男）です。かつて武昭儀様が帝とともに無忌邸を訪れ、王皇后を廃する件をもちだされたときも、なんのかのと言いのがれて賛成しなかった男。その後、許敬宗が訪れ、利害を説いて武昭儀様のお味方になるようにすすめたときも、首を横に振って許を面責した男……なのです。後日のことですが、太子洗馬の韋季方と組んで政権を握り、隙をうかがって謀反を企てている、という理由で無忌は黔州に強制居住を命じられ、それからさらに半年後、中書舎人袁公瑜が黔州の



無忌邸を訪れ、勅令と称して無理やりに自殺をさせてしまいました。

こうして、武皇后様に反抗する者どもは次から次と、抹殺されてしまいました。中途はんばなことでは決しておすまじにならない武皇后様のご処置は、宮廷の他の人々も身を縮めて恐れ慄えました。

お食事のお席、お庭でのご休息、武皇后様とすれちがう廷人のすべてが恐れかしこんで拝礼する姿は、頭を地につけんばかりに平伏して、それは高宗皇帝とすれちがうときの二倍も三倍も懇寧を、きわめることでもわかります。まったくもって、お尊き極みの武皇后様でございました。

## 9

東方の半島に、高句麗、新羅、百済などという国がございますので、これは大唐国の御領内ではございませんが、とるにたらない小国で、従来から毎年貢物みつぎものなどを唐朝に献じており、わが国の属国のようなもの……ときいておりました。しかし、この三国はお互いに仲がわるく、なにかともめごとを起こしては戦争になったり、また和睦したり、たえず

争いを続けていたのです。

どういう原因か知りませんが、この三国のうち、高句麗と百済とが争いをおこして、戦争になってしまいました。高句麗は先年、無分別にも、わが国にたてをつくような振舞いをしまして、司空李閔様が征討軍を率いて出征され、こっぴどく懲らしめまして以来、すっかり恐れいって服従を誓い、臣国となっていましたので、わが国としても他国の争いとはいえ、放っておくわけにもいきませんでした。それに今度の場合は加えてもう一つ、放置しておけない重大な問題があったのです。というのは相手の百済の方が、海をへだてた倭国……日本という国だそうですが、この国に援助を頼んで、その日本軍が海を渡って百済に上陸し、援軍として高句麗に攻め入ろうと計っているからなのです。

倭国の朝廷ヤマトは、わが国から東方へ水行十日、陸行一月のところにある小さな島国ですが、なかなか活発な国で、わが国に貢物を献上したり、学生や工人を派遣して教えるうけたりしていながら、半島まで自国の勢力をのぼそうと、前々からその拠点としての百済を応援していたのです。そして今度の百済からの救援をよいことに早速、大軍を送って

高句麗、新羅などにも自国の勢力を伸ばそうと計っているのです。

この事態を、どう処理したらいいか……。朝廷では重臣会議が開かれました。玉座には高宗帝、武皇后様両陛下がお並びになり、下座の卓には司空李閔をはじめ、干志寧、許敬宗、李義府、趙承敬などが席をしました。まず許敬宗が、高句麗、百済両国の紛争の原因、その展開、高句麗からの援軍の要請、さらに百済に阿倍比羅夫あべのひらふを総帥とする倭国軍が上陸したことなど、説明しました。

高宗帝は李閔に「もしわが軍が援軍に出るとすると、戦いはどうなるだろう？」と、おききになりました。

「百済だけでしたら、とるにたりません。ほんのわずかの援軍で忽ち百済軍は崩壊してしまいます。しかし今度は倭国軍が上陸して待機しています。倭国軍は、わが軍と較べますと装備は劣っていますが、しかし、なかなか勇敢な軍隊です。一筋縄ではいきません。これは高句麗と百済の戦いというよりも、唐軍と倭国軍との戦いになりましょう。たやすく勝てるとは申しあげられません」

「ふーむ……もしわが軍が敗れるようなことがあったら、どういうことになるだろう？」

「半島は倭国の勢力圏に入ってしまった。いままで倭国の勢力のおよぶところは百済だけでしたが、もしわが軍が後退するとなると当然、高句麗、新羅にその地歩を伸ばしてくること、火を見るよりも明らかです」

「すると……交戦を避けて倭国軍と談合し、両者とも面目のたつ解決方を講ずる手はないものだろうか？」

「ないこともございません。倭国に高句麗、新羅に手を出さぬことを約束させ、その代償に百済だけは倭国にまかせる……といった談合にでもなりましょうか」

「ふむ……」

高宗帝は考えこみました。わが軍が負けることはあるまい。しかし倭国軍も猪のごとき蕃軍ときく。うかつには戦えない。とすれば双方、兵を損ずることなく談合して、ほどほどの条約をとりきめた方が賢明な道かもしれない……

帝は一同の顔を見わたしました。

「一歩退いて、二歩の利を、得よう。今回は一応、使者を派して倭国軍と談合し、戦わずして……」

「いけません！」

同じ玉座から、烈帛の玉声が発せられまし

た。武皇后様でした。帝はびっくりして、息をのんでしまいました。

「倭国がなんです。いままでも、わが国に貢物を献上していた小国じゃありませんか。いわば属国よ。その属国を恐れて、談合とは何ということをするのです。李閔、たやすく勝てるとは申しあげられませんかと言いだすが、それは負ける……ということかい？」

李閔は、あわてて口を開きました。

「いえ、負けるとは申しません」

「では勝てるか、負けるか、どっちなの？」

「たやすくは勝てないと申しただけで、わが軍も、もちろん勇猛果敢なること倭国軍に劣りません。万全の準備を講じた態勢で戦えば敵軍を、ことごとく海につき落とすことも不可能ではございません」

「だったら、万全の準備を講じたら、いいじゃないの。向こうは海を越えて上陸した背後に援軍のない軍隊よ。敵の軍隊の二倍の兵士を送りなさい。一挙に押しつぶすことぐらいわけないじゃありませんか」

高宗帝は黙ったままでした。重臣たち一同は武皇后様のお顔と帝のお顔と見くらべていましたが、毅然とした武皇后様のお態度に、みな一様に平伏してしまいました。遂に、倭

国軍征討が決定したのでした。

司空李閔を総帥とした唐軍は高句麗から、さらに南下、百済に入りました。各地での交戦ののち、唐軍は倭国軍を白村江に追いこみ東から高句麗軍、西から唐軍と挟撃、ここで倭国軍は総くずれとなり、隊伍を乱して敗退命からがら船に乗りこんで本国へと逃げ帰ったのです。

戦いは唐軍の大勝利で終わりました。李閔は倭国軍の捕虜二百人をひきつれて都へ凱旋したのでした。

高宗帝ならば倭国に百済を与え、まごまごすると新羅まで自由にされるところを、武皇后様のおかげで厚かましい倭国軍を海の彼方に追い落とし、三国を武皇后様の隷属下に安住させることが出来たのです。まさに武皇后様こそ大唐国の最高の御方と申していいのではないでしょう。

長安へ連れかえった倭国人の捕虜二百人のうち、百七十人は労役夫としてそれぞれ地方にまわしましたが、武皇后様のご命令で三十人が御殿の奴仕として長安に残されました。

数日後、牢獄に入っていた倭国人たちに、御殿に仕向せよとお達しがありました。捕虜たちは両手を後ろ手に縛られ、足もわずか



に歩行が出来るだけの間隔を置いて縄でくくられて、数人の衛士に鞭で打たれながら、ぞろぞろと御殿に仕向したのです。

「これから、あたしの奴仕に、なる男たち。一人々々顔を見てやるから、あたしの部屋へ連れておいで」

という武皇后様のご命令でした。武皇后様は金糸で龍を刺繍した桃色の絹のとばりを後ろにした、腰台にゆったりと腰をかけられ、入ってきた捕虜たちを十人ずつ、三列に並べて坐せました。

「きょうから、あたしがお前たちの御主人様だよ。きょうは特別に謁見を許してやったのだから、お前たちは喜んで、まず、あたしに仕える奴仕の礼をしなければいけないわ。さあ、みんな揃って、あたしを拝みなさい」

「皇后陛下様に拝礼——」

後ろから衛士が大きな声で命令しました。捕虜たちは、とまどって右を見たり左を見たり、どうしたらいいものか、まごまごしていました。

ピシリッ！ 後ろから衛士の鞭がとびました。

「ああッ！」

鞭を打たれた捕虜は、のけぞりました。

「その鞭を、あたしにお貸し」

「はッ」

衛士は急いで武皇后様の前に馳せつけ、跪いて鞭を武皇后様に、お渡ししました。武皇后様は、その鞭を弄びながら、

「拝礼……といっても、異国のお前たちは、どうしたらいいのか分からないのね。きょうだけは特別だから、あたしが教えてやるわ。まず、坐っている腰をあげて、膝に力をいれるのよ。そして、からだを前にかがめて、頭を前の床にすりつけるの。手が使えないから腰と膝に力をいれていないと、前へのめってしまふよ。それから頭を元の位置に戻す。それを、三度つづけるの。それが、お前たちの奴仕の礼よ。ね、分かったね。じゃあ、もう一ぺん言うよ。さあ、あたしに拝礼をおし」

三十人のうち半数ほどが、あわてて腰をか

がめ、頭を床にすりつけました。あとの半数は、頭が床についていませんでした。

ピシリッ——。

武皇后様のお手がのびて、鞭が振りおろされました。

「う、うーッ」

鞭を受けた捕虜は急いで身体をまげ、頭を床にすりつけました。

こうして全部の者が武皇后様に奴仕の礼をなしおえたのです。

「お前たちの日本という国は、東方の小さな島国なのだろ。その虫けらのような小さな島国が、大きなあたしの国に、はむかうのはあたしの国のことわざで、螻蛄の斧」というのよ。きけば、お前たちの国にも皇帝がいるそうだが、何という名なの？」

衛士のうちの通訳が、倭国人に武皇后様のお言葉の意味を通じてやりました。

「はい、斉明天皇でございます」

倭人の一人が答えました。

「その斉明がお前たちを百済に送ったの？」

「いえ、皇帝は斉明天皇ですが、政治は皇太子の中大兄皇子がとりしきっています。私たちには、よくわかりませんが、おそらく補佐役の中臣鎌足と皇子と相談してとりきめたことと思います」

「ふーん……それで百済へ上陸して、お前たちは勝てると思ったの？」

倭人は黙ってしまいました。

「ははははは」

武皇后様は大きなお声で、お笑いになりました。

「みのほど知らない島国のやからたち。もし

やろうと思ったら、あたしの方から、お前たちの国へ上陸して、一押しに押しつぶすことも出来るのだよ。とるに足らない小さな国だから、そのまま放っておいてやっているのもわからないで、この昇竜の国と戦おうとは何という愚か者。そんな愚か者の国だから、お前たちは一生、あたしの奴仕として使われることになるのだよ。さあ、お前たちは奴仕になった証しとして一人ずつ、あたしの足を嘗めさせてやる。沓、あたしの沓をおとり」

私は平伏して武皇后様の御前に跪き、お沓を、おとりしました。武皇后様は、お膝をお組みになって、お右足をゆったりと前におだしあそばしました。

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御承下下さい。

○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。

○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

「さあ、一人ずつ、前へおいで」

衛士の一人が、さっと鞭を振り上げて倭人の一人を打ちすえました。

「皇后陛下様の御前に、一人ずつ跪いて、すすむのだ」

「ひひーッ」と慄え上がった倭人は、おずおずと平伏しながら、武皇后様の前に進みました。躊躇すれば、こんどは武皇后様のお鞭が背中の上にふりおろされるのです。命令のままに行動するより方法のないことを、さੱさと倭人は、跪いた形のまま、首を前へ突きだし、ペロリと舌をだして武皇后様のおみ足の裏を嘗めました。

「さあ、次——」

衛士は、ふたたび鞭を振り上げて、うながします。

かくして三十人の倭人は、一人残らず武皇后様のおみ足に、服従の口づけをしおえたのでした。

倭人たちは地下の獄室に連れ戻され、欠け皿に放りこまれた残飯を食物として与えられました。

もちろん、箸もなければ、また手も使えない倭人たちですから、その残飯に首を突っ込んで、犬のようにむさぼり食べなければなり

ませんでした。

この三十人の倭人は、武皇后様のお考えで十人が灯仕を、二十人が挽仕を仰せつけられました。

灯仕は手も足もくぐられたまま頭に燭台をのせ、夜、宮廷内の廊下や、お厠に動く燭台としての御用を勤めるのです。

また、挽仕は「みせしめのため、馬のかわりをさせてやる」という武皇后様の仰せで、従来、武皇后様のお乗りものの玉車の馬のかわりを、この挽仕たちがしなければならなくなったのです。

玉車の挽棒に、十人の倭人が五人ずつ二列に並び、武皇后様をお乗せして走る勤めでした。

取者の手に持つ鞭によって、倭人たちはたづなの引かれる方へ、ただ一生懸命、走るのです。

武皇后様は玉輿のとばりの中で、ゆったりとお横になりながら、馬となった倭人たちを街の人前にさらして、愚かな倭国の戦士のたどる道を、庶民に見せておやりになったのです。





今年の芸術祭参加作品だと思うが、最近の松竹作品の企画に『アーロン収容所』（会田雄次著）／中公新書3／が、あがり、第一稿（脚本、井手雅人・永井素夫）は、既に出てあがっている。

内容は、原作を読んだ方なら御承知と思う

## 女責め図絵の系譜

# 捕虜と女たち

文と絵 南彦造

が、京都大学人文科学研究所教授の著者が昭和十八年の夏、京都の連隊へ教育召集され、その俘ビルマ戦線へ送られて東部シャン高原で終戦を迎え、ラングーン郊外の『アーロン日本降伏軍人収容所』へ集合させられる。そこでの生活を、ビルマ英軍収容所に於け

る強制労働の毎日を通して、歴史家の鋭い観察眼と冷静な怒りが、西欧文明を小気味よく批判して飽きさせない。

同書の宣伝になるかも知れないが——イギリスの女兵たちは、なぜ日本軍捕虜の面前で全裸の俘、平然と立っていられるのか？——この強烈な事実のもつ説得力の前に、読者は驚き、微苦笑させられつつ、西欧という怪物の正体を次第に知り、激怒とユーモアの見事な結合の魔力に魅せられるであろうという。

それほど、この原作は面白い。いや面白いと云うよりは、フィクションでない真実が、見事なのだ。

嘘ではない——本当の特異な話というものに憧れる心理というものは、誰の胸の中にもあるとっていいだろう。

「棟割り長屋」の井戸端会議とか、BG、いや失礼、現代ではOLなのだそうだが、そんな若い仲間たちの「トイレット会議」や「お茶くみ会議」——などみな「事実への興味」からなのだ。

東京でも「物見高いは江戸ッ子の常」とか云って、人間の弥次馬的根性を諷刺して、現在に到っているが、なにも江戸ッ子に限ったことでもあるまい。

文学の世界でも、最近、事実にもとずいた記録的なものが売れている。

出版屋にたのんで、自分の書いたものを単行本にしたい——風潮も輪をかけて、最近ではフィクションではないものを求める読者が増えた。

私の書いたものを、台湾の読者が好んで読んで下さるとのお知らせを得たが、私は「奇ク」の場合、雑誌の性質上——フィクションも結構だが、やはり事実に基づいた材料の方が、より感銘を受けるであろうし、想像に委せたものは、よほど調べたものでない限り、マスターベーションの域を出ないのではないかと推察している。

マスターベーションは普遍性があればよいのだけれど、個人差があり、これほど多種多様でオリジナリティに富んだものは見当たらない。

つまり、一人よがりになってしまう形勢にあるものだ。

文献としても価値がないと思う。

そこで、私は、なるべく創作は書かないつもりでいる。創作ではあっても歴史的事実の裏づけとか？ 体験に基づくものにしたい。知らないことを知ったかぶりして書いても、

所詮はウソのメッキがはげて、読者に嘲い物にされてしまうであろうことは、火を見るよりも明らかである。

それほど、読者は利巧で、経験豊かなものなのだ。

大分前だが、私はある雑誌に「新選組始末記」のようなものを掲載して貰ったことがあった。その中で、どう間違えたのか、芹沢鴨の乱行と土方歳三をとり違えてイメージを浮かべたものだから、内容が違ってしまい、早速読者批評で叩かれ、熱汗百年の想いだった感謝したい気持ちだったりしたのを、覚えて

以来、読者とは有難いもの、正確に読んで下さる、いい加減には書けないものと、キモに銘じている。

○

話が横道にそれたが、私が、この「アローン収容所」をとりあげたのも、実は内容の面白さもあるが、私自身——アローンと同じ形の南方収容所で、一年ばかり生活した体験者だからなのだ。

私は、ボルネオ島（いまのインドネシア領カリマンタン）のバンゼルマシンという港町で敗戦を迎えた。そこから連合軍の舟艇で、

バリックパンという、油田で有名な港町へ搬ばれ、そこから捕虜の第一収容所に入れられ、転々として最後は奥地の「マンガル地区収容所」だった。

この「マンガル収容所」には婦女の収容所も隣り合せになっており、一番印象深く、半年前に、間違って入れられた「ブラック・キャンプ」と云う戦犯者の収容所の想い出と同様、忘れられない、記憶も新たなキャンプだったのだ。

私は、ここでの一年間で——会田教授とはまた違った辛酸をなめた。

と云うのは、此処での監視兵は、白濤主義の誇り高いオーストラリア軍が主体で、続いてオランダ軍と親蘭部隊のアンボン兵と云った、現地人の中でも日本人ぎらいの兵達だったからで、アメリカ軍は少数だった。

親日的なインドネシア兵は、独立戦争で、連合軍側と敵対行為を続けており、監視兵などとしてはいないのだった。

私は、この生活中で、所謂、復讐心に燃える数々の「私刑」を見た。勝者が敗者を痛めつける刑罰だが、敗けた場合のことについて経験のない日本人ははじめだった。やられっぱなしなのだ。



これが、中国人のように長年苦しめられて来た民族なら、考えも浮かび、生命とか財産保全の方法なども臨機応変に出来たであろうが、悲しいかな日本人には真似が出来ない。怒をかいではとりあげられ、無怒になれば飢えるばかりだった。

しかし、私はここで二十数年前の愚痴を、こぼそうと思うのでもなく、日本人の過去の行為を正当化しようとするのでもない。

いかなる場合でもやはり悪い奴は天罰観面だったし、善良なる者には、それなりに神の恵みはあったのだった。

私は、ここでの生活で、やはり善悪、正不正の問題——まずかった大東亜戦争なるものについて、いやと云うほど考えさせられた。

戦争のお蔭で、東南アジアの民族意識が昂まった(?)——などと云うなかれ。

最初から『大東亜共栄圏』の実現が日本人の理想だったら、みじめな敗戦の天罰にはあわなかったであろうし、やはり『軍閥』と云う底知れぬ力が起こした、諸外国との衝突であつたのだ。

私は『軍閥』を憎む。それに追隨した『財閥』と、その力に押し流され無力だった日本人の無知蒙昧さも情けない。これからの日本

人はバカであつてはならないと思う——

敗戦と云う苦酸をなめたばかりに、最近の日本人は『小利巧』になりつつある——とは私のひがみか? エコノミックアニマルも結構だが、なんにつけ、このアニマル精神が、あの悲惨な戦争を引き起こしたのだ——と考える日本人が何人いるであろうか?

国の内外を問わず、再び風当たりの強味をおぼえ始めた日本人——そんな風当たりの中で、真実に生きようとする日本人——その数が多ければ多いほどよいのだが(?)あの忌わしい戦時中、東南アジアの日本軍占領地区にも、本当に平和を愛し、人と人との結びつきと、人間愛に生きようとした、数々の日本人がいたのを記憶しているだけでも私は幸いですだと思つてゐる。

そして、その人たちが間違つて『私刑』を受けたり、殺されたり——運よく助けられた人もいたが、しかし、勧善懲悪の小説のように、アワヤ! という瞬間に救世主が現れるとは限らなかったのだ。

『私刑』の悲惨さというものは、全く言語を絶したのである。

○  
私が見た最初の『私刑』から述べてみる。

私たちが最初にとじこめられたバンゼルマシン地区の郊外にある、マルタプーラのゴム園には、数々の便所が野天に掘られた。いかに敗戦国の捕虜とはいえ、生理的現象だけはどうにもならないもので、殊に腹工合の悪い者などは、我慢が出来ない。監視兵は衛生上よくないと怒るが、ためえだつて我慢出来ない! と、こっちで文句つけたくなるが、バリケードの周囲には、重機関銃がデンと据えであるから暴動も起こせない。

自前の器物で土を掘り、穴を造つて汚物を埋めねばならない。

スコップなど借りられるようになる間の長かったこと——監視兵は生理現象に苦しむ日本人を眺めながら、コーヒを飲んだり、ピフテキを食つたりしていたものだ。

浣腸マニアの喜びそうな光景だ。私は便所が出来るまで食べない算段だった。戦法としては糞をつくらぬことだ。水をのんでいればまず三日以内は大丈夫、医学上では七日間も生命に別条がなかったと聞いたからだ。

婦女子の方は、その点、優遇されていたようであつた。通訳の話では、ゴム園内の診療所の跡にある看護婦療に軟禁されていたのでトイレはあつた。

だが、得体の知れない面相の監視兵が、うろろしているの、のんびりと、というわけにはいかない。のぞかれたら大変だ。

それで、申し合わせて数人で行列を作ったり、気の小さい者は、部屋の蔭で洗面器の中にする。だが、すぐに捨てないと悪臭が充満するのでまずい。そこで窓から捨てたら監視兵が干天に慈雨とばかり喜んだとか？

——そうこうしているうちに、監視兵の中にもヒューマンな奴がいて、チョコレートなどを、窓から投げ込むようになったので、次第に警戒心がうすれ、女共は日本男子とみれば莫迦にみえ始めてきたとは流石に「女上位」の国の男のうまさは違う。「女性飼育法」にかけては天才的な面があったのである。

彼等は女性をなびかせる方法として、まず食物を与え、しかる後に「便器」を与えて、その美しき黄金物を、日本人男子に命じて捨てさせたのだ。

その下働きの下男にさせられた、ある男の述懐だが、——マゾ的な糞便マニアだったら喜んで、女性の便器役をつとめたであろうしその妙なる美匂に鼻穴をピクピク動かし——感謝おくあたわずと云った場面だったろうに惜しまれた。

○

やがて、婦女子たちの衣類の汚れが目立ち始めた。男たちは附近の川に飛び込んで、土人よろしくマンデーときめこだのが、大和撫子の場合——他人に肌は見せられない。コッソリと洗面器で部屋の隅で体を拭く程度の惨めさだった。

そこで「女性上位」のお国柄は、またまた日本男性を利用し、男前をあげようと企む。ドラム缶を用意させ、女の部屋で「水浴」が出来るように計画したのだ。

またしても撰ばれた男たちの女性奉仕が始まった。こんな場合——たいていの男は女の洗濯を手伝う現代だが、その頃は「男上位」なので、バケツは与えても「女の下着」なんか見むきもしない。

そこで監視兵が怒った。鞭で叩いても女の下着を洗わせようとした。最初のうちは恥かしながら洗っていた女達も、日がたつにつれて、当然のように洗わせるようになった。

一点が茶褐色に汚れたパンティを、幾枚となく丁寧に洗い清める日本男子たち。

監視兵たちは、口笛を吹きながら、いやがる男たちに女の下着を洗わせた。当たり前のように汚れたパンティを差し出す日本女性。

そんな女宿舎の仕事を、わざわざ志願する男たちもいた。

ヒラヒラと白旗ならぬ——女の白パンティの、はためきを眺めつつ、身を以て敗戦の悲哀を知ったと云う兵もあった。

だが、そうした仕事を喜ぶ男奴隷たちの多かったことよ——羨ましいような哀れなようなシーンだが——下着マニアの性癖があったら私も志願したであろうに……ジャングルの間にチラチラと白く映えるパンティの鮮かなはためきを、いつまでも私は忘れない。

○

突然——私は監視兵の召集を受けた。川の向こうのマルタプーラ街道まで行け——と云うのだ。

ゴム園の境には川が流れており、川を渡ると、バンゼルマシン市に通じる幅広い街道だった。その附近まで出ると、最後まで市内に残務整理で泊まっていた民政部関係の要人たちが到着しているから出迎える——と云うのである。しかも監視兵のトラックが用意してあった。とにかく乗れと云うので、他から呼ばれて来た数人と便乗する。

暫く走ると——トラックが急停止した。見れば、顔みしりの民間商社代表とか、民



政関係の要人が、はだし同然の底抜けた軍靴——汗とホコリと泥まみれになり千切れはてた開襟シャツ——蛸のようにヒブク、ヒブクした顔——両手足——など露出した皮膚は太陽に焼けただれ、水ぶくれからは膿汁に似た淋巴腺液が流れ出し——見るも惨憺たる相貌で舗道に転がっていた。

理由も何も必要なし。とにかく抱きあげてトラックに乗せねばならない。

「どうした？」と聴いても、頷くだけで、返事する言葉も出ないようだ。底のない破れた軍靴から、灼熱の舗道を歩き続けたと思われる両足の裏が、あぶつたスルメのように反りかえり、表皮はむけて、赤肌だった。

監視兵たちは冷然と眺めていた。しかし、私たちの介抱する手を止めようとはしなかった。私は太陽の光から少しでも彼等の肌を守ろうと帽子を僅かだがかけた。

手拭いを拵げて、手足や焼けただれた皮膚の上にかけた。

私たちが、倒れている、この数名の失神状態の哀れな日本人たちを拾い上げ終わると、トラックは頭を返して、再びゴム園の方向へと走り出した。

川を渡れば診療所跡だった。

私たちはトラックから下ろした、この半病人たちを担いだり背負ったりして川を渡る。気づいた道端の男たちも協力してくれて、とにかく診療所のある安全な場所まで——。

正規の看護婦とか、慰安関係だった、特志看護婦たちが、不安そうに病人たちの間を往来していたが、私たちの運び込んだ男たちが顔見知りのお偉方と知って、泣き乍ら介抱に掛かった。

やはり、残留者は惨めだったのだ——。理由は『連合軍捕虜虐待』の責めを問われ、トラックで数時間も掛かる、熱帯の焼けつくような舗道を、テクテクと歩かねばならなかったのだ。

それは、有名なフィリップスの『バターン半島死の行軍』を連想させた。

彼等もその事実に基づいて復讐を行なったのであろう。とにかく酷い仕打ちであった。惨憺たる私刑であった。しかも鞭を構えた赤鬼たちは、冷然と上司の命令により、この哀れな日本人たちに、罪の代償を加えたのだ。

私は、封建時代の罪人の引廻しとか、西欧に於ける奴隷の酷使の歴史を想像した。そして、とりすがって泣き崩れる看護婦たちの姿

に、歴史に残る『女奴隷』の暗黒時代を連想した。

それは、お芝居ではない。真剣に泣いている成熟した女の哀号だったのだ。私は、明るく気丈だった彼女たちの以前のイメージなどからでは、およそ、想像することの出来ないワアワアと泣く子供のような破れるような泣声と、哀切極まりない歪んだ表情を、適確に、掴みとろうと凝視した。

それはチャンスであった。女の号泣の哀れさを、真実知ろうとするには、またとないチャンスであった。

私は、いままで、本当に泣き悲しむ女の不安そうな瞳の愁いを含んだまたたき——とか泣く声を、まじかに眺めた経験はなかった。

この状況は、私にとって驚異であり、異常なムードであり、また、ふだん、美しく化粧し、おっとりとした美女たちの——これが人間らしい、本当の姿だったのだ——と堪能した。

私は彼女たちの中の何名かを知っていた。だが——彼女たちは、私の存在など、眼中にはないのだった。

敗戦にともなう、女性としての不安——それは男性の比ではなかったであろう。私も女性

だったら、性への不安にさいなまれ、日夜、おちおちと安住の境地には浸れなかつたに違いない。

歴史の東西古今を問わず、敗戦国の女たちが受けた、惨虐な私刑の数々は文化のすすんだ現代といえども断えた例がないのである。

在満の開拓団員の婦女子の遭難がしかり、北中南支に於ける邦人婦女子の私刑や性的刑罰をうけた凌辱の秘史が、しかりだ——。

常に婦女子は、最悪の立場にたたされていく。日本歴史をひもとけば、戦国の雄、織田信長にまつわる「女落城秘史」の数々。関白秀次の乱行と畜生塚の因縁とか、女性受難の例は、跡を断たないのだ。

この彼女たちも、男性の遠く及ばない、不安の境地にあるのであった。

だが、しかし、幸いにも、此処に於ける邦人婦女子は安泰であった。輪姦されるようなことも無かつたし、すべて杞憂に過ぎなかつたのは有難い限りであつた——と云えよう。

○

やがて——パリックパパン港への集結が、近づいた頃——私たちは、現地人たちの罵声や投石を浴び乍ら、LSTの待つ、バンゼルマシン港の埠頭に出た。

そこを流れるバリト河口から出ると、茶褐色に汚れたジャワ海の波は、澄んだオーシャン・ブルーに照り映えて、附近に停泊中のオーストラリア海軍の巡洋艦が純白の巨体を南海の水に、くっきりと鮮かだった。

乗組員が舷側にもたれて、我々の情ない格好を眺めていたが、ふと見るデッキに、どうやら女らしい姿がチラついたようであつた。後の話だが、婦女子たちは、この艦に乗せられ、送られたのだ——と云う。

だが、この艦内でも婦女子の身辺は、安泰であつたと伝えられた。しかし海賊的な面構えの、外国水兵の逞しさを想うと、女たちの心の動揺がしのべれた。

私たちが、乗ったLSTで受けた所遇の酷さを思い合わせれば、やはり衣食住にことをよせ、苦しめようとする魂胆が憎かつた。

尾籠な話だが「家畜人やプー」的な生活を強制されていたのだ。

○

人間とは思議なもので、保護色のように環境に順応し、生活を変えることが出来る。私たちの生活が、それであつた。主客転倒した捕虜的収容所の生活の中で、それなりに生甲斐を発見し、それ相応に生活をエンジョイすること出来たのだ。

ある兵隊は、監視兵の要望に便乗して「春画」を器用に描き上げ、パンにありついた。

ある兵隊は、監視兵の奥さんのワンピースを縫ったり、ジョンゴス（下男）を勤めたりしていたが、頭のきかない現地人と違い、元洋裁師の、この兵隊にはミシンが出来た。奥さんが喜ぶので、監視兵は、奥さんのためにその兵隊を優遇するのであった。

この兵隊は、次第に奥さんと親しくなり、奥さんの寝室まで出入自由となり、豊かな西欧人女性特有の三助役にまでなりさがつたが、むしろ、それをエンジョイしている模様で、このグラマーな奥さんの身体的な特徴とか、性癖を知悉して、私たちに夏夜の夜話し「千一夜物語」をいくつか披露したものであった。

一般に西欧の女たちは、やはり日本人も含め、黄色人種を奴隷扱いにするのを忘れなかつた。

前記の兵隊の告白にも——奥さんは、昨夜の激しい営みを想わせるダブルベッドの部屋で、捕虜兵の見守るのも頓着せず、ネグリジェを脱ぎ捨て、真裸の素晴らしいトルソを瞥見させてくれたし、バグス（上等）とほめれ



ば、ファッションモデルのポーズよろしく、前の方まで、すっかり出して媚態を示したものだ——と語った。

兵隊も、この美貌だった奥さんがためた昨夜の排泄尿を、うやうやしく捧持してトイレまで捨てに行ったり、奥さんの汚れた下着を洗濯したり、肢体をマッサージしたりで、重宝がられたと云うのだから愕く。

○

もう少し酷い話になると少し落ちる——ある監視兵の奥さんは、以前、抑留生活で受けた不自由な生活の腹いせに、日本人を苦しめたいと計画し、上のことから下のことまで、すべての世話を奴隷的にやらせ、コキ使ったのだ。ところが喜んだのは、その使役にやとわれた兵隊だった。高嶺の花だった西欧女の肌に直接触れ、堪能出来るし、肉体の秘密まで知ることが出来たのだ。

こんな都合のよい役得は、敗戦ならではの余得ではあった。

しかし、ふり返ってみれば、これも侮蔑の現われで、腹もたつし、莫迦々しい限りだ。

もしも、彼女たちが使役男に「便器たれ」「座蒲団になれ」「椅子代わりを勤めよ」とでも要求しようものなら男たちは喜んで応じ

たであろうし、決して懲罰には、ならないのであった。

○

私には、そうした「奴隷的」な使役は、残念ながら廻っては来なかった。

しかし、恐ろしいことだが、私が進んで勤めた人の嫌う労働が、次第に普通となり、何の感激も起こらなくなったことだ。

私はキリスト的犠牲心を發揮し、収容所内の「糞便焼き」を暫く続けたことがあった。

と云うのは、外部の作業に出れば、不発弾の爆発とか、トラックの衝突——はては、監視兵の不注意による機銃の暴発など——不慮の事故が断えなかったからであった。

折角の生命を、そんな事故のせいで失うのは惜しいから、出来れば内部の作業の中で、最も希望者の少ない不潔な作業とか、役得のない、つまらぬ作業に従事すれば、一日一日が安穩と云う結果になるから、復員船が入港するまでの我慢だと悟り切った。

「糞便焼き」とは、ドラム缶を地中に埋めた便壺代用品の上蓋を円く切り取り、そこから大便が下に落ちるような形になっている便器内の、たまった大便にガソリンを落として焼却する作業だった。

馴れると要領よくやれるのだが、初心者だと、ガソリンを投入し、マッチを点火するのでドラム缶内のガスが爆発して、ドロドロになった糞便がいきなり上部に噴き上げる。

覗こうものなら耐まらないう。まともに顔中が糞尿だらけにさせられて終まう。

眼もあてられないとは、このことだ。

指導班長の元軍曹は、当初からのベテランだから、最初の者にはまず要領を教え込むのだが、不潔だと思っている糞便だから、まともに扱える男は、まず居ないと云ってよい。

とにかく、汚ないのだ。五、六十缶も埋まったドラム缶の中は、黄色いの、赤いの、茶褐色のもの、その他の夾雑物で、抽象画の油絵を見るようなのだから、ヘドを吐きたくなるもの続出だ。私とて凡人の悲しさ、やる気になったものの、朝晩の食事、いざとなれば、連想するから咽喉も通らない始末——。

しかし、嫌うより馴れる——の例え通り、次第に見られるようになった。じつくりと腰を据えて、糞尿にガソリンを掻きまぜられるようになった。

農村の昔話ではないが——昔の百姓は、コヤシ加減をためすのに、コエダメのよく腐ったのを、指ですくってはなめたと云うが——

## 読者ギャラリー『荒れ部屋の珍客』宮城昌子



さもありなん——で……私なども下痢便を眺めた直後にすら、シチューとか粥食でも食べられるようになった。

そうこうしているうちに、婦女子の方の便

壺も処理するよう——命令が出た。

酷いもので、女たちの出したものまで男たちが処理しなければならぬ——民主主義洗脳が始められていたのだった。

尤も、女たちは焼き方が下手なので、手伝う形なのだが、女上位に馴れ切った女どもはいとも当然の如く振舞った。

私は、指導的な立場にまで出世(?)して居り、専任のような形となっていたので、希望者(?)を募り——とにかく婦女子用の便所へ行くことにした。

すると面白いことに——最初は不平面しているが、意外と喜んで行く男が多く——行けば、懐かしい日本の婦女子に会えて、冗談も云えるし、うまくいけば、石鹸とか洋モクの

サービスにあずかれるので、まんざらでもないのだった。

婦女子の便所は、流石にドラム缶一本あてに一枚、アンペラで四方を囲ってあったが、どう云う訳か——監視兵の高い櫓が近くにあった。その上から眺めれば、天井のない囲いは、やっっている状態が、まる見えのようなのだ。

実際に櫓に上がって眺めたことはないから憶測だが確かに、よき眺めだろうから、監視する方も飽きることなんかあるまいと思う。だが——そんな不謹慎な言葉を、おくびにも可憐な、この大和乙女や、お色気盛りの年増の方たちなんぞに報告出来ない。

それは、男たちだけが知る——唯一の楽しみなのだから——そう思って眺めれば、隣の『水浴場』も、うまく出来ていて、アラビアのハレムの水浴場を想わせるような構造だから、櫓の上から、王様(?)たちは、じっくりと眺められる仕掛けになっていた。

なるほど——櫓の上では監視兵が、煙草をふかし乍ら、一方に視線を集中していたと思っただが、さもありなん——と合点がつく。

そうこうしているうちに——乙姫様(?)たちの御入来だ。すっかり、ノンビリムード



なので、ネグリジェ姿も悩ましく、朝のオトイレにお出ましと相成った。

十数本のドラム缶を一度に処理しては何かと支障をきたすので、半分の五本ずつ処理して、あとはご使用に委せて、見えないように囲って置くのだが——どうしても乙姫様が気になる。

女たちの方は、<sup>しのぼすのいけ</sup>不忍池だが——男の方も音なしの構え——で大菩薩峠ときめ込み、作業を続行している。

しかし、ドラム缶の中は男の出したもののより酷いのだ——百鬼夜行のアシユラの図だ。

昔——高峰三枝子や木暮実千代などの大スターが、トイレに入って用をたすのを見て、あんなに綺麗な女でも糞を出すのかね(？)と首をかしげたファンがあったと云うが、その意味や深長——で、同感の至りだ。

とにかく、顔と便壺が一致しないのだ。

特に月、ものまで捨ててある。そのドドメ

色の凄惨刺戟にはヘイコーした。

女たちも流石に手伝いには出るが、羞恥心は隠せない。だが、他人のものと自分のものが混交しているせいか、安心して眺めているようだった。自分のものだけであつたら、落

着いてもいられまい——と思う。

だが、こうした男女の奇妙な<sup>つきあい</sup>お交際も、敗戦という異常な現実の結果がなかったら、到底味わい得なかった、尊い所産であつたと思うし、男が作業をしているのに、隣の囲いの中では、女臭い排泄の臭いと、ブツブツと発酵したコウジでも弾けるような音——はては滝のような水音——など、賑やかな女の交響楽だ。

耳にすれば、誰だって苦笑を禁じ得まい。

どんなに、鎮めようと、そこは生理的音響効果のなせる悲しさで、女性の羞恥心が鎮めようとしても、どうにも発射音だけは、さけられない模様だった。男たちの中には、マニアもいて「美女とドラムと兵隊と」と云った珍妙な粋筆家も現われて美女の排泄場にとり憑かれた男はいくらもあつたのだから——やはり「女ならでは夜の明けぬ」収容所のお粗末であつた。

○

この衛生班は、監視兵の家族宿舍の方面まで、繰り出された。

何処の国でも「おわい、や」は下層の<sup>せんみん</sup>賤民のやる下品な仕事と、きめ込んでいるらしく、敗戦国の奴隷男たちは、金髪の女のものまで

始末せねばならなかったのだ。

金髪には金髪なりの太さや、粘着力や排泄量のオリジナリティがあり、前記のマニアなどに云わせれば「金髪美女と兵隊と」と云つた冗談さえ生まれた程だった。

「金髪」と云えば、アーロン収容所の物語ではないが、外国女性は、私たち東洋人の前では平然と水浴もし、愛情の交歓を行なった。

私たちは、最早、人間ではなく、彼等とは対等視されない動物的存在だったのだらう。

水泳後のシャワーなど、隙間だらけの囲いの中で紫外線の当たらぬウール部分をなびかせ、ゴム毯のような胸乳にしぶきを当てている光景などには眼のやり場に困る程だった。

彼女たちは、所謂「看護婦」が中心の「衛生部隊」が多かったが、シビリアンの婦女子も監視兵家族と一緒にキャンプ生活を続けて居り、若いピチピチした金髪乙女の大膽なポーズにも、傍若無人の振舞いが多かった。

だが、日本の男たちが、金髪女性に憧れたように、監視兵たちは黒い髪の日本の婦女子に興味を抱いていたのだ。

頭髮は黒いけれど、別の部分はどんなのだらう?——とか——日本婦人の身体的特徴などを知りたがっている様子であつた。

私は、以前にも述べた通り『ブラック・キヤンプ』と称する「戦犯容疑者の収容施設」へ間違って押し込められた時——そこでは短期間だが、辛い生活もあったが、そこが最初の「日本国婦女子仮収容所」だった、と通訳から聞かされて妙に感激したものだ。

そして、そこでの婦女子にまつわるエピソードの数々も聴かされたのであった。

通訳は話す「——バンゼルマシン港から、オーストラリアの軍艦で搬び込まれた、日本の婦女子は（連合国はその全部が日赤看護婦でないのを知っていたと云うが）この小さな収容所施設に、まず入れられたが、建物の囲いも少ないほとんど内部が丸見えの状態——監視兵に云わせれば、内部の事情が判らなければ、監視兵の役目が果せないと云うのだ。

だから女たちは監視兵の視線を、四六時中気にしなければ居られない有様なのだ。

抗議しても嘲って受付けず、突然の点検と称して、不意に陳入する監視兵の男の前で、着替え途中のムードを見せて終まった婦女子もあったし、寝乱れ姿の悩ましき、丸出しの姿で、慌てた女性もあったと云う。

監視兵は、そしらぬ風情で陳入するのである。その度に湧き起こる女たちの黄色い悲鳴

——内外の監視兵たちは、そのたんに歓声をあげる。愉悦と探訪心と興味と勝者の優越感——と、すべての戦勝国兵の心理の織りなす綾模様の中で、敗戦国の黄色い女たちは、危険に泣き、悲しみ、男たちの暴力に抵抗するのだ。

が——敗戦国の通訳は、彼女たちの味方たり得ても、拒否する権限はなかったのであった。

ある午後——女の水浴中に陳入した監視兵を、通訳が詰問した処、逆に女の見ている前で、水槽に頭から水浸けにされ、半死半生の目にあわされた——とか？

その水浴場も、私たち男が使うハメになったのだが、その構造たるや、実にお粗末の限り——監視兵が、囲いの向かい側から歩けば内部が見渡せる仕掛け——これでは、如何に気丈な日本婦女子といえども、真昼間は利用出来まい。当然のように夜中に「水浴」せざるを得まいと思うのだが——そこは南国特有の明るい月光と星空の下であった。ムード満点という奴で、却って、監視兵たちの劣情を刺戟する形になったのではあるまいか？

すべてが、そう云った不完全の中の女の生活であった。男の眼を気にして、下着もろ

くろく取り替えず、水浴び、トイレなど、我慢すれば、当然のように病人続出。特に皮膚病とか疥癬で弱る女性が多かった——と婦女子の診療に当たった医者は語った。

すべては、セックスに於いて開放的で野性に満ちた国の兵隊であった。

英語は喋るが、横文学は書けない牧童生活者や、牧羊を好むソドミアの青年。牛馬の荒々しいセックスに馴れ染んだ、逞しい国の男たちが、有り余るセックスの排泄に悩んでいるのが現状なのだ。

勿論、黒いパンパン嬢は、バターの豊富な野性男を求めて集まっては来ていたが、彼等の視線は、肌の白いキメ細やかな日本婦人にあったのは、云うまでもない。

そのせいでもあるまいが、婦女子の宿舎は監視兵の親切な贈り物で、笑いが止まらない有様だった。痩せ細った、貧相な日本の男なんか物の役にもたつまい。監視兵と談笑する日本婦人の中には国境を越える者も出た。

が——果たして、外国の男たちは、何を想い何を連想するや？

これは私の探訪だが——ある焼け跡の兵舎の整理作業中、私は不思議な紙片を見た。拡げてみると、実に丹念で、解剖図譜のように



細密な線で描きあげられた、ソドミアのデッサンであった。

蹲踞の姿勢に折り曲がった、女のその表情はどうみても日本婦人の顔形なのだ。対する男は、西欧人の逞しさだった。

この兵舎に以前、誰が、どんな奴が、この机を利用していたのか？ 私に判かる筈のものではなかった。だが、確かに利用者は、連合国軍の兵士たちであったのだ。すると彼等は日本婦人を……いや、想像するのは止めよう。ただ、その捨てられた机の抽出<sup>ひきだし</sup>の裏側の隅にクシャクシャに破れ捨て去られていた一枚のノートの紙切れに描かれていた戯画——その構図とデッサンの顔や形、そのポーズから、私は何を連想したか？ 空想するのは自由であると思うが——だが、もし、かつて此の部屋で捕われの日本婦人を囲んで戯画の構図のような、白日夢が展開されたとしたら？

私は不思議な耽美的ムードに浸<sup>ひた</sup>り乍ら、そつと折りたたんで、ポケットに入れた。

そこから離れたガレージの、廃缶の壁には——これは珍らしい修正なしの金髪女のヌード・カラーが貼られた俣だ。

しかも、この金髪女はテープのようなバン

ドで縛られていた。革の靴を持った半裸の男が、のけぞった女の、はち切れそうな、その腰の辺りを、じっと睨んで打ち据える——と云った構図。

これは、剥がそうにも糊が効いていて離れなかった。

他にもまだ、やはりどう見ても日本婦人とは思われないムードの、逆しまに吊られた惨酷なポーズのデッサンが、実に微細な部分まで丁寧に描かれた俣だ——。

しかも女体の線は、西欧女の、あの豊満な脂肪を想わせるが、顔貌はどう見ても東洋的なのだ。髪は、芸者のそれを想わせた。

不思議な魅惑的な和洋折衷の「責め図絵」だった。

そして、その女性自身を医学図鑑の、あの精密なタッチで、描き分けていたのだから、愕く——

私は想像する——此処は、終戦前夜まで、激しい戦斗が続けられたのだ。日本軍は、じりじりと奥地のジャングルに後退したのであったが——その集団には、当然、日赤の看護婦さんを始めとして、末は、芸者、慰安婦と云った娘子軍まで参加していた筈であった。

悪夢のようだが——不幸にして捕えられた

娘子軍の一人がこの兵舎で……この図柄のような苦しい私刑に悶えたのではあるまいか？ 逆に想像すれば、西欧兵のマスターベーション的な凌辱の空想画でもあろうか？

何はともあれ、ソドミアの国、西欧諸国の面目躍如——惜しい逸品だが——壁面ではコレクトも出来ないので諦めた。

○

捕虜と女たち——と云う材料で、私は二度と体験は出来まいと思われる、二十五年前の思い出から記憶を辿ってみたが——日本を中心として、東西南北に分散して戦った日本民族の婦女子の中で、敗戦後の悲劇が最も酷かった北と西を除いて、東と南は、割に平穏だったのは、風土、気候、習慣、宗教その他、人文科学的な要因によるものなのであったろうか？

とにかく、南のカリマンタン地方。その中でもバリックパン地区は、私達の復員する日まで、敗戦国であるべき日本の婦女子は、平和そのものだった。

馬繫<sup>うまづな</sup>ぎの丸太棒に、後手に縛られ、一本足のかかし、同然に片方の足を引き上げられ、羞恥を、白日に曝さねばならなかった、哀れな満州開拓団の婦女子や——一糸纏わぬ全裸の

ままた、牛馬の如く追いたてられ、白昼の舗道を逃げまどわねばならなかった、瀋陽、ハルビン地区の商公社員の主婦、娘たちのつきない涙の物語とか。私たちは痛いほど、北方に於ける虐げられし日本婦女子の引揚げ哀話や大陸物語を、何回も耳にするのであった。

そういった神を恐れぬ惨虐な婦女子に対する私刑の数々は、すべて日本国民が受ける罪と罰なのであるとしたら？ それは如何にも一方的で普遍性のない論理ではなからうか。

ヨーロッパ戦線に於いても、ナチのユダヤ人に対する酷いアウシュビッツの大量虐殺など思えば慄然とせざるを得ないものがある。

かくもどうして、人間同志が一步踏みはずせば、憎み合いお互いに惨虐の限りを尽さねばならぬ——のか？

一般には「飼育された人間のなす行為の恐ろしさ」などと抽象論で、片づけようとするが、確かに「ある力によって飼育馴らされた無知蒙昧の奴は、時と場合をえらばず、ロボットのように無意識で、無感覚に、非道なる殺人鬼と化するのだ」と云う。

ヒトラーによって飼育馴らされたナチが然り——日本の特高警察が然り——北支事変に於ける、通州皆殺事件の中国保安隊が然り——ロシアの尼港事件が然り——で、枚挙にいとまがない。

先般来——テレビ放映で問題になった、南ベトナム兵の捕虜虐殺の実況フィルム——とか、まともには考えられない惨虐が、次々と行なわれ、跡を断たない。

同胞同志の南北ベトナム人が、何故かくも

憎しみ合い、男子の首ばかりでなく、婦女子を引裂いたり、乳首に電流を通じたり、アヌスに仕掛けをしたり、五臓六腑を引き出すような始末をせねばならぬのであろうか？

末尾ではあるが——マカッサル（旧蘭印地区の日本民政病院が抑留中のオランダ人婦女子の健康維持に尽したと云うので——敗戦後オランダ女王から『特別優遇せよ』との下命があった——とか。

捕虜に対する人間的な思いやりがあったばかりに死刑を、許された捕虜係の兵士とか。戦禍を越えた美談も数限りなくあったのだ。そんな想い出と照らし合わせる時、やはり人間にはお互いに救いがあるのだと思う。

妊婦の腹を足蹴にした兵隊と、不幸にして死亡した外国捕虜野辺送りに、通り掛かった日本娘が一枝の野花を摘んで献げた——と云う一言の証言が、敗戦後の南カリマンタン地区、日本婦女子の待遇を一変させた——と云う人がいたが、善悪の応報を如実に確定した——これは日本女性の美点であった。

あの悲惨だった、満蒙に於ける敗戦後の逃避行でさえ、満人や蒙古人に助けられ、無事故国へ引揚げられた家族もあったのだ——と云うことを私たちは銘記したいものだ。

## 天星社刊

### 《限定版グラビア写真集》

### 在庫案内

山原清子『刺青の魅力を探ぐる』一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に發揮した緊縛フォト結集版。

M写真集『女王様に飼育される日々』一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生體のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。





## 新鮮なメロン腹

高野原美

魅力を秘めた若妊婦

岸田今日子のイメージが、ピッタリと云う富田由美子さんが、二十才の若々しい初産八カ月の丸々と膨らんだ妊娠腹を妊婦マニアの前に提供、これほど嬉しいことはない。

辻村氏のカメラハントでは、逆吊りの妊婦の無暴とも云えるポーズを演じた金原さん以來、暫く遠のいていたことでもあり、真っ先に頁をひもといたものであるが、富田さんは辻村氏の緊縛には期待していたようであるが案外M性に未熟さがあり、大胆なポーズがみられないので淋しさが感じられる。

しかし、夫を愛する心から羞恥をのり越えその意に従って辻村氏のカメラの前に、裸身を投げかけた富田さんには頭が下がるものがある。

今までも増田みゆきさん外、多数の妊婦の方が、奇巧誌上に、その膨隆した丸い腹を突き出し、羞恥の姿をマニアの前に鑑賞用女性

として投げだしてくれたが、彼女ほど痛々しく感じたのは始めてである。

これこそ、モデルとなった女性のM性の違いによるものであろう。

その富田さんが、辻村氏の偶然のイタズラから後手縛りの縄を、妊娠のために豊満さを増してドッシリと突き出している乳房の上下にかけて縛ったままの姿で、トイレに行かねばならなかったのは気の毒であった。勿論、われわれマニアにとっては、生贄として祭壇に捧げられた女性であり、情無用で行きたいところであるが……。

「怨めしげな表情が崩れて、情けなそうな顔付になった」と書き、そのうえ、その心を読みとりながらも、彼女に払拭プレイを強いている。

夫を裏切りたくない、ただ夫の前では許せることも、夫以外の方には……と云う切ない

心と羞恥心が、あくまでとり付いて離れない可愛い若妻の心情である。それだけに辻村氏としても、余り極端なポーズ等は、さけられたのであろう。

富田さんの八カ月妊婦裸像は、若々しい姿がみちみちて美しい線を描き、見るものの目を楽しませてくれる。

最初の写真は、斜下から撮られており、妊婦の丸々と膨れあがった腹部の特徴が強調され、私の最も好むカメラアングルである。もう少し上にねらって膝から上位を入れて欲しかったが、ムッチリ豊かな二本の太腿が女の魅力を漂わせ、その太い円柱の上にドッシリと乗りかかる妊娠腹が雄大な姿をみせて、下腹部の膨みが強調され、その上に、妊娠のため豊かさを増した乳房が双球をのぞかせる。妊婦の妊娠による変化像が、最も鮮明に妖しい魅力をもせる角度である。

両手首だけを縛られ無防備な裸身が畳に転がる姿は、嗜虐心をそそるものだ。重い胎児の為に腹は畳の方に下がり、上になった方がやや凹味をみせて歪んだ腹は、若々しい皮膚の弾力を思わせる。八カ月の張り切った充実した腹ではあるが、彼女の場合、まだ膨れる余裕はありますよと、若い女の皮膚の魅力的な弾力性を感じさせ、女の肉体の神秘性を強く意識させられる。

座像は、前手と後ろ手縛りを見せてくれた

が、妊娠八カ月の膨満した腹部が、上下から圧迫されて前にせり出し、見事な大きさとなって膨れ上がっている。特に前屈みになるとより豊かさを増してせり出し、妊婦の腹の魅力を倍加している。

太腿の間にローソクを立てたポーズでは、身体を後ろに反っているため八カ月の妊娠腹の膨れ方の特徴がよくでており、臍を頂点にして、球形でなく鋭角に尖った腹の輪廓がよく判る。勿論、やや背面からとった高姿では鮮明にでているが、この座像の腹を見ていると、先に述べた腹部の皮膚の弾力性がよく察せられ、若さを感じさせられた。

私は、妊婦裸像をみながら、常にその不思議な神秘的魅力に惹きつけられる。これほど美しい女体裸像は、またとないだろう。素晴らしい膨らみの曲線美に心惹かれるのだ。

某週刊誌によると、富田さんも見られたようであるが、自分の妊娠姿を記念に残すために月を追って撮り、出版したいと云う女性がある。また、女子高校生でも、若い美しい時代の記録としてヌードを撮って貰うものが増えて来たということである。

女性の美、これは永遠のものではない。

それだけにナルシズムの女性ほど、自分の肉体のおとろえを恐れ、愛するその美しさを永遠にとどめたいと願う。しかしその場合は魅力的な裸身を自分個人だけの鑑賞にとどめ

て秘めてしまう。だがM性の女性は、現在の美も、永遠に残す美としてのフォトも、全ての人間の共通の鑑賞の対象にしようとする。そのためには羞恥責めの苦痛をのりこえて、裸身を晒けだすことが必要となる。これが伴わないとM性は満足させられない。

M性は、人間の尊厳から脱し生臭い動物的な牝の存在になり切るところから生まれる。

自分の裸身の全てを、男性の生贄として捧げ尽す、そのためには男性の研究心旺盛な観察欲を満足させ、その中から自らの楽しみを発見する努力が必要とされよう。

関西ストリップのヌードダンサー（ストリップパー）が、その裸身ばかりでなく内臓まで観察させる心は、M性そのものである。多くの男性の視線に自分の秘所を晒し、そこからストリップパーたちは、血眼になる男の動物欲をひしひしと感じとりながら、その眼前で羞恥責めを自らの手で行なっていることに陶然としているのである。

女の肉体の一部を見んために高い金を払う男、見えた見えないで騒ぐ男を舞台の上から自由に扱える楽しさは、自分の裸身を通じて征服感を味わうだけに、M性とは云え、一種のS性にも通じるものかもしれない。

舞台上で、男性を悩殺しようと思えば女達ほど女体の魅力を知り抜いているものはいないだろう。

妊婦は、それ以上に腹部の膨隆をはじめとする女体の不思議な魅力を持っている。これを武器にして男性を悩殺する。これ程の強みはないと思われる。

男の目に、グロテスクな醜い姿をさらすのは恥かしいことであると云う考えは捨てさり裸身を晒けだすことで、自らも生贄としての楽しみを感じつつ、男を、その肉体の魅力で征服することの喜びを味わうことだろう。

露出、見せることの楽しみは女の本能である。ミニスカートの流行は、その潜在的本能の現われであり、男の視線を受けることで飲め、満足感を味わっているのである。

女性切腹は、露出とマゾの最高のものである。その点から、私は妊婦の切腹が好きである。これこそ、マゾの極致と云わねばならない。ところが、緊縛の大家辻村氏は、女性切腹に関心がないのか——勿論、単なるマゾプレーで迫力がない点もあるが、妊婦の切腹を撮られないのは残念である。

富田さんが、夫を愛されるなら、もっとマゾに徹し、臨月腹で辻村氏のカメラの前に立たれることを願うものである。

自分の妊娠美を高く評価し、愛してくれている男性が、いや女性も含めて多数いるのだと自信をもち、誇らしげに臨月腹を堂々と突き出して、その雄大な姿を見せられることを期待して止まない。



## 新津 屈服

戸前口に入るまでには、嚴重に鍵のかかった格子戸を何回も、あけたてして来なければならぬ。その一つ一つに別の鍵役がついて控えている。囚人が、暴動を起こした場合、一人だと脱走の危険があるからである。

耳ざとくなっている女囚たちは、当番所の鍵が鳴っただけで何が起こるかを察してしまふ。だから、鍵役が戸前口に立つ時分には、もうその内鞘の牢名主と戸前番が正坐して待っているという段どりになっている。

又、新入りが来た。

うすぐらい照明下でもクツキリと抜けるように白い全裸には、赤白ダンダラ縞りの捕縄がギリギリと巻きついている。正式に打たれた有明本陽三重菱縄であった。鍵役のアマゾン女兵が大声でいった。

「牢入りがある。肉体番号F一七五四番、俗名イーラ・ラジャーソン、捕獲地ホンコン、十九才、A B A B d」

牢名主が落ちついた声で答える。

「ありがとうございます。たしかに、お受けとりいたします」

ガチャリと錠前が外され、低い格子戸がギ

イーツと開く。手早く本縄を解いた鍵役が、イーラの首輪をつかんで扉口に差し入れ、「ソレツ」

と叫ぶ。それに応じて、内側の役人が、「さあ、こい」

といって引きずり込んでしまう。ピシヤリと臀部をひっぱたかれて、オロオロと、うずくまるイーラは、もう牢の中であった。

恋する新津謙介を、屈辱から助け出すために、涙をのんで屈服したイーラが、懲治檻に渡されて来たのである。

有明はイーラに、新津に対する絶縁状を書



かせた。

「おなつかしい、新津謙介さま。ひどい羞かしめと苦痛に耐えていらっしゃるお姿を想像して、イーラは自分が鞭打たれるより辛うございます。でも、強いあなた様のお心は狂いもせず、逞しいあなた様のお身体は健康を害われることもなく、頑張っているより辛うとか。思いもかけない運命の大波は、あなた様もわたくしも共々、木の葉のように翻弄し、呑みつくしてしまいました。今のイーラは、うわべこそ変わらぬイーラの姿をいたしておりますけれど本当はまったく違う、もう一人の人間に、なってしまったのです。いろいろ

前号まで『有明の独裁する秘密国家では、世界中から誘拐されてきた美女が、その機質に応じて五段七階級に分類され夫々の立場で有明に奉仕することが求められている。麻薬事件に巻き込まれて数奇な運命に弄された混血娘イーラ、学生運動の女闘士、私製ジャンヌこと小林敏子、尼僧だったアンなども、その中に含まれている。イーラは国際秘密捜査官の新津と相思相愛の仲であった。それを知った有明は、イーラを屈従させるための囹として新津をも、さらって来た。

のことが、ございました。いろいろと辛い、苦しい目に遭いました。そして、わたくしの知らなかったイーラを発見することになってしまったのでございます。結局、イーラは、この国の人にさせていただく以外に残された人生はないと覚りました。むろん、そのためには、地上の一切を捨て去ることが要求されます。厳しい二者択一でございました。あなた様への愛をとるか、マスターへの忠誠をとるかを迫られたからでございます。そして、イーラはマスターに、すべてをお捧げする決心をいたしましたのでございます。インドには、恋する村の青年を捨てて領主のところへ側女として行った田舎娘の辛い心を歌った叙情詩がございます。永遠に変わることがないと、あなた様への愛をお誓いいたしましたイーラですのに、こんなことを申し上げては、さぞおさげすみになることではございましょう。背信をお怒りになることではございましょう。そのことを考えると、イーラは身を切られるように辛うございます。お許し下さいなどと、お願いして許していただけることではございませんが、ただただ、血を吐くような思いでサヨウナラと申し上げます。マスターはお慈悲深く、新津さまをお許し下さると、おっし

やっております。これだけが罪深い、わたくしの幽かな慰めです。では、おしあわせに、お暮し下さいませ」

「ち、ちがう。これは、イーラの本心じゃない。あのひとは、お前に脅迫されて、こんなものを書いたんだ。オイッ、あのひとを、どうした。あのひとを、ひどい目にあわせないでくれ」

たけり狂っていた声音が突然、弱々しく変わった。イーラの身を思うと、どんなことがあっても、有明の機嫌を損じてはならない、ということに気づいたからである。

哀れにも新津謙介は、再び後手銃で元の檻の中に抛り込まれていた。全身の体毛という体毛を悉く剃りとられた赤裸は、彼の心境とは裏腹に、ひどく滑稽でさえあった。

ポートエリアとパレスエリアの間は天と地ほどに隔絶していた。ここは南海の一孤島。その地底にある火山洞穴を利用して建設された秘密の国であった。国と呼ぶにふさわしいかどうかは別として、少なくともパチカン皇国よりは広いし、モナコ王国よりも富裕であることは確かだった。したがって、兎も角、これを有明の王国と呼ぶことにしよう。そし



て、この王国を確然と二分するエリアがあることは前に述べた通りである。生産、補給をつかさどるポートエリアは、洗脳され官刑を施した男奴を人的資源として、これを監督、管理するのはコンピュータとロボットだった。この責任者は、言うまでもなく鬼才ウイリー博士と、その夫人であって、人種差別（日本人選民主義）の有明でさえ、一目を置くアンタッチャブルな存在であった。彼は豊富な人材？を駆使して、前人未踏の医学的領域をひろげることに成功した。それこそ何ものにも替え難い学究的満足を彼にもたらしたのであった。

新津謙介が閉じ込められている獣檻も、ウイリー博士の実験材料を保管する、区画の一部にあった。いかえれば国際秘密捜査官、警察官吏の中でもエリート中のエリートである新津謙介も、ここでは一匹のモルモットにすぎないということになる。



「言葉使いを改めないで、やらないぞ」

イーラ自筆の絶縁状を、檻の前でヒラヒラさせながら有明が言った。

「さて、いや、まって——ください。おねがいだ。おねがいです。その、その手紙だけは置いていって下さい」

混乱した新津がシドロモドロに叫ぶ。何もかも奪い去られた今の新津にとって、イーラの手紙さえ、千金の価値があるように感じら

れる。有明がいった。

「私は君を、どのようにすることも出来る。君の前頭葉に細工をして、生きたロボットにしてみてもよい。又、手足を切断してセックスだけの色獣に改造することだって、ここでは珍しいことではない。しかし、この際私が望むのは、そうでなくて、君が君自身の自由意思による完全屈伏なのだ」

「もう負けたと、いったじゃないか」

新津が悲鳴に似た声で叫んだ。

「ちがう」

有明は鞭のようににはね返した。

「君はイーラを救う目的でデタラメを云ったにすぎない。君の声紋をチェックしたコンピュータでさえ、その嘘を知っているよ。私がいうのは、いいかね、心の底から私に服従することだ。そのためには、イーラを犠牲にしてもよいと思っている」

「イ、イーラを、どうしようっていうのだ」

「まだ考えていない。君、一人の女を、この国にさらって来るのに一体いくらかかるか知っているか

ね。日本の金にして億の単位がかかっているのだ。乱暴に扱っているようでも、決して無駄にする考えはないさ。イーラにしたって何も殺してしまおうというのではない。ただ」

「ただ？」

鉄格子に顔を叩きつけるようにして新津が迫る。彼には、もはや策略もカケヒキもなかった。ただ一途にイーラの身の上を思う。その真情は、有明もわからないものではなかった。むしろ、美しいものとさえ感じている。

だが、ここでは何があっても、このカップルをこの国のタガにはめ込んでしまわねばならない。

「君次第で、彼女の苦しみ方が、ちがってくるといっておこう」

「畜生、彼女に何の罪があるというんだ」

「罪は君にある」

有明がピシヤリといった。

「君は私の組織を探り、摘発しようとした。

地上の世界では、君は正しかったろう。しかし、この国では、スパイ行為にあたる。地上の国々でさえ、スパイ行為は死刑を含む厳罰を課しているではないか。まして、ここは私の国だ。地上の宗教や道徳の支配を受けない国だ。どんな手段をとったところで、私の考

えで行なわれる限り、正当とされる」

「そんなバカな」

「言葉を、つつしみたまえ」

「いや、いつてやる。人間は皆、平等だ。誰も他人を支配することは出来ない」

「だが、私はそうしている。私は君を飼ひ馴

らそうと思っている。そのため必要ならば、イーラを責めて責めて、責め殺したって、い

いといっているんだ」

「や、やめてくれ」

鉄格子にぶつけるので、額が切れて血が流れた。背中にロックされた両手がギリギリとねじれて、内心の苦悶を、より切実に表現していた。一呼吸ののち、ガックリと肩を落とした新津謙介は、

「おねがいだ。僕は、もう完全に負けてしまっている。嘘じゃない。前から言っている通りなんだ。だから、どうかイーラを苦しめないでくれ」

「イーラは苦しんでなんかないさ。これから、ここでの生活を大いにエンジョイすることになるだろう。それも君が従順ならの話しだがね」

「だから……」

「まあ、いい。君の言っていることが本心か

どうかは、機械にかければ、直ぐわかることだ。その前にちょっとテストをしておこう」

「……」

「後ろを向いてアヌスを見せろ」

顔色が変わったが、これを拒否したら、忽ち災難がイーラに、ふりかかるに相異なる。

歯を喰いしばって、身体の向きを変える。狭い檻の中では、こんなことすら、容易に出来ない。

「ウッ」

「動くな」

いつの間にか、イーラの絶縁状をクルクル鉛筆のように巻いていた有明が、それを一気にインサートしたのである。目を白黒して苦痛と屈辱をこらえる新津。その目の前に素早く廻った有明は、

「手紙は、尻のポケットに入れておいてやった。中から押し出さなければ抜きとることは出来ない。ハハハハ……まあ、それまで大事に体内で温めてやるんだな」

アザ喰って、ペツと唾を檻の中に吐き、「何でも言いつけた通りするというんなら、ソレをなめて見せろ」

数秒の躊躇は止むを得なかったであろう。だが、絶対服従を自ら証明しなければならな



かった新津は、とうとう、床をぬらしている有明の唾に、自らの舌をあてるのだった。

## 強制搾乳

「ホントに、見ちがえる程、大きくなりましたね」

曳き出されて来た一匹の美畜を見据えながら、エミー司令、すなわち、星恵美子が言った。トリートメント室の医務官は自慢気に「濾胞ホルモンが、とてもよく効いたようです。ですから、予定より一週間も早くプロラクチンが使えたのです」

「スターターですね」

「そうです。泌乳が刺激されます。丁度、もう張って来て痛み始める頃です」

その声に応じるかのように、美畜は不自由な声を振り絞って吼えた。ギャグで舌を押さえられていたから言葉にならないのである。

「アー、アー、アー」

哀願の表情、その両眼から涙がしぼり出されてくる。鼻網を踏まれているので、立ち上がる事ができない。

家畜は眉を残してクリクリ坊主になっているので、風貌が全く変わってしまっている。

しかし、大きな目、偃月刀（シミタル）のような鼻スジ、肉感的な唇は変わっていない。ペルシャ美人、アマトル・アミンその人であった。

アマトル・アミンは、殿下などと一緒に、例のドラム缶詰にされてネプチューン号に収容されたのである。彼女はエミー司令の仕返しを受けるめぐりあわせになってしまった。

彼女の受けた判定はA B B B F、つまり、当然、銅のクラス以上の材質を持ちながら、所業の故に、ワザと畜位に貶されてしまったのである。美しいとはいっても、三十才、悦楽に鈍った彼女の肉体は、所詮、役畜として調教するべくもなかった。そこで彼女は「乳畜」に改造されることに決定している。

トリートメント室は調教所の構内において乳畜改造を処理するところである。自然には分娩によって惹起される泌乳現象を、ホルモン処理で人工的に起こさせてしまう。妊娠すれば自動的に分泌してくる黄体ホルモンとか濾胞ホルモン、その他、胎盤性ホルモンを適当に注射して行くと数週間のうちに、乳房組織がグングン発達してくる。

頃合いを見て今度は分娩時と同じ刺激、つまり泌乳刺激ホルモン（プロラクチン等）を

与えると泌乳が始まってくる。もちろん泌乳現象には精神的要因が大きく作用するから安定剤としてトランキライザーを併用しなければ、この異常な状況の下で、人工泌乳をさせることなど、とても期待出来ない。つまり、①組織発育剤、②泌乳剤、③精神安定剤、これらを巧妙に組み合わせると、妊娠も分娩もせずに乳を出させることが可能となる。

トリートメントされたアマトル・アミンの乳房には、所謂「初乳」が溜まりはじめている。それが疼痛をもたらして、彼女を責めている。これも又、一つの拷問であった。

厩舎に接して、スタンションなどの設備は全く同じだが、四分の一ほどの広さしかない別室がある。そこは「乳畜舎」といって、乳を出す美畜を収容している。コレクションとして、文明人ばかりでなく、乳房の小さいエスキモーから、肩にかけられるほど長いので有名なホットtentトットの女まで、種々雑多の人種が蒐められているのも、ここの特長であった。

トリートメント室は、その一隅に位置し、更にその隣に精乳室や分析室があって、特別の女職員が働いている。化学、栄養学等の専

門経歴を有する予備役要員が任命される。

星は高官だから奴婢畜物を私有することが許される。アマトル・アミンも星の戦利品でありその労苦に対する報償として下賜される内諾を得ているので、乳畜改造も星の要請によって行なわれた。星は有明にかわって非業に斃れた仲間ジャン・シュレッサーの復讐をする義務があった。シェイク・アル・ゼバルの本処が完全に破壊された今、その対象とされるのは色獣に加工された殿下、このアマトル、それにづくハレムの女たちでなければならない。

後手錠のアマトルは、星に鼻綱を曳かれてトリートメント室を出た。そこは、すぐに調教所になっている。たくさんの美畜が様々な方法で激しい調教を受けている最中だった。自転車に縛りつけられて必死でペダルを踏んでいる者もいるし、重いロードを力一ぱい牽っぱりながらトレッド・ミルの上を歩かせられている。すべて機械的に看視されているので、少しでも怠けると電撃が襲ってくる。

アマトルはサド女だったから、たちまち、



この雰囲気に対応した。そして、自分も同じ囚われの身であるのに、それさえ忘れてしまったかのように瞳を輝かして美畜の苦悶を眺めている。乳の痛みも、どこかへ飛んで行ってしまったように見えた。

アン・ブラウンとF五五四号のペアが鞭で追われながら早駆けして来るのに会った時、アマトルの興奮は絶頂に達した。

「……」

星が鼻綱をおさえなければ、アマトルはアンに飛びかかったかも知れない。夢中で駆け回っていたアンには、アマトルを見る余裕は無論なかったし、又、仮にあったとしても、変わり果てた尼さん頭では直ぐには判らなかった

かも知れぬ。とに角、はげしく鼻梁が牽かれたので、アマトルはハッと自分をとり戻した。責める者が責められる者にならった冷酷な現実を、イヤという程、思い知らされて、あらためて、しおしおと、うつむくのであった。星は落ちついた足どりでアマトルを引っぱりながら、調教所を横切って行った。

イーラを内鞘に押し込んだ鍵役は、直ぐには帰らず、命令を続けた。

「F一七五三番、お調べがある。出てこい」  
あわてたのは牢名主や役人たちである。F一七五三番、すなわちジャンヌは今、懲罰を受けている最中だった。日系米人キャシィ・E一三三六号がヘンな発音でマッククロケノケを歌っているのに合わせ、無限の水汲み運動を繰り返しているのだ。手は棒のように、腰はもう感覚を喪失していた。淋漓と流れる汗が全身をベタベタに濡らしていた。

「お待ち下さい。只今、身体を清めて差し出しますから」

「早くしろ」

もう仕置どころではない。当番が二人、大いそぎでジャンヌの裸身に水をかけて汗を流す。熱した肌に触れた水は湯気をたてた。



「F一七五三番、差し出します」

今度は尻から出て行かねばならぬ。鍵役がジャンヌの両手首を後手にとめる間、戸前役が内側から首輪をおさえるのが規則だった。

「よし」

といわれて始めて手を離す。くぐり戸がしまつて、ピーンと錠がかかる。赤白ダンダラの本縄が、ピシピシとジャンヌの裸身を締めつける。ジャンヌの息使いは依然として、せわしく、身体はガクガクと痙攣していた。

拷問檻にあったのより数倍も広く、調度も豪華であった。カウンセラーも二人になってその他、専門の医師、マッサージ師、トレーナー等が配置されている。

「調べ室」と牢内では言いならわしていたけれども、正確には「環境調整室」であった。異常な環境、生活に神経が麻痺し狎れてしまわないように、時々地上の生活をとり戻させるシステムは拷問檻と同じだった。

控え室で縄を解かれたジャンヌは、スチームバスに導かれた。すっかり汗を落としたところで、全身マッサージを受ける。牢内での難行苦行が、嘘のように思えてくる。

「サロンでエミーさまが、お待ちですよ」

カウンセラーが、やさしく微笑みながら迎えて来た。白髪で品のよい老女だった。

タップリと香料を擦り込んだ裸身に豪華な絹のネグリジェを羽織った。

白を基調にしたフランス風のサロンは、中央に噴水を持った水盤を配し、ゆったりした白鞆皮のセットが薄いブルーの絨氈の上に、程よく、配置され、その一つに、星恵美子が坐っていた。足もとにアマトルが後手のまま平伏している。鼻輪を星の踵が踏んでいるので顔を、あげようにもあげられない。

「大変でしょう。でも、誰でも一度は通り抜けなければならぬ試練ですからね。どうか頑張ってください」

ジャンヌが近づくのを見た星が、やさしく声をかけた。みるみるジャンヌの目に涙が溢れる。現在の境遇では、こうした、やさしいひと言葉でも深く胸にしみ通るのである。ここへ呼ばれたのも、実は偶々テレビでジャンヌが水汲み責めをされているのを見た星エミー司令が、可哀そうに思って助け舟を出したのが真相だった。だが、そんなことを恩に着せる星ではないから、そ知らぬ風に、

「お茶を飲み立ち寄ったのです。ご一緒に如何ですか」

深々としたクッションの感触は、あくまでもソフトで、ジャンヌは天国にきたような快さを覚えた。それ程、牢内での惨めな生活が身にコタえていたといえるであろう。

カウンセラーの老婦人がニコニコしながら紅茶を運んで来た。素敵なお茶だった。

「ウ、ウーン」

床の白い肉塊がウメいた。乳の痛みがズキズキとアマトルを責めさいなんている。

「お茶にミルクを入れましょうか」

「？」

ミルクは運ばれていなかった。星が鼻綱を引き上げると、涙にぬれたアマトルの顔が持ち上がった。膝立ちになると、ふくれ上がった乳房が、丁度テーブルの上になった。

「これは乳畜といってね……」

ジャンヌは目を丸くして星の説明を聞く。「ホルモンを上手に注射して行くと、子供を生まないでも乳が出るようになります。これは丁度、トリートメントしたばかりですから、乳が張って痛んで仕様がなのです。しばらくやれば直ぐ楽になります」

ギョツと乳房を掴んで揉むようにすると、黒ずんだ乳首から、白い液汁が滴り落ちてきた。それを自分の紅茶茶碗で受けながら、

「初乳ですから、糖分が殆どありません。むしろ酢っぱいぐらいですけど、とっても栄養価が高いですよ。あなたも如何ですか」

と、反対側の乳房に手をかける。顔色をかえてジャンヌが嫌々をすると、ニンマリと微笑んだ星が、

「そうですね。でも、やがてお馴れになりますよ。この家畜は、わたくしの私物です。生かそうと殺そうと、わたくしの自由になります。まだホンの五ccか六ccしか出ませんが、一週間ぐらいすると、成熟乳に変わって二〇〇ccぐらいも出すようになります。乳畜の中には、その十倍、二〇〇〇cc、つまり二リットルも出すのが、ありますのよ。ホホホホ」

二つの乳房をしばらくアマトルは、乳の痛みが休まったので、ポーっとしている。その鼻綱をグイッと引き下げて、

「いつまで立っているの。用が済んだら、さっさと、ひざまずくのよ」

星が英語で叱った。あわてて青い絨氈の上に平伏するアマトルの姿には、かつての金持サドマニアの威勢は、どこにも見られなかった。脂の乗り切った白い肉体は、人間としてのデグニティを奪いとられて、何か獣めいた艶めかしさを発散していた。

「ところで……」

人乳入り紅茶を美味しそうに一口、味わってから、急に真顔になった星は、

# 伝言板

○分譲品録目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます。尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、振替（切手代用は一割増）にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありまして最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社へ願います。

「小林さん、あなたはここへいらっしゃったことを後悔していらっしゃるんじゃないですか」

「えっ、どうして……」

と口ごもるのに、押しつぶされるように、「あなたは有明にだまされているのよ。愛するとか何とかいっても、あのひとは、もうとくに、あなたなんか忘れてしまっているのよ。もしそうなら、ハッキリおっしゃって下さい。誰にもいいませんからね。わたくしは近いうちに又、ネプチューンを指揮して地上に戻ります。そのときコッソリ乗せてあげます」

これは罠であった。星は有明の密命を受けてジャンヌを試すために、ここへ来たのである。だが、煮えたぎるような有明への思慕を失っていないジャンヌは、涙ながらにキッパリと拒否した。

「折角ですが、私はこの運命に賭けてみたいのです。マスターが何とおっしゃろうと、私がマスターをお慕いしていることだけは確かなのですから」

このいじらしい答えに、星も涙ぐんで、シッカリとジャンヌの手を握るのであった。ジャンヌは、試験をパスした。

（未完）





陽灼け女ひとりあるき

## 北中南米ふんどし旅行

文と絵 鈴木 ゆり 子

ながらく御無沙汰しました。四月号で越智  
かおりさんからの呼びかけを拝見、筆をとり  
ました。

実は去年の夏、ハワイ、カリホルニア、メ  
キシコ、中南米を、ひとり旅してきました。  
ふんどし物語で夢みた南米のジャングルへの  
ふんどし一本パラシュート降下は果せません  
でしたが、ずっとミニスカートの下は日本の  
さらしの六尺ふんどし一本で通しました。

### ——ハワイのビキニ——

ハワイ、サンタバーバラ（カリホルニア）  
アカプルコ（メキシコ）の海岸は、色とりど  
りのビキニで、いっぱいでした。忘れられな  
いのは、ハワイの海洋研究所でイルカの言葉  
の研究をしていられるハーバー博士をたずね

た時です。イルカ用の小さなプールの枠に、  
マホガニ色に日やけたお嬢さんが腰かけて  
いたのですが、お尻の縦のくぼみの上の方三  
センチぐらいが、ビキニのうしろから出てい  
るのです。特製のビキニではなくて、サイズ  
の小さいビキニを着こなした、新しいスタイ  
ルでした。

私は、思わず「ハアイー」と手をあげて、  
ニコニコしながら近寄りました。彼女も「ハ  
アイー」と愛想よく笑います。

「ユーアーチャミング！ マイフレンド」  
と、ワンピースを脱ぎますと、縦の線がキ  
リリと食い込んでふんどし一本の姿になりま  
す。彼女の方は、横の線が、それこそ、腿の  
つけ根を切りそうです。見ず知らずの私たち

ですが、そのまま抱き合って、頬に接吻し合  
いました。

「あなたの着こなしは、すばらしい」  
「その新型のビキニは理想的だ。日本に売っ  
ているのか？」

など話し合い、目を白黒させながら、まん  
ざらでもないハーバー博士に、肩を組んだ後  
姿を撮影してもらって別れました。

ハナウマという海岸で、アメリカ人とフィ  
リピン人の混血の三〇才ぐらいのツエウ夫人  
や、小学生の娘さんと泳ぎました。ハワイの  
人は、「ワイキキなどは、ヤンキーの観光客  
が行く所で、あんな汚いところでは泳ぐ気が  
しない」と言っています。

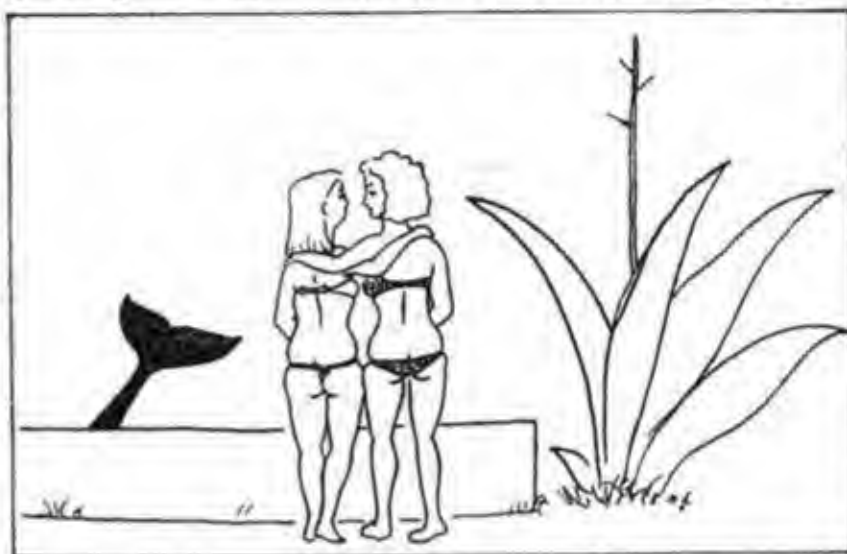
母娘とも、浜辺では超ミニのビキニなので

すが、泳ぐ時は、その上にワンピースの水着を着ます。研究所の中とちがって、人が多いところですから、私もふんどしでなく、ビキニで泳ぎました。市販のものではなく、ギリギリまでふんどし化した手製のビキニです。三人とも、水めがねをかけて潜水し、サンゴ礁の海を心ゆくばかり楽しみました。

余談ですが最近、恐竜時代というワーナー映画を見ました。

もちろん荒唐無稽なものです。全身、私のように日やけしたグラマー美女が、一貫して、ふんどしに近いビキニで出て来ます。何しろ原始時代ということですから、ビキニの横は、ほんとうに細い紐です。泳ぐ時もジャングルを歩くときも、寝るときも、儀式の時でも同じスタイルです。本当にこんな国があったら、すべてを捨てて、今すぐにでも移住したいと思いました。

ただ残念なことに、前にも後にも越中ふんどしのようなビラビラをたらしめていることです。ハワイの美女といい、どうしてアメリカ



人は、そのところまで来ていながら、ふんどしの縦の線の美しさを、ものにできないのでしょうか？

### —サンフランシスコのポルノ—

サンフランシスコで、その種の、ショー、映画、写真、本などを、たくさん見ました。

トップレス「ボトムレス」というショーは、ちゃんと、まじめにそのとおりですし、映画も本も、日本のようにウジウジと気がねしたところがありません。三日間、女だてらに朝から晩まで、こんなものばかり見たのですが、何ともフニャリと、とらえどころがないような感じでした。

只の裸に倦きたアメリカ人は、帽子をかぶらせたり、ストッキングやブーツをはかせたり、鞭を持たせたりしますが、それでヌードがひきしまるというものではありません。

服装のおしゃれとヌードの間に、ふんどし美が入るべきだと思います。今のところ、日

本人の感覚としては、服を脱いで行った最後に出て来る女性のふんどし美というもののしか考えられません。アメリカへ来て感じたことは、ヌードに倦きた上、ストッキングやブーツにまさる最高のアクンセットとしての、ふんどし美というものが、検討されなければならないということです。

サンフランシスコの場末のボトムレス・ゴー・バーで、くろうと、しろうとの、オール・ヌードの若い女性にまじって、黒の水泳ふんどしで私が踊り出した時の、割れるような興奮を、今でも誇らしく思い出します。

### —サンタバーバラのヌーディスト—

サンフランシスコとロサンゼルスの中間にある美しい町、サンタバーバラの郊外に、ロス・パドレスという峡谷があります。天然の緋鯉や、グッピー、アカラなどの熱帯魚が泳ぎ、アメリカ人やカリフォルニアのメキシコ人が、車で遊びに来ます。

その上流の、赤い大岩で囲まれたレッド・ストーンという水たまりには、どこかのクラブの専用ということではなく、ヌーディストが自然に集まって来ます。服を着た人がジロジロ見ていると、誰からともなく罵倒されるの





で、裸の人たちにとっては安心です。

ここには老醜は、ひとりもおらず、男女ともに、りっぱに観賞価値のある若い人たちが数十人、泳いだり抱き合ったり、ひなたぼっこなどしています。

私はエリザベス・ハイルバーグという若い女性ヌーディストの車で、ここをおとずれました。ファッション・ショーという程でもありませんが、大岩の上で、六尺ふんどし、九尺ふんどし、黒やえんじの三角ふんどし、その他、各種のふんどしを締めてシャナリシャナリとやったりバレーのポーズをとります。

脱いで行くのを着ている人が見るショーではなく、青空の下、着ていない観衆が、一片の

布を「着」て行く私を見るのです。たちまちの内に、私はすっかり人気者になり、締めて帰る一枚だけを残して、持って来たふんどしは、みんな、私の腰から、青い眼、茶色い眼のグラマー娘の腰へと移ってしまいました。

アテネ商会、ニュー・ポートその他の特殊下着屋さんにはフリルがついたり孔があいたりした半透明のケバケバしいパンティを売っています。が、私の、それ自体は光らず、締めた持主の体を、より美しく光らせるようにデザインされています。

大自然の中で、実行力のある若いヌーディストたちから歓迎されたことで私は、ふんどしファッションに深い自信をつけることができました。

### ——アステカ族のふんどし——

西部劇など見ると、北米のインディアンの中には、前後にビラビラを垂らした、ふんどしが広がっているようなのをしたように思えます。

メキシコ市外にあるカステリヨというラム酒工場の近くのマーケットで、私は感激し

ました。この場所に、昔あったアステカ・インディアンマーケット風景が壁大面に原色で描かれているのですが、茶色い肌のおばさんや娘さんが、六尺ふんどしを締めて、サボテンの実やパパヤを買っているのです。

等身大のその絵の下で、アイシャドウに金ピカ、イヤリングのスペイン風の若い女たちが毎日の買物をしています。案内してくれた若いエスペランチスト、マリヤ・エレナお嬢さんに「この絵は、あなた達の祖先ね」と言ったら「もちろん、そうよ」と、もともと大きい胸を張って答えます。「あなたも、スカートの下に、ああいうの着てる？」と聞いたら「これは大昔のことよ。今は違うわよ」と大まじめです。「アラ、私は、ああいうのよ。あんた達メキシコ人はダメねえ」と言う「うそばかり」というような顔をしていました。この会話は、みんな国際語エスペラントです。

マーケットの真ん中でハレンチ学園みたいなことをする訳には行かないので、彼女の運転する車に戻ってから見せてやりました。生まれつき、陽に灼いた私のお尻ぐらの肌色をした、目が大きいこの混血美女は「オー・ベルダー・ケ・エルモッサ！」（アラマ、ほ

んとだ！ステキ！」とエスペラントを使うのも忘れてスペイン語で感嘆しました。あとで進呈して、くり返し、締めかたのコーチをしたのは勿論です。

今のメキシコはカトリックの国で、雑誌のグラビヤも日本以下の脱ぎ方ですし、ふんどしに類するものは、残念ながら目にとまりませんでした。

しかし、画家リビエラの生家の民俗博物館テオテワカンのピラミッドの壁画などには、六尺式のふんどしや、物すごく長い前だれの越中式ふんどしの男などの石像や画が見られました。

### ——イタリア人のふんどし夫妻——

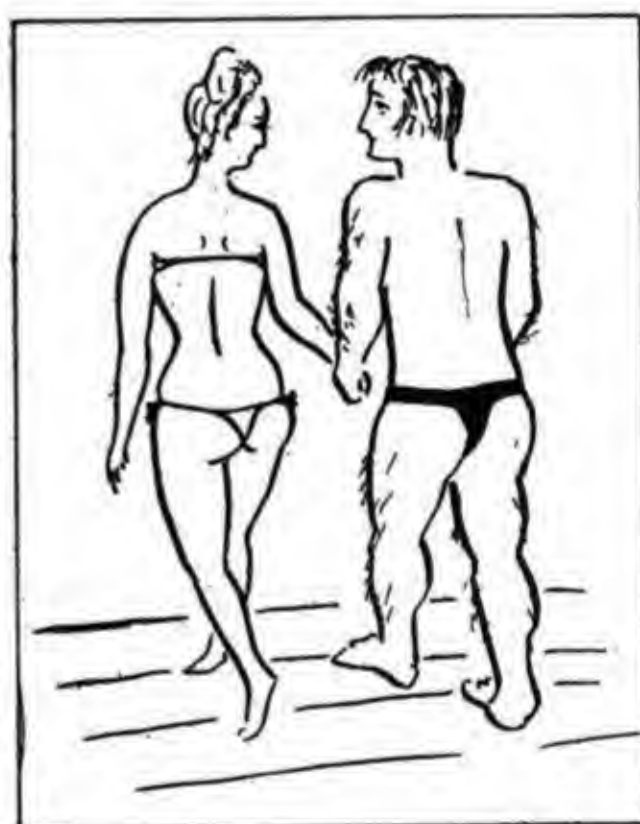
メキシコの太平洋岸にある保養地アカプルコの、オテル・エル・シという旅館で、私はアツと息がとまる思いでした。

うす暗い階段を上がって行くスラリとした女性は、うす緑のふんどし型ビキニ、手を握った若い男性は、殆どふんどしと変わらない黒いパンツです。

「ブエナス・タルデス・セニョーラー！」

やっと追いついて、とりあえず挨拶しました。

案内者もない土地の、ひとり旅だからと



思っ、ふつうのビキニを着ていたことが悔まれます。

この夫妻とお茶をのみましたが、ローマーの会社員だそうで、お互いにスペイン語は片言なので気が楽でした。

彼女といっしょにシャワーを浴びましたがビキニの灼きあとがとてもみごとでした。彼女も、私のかくれた部分が意外に白いこと、白い部分がビキニより小さいことに気がついて、さわって見て、首をかしげたりしていました。

自分の部屋に帰って各種のふんどしを持って来ると目をかがやかせ、裸になって当ててみたり、夫に見せています。

彼女はえび茶の三角ふんどしが、いちばん気に入ったようですので進呈したのですが、代わりに、うす緑のふんどし型ビキニを貰いました。

——ベネズエラ、

パナマのふんどし——

日本人に対して愛想のよいメキシコに滞在している間に、片言ながら、スペイン語会話をおぼえましたので、ちょっと心細かったのですが、ひとりで、ベネズエラのカラカスへ飛び、中米をとり石づたいにメキシコへ戻り、帰国しました。

ベネズエラでは極彩色の前だれふんどしを締めたインディオの女、パナマでは赤ふんどしのインディオの男の絵はがきや、スライドを買いあさりました。けれども、限られた時間とお金では、山奥のふんどし族をたずねて行くことはできませんでした。

又、お金をためて、腰のまわりの色香のあせぬ内に、こんどは本格的な世界ふんどしハントに行きたいと思えます。その時は前以て誌上で呼びかけますから、越智かおりさん、ぜひ御一緒にね。

——（おわり）——





晴 着 奇 譚

## 新きものの着付教室

牧 高 志 (文と画)

テレビを御覧の皆さん、今晚は…。司会の一笑亭佳楽で御座います。

実は今週から毎土曜日深夜の午前2時から三十分乃至一時間にわたって、異風きもの着付教室と申しますか、アブノーマル教養番組だともいわれそうな、お好み番組を放映することになりました。

予告篇を一寸御覧になりましたもお判り頂けると思いますが、従来の講義調番組と違って、説明しながら御覧になっている皆さんとご一緒に実演出来るように終始、仕組んであ

る処が味噌なのであります。

放映時間につきましては午後茶の間時刻をと強く希望された団地の奥様達も多数おられたかに承りましたが、何分にも成年映画に類似する場面が多く、従いまして止むを得ず深夜放映となった次第でございます。

それでは私同様、毎週ご出席ご指導を賜わる講師の京ノ井町子先生を、ご紹介申し上げます。

先生……今晚は……と申しましたが、も早や草木も眠る深夜なのですが、初めての試み

なので、寝ぼけてトンチンカンなことを申し上げるかも知れませんが、よろしくお願い致して置きます。

『奇なことを申し上げますが、先生は年中、和装で、このような胸高帯なのですか』

『いいえ、そんな事はございません。ただ主人が無性に好みますのでお相手する時は専ら盛装着で、ふだんはズブの素人の癖に、粋筋な恰好で、くつろいでおります。特別この番組に、あやかっただ訳ではございません』

『それでは早速、授業ということに移らせて

頂きますが、最初はどのような処から始めた  
らよろしいか、モデルさんも三人程、次室で  
それぞれ違ったコスチュームで待機しておる  
次第です。まず盛装から参りましょうか、そ  
れとも次は長襦袢一枚、最後は肌襦袢にお腰  
一枚と、三通りのタイプで順々に、ご指導願  
えれば、大変結構だと思いますが……」

「そうですね。矢張り、男の方が好まれるの  
は、何もつけない素裸のヌードから、お腰、  
肌襦袢、長襦袢、お着物、帯というオーソド  
ックスな順序は、一部の女装愛好者のグルー  
プでは喜ばれるでしょうが、大部分の殿方は  
その逆でございまして、そう申しては大変失  
礼ですが、その道の大家、団鬼六先生の御本  
を拝見致しますと、洋装和装ともに着装位か  
らベルトや帯を解き、最後はストッキングや  
足袋まで脱がせて、生まれたままの一系まと  
わぬ素裸にして、待望の縄をかけるという羞  
恥コースを、必ず採られておるようござい  
ます。」

ですから、この講座の方も、盛装の晴着姿  
から順々に脱いで頂いて、最後は肌襦袢にお  
腰一枚という処で終わらせて、どうしてもお  
腰や足袋を剥ぎ取ってしまったければ気が済  
まぬ……と仰言る方は、思い切って洋画のデ

ッサン科にでも、お入りになって、更に、ご  
修業なさったら如何かと存じます。

大変、失礼なことを申し上げました。それ  
では大方のマニヤ好み……と申しましたが、  
或は極く一部のきものの愛好者を対象として  
の、多分に私好みになりそうな処から、ご説  
明して参りましょう」

「というように訳で、トップバッターは御覧  
の通りブルーと申しますか、青く澄んだ空色  
の紋どんす地に、霞取りの紋りと濃厚な牡丹  
に、さくらの花を散らした、中振袖の素敵な  
モデルさんに、ご登場して頂きましょう。ど  
うぞ真ん中に出て、正面を、お向きになっ  
て下さい。」

如何ですか？ 講師の先生を、さし置いて  
これこそ全くの素人の私が、あれこれいうの  
も場違いもんでしょうが、お正月の年始参り  
か婚礼、さては女子大謝恩会という処の、先  
ずは豪華絢爛なお召物のようにお見受けしま  
すが、一寸うしろを向いて下さい。黒地に金  
糸銀糸亀甲華紋の袋帯を、このように胸高に  
ふくら雀結びに背負い上げ——正直な処、こ  
のお嬢さん、余りの苦しさに声にならぬ悲鳴  
を、さい前から、ひっきりなしに挙げていら  
っしゃいますが、これは先生、もうこれだけ

で男女ともに、マニヤの方は満足されるんじ  
やないですか？」

「一寸これだけ拝見して満足されるのでした  
ら、天下泰平物なんですけど、勿論、そのた  
めには着付の際、前以て幾分標準より細目の  
腰紐を身体に喰い込むように一本一本、きつ  
く締めて置くことが大切です。京の舞妓さん  
が本番で、だらり帯を男衆に締めて貰う時に  
は、胸から上半分が、ちぎれて飛んで行くよ  
うな気がすると申します。それ程きつく締め  
ないと帯本来の妙味は産まれないものなので  
す。如何ですか？ お苦しいですか？」

「いいえ、ちっとも……とモデルさんは仰言  
っていますが、さて、この寸分も、すき間の  
ないピッタリと肉体の線もあらわにまといつ  
いた、中振袖のお嬢さんを、どのようにした  
ら更に、もっともマニヤ好みになるか……  
：新着付法は、いよいよ、これから始まりま  
す」

「女の私が申し上げるのも変ですが、団鬼六  
先生のお言葉を拝借すると、およそ羞恥なる  
ものは、女性にとって不可欠のものであり、  
女性の肌に縄をからませようとするマニヤは  
何よりも被虐者の羞恥を、その大腦において  
性的魅力として受け取ろうとしている。着衣



を略奪される羞恥、縄をかけられる羞恥、凝視される羞恥——マニヤは女性の本能であり精神的なアクセサリーでもある、羞恥の一挙手一投足に好奇の目を光らせ、耽美的な陶醉に浸るのである云々とあります。

これが、仰言る通り上流社会の貴婦人や深窓に育った令嬢であればある程、嗜虐性が倍増して文字通り落花無残となる訳です。

そう成りますかどうか、私にも只今の処、自信は全くございませんが、このような第一装の晴着——つまり、本振袖ないし中振袖を召して、ふくら雀結びで帯を締めた場合、帯揚げを高々に巾広く飾りつけた正面からの姿態を、より美しく表現するためには、折角締めあげた帯揚げの真上から、結果的には、胸部一杯ということになりますけど、そこに常例的な縄をかけるのはこの場合、よくありません。

寧ろ、胸部にかける二巻きないし三巻きの縄をやめて左右の二の腕、つまり肩と肘との間の比較的、肉の柔らかい処に三巻き、四巻きという風に、ぐるぐる巻きに縛ってぎゅっと締めあげます。勿論、両手は後ろ手にして手首のところは、それぞれ単独に縛った縄とを結び合わせ、それを左右の二の腕を縛った

縄と、更にしっかりと結んでしまします。こう致しますと、この胸の襟から帯揚げ、帯、帯締めにかけての上半身が一見、ぐっと前へセリ出して来るように突き出て参ります。

これを更に強調するために、もう一本の縄で丁度、下腹部のところ……膝小僧より上の方にありますが、そこを強くギュッと縛ります。そう致しますと、腹部の線が半円形を描いて、実に綺麗に出て参ります。お助平な殿方なら、

『さては、妊娠みどもだな……』なんて悪口をたたかれるかも知れません。膝小僧より下の部分をお縛りになりますと、一寸歩行に難渋致しますが、逃げ出さないように安直に床柱などに縛って置く時には手頃で結構、役立ちましよう。

先日もある処で、新婚早々とお見受けする若いお二人があたりには人気がないのを幸いに境内の縁を背景に白砂の上に中振袖の彼女を立たせ、偶然にも二の腕縛りの下腹部縛りを演やっておられました。あっちを向け、こっちを向け、時には思い切り背そって見ろ……などといわれるのを易易諾々ときいて、彼女の方大胆に白昼、命令通りのポーズを採っておられました。私はその時、ああ、お着物な

らではの感じを深く受けました。良人だけのもの、そして、この残酷さの中に、一きわ映えてこそ、本当のお着物の美しさというものが存在するのだと思いました。

勿論、このような縄のかけ方は、専ら苦痛を強いる一部のマニヤの方には、生温なまぬるいかも知れません。

ですから、このままでは、見たところ如何にも孤独派的だと申し上げても嘘ではないのですが、この孤独派的と称するモノトーンのお着物から下に色々と召しておられる長襦袢とか蹴出し、お腰といったものが、少しでもチラチラとのぞいて参りますと、忽ち多採色的なものとなってしまいます。

実は和服の美とは一面、それを潜在的に狙っているのです』

『ハハーン、成程、左様ですか。部屋の中は兎も角、外の街路上で裾が乱れたりするのはひどく多色彩的ですからね。想像力をたくましゅうさせる元凶……といった言葉が下品になります。もともと着物というものは何かにつけて、乱れるのを前以て予想した上での着付なんですね。裏を返せば、そういう着付に応じられるような心構えが常日頃、必要だということになりますね。ご苦勞様なこ

とです。

視聴者の皆さん、如何ですか。愛する彼女を、こうも緊縛したものの、更にもっと色気を添えるためには、どうすればよいか……なんてことを次に伺って見ましょう。でも……先生。当の女性の方は、さまで大騒ぎしないのに、われわれ男性側が文句なしに、はたでワイのワイのと騒ぎ立てるのは、この……エッチなんて、すぐさま怒られそうなオッパイなんで……。上品にいつでも乳房、これが表面に出ないことには第一、承知しない。背丈の問題を離れて、この乳房の盛り上がり方は明治大正時代のヌード・モデル写真でも相当強調されていたようですね。

まして物資豊かな戦後の今日、背丈の伸び以上に乳房の魅力は、やっぱり最高ではないでしょうか」

『確かに仰言る通りだと思います。全然ないのより、あった方がよい。ただ、あるというより、こんもりと前方に盛り上がった方がよい……というのは当然で、で、この場合、女性に屈辱を強つ、その目的を達成するには何といっても正攻法の緊縛を行なうより外に方法は御座いません。』

つまり、両乳房の上部と思われるところを

二巻きないし三巻き、ぐるぐる巻きに縛って縄目が見えない位に締めあげ、次に別の縄で帯揚げの、すぐ上か、または、帯揚げにかかってもかまわず触ってみて、両乳房の下部と思われるところを強く締めあげます。これは思ったより相当きつく緊縛しませんと、かくれた乳房が盛り上がって来ませんから、男性の方に手伝って頂いて、乳房がち切れて飛んで行く位に致します。それ程、和服の場合は肌襦袢や長襦袢だのという下着が案外、邪魔をするのです」

『成る程こうなると……惨めなものです。ただと素晴らしい。この和服から乳房の存在を誇示するというか、相手方に認識して貰うためには、このような二段構えの縛り方がどうしても必要なんですね。』

今これを従来のように、いい加減に、しかも一段式に縄をかけたらどうなりますか？」

『不用意に縄目を受けた女性側の方が、ひどくショックでしょうね。例えば見えない和服の中で丁度、乳房の真ん中にでも縄目を受けて御覧なさい。折半された乳房の痛さは、かくしても顔の表情に、たちまち出て参ります間接的な責め折檻でしょうか』

『そうしますと、先生、話は飛躍しますが、

仮に結婚式のご披露宴で、色直しとか何かに花嫁が出て参ります時、例の二段構えの両乳房突出型の恰好で現われたとしたら、華やかな中に、惨めさと壮観さが混在して、列席者一同、興奮の坩堝の裡に嘆息を挙げるんじゃないでしょうか』

『残念なことに、そんな場面につかったところが御座いませんで、何とも申し上げられませんが、若しそんなことが許されるとしたら、二段式緊縛もさることながら、盛装中の盛装なるが故に、花嫁さんの後手縛りは文字通り一面で披露する意味で、この場合はどうしても高手小手式に縛りあげなければなりませんね。』

お話は一寸、横道にそれますが昔、花嫁が新郎の家に興入れする際、裾をからげて青竹や敷居を高々と跨いで入ったという故事に倣った訳でもないでしょうが、ある僻村で妙な婚礼を見たことが御座います。

三々九度の盃が済みますと、座は一転してご披露の酒宴となるのですが、角かくし姿の花嫁は仲人さんに手をひかれて、いったん姿を消します。田舎の癖にと仰言るでしょうがここでも所謂、色直しという行事が行なわれておって、やがて目も覚めるような豪華な花



嫁さんが静々と再現するのですが、ただ真新しい縄——といっても毛ば立った真縄ではありませんが、簡単に後ろ手に縛られて、その縄尻は新郎が持つて、そろって金屏風の前に坐ります。

この意味は、お嫁入りしたなら、徹頭徹尾良人のいわれるままになって、妻としての勤めを果たしますという従順さを表わすと同時に、良人のS的に対し終生、M的にお仕え致しますという意味も、兼ね備えているものと思われまゝ。

ですから、高膳のご馳走も全部、新郎が両手を縛られた花嫁の口へ運んで食べさせるのです。

酒の席が次第に熱狂して参りますと、無遠慮な招待客が花嫁に、しなだれかかって裾を乱し、火のような緋色の長襦袢がもろに出たりすると、すかさず裾を覆ってやる新郎、またそれを愛情のしるしとばかり、今度は花嫁の見ている前で花婿を素裸にしようとしたり……数々の狼藉を演じるのですが、夜明け近くになって、やっと新郎新婦、待望のお床入りとなります。

実はこの場面が、続いてお話し申し上げる着付教室の長襦袢緊縛法と偶然にも、ぴった

りなんですけど、今は半分位は帰った居残りの招待客と、親戚の有志のいる前で、花嫁は仲人さんの手で着物を脱がされます。緋の長襦袢一枚になると、婿側と嫁側の血縁の薄い人が各一名選ばれて、花嫁の両手を後ろに回し、襖を終わった真新しい白麻縄で、後ろ手に縛りあげます。

それから声を挙げないように猿轡を噛ませるのですが、あとで伺った処では、この猿轡は、ただの猿轡ではなかったようで、少々グロなんですから、まず花嫁の娘としての最終月経の泌み込んだ布を口の中に押し込め、その上を花婿さんの童貞最後の尿水の泌み込んだ褲で猿轡を噛ますんだそうで……。

やがて後ろ手に縛られた花嫁は、二人の付添人に縄尻を取られて夫婦契りの間へと連れて行かれ、一つ布団の片側へ仰向けに寝かされます。夫婦固めの盃が寝たっ切りの花嫁と交わされ、付添人は静かに、部屋から退去していきます。

以上が、やや変則的な、見方に依っては脚色過剰な結婚式の模様なんですけど、これまた一つ残念なことに、場処柄、女の縛り方が、ゆる過ぎるぐらい、ゆるいということですよ。

ですから、お話を元に戻して、胸高の帯を結んだ晴着姿を緊縛するのだしたら、花嫁であらうとなかろうと、背面は到底、縄目からのがれられないというような両手首の縛り方肩から胸にかけて縛った縄は上膊部から、くの字形に彎曲するように……つまり第三者が観た場合、こんなに縛られちゃ、もうせつなく、どうすることも出来ない。先方のいうなりになるより、外に致し方なしという観念を即座に抱かせるような縛り方であって欲しいと思います。

一寸申し遅れましたが、さいぜんから胸高帯などと、たびたび申し上げましたけど、本当の胸高帯は昭和の初め頃のを最高として次第に下がり、普断結んでおられるものより幾分、高めというのが最近の胸高帯なので御座います。ですから、大正末期から昭和の初期に、深窓の令嬢が、侵入した悪漢に後ろ手に縛られて拐わかされて行く場面なんかを観ますと、二段式どころか、帯全体の上を縄がぐるぐる空転しているかのように見えて、胸のふくらみ、乳房のふくらみが全く消滅しております。その意味から申せば、ほどほど程程に胸上を上りつめた現代の胸高帯は、昔にくらべて縛り甲斐があると申してもよろしいでしょ

## 読者ギャラリー『仕置蛇』岡 たかし



う』

『どうもお話が興を呼んで色々と飛躍するようですが、その胸天井を突く昭和初期の胸高帯を、さらに、その上から縄をかけるとしたら、そのこと事体二乗という形となって、計算的にはSMともに倍増しやしないでしょうか?』

『本来なら、そうなるのが自然なのですが、縄目のない胸高帯の松竹の女優さんのプロマ

イドは当時、売れるが帯と縄目がミックスしたものが結構売れ残ったところを見ると、やはり第三者の大衆の選ぶ目は確かなんでしょねえ』

『有難う御座いました。どうも先生は着付もさることながら、仲々あの方面もお詳しくてベテランでいらっしゃいます。』

さて、お講義を進めて参りまして次に、ぐっと色っぽくなりました長襦袢一枚のあで姿

を、さらにもっとSM的に盛り上げるには、どのようなしたらよいか、など伺って見るとに致しましょう。

モデルさん、ご登場願います。いらっしゃいます。どうも、こう目の前に本絹も本絹、重目正絹の……これは訪問着か小振袖用の緋の長襦袢というのでしょうか、それをお召しになって、乙に紅白の昔風な伊達巻で、はさみ巻……さしあたり、四畳半向に誠にうってつけという処で御座います。それに同じ緋縮緬でも振袖用なら、お嬢さん向、袖丈がこうきまると、花柳界では、まずお姐さん間違いないです。てな具合になると、髪も高島田髷を結わなければなりませんね。これは冗談ですが……さて、先生、こうなると、一体どういう風になるのでしょうか』

『そうですね、殿方の色々の目的に依ってそれぞれ持味が違って来るんですけど、女の帯を解き、着物を脱がせて、無理矢理に赤い長襦袢一枚にしたとすれば、先ず女の自由を奪わなければなりませんね。そのためには、内内のお二人のプレイでしたら比較的、柔らかい縄紐で長襦袢の上から胸を二廻り乳房の下にかけて、締めあげ、両手を後ろ手に縛りあげます。』



天井に吊るし上げたり、幕末のような処刑を再現するんでしたら、晴着の場合と同様に縄目を心持ち多くし、菱形に縛ったりして、いかにも囚人らしく見せかける必要があるでしょう。

元来、女の長襦袢は、それ自体が華やかなものなので、繻目は、むしろ出来るだけ少な目にするのがよいのです。もっとも石川五衛門が長襦袢を着たら、ぐるぐる巻きの多条縛りでないと、すぐ逃げられちゃいますから、こんな場合は例外です。

この長襦袢姿の後ろ手縛りは、やはりアクセサリーとして豆絞りの猿轡がないと、錦上花を添えません。島田の髷が少し崩れ、赤い長襦袢一枚で猿轡され、両手を後ろ手にして床柱に縛りつけられている芸妓……仮に温泉旅館の離れは、おそらく、せせらぎの音も聴こえない位、静かでしょうから、その前で旦那衆がチビリチビリと卓をたたきながら、お酒を召し上がっておられます。どうだネ、もうすっかり観念したかネ。

今晚は、どうでもわしの女になって貰わん事にゃ困る。身請けの金も既に払ってある。それをただ部屋を間違えましたと逃<sup>す</sup>らかろうとしたって、そうは問屋は卸さないよ。人目

があるから折檻しようとは思わぬ。思わぬ代わりに、声にならない声を、たんと聴いて思いつき泣かせたいんだよ。判ったな？

余計なことですが、遠端にブルブル慄えてこれで引き下がるようでは一人前の男ではありません。女がうなずけば縄を解いて、長襦袢の上から思い切り抱いてやるが、若し女が首を左右に振って、いうことを聴かぬなら、九十九パーセントは後ろ手に縛ったまま、床の上に仰向けに倒して、初期の目的を達成しなければなりません。

長襦袢は一面色で男性を興奮させると申しますが、やはり上に着るおきものと同様、だらしない着付は如何にも品が下りますので、昔流でしたら、お端折りの出来るような幾分長目のものが、伊達巻で結んだ時、お色気が一層出て参ります。

ですから派手な長襦袢であればある程、縄目を少なくして、この際、色で勝負するように、真白な銀世界の雪の上に長襦袢姿の女を一度、転がせて御覧なさい。

遊女浦里を雪中に折檻した女郎屋の主人はちゃんとこの素質を天性、心得て芝居史上に残る、あの名場面をリハーサルしたに違いありません』

『いやどうも……美学論の真髄にまで触れるような学識振り、恐れ入りました。そう致しますと最後の上が通常、真白で下が赤かピンクの肌襦袢にお腰、ないしは、その上に同色系統の蹴出しを巻いた一見、着た切り雀のようなコスチュームは、一体どうなるでしょうか？ モデルさんも、このように少々慄えていらっしますが……』

『そうですね。この場合は何といっても着衣が最低ですから、上は兎も角、下部半分は、どうしても肉体の線を強調しなければなりませんね。』

日本画家の伊東深雪そのほか二、三の方々には、例えば、こんな姿で鏡台の前で、お化粧しているとしたら、坐った女のお腹からお尻、ひざ小僧にかけて、お腰の皺、つまり自然発生の皺を必ずといってよい位数本の線で強調します。これは長襦袢一枚の場合でも同じことなんです。お腰の場合はこれが最後の線なので、いやでも色気に直結する訳なんです。

ですから最低の着衣でSMの程度を高めようとするにはむやみやたらに縄目の数を多くしたり変則的な縛り方をするのが能ではありません。

寧ろ単純な後ろ手縛りで、胸にせいぜい二巻き位な縄目にとどめておいて、ここで思い切って女を水の中に漬けるんです。そして充分、水を吸った処で引き上げ、立ったままでもよいし、坐ったままでもよく、そのまま柱か樹に縛りつけて御覧なさい。

びったりと肉体の線が出て、何ともいわれぬお色気が惨み出て参ります」

「左様ですか、それではモデルさん、誠に御気の毒なんです、一寸コマージュをやってる間に別室にいらっしゃって、特設の湯槽に、ざんぷりこ、と入って頂きます。勿論結果論ばかりでなく、湯槽に入る処までカメラに追跡して貰うことに致します。では、ここで済みませんが一寸、両手を後ろ手に縛らせて下さい。あとで、どうせ水で締まることでしょうから、余り強くは縛りません。が、この程度は一つ、我慢して下さいよ。さア出来ました。コマージュをやってる間に大急ぎで別室へ参りましょう。それでも一寸、間がありますネ。どうですか。如何ですか。とんだことを引き受けましたネ。モデル稼業って土台、楽じゃありませんネ。いえ、そうでもないって……それ、本当ですか。こんな目に逢うのは、好きですか。でも愛する

男性から縛られることって万更、嫌いじゃない。すると貴女がた、Mなんですネ。結構ですよ。大いに結構です。都はるみじゃないがそうなくっちゃ女じゃありません。さア水槽が現われました。

カメラが三台、ロングでもショートでも御座れテツと目を光らせています。

ハイ、モデルさん、水の中へ入ります。ぐっと身体を水の中へ思い切り沈めて下さい。そうです、二秒、五秒、一分、あと三分程……結構でした。モデルさんの身体を引き上げて下さい。いやあ……これはドブ鼠見たいになっちゃった。御免なさい。あたし美髪美女のモデルさんを、あろうことか水風呂みたいな処にザンブリコと漬けて、本当に申し訳ありませんネ。これも視聴率を高める非常手段だと思って、平にご勘弁願います。それでは、お身柄はこのまま先生にお渡しします。どうぞよろしく」

「とんだ実演で、ご災難でしたね。でも満更でもないでしょう？ 大勢さんの観ていらっしゃる処で、あられもない恰好で殆ど裸体にも等しい恥かしさ……実はこれが男女間の愛情につながる大事なポイントなのです。

立ったままでお話するのも何んですから、

お気の毒ですけど、もう一度、この柱に縛りつけられた処で釈迦に説法と参りましょう。

御覧のように薄い肌襦袢で、これがガーゼのようなものになりますと、殆ど素裸同様に乳房の形もそのまま表面に出て参ります。一方縛った縄の方は、逆に何パーセントかは締まって来ますから、一見して、これは酷い……ということになります。さて問題は、これから下の下半身でありまして、カラーで御覧になりますように、生地がデシンなどの化繊物であろうと、メリンス（モスリン）などのウール系統のものであろうと、このお腹から股にかけて、背面ですと、このお尻から矢張り股にかけて、キザな文学調で申し上げますと一触即発、匂いかつこばれ、落ちんばかりの風情……と……相成ります。

団鬼六先生ですと、例によって先を急ぐ関係もあって、濡れてビショビショになったお腰を、すぐさま脱ってしまわれるのですが、これは極力急がず鈍行で参りたいものです」

「いやあ、驚きましたネ。ふるいつきたい程の下腹部の線と……江ノ島の弁天さまに早速、怒られそうですが、子供の頃、神社や寺の滝壺のあたりで、こんな恰好をよく見かけたことを覚えて居ります。もっとも、そ



ちらの方は白一色の信心講から進んで挺身したものでしょうから、たとえ若い娘さんであっても、場所柄お色気なんてものがあっちゃ困りますけど、こちらはそうはいかない……何故って、初めから、お色気の裡に残酷美を盛り込もうというのだから、仮に滝壺の中へ……何も滝壺ばかりじゃない海中でもよい。

大正の初め頃、一夜成金の百万長者達で、粹興にも、島田鬻の芸者衆を赤いお腰一つの裸にして、海の中に追いやり無理矢理、泳がせたという武勇？ 伝は何も鎖夏法という慈悲心からではなく、端折って申せば、札に物をい寄せた助平心に外ならない……となると、責め折檻もさることながら、このコスチュームは、先生、日本にきものがある以上、この最低のコスチュームは是非とも残して置きたいものです」

『まあそれ程、興奮なさらずとも、精神面でも、つまりこの一枚のお腰巻の下には何もつけていない、はいておらないという警戒心が即、羞恥心に結びついて、いわず語らず、自然と上品なお色気をもし出すのです。ですから下腹部の線が、くっきりと見えている、ほんの僅かな間が鑑賞に値する時間で、乾いてしまつては半分以下になってしまいます。』

大正の終わり頃でしたか、関西のさる処で、お女郎屋が焼けたことがありました。丁度、寝入り端だったので、火事だという叫び声で起こされ、すりばんの半鐘で慌てふためいて飛び出す処を、消防の水で散々にズブ濡れとなり、客と寝た真赤な腰巻一枚のあられもない姿が更に拍車をかけるように、肉体の線丸出しの生弁天……サーチライトに浮き出した本人達もさることながら、放水した消防隊の連中も顔を赤らめ、タジタジの態であったという話でしたが、さすがはベテランの新聞社のカメラマン達も、撮ったスナップ写真は、ことごとく割愛したそうです。

こんなことを申し上げているうちに、TVスタジオ内の熱気で、折角のお腰も乾いて来ましたね。SM的サービスの限界としては、この時点に於いて、お腰をパリりと足下に落とすまでであって、剥ぎ取ったお腰から離れて裸のまま移動したりしますと、別の世界で意義付けされることになります。ですから、裸の世界でも少しばかりの衣類が瞥見しているうちは、それが腰紐や帯板の小間物であっても、お着物の世界と申してもよろしいでしょう。』

定義がましくお互い窮屈になって来ましたが要するに素っ裸になる一步手前のところで、演っている本人を含めて、どのようなコスチュームを採ろうとも、もっとも残酷、かつ、お色気のある緊縛法は、どう在るべきか……ということの中核としたものを、この着物の世界から求める事が本来の宿題なのでした。

余計なことですが、先生、この甚だ以てクラシックな和装の世界で、まだ新規開拓してゆける分野があるでしょうか。』

『具体的にこうだとは申し上げられませんが余地はあると思います。江戸川乱歩という探偵推理作家は、わざと階段下の真暗な部屋を選び、ローソク一本を灯してペンを走らせた」と申します。雨のしとしとと降る晩、数多くの女の体臭を吸った古着屋出ものの中古の着物や長襦袢を、そっと払って御覧なさい。襟や裾の汚れから、あなたはそれが直接、責め折檻に繋がろうと繋がるまいと、果てしない空想に酔いしれることでしょう。

性学者として有名だった高田義一郎博士の言葉を引用すると、嗅覚にプラス目も鮮かな視覚という性媒介作用に依って、Abnormal Sexual desire は堂々確固不動なものになつてしまふとあります。ただし、塩が効き過

ぎると固まるべきアイスクリームも固まらず  
もとの黙阿弥同然となりましようから、然る  
べきムードが充分、かもし出された処で、あ  
せらずゆつくりと我が道<sup>オンマイウェイ</sup>を歩いて下さい。き  
っと何かが発見されます。そうしたもののなん  
ですよ、お着物の世界というところは……」  
『どうも判ったような判らないようなお話を  
中絶しまして大変、失礼致しましたが、着付  
教室の序幕篇は一応これ位にしまして、次回  
はどんな処をお示し下さるのでしょうか?』

## 新発足 懸賞△告白、手記、体験▽原稿募集

### ☆賞金☆

|    |       |     |
|----|-------|-----|
| 優作 | 一篇につき | 参万円 |
| 秀作 | 一篇につき | 五千元 |
| 佳作 | 一篇につき | 三千元 |

### ☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここ  
に新しく、「告白、手記、体験」の原稿を  
広く懸賞募集いたします。  
一、従来、「告白」の分野で文趣味豊かな  
告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字  
塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告  
白をもって誌面を飾る考えであります。  
一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

『次回と申しましても、色々と制約が多分ご  
ざいましょうから、一方的に、ここで確約は  
出来ませんが、もし放映するとしたら、心理  
的なものを座談会式と実演を併用して演<sup>や</sup>って  
見たいと思っております。例えばオーソドッ  
クスな時代層に身を存在させて所作事一切、  
現代調と完全分離の上、伝統の和服を着用し  
スタジオもまた、思い切ってそのような造り  
にセット替えて、つまり着物が持っている  
多分に幻想的な分野を、ふんだんに点滅して

## 手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表 したいという熱意のこもった原稿を求めま す。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうま  
さは求めませんから、実際に体験されたも  
の、事実の裏付のあるものが大切だと思ひ  
ます。従って必ず自作の未発表のものに限  
ります。  
一、枚数に制限はありませんが、一回の掲  
載分としては、三十枚乃至五十枚が適当で  
す。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さ  
い。締切日は毎月十日。翌月号より発表。  
一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送り  
いたします。応募原稿は読者原稿と区別す  
るため「告白懸賞」とお書き下さい。

改めてSMの世界を眼前に現出させようとす  
る意気込みなのですが、そのためには、これ  
にマッチするような女性のモデルさんを早目  
に探すか、または養成しなければなりません  
ね。おいッ、撮影だ。ハイ、パチリで事足れ  
りでは心理的に、もう落第物です。ですから  
最初から縄が平気な、モデルさんも困ります  
が、こうですかと明治大正頃の女性の一番恥  
かしい下着をズバズバ開陳されても困るので  
す。後ろ手に縛られるモデル嬢が時々ニタリ  
と笑ったりするので大いに閉口した、とは団  
鬼六先生<sup>みずか</sup>自らの言葉なんですけど、これで  
は、スタジオオマンが、がっかりするのも当た  
り前といわざるを得ませんね。羞恥を忘却し  
ては、この世界は絶対に成り立ちません。ど  
うぞこの点、お忘れなく」

『ご忠告の終わった処で、異色きもの着付教  
室、開幕篇を終わりたいと思います。TVを  
御覧になった皆さん、眠い目を大分シヨボッ  
かせていらっしやいますか如何でございまし  
たでしょうか? 夜が明ければ平常な社会で  
またご活躍下さい。夜の帳<sup>とばり</sup>が下りれば、そこ  
はまた、そこで、よしなに遊ぼうではありません  
せんか。では全国のきものファンの皆さん、  
御機嫌よろしゅう。さようなら……』



## □ 水田真紀子習作シリーズ □

五月さつきの頃ころの物語ものがたり

水田真紀子



カット・須坂 旭

あら、おたくも、こんなことがお好き？  
ンじゃあ、おもしろい話、してあげるわ。  
きつと、お気に召すと思うの。ウフフ。

そうねエ、丁度、今ごろ、青葉のきれいな  
頃だったわ。アカシヤの並木の、染まるよう  
な緑の季節だったのを覚えてるの。そのお店  
につとめてた頃は、この銀座に、まだ電車が

走ってたわ。

ちようどその日、あたしは、お店が終わっ  
て二階の更衣室から出て、そう、そのお店は  
二階に、あたしたちの更衣室があつて、下が  
お店になつてたの。お店は片側が、ずうっと  
カウンターになつて、せまいけど中央にフ  
ロアがあつて反対側にボックス席が並んでた

のね。

そういうお店を想像してよ。女の子？ そ  
うねえ、早番や遅番おそばんがあつて、それにしょっ  
ちゅう交替があつたから、正確な数は分かん  
ないけど十人くらいいたかな？ でも割りと  
綺麗なお店だったわ。そのマダムってのが  
ずいぶん、お金を持ててね。きつと、いい  
パトロンがいたのよ。

でも、そのパトロンってのは恐らく年寄  
りで、マダムは生活こそ充たされてたようだ  
けど、肉体的には色々、慾求不満があつたよ  
うだと思ふわ。それに、そのマダムってのが  
ずいぶん、きつい人でね。それに、若い子が  
好きなのよ。それだからバーテンやボーイは  
みんなハンサムばかり揃えてたわ。

え？ マダムの話なんか、どうでもいいっ  
て？ でもね、このマダムが関係してくるの  
よ。まあ少し、おあけになつたら？ あと水  
割りでも持ってきてきましょうか？

どこから脱線しちゃったんだっけ？ あ、  
そう五月ね。あたしが帰ろうと階下へ降りて  
くると、カウンターの中にマダムがいて、そ  
の前にヨウコが神妙にかしまっているじゃ  
ない。ヨウコ？ あ、それは同じ仲間のホス  
テスなのよ。何でも昼間は女子大に通つて

夜、アルバイトでつとめてた子なのよ。

綺麗な子だったわ。ちょうどホラ、吉永小百合って女優さんがいるでしょ。あの人に、ちょっと似ててね、ポチャポチャツとして、可愛い子だったわ。あたしが、好きだった子なの。さっき、もう帰ったと思ってたのに、そこにいたので、

「ヨウコ、帰らない？」

って、あたし声をかけたの。いつもなら朗らかに答える子なのに、じっとしてるのよ。

そのとき、マダムが

「あなたが最後なの？」

って聞くの。だから、もうあとには誰もいませんって言うと、

「ちょっと手伝ってよ」

って言うのね。何だろうと思ってるマダムが手招きするから、カウンターの前まで行くと、あたしに、そっと握らせるじゃない。

見ると一万円札なのよ。

「えッ？」

あたしは驚いてマダムの顔を見直したもののよ。一万円くれれば終電に遅れたっていいから、何だか知らないけど手伝うことにしちゃったわ。だけど、聞いてみて、また驚いちゃった。これからヨウコをいじめてって言う

のよ。いじめるって、どんなにって言うのと、裸にして折檻するっていうでしょう？

「まあ！」

改めてヨウコの顔を見直したわ。

「いいのよ。ヨウコも承知だから」

マダムは、あたしにウインクするの。

「いいの？ ヨウコ」

それでも一応は本人に確かめなくっちゃいけないよネ。ヨウコがいやなら、何とか言うわよ。それが、じつとうなだれてるだけでいやいかもしれないの。きつとマダムに、それ相当の報酬を握らされたんだと感づいたわ。

あたしだって、お金をもらって、こんな若い子を裸にできるってことは、いやじゃないもの。そりゃ女同志でも綺麗な肌を見るのはいいものよ。ましてヨウコの容姿は、あたしの好きなタイプ。ヨウコとなら、浮気してみてもいいなあって、かねがね思ってたくらいだもの。引き受けたわ。

「ヨウコ。じゃあ、脱いで——」

マダムが促すと、ヨウコは着ていたミニのワンピースの背に手を回して、ファスナーをはずし始めるの。本人が承知なら、あたしも遠慮することないから、後ろから手伝ってあげたわ。

その下のスリップの肩紐をとるときは、さすがにためらって羞かしそうだったけど、思いきってそれを落とすと、あとはブラジャーと純白のパンティだけになったわ。足には、パンティストッキングを着けてたわ。そのまゝ、羞かしそうに身をちぢめているのをマダムは、

「これで、手首を結わえて——」

と、あたしにタオルをさいたような布を渡すの。

「手首を前で合わせて結わえるのよ」

指図されて、あたしはヨウコの手首を縛ってやると、マダムは太いロープを出してきて手首にその一端を結ぶと、ヨウコの体を天井に吊るからって言い出すの。

あたし、人間の体があんなに重くなるとは思わなかったわ。二人してシャンデリアの環にロープを通して引っばったけど、汗をかいたくらいよ。ヨウコのつま先が床から離れるとき、ヨウコは初めて「アッ！」と小さな声を洩らしたわ。

ヨウコの体は吊られて棒のように伸びきって、ぶら下がってるの。ブラジャーとパンティだけの女体が、すっかり伸びきっちゃってると、身体の線が、とっても綺麗に見えるも



のね。細くくびれたウエストから、円い曲線がヒップの拡がりを書いて、とてもすてきだったわよ。スラリと伸びた長い足。ふくらはぎのピチピチした円さが形よく、つま先まで伸びてたわ。

ヨウコは、首をガククリ落として宙吊りにされたまま、思い出したように、つま先で床をまさぐるように体を動かせるの。でも届きやしないわ。その度にロープがゆれて、苦しげに体が宙に舞うのよ。さぞ手首が痛かったと思うわ。だって全身の重みをすべて預けているんですものね。

「きれいな体ね」

マダムも下から見とれてたわ。そのとき私は、以前に見た『肉体の門』って映画を思い出したの。そのことをマダムに言うと、

「そうね、あれと同じね。映画なら、これから鞭で、ぶつところね」

って、言うじゃない。

「えっ！ ヨウコを、ぶつんですか？」

聞きかえしたわ。アラごめんなさい。すっかりおつぎするの、忘れてたわ。折檻？ ええ、それからヨウコは、どんなにされたとお思いになる？

マダムがね、ヨウコの細腰るところを何の

気なしに撫ぜたのよ。そしたらヨウコが「あっ！」と言ってとびあがったの。それから思いついたのね。そう、くすぐられたのよ。だけど、くすぐられるってことは、たまらないものよ。

吊られ放しで、思いきり伸びきった素肌を撫ぜられてごらんないよ。痛くはないけどずいぶんひどい責めよ。腋の下なんか、あけっぴろげだもん。ウエストだって、いじり放題よ。

「あっ！ いや！ ゆるしてエ」

ヨウコは苦しそうに宙吊りのまま、身をくねらせて悶えぬくの。あたしがヨウコだって同じよ。とても辛抱できなかったと思うわでも人間って残酷なものね。こうして悶えてるヨウコに、あたし魅力を感じちゃって、ブラジャーまで外して責めたてたわ。ヨウコの苦しげな悲鳴にも酔っていたのね、キット。

ところがね、その時マダムがカウンターの床から何か持ちあげてこようとしてるのよ。

それが何だったとお思いになる？ その店のドアボーイの男の子じゃない。まだ十五、六の、中学を出たばかりの子で、そうね、ピーターって知ってるでしょ。あの子みたいに可愛い感じの子。あたしは名前を知らなかった

けど、まあピーターにして置くわ。

どうして、その男の子がカウンターの奥の床にいたのか不思議だったけど、連れ出されてきたのを見ると、グルグル巻きに縛られているのよ。

「あら、マダム？」

あたしは、びっくりして尋ねたの。

「この子ったら、ちっとも言うことをきかないの——」

マダムは、そう言うのよ。だけど、この言うことをきかないって言った意味は、そうじゃないのよ。マダムはこの男の子、ピーターを火遊びの道具に使うとしていたらしいのね。それが言うことをきかないもんだから、可愛さあまって憎さが百倍ってわけで、今日のことになったらしいの。

縛られたピーターは、ヨウコの吊られてる下へ連れてこられて、マダムはその子のバンドを外して、ぶち始めるじゃない。

「うーっ！」

ピーターは呻きながら、それでもヨウコの裸身に、まぶしように目をながしてるのよ。そりゃそうでしょ。女のあたしでも美しいと感じるヨウコの姿態に、男の子が感じないわけはないもの。恐らくこんな間近に若い女の

裸身をみるのは、きっと初めてだったのだらうと思うわ。

マダムは、自分の言うことをきかないからこのピーターを折檻してるんだけど、ピーターは、むしろ驚きのまなざしでヨウコの裸身に氣をとられてるらしいのよ。ぶたれて呻きながらヨウコにそそがれる視線に、マダムが氣がつかないはずはないと思ってたら、案の

定、

「ふん。そんなに若い娘がいいのかい」

鼻をならし始めた。あたり前だわよねエ。

これから、すごいことが始まるのよ。

さあ、一ぱいつがせて。

ピーターは、それから転がされたまま、ズボンが脱がされたの。バンドを外してあるんですもの、すぐ脱がされるわ。それに縛っちゃってるんですもの、抵抗も出

来ないもの。仰向けに寝かされて、ズボンをずり下げられてパンツまで下ろされたのよ。

「そんなにこの子がいいのなら、そのようにさせてやろうじゃない」

マダムは、赤くなりながらも今はもうぐったりとなっているヨウコの宙吊りの姿態にまぶしように目を細めている。ピーターに、なげつけるように言うと指先でいじり始めたのよ。

あたしまでジーンとしてきたわ。思わずヨウコの体にしがみついちちゃった。ヨウコは、と見たけど、彼女、すっかりグロッ

キーで目を伏せたままなの。

マダムの指先が器用にリズムカルに動くにつれて、だんだんたまらなくなってきたんでしょうね。さきほどまでぶたれる痛さに呻いてたのが、今度はそれと分かる呻きに変わってるのよ。だけど、これも責めだったのね。もう少しでつてところまでくると、マダムは指先の動きを止めちゃうの。ピーターは、せつなげに悶えるだけ。

幾度も、こすられては、捨てられちゃうのよ。ピーターは、その度に腰をくねらせて脂汗までかいてきたわ。その苦し気な表情をみていると、あたしは胸がどきどきしちゃって見せつけられてる、あたしの立場はどうなるのよ。ねえ、そうでしょう。あたしが自由にできるのはヨウコしかないもの。

あら、女のことならよく分かるわよ。ヨウコの剥き出しにされた乳房をもみ始めたの。柔らかい手ざわりの中に、コシコシした弾力のある、ふくらみ。まあ、つまみあげるように、もみ込んで行っちゃったわ。ヨウコは体をくねらせ始めたわ。たまらないように、たまらないように、もんでいるんですもの。

「ウーン」

ヨウコの声が洩れてきたわ。



『Sコレクション』刺 痛 覚 豪 城 二



ピーターはピーターで、マダムの玩具にされて、思う存分、もてあそばされてるの。もう真ッ赤に充血してるピーターなのよ。マダムの舌の先で動かされたり、指先で、こすり続けられては投げ出されたり、遂に

「マダム。もうどうにでもして——」

ピーターが、あえいで呻いてきたのを、

「じゃあ、あたしの言うこと聞くのね」

マダムは、じらしながら目をかがやかせて問いかけてるの。「うん」とピーターがうなずいたようだったわ。そこで始めてピーターは、この苦しみから脱けることができたの。

マダムは指先につばをつけてから、改まったようにピーターをしごいたわ。ギューッギューッと掌全体で握りこむようにこすられると、ピーターの縛られた体が、ぐうっと硬直して、

「あ、あ、あーっ！」

何とも言えない声をあげたわ。

マダムは、もうぐったりとなってるピーターに、

「あたしの言うこと、聞いてくれるのね」

もう、うれしそうなのよ。だけど、やっぱりピーターはグルグル巻きにされて転がされたまま。そして、こんどはあたしに、ヨウコ

を、もっと苛めてって言うの。

どうやらその時あたし感づいちゃったわ。

マダムは、このピーターと思いをとげたいと思っていたのにピーターは、どうやらヨウコを慕っていたようなのね。だから女の嫉妬がヨウコをこうしていじめるってことになったらしいわ。

ヨウコにお金をやって、裸にさせてその体をいじめるってことに、なったらしいのね。ヨウコこそ、いい災難よ。ピーターなんか相手にしやしないわよ。それなのに、いじめられるんだものね。

あら、グラスが空になってるわ。ごめんなさい。

それからヨウコは天井から下ろされて、改めてこんどは後ろ手に、くくり直されたわ。あたしがくくってやった。白いピチピチした腕を後ろへねじあげて手首を合わせて、細紐で、くくってやったわ。後ろ手にされてくくられてる姿って、みじめに見えるものよ。だって乳房も何も、かくせないもの。

天井から下ろすとヨウコは直ぐ腕をキュッとちぢめてブラジャーをはずされてる胸のふくらみをかくそうとしたの。手首は縛られても前で合わせていたら、腕をせばめてかく

すことがどうにかできるものよ。それを今度は後ろ手に縛られていては、どうしようもないわ。

裸の上半身をできるだけ前にかがめて見せまいとするのよ。体を前かがみにすると背が上を向いちゃうから、くくられてる箇所がよくみえるの。ヨウコの手首が交差させられて、そこを痛々しそうだったわ。それを見ると、あたし、どうしても、このヨウコも、さっきのピーターのように、せつない呻き声をあげさせたくなっちゃったわ。ヨウコって可愛くて、あたし好きだったのよ。いい機会だと思ったわ。

「マダム。ヨウコは、あたしに委せて——」

羞かしそうにうつむいているヨウコを抱きあげてサ。ホラ、カウンターの前にある背の高い、丸っこい回転椅子があるでしょう。お尻んところが、ちょっと乗っかるだけの、丸い椅子よね。あれにヨウコの体を仰向けにして寝かせたのよ。そりゃ小ちゃな椅子だもの、みんな乗りやしないわ。丁度、腰の裏側、そうウエストの、ぐうっと、くびれてる裏側のあたりを、その丸椅子にのせたのよ。体は全部、はみ出しちゃってるわよ。そし

たら、弓なりに反りかえるような恰好になるでしょ。そうしたのよ。上半身が、ぐうっと反って頭が逆さになったわ。手首はそのまま床にのびるわね。下半身も腰のところから、ぐうっと逆に反りかえって、足首が宙ぶらりんになるでしょ。その足首とところを揃えて別の紐で一つに合わせてくくっちゃったの。

そして腰かけの下で手首と足首を引きしぼって、一つに合わせるまでたぐりよせて、台になつて金属の柱に動けないように結んだのよ。どう？ 分かるでしょ。ヨウコの裸身は腰んところで弓のように後ろにまげられて思いきり反りかえったままで動けなくされてしまったの。

「う、うーっ！ く、くるしいわ」

ヨウコは、もがいてるようだったけど、もうこんななされて動けようもなかったわね。ひざをまげられて足首をしぼるように引っぱられてるんだから、ひざを合わせることも苦しいのね。ストッキングとパンティだけは着けてるって体の線はもう裸同然よねえ。そんな恰好にさせて縛ってあんのよ。どう？ すてきでしょ。

弓のように反りかえって思いつきり、のけぞって乳房もお腹のところも、まるでこれ見

よがしに突き出してるんだもの。ヨウコの細くくびれたウエストが、痛々しく後ろへ曲げられてたわ。

若い娘の肌の肉つきってのは、ほんとうにはちきれそうな円みや、乳房のところなんかほんとうにたまんないくらいだわ。若い女の子が羞かしいところをかくしも出来ず、晒してるんですもの。

手首と足首を重ねてゆわかれてるし、ちっちゃな丸椅子に、ちょこんと、のっかってるだけの身体ですもの。アクロバットの踊子のようにヨウコの裸体は曲げられちゃって、それが無残にゆわかれてるんだもの。女のあたしでも、これからどんなにでも好きなようにできるポーズなのよ。

若し、あなたが、こんななされて放って置かれたままのヨウコがいる部屋へ一人で入ってきたら、どうなさる？ あら、グラスがふるえてるわ。こうやって縛られた女を、思いつきり鞭でひっぱたいってやったら、さぞ、いい気持ちになるかも知れないって、あたし、ふと思ったりしたわ。きっとヨウコは、ヒイヒイ言っただけで痛がるでしょうね。

股を左右に拡げて悶えてたわ。スラリと伸びた太腿の、はちきれするような若い肢体が、

もがいてんのよ。パンティのゴムが太腿のつけ根の柔らかい肉にくいこんでたのが、反りかえらされたために、ちよっとずれて、赤い筋の輪までみられるのよ。

どう？ こんなポーズってすてきでしょ。あら、ウイスキーがこぼれるじゃないの。

頭をさかさにさせたままでヨウコは苦しう。あたしは、そんなにヨウコをさせたいって乳房をいじってやったわ。はりさけるように伸びきってるヨウコの乳房のふくらみを指さきで大きくつまみあげて置いて、片方の掌を丸く伏せて廻すように撫でてやったのよ。

「ウッ！ アアッ！」

ヨウコが、あごをそらせたわ。たまらないのよ、女って、そんなにされると。乳首が直ぐに固くなったわ。掌にコリコリふれてくるのよ。二つの乳房を交わる交わる撫でてやったわ。つまみあげといて撫でるんですもの。そして石のようになってる乳首を二本の指先でプリプリと、もんでやるの。

「う、ああっ！ むーっ！」

ヨウコの裸身は火のように燃えて、きゅうくつな姿勢にされてても、その苦しみどころじゃなくなってきたのよ。ヨウコは、この姿勢で動かせるのに頭とひざだけ。頭は、の



けぞって、ひざは、はりさけそうになってたわ。

「まあ、この子ったらー」

その時マダムの声がするじゃない。マダムだって面白そうに、あたしのすることを今まみてたのよ。それが急にどうしたのかしらと思って、あたし顔をあげたわ。ピーターがもがいてるの。グルグル巻きにされたまま、ぐったりとなっていたピーターが、気がついたのね。

ヨウコの身体は丁度、ピーターの転がされてる方に向けられてたけど、そのヨウコがこうして悶え始めてるんですもの。その度に、ひざがくねるのね。それをフロアに転がされて下から見上げるようになるんだから、きつとたまになくなったんだわ。

「マダム、お願い」

ピーターが哀願したわ。

若い女の一番、羞かしいところをヨウコは見せてるんですもの。ピーターだってやりきれないのは無理ないと思うわ。だけど納まらないのはマダムよ。さっき、どうやら自分のものにしたと思ったピーターが、もうヨウコを見て興奮してるんですもの。

「何よ。いやらしいったらありやしないわ」

マダムは、さもないまいましように、そんなピーターを眺めるばかり。それでもピーターは、

「お願いだから、さっきのように僕をして」

身をよじって悶えてるの。その時でもヨウコはずっと、あたしにお乳をいじられっ放しよ。ウンウン唸って悶えてたわ。だから今はもう不自由な腰さえくねらせて、せつない声を洩らしながら身をよじらせるのね。それを下から見上げてるんだから、ピーターも無理ないわ。

「ねえ、マダム。お願い」

グルグル巻きにされた身体をよじって、哀願してんのよ。ね、ちょっと、あたしにもピールのませてよ。

「ねえ、もうそれくらいいいわ」

あたし、マダムによばれたの。

「もうそれくらいでヨウコも仕上げしてやらないと身体に毒よ。パンティを脱がせておやりよ。そして、脱がせたパンティで、この子にさるぐつわしてやるわ。何しろ、この子ったら、うるさくって仕様がなから」

驚いちゃったわ。いえ、ヨウコを脱がすことは当然、あたしも考えてたわ。どうせヨウコは、まるはだかにしてやるつもりだったの

よ。だから、そのことじゃないの。あたしが驚いたのは脱がせたヨウコのパンティを、ピーターのさるぐつわに使うってことなのよ。

これはショックなアイデアだったわ。だって、女が今まで身に着けてたパンティで、男の口をふさぐとするんですもの。

あたしは、ヨウコの固くなってる乳首を指先で二、三度、ピンピンとはじいてから、反対側にまわったの。乳首をはじかれるとヨウコは、身ぶるいしてたわね。

体は弓のように反らせてるので、ヨウコのパンティは可愛いおへそをのぞかせて、張りつめるようにデルタを、キューツともちあげて、のびきってたわ。手首と足首を一つにされて引きよせられてるので、ひざが割れてパンティの一番巾のせまい部分も、後ろまでめくれて見えるのよ。このパンティを脱がせて、その羞かしいところも、はっきり見せるんだよって、心の中で言いかけながら気がついたの。

「あら、ヨウコ濡らしてるわ」

その声に、マダムも寄ってきて太腿を押しひろげて、二人してのぞきこんだのよ。

「あ、いや」

ヨウコが、ひざを合わせようとして、もが

いたわ。

「まあ、ほんとね」

マダムとあたしは顔を見合わせたものよ。

「きつと、さつきすぐった時に洩らしたん

じゃない？ 女だから」

マダムがいうの。そして、

「尚更いいわ。この汚れたところを、かまし

てやりましょうよ」

## 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売！

|     |     |            |
|-----|-----|------------|
| 一月分 | 1冊  | 三五〇円(送20円) |
| 三月分 | 3冊  | 一〇五〇円(送共)  |
| 半年分 | 6冊  | 二一〇〇円(送共)  |
| 一年分 | 12冊 | 四二〇〇円(送共)  |
|     |     | 郵便番号 558   |

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとか、かいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたたいという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、「現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず「現金書留」にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたします。御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

ヨウコは、

「いや、それだけはよして」

って泣くように言ってたけど、くくられて

ちゃ仕方ないわ。それに、お尻を宙にうか

せてるんですもの、スルスルと脱がされた

の。ヨウコの白い肌が、その瞬間に紅をちら

したように染まったわね。ヨウコはパンティ

の下にパンティストッキングをはいてたので

すぐ素肌は見せなかったけど、

「ついだから、とっちゃいましょ」

パンティストッキングもぬがされて、ほん

とうに一条まとわぬ全裸のヨウコが、明るい

シャンデリアの光の中に現われたわ。足首の

ひもを、ちょっとだけほいて、ずらされた

布地を抜きとると、すぐにまたくくられて、

羞かしいところをかくすこともできず、ヨウ

コの全裸が弓なりに反りかえってふるえる

のよ。ピーターは、それを見て一層、身体を

硬直させてたわね。

「ほら、いいものあげるわ」

マダムは脱ぎとったヨウコの、まだ体温が

残っているパンティを、ピーターの鼻の先で

ヒラヒラさせながら、

「ここんところが汚れてるところよ。さあ、お

口をあけて。くわえさせてあげるわ」



むりやりに口をあけて、ねじこんでゆくよ。ピーターは、ヨウコの汚れたパンティを口に詰めこまれて、うなっていたわ。丁度、濡れてる部分をピーターの舌の上にのっけるようにして丸めて詰めこんだのよ。いくらナイロンのパンティだって、口の中へ押しこもうとしても、なかなか入らないものね。

押しこまれてピーターは顔をしかめてたけど、好きな女の肌に着けてたものをかまされつつのは、いいのかしらね。目を細めちゃってるのよ。きたならしいったら、ありやしない。あら、そう？ 男って、みんなそうなのかしら？ いくら何でも女の一番汚れるところなのよ。それを口の中に入れられて、ほんとうにいいのかしらね？ まあ、こぼさないで召し上がってよ。おつきしますわ。

とにかくね。ピーターはヨウコのパンティを口に詰められて、ストッキングで、さるぐつわをされちゃったのね。

「ムウ、ウウウ」

なんて、言うばかりなの。

「いや。ひどいわ」

ヨウコはヨウコで、一糸まとわぬ全裸に剥きあげられちゃって泣くように訴えてたわ。

「ヨウコ！」

マダムが言ったわ。

「ヌードにさせるって約束だったでしょ。何よ、今更」

「だけど、こんな、ひどい……」

全裸にされて仰向けに弓のように反らされてるんですの。そりゃ羞かしいポーズに違いないわよ。ひざを合わそうにも、手と足首を思いきり引きしぼられてるんですもの。股を拡げられるだけ拡げて、その痛みに耐えるのが精一ぱいなね。あたしも、こんなポーズで同性の大事な所を、ゆっくり眺められたことなんか初めてよ。

指先で、ちよつとでも触れると、張りさけるみたいなのくらみ。ピチピチして、とっても魅力的だったわ。お餅みたい。女のあたしも、そう思うんだからピーターなんか、たまんないだろうと、ほんとうに思ったわ。まして自分の好きな女の子だもんね。

「ムウ、ウツ、ウウ」

さるぐつわの中でもがきながら、じっとヨウコを見つめてるのよ。くくられていて自由がきかないもんだから、ひとりで腰をくねらせてもがいてるのね。

あたし可哀そうになって言ってやったわ。

「そんなにじらさないで、もう一回してやっ

たら？」

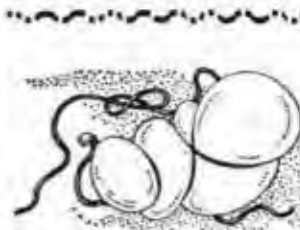
そしたらね、マダムってすごいものよ。草履をぬいじゃってさ、それを両手に持ってね、その裏んところでピーターをこすり始めるじゃないの。あれじゃ痛いでしょうねえ？

あたしはソフトタッチよ。先ず掌でもみこんでいったわ。くるくるまわしながらね。いやあ、これでもきくのよ。ヨウコがうーって言ったわ。あたし女だから、どうすればヨウコがたまんなくなるかをよく知ってるもの。ましてヨウコはいじってほしいのって言うてるみたいに仰向けにくくられてるんですもの。あたしのするままよ。そして

「んーん、ああ」

なんて鼻声をあげるんだもの。ピーターはピーターで、草履のうらで、もみこまれたり左右からパーンパーンで、はさまれて叩かれたりしてんの。じらされてんのよ。だから、あたしもヨウコをじらしてやったわ、あら、あなたまでトロンとしちゃったじゃない。

ごねんね。あたしばかりが喋っちゃって。いやだわ、あたしも、いつの間にか興奮してきたわ。ね、行きましよう。ヨウコとピーターみたいに、別々にされるんじゃないで、二人っきりで、ねえ？



&lt;告白&gt;

# ゴ ム 夫 婦

呉 無 真 仁 夫

最近、ゴム・プレイ愛好者の発言が一段と減ってきたようだ。マニアの一人として非常に淋しい想いがする。何か「孤軍」という気がするが、私のゴム・プレイについてのことを書いてみよう。

普通、ゴム・プレイというと生ゴム使用を意味するようであるが、私は、生ゴムの他にビニールや柔らかい皮なども、幅広く併用している。

ゴムにも、アメゴム、やや固いゴム、ビニールに近いゴム等、いろいろあるし、ビニールも透明度や硬軟度の点で多種である。

同じ女体の縛りにしても普通の荒縄や綿ロープよりも、ビニール製ロープ、ナイロンロープ、皮製ロープなどのほうが私の好みに合い、女の肌の柔らかさを余計に表現出来るように思うのである。

私の狙いは、女の身体を縛り上げた時の肌の盛り上がった肉感的な緊縛美ということに尽きそうだが、そこにゴムという滑らかさが加味されると、一層その女体のしなやかさが

丸みのある美しさを増すように感じられるのだ。この言うべくして言い現わし得ない微妙な受感が、私を魅了してやまないゴム・プレイの妙味となっているらしい。

だが、近頃では、責める私よりも、責められる彼女のほうが深い陶醉を覚えるらしく、だんだんと彼女本位のゴム・プレイになりつつあるようだ。最初のうちは、ただゴムの下着をつけて縛られることだけにでも、お義理のような態度を見せていた彼女が、よく締まるゴム・ロープで高手小手に緊縛され、ゴムシーツの上に転がされて押えつけられることに露わな喜びを見せるようになった。ゴムの感触を楽しみとするようになってきたのだ。

そればかりではない。その上に更に浣腸責めの併用を望むようになっていくのだ。

ゴム・シーツに包んだまま、私は一〇〇〇ccぐらい浣腸をしてやり、自家製のビニールパンティを穿かせてビニール・テープで密封し、ゴムのおしめカバーをつけ、更に両足を揃えたまま、首から下をスッポリとゴム・シ

ートでぐるぐると、ナイロン・ロープでぐるぐる巻きに縛り上げてやるのだ。

時が経つにつれて、女の口から「許して」という哀願が洩れ出すが、その実は、この責められ方の喜びを噛みしめているのである。

もちろん私も好きならばこそやってやるのであるが、この責めは後始末が大変なのだ。

彼女にさせればよいようなものだが、排泄したからといってプレイ終了というわけではないし、プレイ中に縛ってあるロープを解くことは気がすまないからだ。

私は、普断でも彼女にゴムの下着をつけることを命じていて、いうことをきかないと仕置きすることになっているが、彼女は最近、わざと逆らう態度に出ることが多くなった。仕置の催促なのである。

仕置といっても結局はゴム・プレイということになってしまいが、そんな時には、プレイに入る前から素裸にさせて、ビニール製の割烹衣だけで夕飯の支度をさせ、食事は、全裸で後ろ手に縛ってさせる。もちろんゴム・ロープで縛るのであるが、生ゴムの自家製ヨダレ掛けをつけさせ、私が口移しで食べさせてやることが多いのである。

改めてプレイをしない時でも私が家に居る間は、出来るだけ裸で縛り上げておくことにしているが、そのために彼女はトイレが遠のき便秘症になってしまっている。



## S M カメラ・ハント —— 高村浩子の巻

華

麗

な

衝

撃

辻村

隆

五月号の巻頭を飾った高村浩子の手記『被虐こそ私の夢』を読んで、私は意外の感を深くした。編集部から、モデル希望の女性があるという連絡をうけ、塚本鉄三氏と二人で撮りにいったのが、外ならぬ彼女であったからである。

四国高松から連絡船の出ている、桃太郎の鬼退治の伝説で知られた女木島の生まれで、御多聞に洩れぬ過疎現象の小村から、大阪郊外豊中の、実業家の邸へ、お手伝いさんとして住込んだ二十一才の彼女から、正直いって、M願望の女性の感じは受取れなかった。終始

オドオドした態度で、自分のフォトが奇クに掲載されては、将来の結婚にも差支えるから絶対にのせないでくれと、クドイ程、念を押して頼むのであった。それ程、忌避するのなら、何もモデル志望などせねばよいのにとともに思ったが、Mの願望やみがたく、緊縛され、虐められたいが、その秘密の願望が、不特定多数の人々に知られては困るという女性も、近頃は案外、多かった。勿論、人間にはそれぞれ、絶対不可欠のプライバシーを守らざるを得ない時もある。高村浩子が、かくも懇願する以上、敢えてその気持を無視してまで書

く気は毛頭なく、私も塚本さんも、唯ゆきずりのM願望の若い女性を撮ったことで満足し彼女との約束を守って、事実私も、高村浩子の件については、『楽我記』欄などにも一行も触れなかったのである。どうやら奇クを読んでいるらしい彼女に、若し私が辻村隆であると告げると、或いは故なき恐れすら抱かすのではなからうかと、名前すら知らさなかったのであった。所詮は、豊穠な乳房が特に印象に強い女性というだけで、私の蒐集の一頁を飾って、筐底深く永久に眠る運命と、彼女の氏名すら聞かず、撮り終わると、あっさりと

別れたのであった。

私のコレクションを知る同好の人ならすべて御存知であるが、こうした闇から闇へ消える緊縛の女性は相当あって、よく指摘されることがある。カメラ・ハントで発表したら、嘸かし喝采を得るであろうと思われる女人でも、相手がどうしても、発表は困るという人は、ハントには書いてはいない。時折は「楽我記」で仄めかしていることもあるが、判然とは書かず、それっきりのことであつた。

そうした女性群のフォトは、専ら秘蔵のコレクションとして、単にその艶姿、媚態、痴戯、愛虐のさまざまを、大切にアルバムに留めているだけであつた。

カメラ・ハントを書き続けて、幾らか虚名俗名が高まるにつれて、私と出会ってプレイしたら、必ず書かれるのではないかという危惧と不安が、奇クに応募してくるモデル女性の中にも、しばしば見受けられると、はなはだ迷惑至極に私を曲解していることを、箕田氏から聞いたが、そうした女性の方の爲にもこの際自らを弁護しておきたい気持である。

高村浩子が、奇クへその時の手記を寄せてきたことは、編集部から全然、知らされていなかっただけに、手にとつた五月号をみて、

女心の妖しい心裡に、虚をつかれた思いにかけられたのである。

ハントの打ち合わせで箕田氏へ電話したとき、私は思わず彼女のことに触れていた。

「絶対発表してくれるなどあれ程いい乍ら、自分から書いてるじゃないか。一体どうなってるの？」

「そうなんだ。気が変わったんだね。便箋に書いて来たのだが、誤字や読み辛いところもあって、大分こちらで手直したのだ。判つきり顔の出ているのは困るが、チラッとした横顔や、後ろ姿のフォトなら載せてもいいと言うんだ。やはりこの辺に、彼女のM性が出ているんだな。他人に書かれたら困るが、自分の意志でなら書いてみたいという気持——おとといも電話がかかってきて、この次には一度、辻村さんにも会ってみたいなんていうから、第一回目の最初に撮った時、一緒にいたじゃないかといってやったらビックリしていた。編集部の方では、あれから二度ばかり撮っているんだよ。そんなことで、気分的に大分リラックスして来ているんだね」

「オドオドして、絶対フォトを発表してくれるなというから、こちらも諦めて、彼女の名前も聞かなければ、私も名を告げなかったん

だ。必要ないと思ったからネ。それで私とだけで撮ってもいいの、本当に？」

「あんたのよくいう言葉の、『緩々急々』の『急々』の方なんだな、今の彼女——。あんなを辻村氏と知って、改めて会って欲しいといってたよ。分譲フォトも構わないって、言っているんだが、相当の変わりようだよ。どうする、会ってみるか」

「カメラ・ハント書いてもいいのかな」

「そうだろう。今度は辻村と知って会うのだから、女心の微妙な変化だろうね。生まれて始めて男臭いあんた達に縛られた時の味が、すっかり忘れられなくなったのだろうよ」

「じゃあ顔を出してもいいんだろね。後姿や、判つきりしない顔は味気ないもんね」

「それは、あんたがうまく口説けばいいさ。今の心理状態なら、多分O・Kだろう。彼女すっかり燃えてるからね。気の変わらんうちに撮った方がいいよ。かなりM性も昂進しているから、きっと大胆なのが撮れると思うよ」

「一対一でいいんだね」

「プレイする気だったら、その方が、やり易いだろう。よかったら、すぐ連絡しようか」  
彼女の休日は、現在お手伝として働いてい



る家庭の都合で、公休は月三回の木曜日にきめられているという、彼は早速、私に異存がなければ、次の木曜日にデート出来るよう連絡しようといってくれた。私にとっては、始めて出会う女性でない気易さもあり、彼女の、年に似合わない豊穡な乳房には、大いに惹かれるものもあったので、二つ返事で承諾した。

塚本さんと二人で、始めて出会った場合と違って、今度は判っきり辻村を押し出してゆけるのだから、おのずから又そこに、違ったニュアンスが生まれてきそうである。

『花と蛇』を愛読し、自分を静子に擬して、自縛して空想に耽り、鏡に映るわが身にナルシズムの欲びを覚えて、自らはかせてゆく青



春の残滓——。それが次第に昂じて、思い切ったモデル志望の投稿をしたものの、いざ現実のカメラに直面すると、甘い幻想は忽ち萎縮し、不安と内潜する被虐願望の相剋に悶え乍ら、誌上に我が被縛の姿を曝すのを懼れる浩子——。果たして約束通り、一行も自分の記事がないことを知ると、そのくせ、やはり物足りなく、自ら陥穽を求めて、手記を書き送る不可思議な心理——。

それは、あたかも楽しい秘密を持った女が親しい友にそれを打ち明け、誰にも喋らないでくれと言っておき乍ら、さてその友が約束を守って口を緘していると、いつしか緘口に不満を感じ、友の気のきかなさに業を煮やしやがては自分から吹聴して回る心理に、一脈相通じていた。喋るな、ということが、喋ってくれという、微妙な反語の意味を持つ、言葉のニュアンスが女性の場合、往々にしてありとすれば、高村浩子の、のせてくれるなということは、不安と危

惧を内心、抱き乍らも、或いは掲載を期待していた、反語のニュアンスを含んでいたのかも知れなかった。万一の場合、責任の転嫁をしようという、この反語も、唯ことがことだけに、私も塚本さんも、それを言葉の額面通り、正直に受取っていたようであった。その様な推理でも組み立てねば、彼女が自ら手記を発表した心理が、理解出来なかったのである。

さして特徴もない、おとなしい平凡な顔立ちの彼女のどこに、あの様な激しいM性が秘められているのであろうか。

私は、とり出してきた高村浩子のフォトをしみじみと眺め、改めて彼女の手記を熟読するうち、いつしか心は、三日後に控えたその日のプレイに、新鮮な情熱を燃やし始めていた。

× × ×

四月の第三木曜日——。私の車は快晴の阪神高速道路を一気に走って、豊中へと向かっていた。彼女と始めての出会いの日は、万一のスッポカシを考えて、塚本氏行きつけの、宝塚の料理旅館を指定しておいたが、一対一となると、アベック然として入り易いので、ホテルはどこでもよかった。

箕田氏からの連絡を受けたのか、その夜、不意に公衆電話から浩子の声が受話器に伝わり、その日の時間と待ち合わせ場所を、早口で告げてきた。車でその待ち合わせの場所まで迎えにゆく約束をし、尚も話を続けようとしたら、プツンと切れてしまう。肝心の要件だけは話し合えたものの余韻がなかった。

わざわざ迎えに行くといつて、そのあと私は独りで苦笑し、年と共に追々フェミニストになってゆく自分がおかしかった。

その家は、豊中、螢ヶ池の中間の、刀根山附近にあった。彼女から教えられた目印を頼りに、十二時過ぎに到着すると、既に高村浩子は先に来ていて、私の車を待っていた。今更、改まって辻村ですと挨拶することもなく私は笑顔で車のドアを開く。

「この近くでない方がいいでしょう？」

「ええ、若し知ってる方に出合おうと困りますから——」

「食事は」

「簡単にすませて来ましたが、あのう、お食事、未だなんでしょう」

気易く私の名を呼びかねて、浩子はしおらしく問い返すのであった。窓を開き、春風を一杯に入れて、私は池田の方へ向かって、混

雑する車道に乗り入れていった。

石橋あたりのドライブインレストランで車を止めると、簡単な食事を摂ることにする。

「私を辻村って知らなかったんだね」

「ハイ全然——私、アガっていたのですわ」

「フォトをのせたり、書いたりしてくれるだって、しきりに言ってたから、約束を守って私は一言も、あんたのことに触れなかったんだよ。だから手記をみてビックリした」

「あれから又、編集部の方に撮っていただいたのです。しきりに書けて奨められますし遂々説き伏せられたような恰好になってしま

って」

「ああ、とてもお上手だよ。やはり編集部がすすめるだけのことはあるね」

「あらッ、お世辞でしょう。読み易いように随分、訂正してありました。自分でも、こんなに書けたのかと、びっくりしています」

「編集部は、その点、馴れたものだからね。それで、あの告白は本当のことなの？」

「ええ、大体……」

彼女は少し言葉を濁した。

「最初に出会った時、随分かたくなっていたでしょ。何もいわないから、単なるモデル女性だと思っていたのだけど、Mの願望が予想

以上に強いので意外だった」

「幾分はオーバーなのです」

「案外、本心じゃない？ 或いは、もっとそれ以上——だと、思うんだがなあ」

浩子は俄に頬を染めてうつむき、モジモジして、羞恥を全身に現わし出していた。場所柄もあって、私もそれ以上、追求も出来ず、話題を変えた。

「島で生まれたんだってね」

「ええ、離れ小島の生まれなんです。ひょっとすると鬼の子孫かも知れません」

「可愛い鬼だよ。或いは桃太郎の子孫じゃないかな」

話題を変えたのにホッとしたのか、冗談が出来るようになったのはリラックスしている証拠である。私も冗談を返して、この調子だと、かなり強烈なプレイフォトが撮れそうに思えた。

「女木島、御存知ですか？」

「ああ四国高松に遊んだ時にね。屋島、栗林公園、金刀比羅宮、玉藻公園など、おきまりのコースを廻って、翌日、フェリーで渡ったよ。海水浴には、いいところだね」

高松から海上六キロの、この伝説の小島での、家族達との海水浴は、もう四年前のこと



である。おそらくその頃、高村浩子は、この小島で、健康な毎日を送っていたことであろう。鷺ヶ峰から見る瀬戸内海の展望や、遙かにつらなる白砂青松の海浜に、夏の日の思い出があった。伝説の洞窟も面白かった。

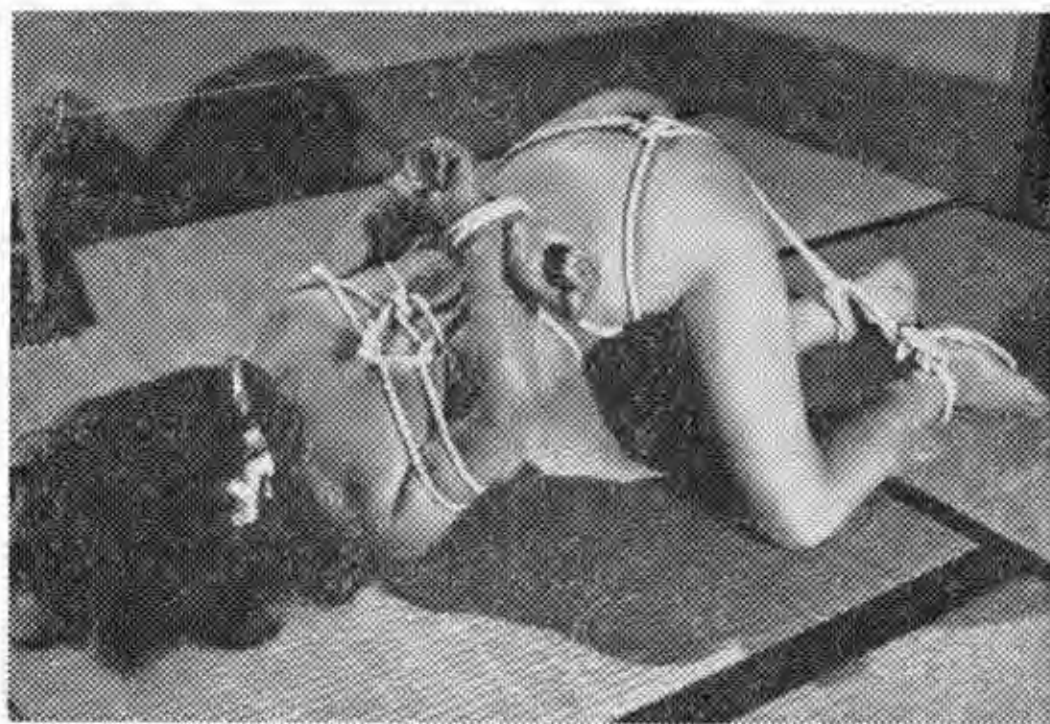
「賑わうのは夏の時期だけですよ。遊びに来られる人々にはよくても、一生を暮す島ではありませんわ。でも近頃は豊中あたりも公害で余りいいともいえなくなりましたわ。今年の夏、奥様始め家族の方が、私の島の家で十日位バカンスを愉しむと仰有ってますの。多分、私も一緒にお供するつもりですけど、久し振りに生まれ故郷で、ゆっくりと、くつろげそうですわ」

「私も、いつか行ってみたいよ」

「どうぞ、家の方へ連絡しておきます。空気は確かに綺麗で健康的です。でもこんなお話今日のことは縁がありませんけど……」

「奇クを、ずっと読んでるそうだが、私のカメラ・ハントも読んで呉れてるの？」

「ハイ、読んでいましたが、特別に意識しませんでした。すぐベテランのプロの人のように思えて、内心は、こんな方だと思っていましても、私などとても怖くて、問題にされないと思っていました」



「その怖い私と最初から会っているんだな」「あとで聞いてビックリしました。もっと気をつけて読んでおりましたら、お写真も出ていて、すぐその時、気がつく筈なのに、やはり、もうアガリっ放しだったのですわ」

「案外フェミニストだと、いわれているんだよ。滅多に無茶はしないつもりだ。あんたの

時も、始めてだから、随分、手加減したつもりだったんだがね」

「何しろ無我夢中でしたから、その時は分かりませんでしたけど、日が経つにつれて、もっと強くされても、辛抱出来たのじゃないかなって、そんな気になってきました」

中袖の白のブラウスの上に、ピンクのミニのベストを着て、短いスカートの潑刺とした服装で浩子は、はきはきと応答していた。とても小島から出てきたお手伝いさんとは見えないう都市的のセンスがあふれていた。三年間の豊中での暮らしが、高村浩子を、すっかり洗練した娘に変えたことは確かであった。

彼女はサンドイッチと紅茶、私はランチを喰べ終わって車へ戻る。人けの多いレストランで、これ以上つきつめたプレイの話も出来難かった。

都心から、なるべく離れた方がよからうかと、池田市へ車を向けて走る。

「辻村さんは、随分と沢山、女の人をお撮りになったのしょうね」

始めて私の名を呼んで、彼女はSMへ、みづから話題をもっていた。M性の浩子にとって、私に気を許したとなると、訊ねたいこと、知りたいことは一杯あるらしかった。

「まあね、気がつく、いつの間にか、そんな恰好になってしまっていた」

「撮った女の人のこと、全部書かれますか？」

「そうじゃない、人それぞれのプライバシーがあって、書かないというより、書けない人も、かなりあるよ。現に、あんたのことだって、一行も書かなかったじゃないか」

「それだったら、本当はもっと沢山の方を撮っていらっしやるってことね」

「そうなるね、同じ女性を度々撮る時もあるから、実際の延人員は、もっと多いだろう」

「辻村さんより、私の父の方が若いはずですけど、こうしてジカに拝見すると、父よりずっと若く見えますわ。やはり狭い島なんかで漁業などしていると老けるのでしょうか」

「こんなことに憂身をやつしてばかりいるから若いのかも知れない。根はバカなんだね。実際あんたより、私の嫁いだ娘達は、皆年上だからね。いわば私のムスメのようなあんたを、こうしてプレイの対象にしているんだから、気も若くなるよ」

「私は辻村さんを、一人の男性としか感じません」

「有難う、私もあんたを一人の女性と考えよう」

「私のことカメラ・ハントにお書きになりますか？」

「告白を、みずから書いた君のことだ。今更もう隠しておく必要もないだろう」

「構わないんです。私という女を、どういう風に書いて下さるか興味がありません」

「いまだことなく、幼さを残した、あどけない顔が、はにかんで真剣味を帯びているのを、チラリと横眼でうかがい、ハンドルを握る私の気分は次第に愉しくなっていた。そのつきつめた様な口吻に、世馴れない純情さが、むき出しになっているのも微笑ましかった。」

「顔が判っきり出たら、困るんだろ」

「ええ、編集部に頼んで、告白のフォトも、後ろ姿だけと頼んだのに、五枚目の横顔など判っきり私と判るものが出ていました。なるべくは隠していただけたらいいのですが、少しくらいは仕方ないと思います」

「すっかり大胆になったのだネ」

「……………」

浩子は黙って、しばらく応答の言葉を探しているようであった。

国道に面して、ホテルの広告があるのに目を留め、そのところを記憶して、池田市内を

山手にとってゆくと、やがて判然と、アベックホテルと覚しき建物をみつけ、私は躊躇なくそれに車を近づけていった。

× × ×

高村浩子の湯を使う音がきこえる。アベック向きに万端ととのえていて、近頃はやりのテレビで、ムード映画も上映される設備まである。バスに面した窓越しに、湯を使う浩子の姿が、湯気に煙って、ありありと私の眼に映じていた。豊満という言葉すら形容に弱い特大の乳房がゆらゆらと揺れている。確かに彼女のオッパイは、普通の女性の、倍以上の大きさを誇っていた。その乳房にパイプを当て、歓喜に涕泣する乱れた姿態を想像して、私の胸は熱く疼き始めていた。いつものなじみの、黒革袋のプレイ用具一式と、シヨルダ一バッグの二基のカメラをタタミに放り出しストロボも装填して、既に準備万端は出来上がっていて、今は唯、彼女の湯上がりを待つだけであった。

ホテルの浴衣をつけ、肩近くまで伸びた黒髪に露をふくませて、赤く顔をホテらせて部屋に戻ってきた浩子は、チラリとカメラや縄に眼をやって、羞恥に身をすくめると、机を隔てて坐った。いよいよ緊縛タイムは近づき



つつある。軽い不安と期待の交錯した表情で彼女は神妙にそっと手を組んで、私の目前で眼を伏せていた。その心の緊張をほぐすように、冷蔵庫からファンタをとり出して、すすめ、

「イヤに真剣な顔付だね、もっとリラックスしなさいよ。でも今日は手加減しないよ。いいかね」

「私自身の青春の記録ですわ。きつく縛って下さっても構いません。多分、辛抱出来ると思います」

この言葉の裏に、彼女のMに対する激しい願望が感じられた。みずから口にする精一杯の表現であろう。凝っと浴衣の胸の、大きな膨らみをみつめるうち、私の脳裡に、あの異様とも思える程に豊かに膨れ上がった乳房、大きく輪を描く、ピンクの乳暈が、ありありと蘇ってきた。最近、稀にみる、素晴らしい乳房に、浩子の若さが溢れているように思えた。

「SMのプレイもしてみようか。緊縛のフォトばかり撮すだけでは面白くないからね」

さりげなく切出すと、彼女は顔を挙げて、私を、はっきりとみつめ、

「セックスだけは許して下さい。私、好きな

人がいるのです」

と、私の出鼻を挫くようにいやにキツパリと応える。SMプレイを、すぐさまセックスに関連させるところに、私は現代娘の割り切った観念をみた思いがした。

「既に関係があるの？」

「御想像に任せますわ」

「彼とSMのプレイはしたの？」

「知らないのでしょうか——。それはそれでいいと思います。私も、こんな性格を知らせませんもの。顔の出るのを恐れたのは、彼が万一、奇クを見た時を考えて躊躇したのです。が、今の処、全然関心がないようですし、未だ大学生ですから大丈夫だろうと、タカをくくっているんです」

その大学生が、現在お手伝をしている家族の、息子ではないかという直感がフト走ったが、私は何も訊かなかった。それは恋愛感情の、彼女のプライバシーである。今の私は、高村浩子を、M願望のモデル女性としてのみ受け止めていればよかったのである。個人のプライバシーを深く追及しなくても、夢見る恋心を抱く年頃の娘は、父親程も年令の開く私に信頼感を持った場合、自分の方から何かと打ち明けたくなってくるに違いなかった。

Mの願望と恋愛感情は、似て非なる異質のものであるらしい。

「多分大丈夫だろう。世間は広いからね——。今が一番楽しい年頃だよね君は。それでよく彼と遊びに行くの？」

「彼マジメなんです、とても——。お茶を運んだ時など、偶に手を握ってくる……」

呀っと気付いて口を押さえたが、早くも語るに落ちていた。世間知らずの坊っちゃん大学生と、年頃のお手伝い——よくあるハナシじゃないか、である。懼らく家人の目を盗んではあったのだろう。むしろM性に目覚めている浩子の方が、その大学生より、情緒は豊かだったかも知れない。思慕を彼に寄せる一方モデル女性を志望してくる、若い娘の、異妖で複雑な心理に、私は現代娘の割り切った思想を感じ、新しがついていても、大正生まれの感覚では、何かついてゆけないものを覚えるのであった。

彼女の告白によると、主人の書齋にあった奇クを見て啓蒙された筈ではないか。とすれば、たとえ息子は気付かなくても、主人の眼に、彼女が触れる可能性は大いにある筈であった。もし皮相な見方で、その心理を深く追

及するならば、自分のフォトが奇クに掲載されることによって、主人に己れのM性を知らせる手段とは、うけとれないだろうか——。

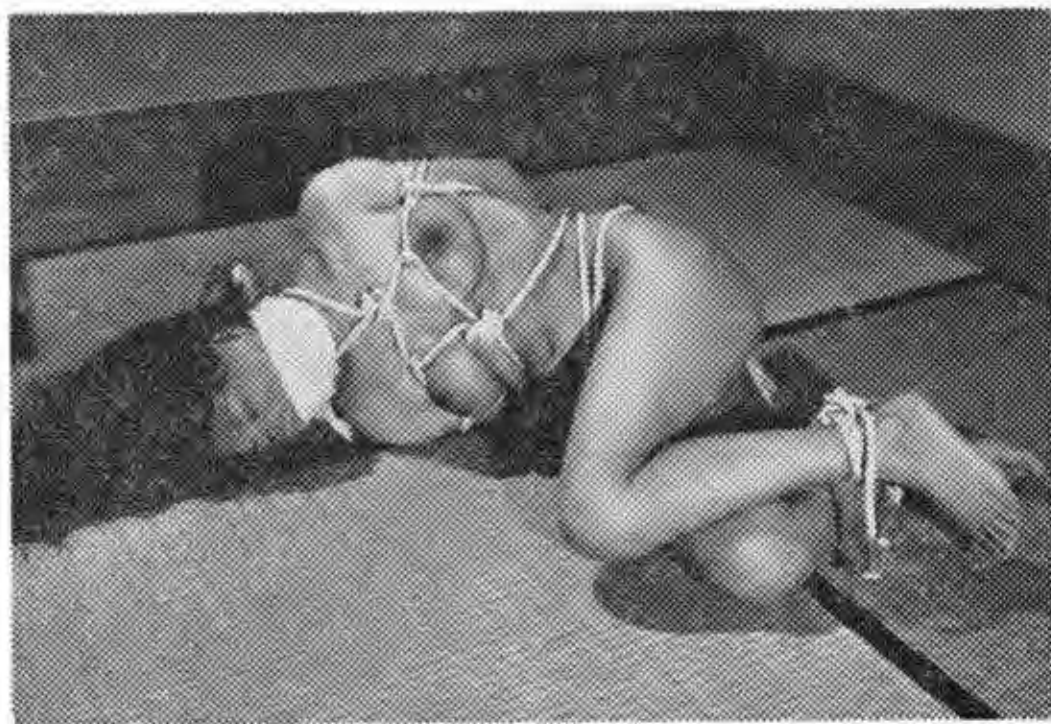
一方では息子的大学生に思慕をよせ、片方で主人とSMの快楽に耽る——、そんな穿った見方をする私の心理は、SMにかたよった思い過ぎなのであろうか。

私のハントの記事によって、浩子と主人は必然的に、SMプレイの関係に陥ってゆくかもしれない。この歴然たる事実を、浩子はどう受け止めようとしているのであろうか。将来の結びつきはどうあれ、少なくとも一悶着は起きるはずであった。

しかし私は、その件には触れないつもりでいた。今ここで、それに触れた場合、浩子は承知の上なら心の秘密を曝かれて困惑するであらうし、うかつにもそこまで深く考えず、心の走る俤にその気になっていたのなら、愕然として、私の手の届かぬところへ遁げ出してゆくに違いなかったからである。

それを追及することは、これからのプレイに、決してプラスしないことを、私は咄嗟の思案で察知していた。

彼女は今更、恋人が家族の大学生だと告白もしかねて、モジモジしている。かなりの沈



黙のときが流れていた。

「SMプレイを、いきなりセックスに飛躍させたので、驚いていたんだよ」

「でも辻村さんのハントをお読みすると、プレイの挙句は、いつもセックスにつながるっている様に思えますもの。だから……」

私は苦笑した。そうか、それで、すぐ頭が

そこへ走ったというわけなのか。SMプレイとセックスが、すべてがすべて繋がるものではないことを、今更くどくど説明しても、浩子の頭を混乱さすだけであろう。

「緊縛をしてフォトを撮ることと、SMのプレイは、似ていて違う性質のものだよ。分かる？ SMのプレイとセックスも、又同じことがいえるわけだ。しかし、緊縛——SMプレイ——セックスは、何処かで交差している、関連性もあるわけだ。関連を持たせるのも、持たない場合も、相互のパートナーの感情がすべてを支配するのじゃないだろうか。難かしい論理かも知れないがね。別段、分かってもらわなくてもいいが……」

中学卒のお手伝いの娘には、一寸無理だと思っ言葉をきいたら、

「ハイ、分かるような気がします」

と、浩子は真面目な顔付で答えた。

「M性の願望をみたそうとするあんたにとって、緊縛されることも、勿論、一つの手段だが、やがて緊縛に狎れてくると、次々と縛りの羅列だけではMの願望は満足しなくなるのだ。緊縛した女性を愛情をこめて虐める——さしずめ、愛虐という表現をしよう。その愛虐なくては、ヌードに縄を巻きつけたに過ぎ



ない。そうじゃないかね。緊縛美という言葉は、縛られた美しさ、縛りの芸術ともいえようが、所詮M性をみたすには、物足りない縛り方に過ぎないと思うのだ。女性に屈辱と羞恥を与える縛り、苛める縛り、そこには緊縛美ではないが、Mの願望をみたしてくれる縛りがある。しかしその緊縛は、殆ど発表出来ないタブーのものだ。緊縛フォトと、生ま生ましい愛虐の縛り、そこに大きいギャップがある。それは、カメラ・ハントに発表する、私のフォトにも、一番痛切に感じ、いえる事なのだよ」

浩子は、こっくりと頷いた。別段理解して貰えなくても、それは近頃ハントを書いて感じる大きなジレンマであっただけに、いつしか雄弁になっていた。私は尚も続けて、

「近頃の私の傾向は、緊縛は所詮SMプレイへの前提の手段に過ぎない、と覚えてきたのだ。プレイの生ま生ましい状態は、私自身がプレイヤーの場合が多いので、自然フォトに撮りにくいから、ハントのフォトは、いつも緊縛ポーズのみを発表するような恰好になるけれど、本当のSMプレイなんてそんなものじゃない筈だ。プレイに没入すれば、カメラなど、むしろ邪魔っけなのが本当だ。カメラ

の方へばかり心を走らせていたら、プレイなんて出来やしない。緊縛フォトがアングラ的存在だった十数年前は、私もそれなりに、緊縛自体に嗜虐の血を燃やしたこともある。謂わば、先駆者的な稀小価値もあったわけだ。

今のように、巷に緊縛モデルのフォトが氾濫するようになったら、もう緊縛美を追求する芸術的なフォトをとることは、私の役目ではなくなってきた。そんなことは、本職のカメラマンに任せておけばいいのだ。私は人間の深奥にひそむ、SMの心理を探求し、剔抉して、カメラ・ハントの幅を深めてゆきたいと考えるようになった。だから私は、SM的なプレイをして、相手の心にメスを入れてみたい。それが本心なんだよ。あんたを最初に撮った時は、編集部依頼の、単なる緊縛モデルとして撮ったに過ぎない。だから私は、難かしいことは何も言わず、撮ることだけに専念していたんだよ。綺麗ごとには終わったが、私と君との心の繋がり、結びつきなんてものは、何一つありやしない。それであんたは、M性の願望を果たしたように思っているが、本来はそうではない。見知らぬ男達に、あからさまに裸身を曝し、屈辱的行為の緊縛によって、勿論、羞恥を覚え、M願望に通じるも

のもあるが、始めて緊縛されるといふ事実に動揺して、M願望を果たしたと、誤認しているに過ぎないのだよ。M性のない報酬目当ての女性なら、当然それだけがすべてであるがM願望のあんたなら、矢鱈と緊縛ポーズの繰り返しばかりなら、早晚必ず不満を感じる筈だ。違うかね」

「分かります、辻村さんの仰有ることが――編集部の方と、二度うつしましたが、唯、慌しく、次々とポーズを変えて縛るだけで、正直いって情緒もなく、心の盛り上がりもなく、満たされない想いなのです。それは今、辻村さんが指摘なさったように、私のようなM気のある者も、報酬目当てのモデルも、同一視しているからだと思います。でも私は何だかプレイすることが怖いのです。辻村さんが怖いのではなく、ブレーキの故障した車のように、とどまることなく被虐に向かって走るかも知れない私の心が――」

「SMのプレイに未知の恐怖は、つきものだよ。約束を守って、あんたの謂うセックスはしない。しかし女体の深奥を探求せずして、プレイは云々出来ない気持だ。いやセックスのみではない。人によってはA感覚の時もあるうし、それがクリスタールにも波及してゆ



くだろう。しかし所詮プレイの究極は、女悦の根源に繋がっているのじゃなかろうか」

若い未熟の娘をつかまえて、興奮気味に喋ったとて、何処まで理解してくれるとも思わなかったが、次々と緊縛の異なる姿態をカメラに撮ることが、SMのプレイのすべてでないということ、何とかこのM願望の娘に教えてやりたかったのである。

こうした理論を組立てながらも、高村浩子を眼前にして、これからやる行為は、やはり緊縛に外ならない。何といっても、自由の束縛が、一番手っ取り早く、被虐の願望につな

的に、

「ハイ」

と応えて、浩子は白粉気のない素顔に愧らしを浮かべ乍らも、素直に浴衣を肩から外して、ずり下げていった。その下には覚悟の前か、一糸も纏ってはいなかった。いきなり、圧倒されそうな乳房が、眩しく私の視野に飛び込んで来た。

× × ×

太めの紐が、首に輪をつくり、オーソドックスな菱固めが、女体を締め上げてゆく。

縄うつ私の手の下で、浩子の裸身は被虐の

がることは、数多くの女性と接して、当の私が、最もよく知っていることであった。とすれば彼女の肉体の方が、案外素直にMの願望を受けとめていた事になりはしないか。問題は百の理論より、一の実行だ。

「さあ、理論はとも角として、始めよう」

私は縄を握って、決然と立ち上がった。

「脱ぎなさい」

命令的な口調に、思わず反射

欲びに甘く慄えていた。腰で縛りとめて、白布で猿轡をかませ、長めの縄を垂らした俤、私はカメラを握ると、部屋の中央に立ち疎む彼女に、前後左右からストロボの雨をふらせていた。胸縄の強さで、まるで別のいきものの様に飛び出した豊穠な乳房が、私の嗜虐心を急激にかりたててゆく。始めて出会ったとき、この乳房を、この眼でみつめた時にくらべ、今眼前にある。大きく拡大した乳量の紫色の色ずみの異常さに、私はハッとした。

色ずみは乳首を頂点として、静脈の花を、蜘蛛の巣の様に撒きちらして、ポリウムあふれる乳房の白い皮膚に、血のにじみをみせていた。これは燎らかなる、妊娠の徴候に外ならない。私の眼は、無意識のうちに、彼女の腹部へと注がれていた。心なしか膨れているようにも思えるが、そこに目立ったシルシはなかった。

訊ねるべきか、無視して黙殺すべきか——しかし、彼女自身、懼らく肉体の変化には気付いているに違いない。生理の変調が、必ずやあるはずだからである。高村浩子は、そのことについては、それ程、無智とも思えなかった。

私はカメラを措くと、浩子の裸身に近づき





ぼってりと、豊かにたゆたう乳房に、そっと手をやって、しげしげと撫で廻していた。華麗な衝撃を受けて、ドキリとした彼女は、満面を、みるみる朱に染めて身をよじり、くねくねと縛しめの裸体をくねらせて、私の愛撫の手から遁れようとするのか、その場にヘタヘタと、くずおれていった。

私は事実を突きとめたい衝動をぐっところえ、その刹那、激しい嗜虐心からかれて、いきなり、乳房を押し潰すようにして、ぐいと押さえつけ、両手で胴腹を抱え上げて腰高にさせると、余った縄を臀部で左右に分けて、

双丘の接点で大きく結びめをつくり、開肢気味に、両の足首で縄の端をとめた。

カラーフォトモデルの女性の、性愛のラーゲの性態にこんなポーズをとらせ、背向位云々と注釈のあったことを、何かの本で見たのや思い出し、女体に縛と縄の絡む鮮烈さは、そうした態位のポーズより一枚上だなと、自負めいた淫らな思いを裸身に走らせて、私はカラーフィルムの入った方のカメラをとり上げていた。

(セックスは許して) そういった浩子が、既にセックスの旨酒に酔い痴れていた事実の根源を直視して、うれて熟した、甘美な果実の一点にピントを絞り、息苦しさに、ファイダーを吐息で曇らせ乍ら、この猥らなポーズに、私の視覚は凝固していった。

S Mプレイの終局にセックスを予感し、許してと拒否した女の本心は、セックス本来の拒否ではなく、貞操を捧げた男への、彼女の心の誓約の現われであったのであろう。プレイに対して、現代娘は割り切っていて、最後の一線は、彼の為に守ろうとする女心は、

古めかしくても尊いものの様に思えた。

叩いてくれといわんばかりに、私の眼前になまめかしく屹立した双臀に、まるで誘いこまれるかのように、思わず私の掌が平手で飛んだ。快い撥音が私の耳朵を刺激し、その一打で、まるで堰をきったようにパシン、パシンと、双丘ではねかえる爽音が、部屋の空気を裂いて高鳴った。押し殺した微かな呻きが猿轡の奥から洩れていたが、浩子はむしろ、その打撃の刹那の痛撃を、快い愛虐の愉悅にしながらせているのを、ありありと示しているかの如く、甘い陶酔が呻きの中にミックスされていた。

甘美を漲らせた女体は、いつしか膝立てのポーズを崩し始めて、徐々に体が傾き、スロームーションのフィルムをみているように、体を支える両手の自由もなく、ゆるやかに傾斜して、ドサリと横倒しに倒れていった。ありありと静脈の血管を、無数に走らせた乳房が空間に揺れ、その隠しようのない証拠を、まざまざと私の眼下にみせつけていた。

それをみつめて、嗜虐の血は、更に快く疼き始める。

高村浩子は、この既定の事実について、トボけているのではなく、懼く言い出しそびれ

ていたであろう。モデル女性が、自ら妊娠の事実を告白する必要もない筈であった。マジマジと乳房をみつめる私に、彼女は眼を伏せ、悦虐の吐息を洩らして、その観念の表情には、私に察知された受胎の事実を認めているかのようであった。

度々言うように、人それぞれのプライバシーがあるとなれば、M願望の、単なるモデル女性の位置に彼女をおいた場合、打明けたくない、その肉体の秘密にまで言及する必要はさらさらなかった。仮に、肉体にその事実を認めたとしても、さりげなく無視して、心の秘密にまでは触れず、唯、被虐の願望の目的である、緊縛とプレイにのみ焦点を絞って、その刹那を愉しく過ごすのが、当を得た賢明な手段の様に思えるのであった。

しかも、今日という日を含めて、僅か二度目の彼女に過ぎないではないか。肉体の秘密を告白する気になれぬのも当然であるし、私にしても、彼女のプライバシーを詰問するに、二人の結びつきは、余りにも稀薄過ぎるようであった。

乳量の、まぎれもない事実を黙殺して、むしろ私は、激しい強烈なプレイに徹すべきであろう。その方が、彼女の被虐願望の初心に

も通じている筈であった。

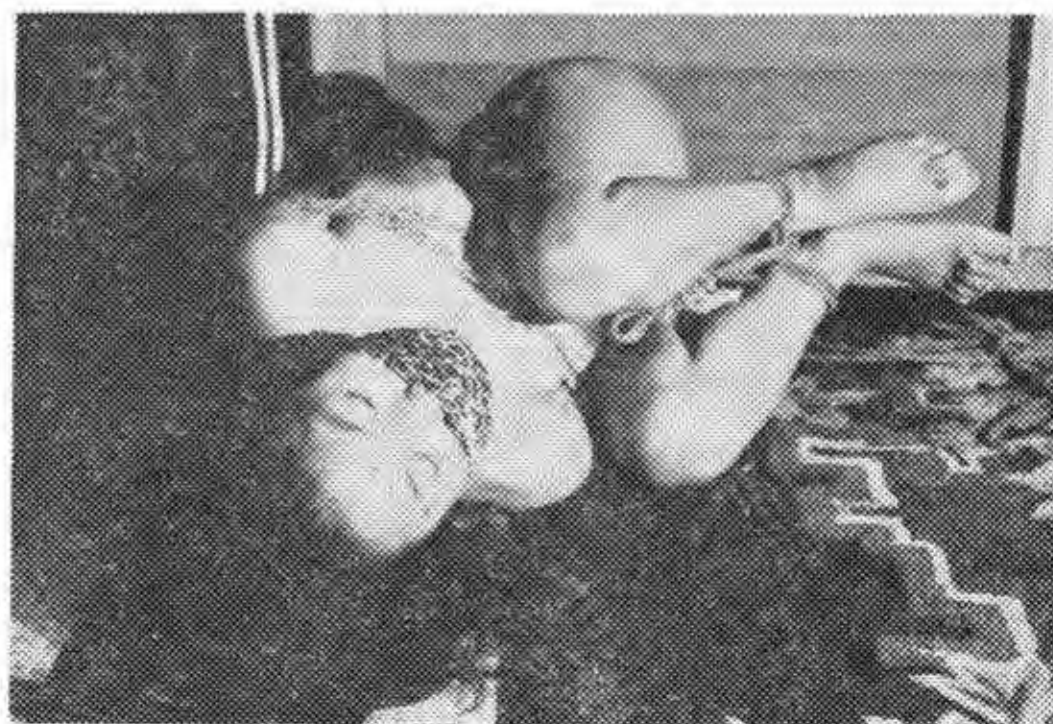
打擲が、私を荒々しい昂ぶりにかり立てていった。最初の緊縛を解くと、休む間もなくすぐさま第二の緊縛にと、かかってゆく。

いつもの斑ら縄をとり出して、ゴムマリのような乳房を挟み込んで、きつく縛り、馬乗りになると、ぐいと押さえつけて、白々と張りつめた双臀をバシバシと叩く。圧迫されて太腿に乳房がベッタリと密着し、馬乗りの圧力で、ゴム風船を力をこめて押さえつけたかのように、弾みのついた乳房は、膨れ上がったハミ出して、針でつつけば、正にパチンとはぜ割れそうに膨張している。

女体に拒否や抵抗の反撥は感じられなかった。まるで、こうした行為を心秘かに期待していたかの様に、被虐の陶醉にひたりきり、私の為すが儘に任せて、甘い吐息を洩らし続けていた。

腰を挙げると、パツと足蹴にして、ゴロリと仰向けに転がし、両膝が胸につくまで強く屈曲させて、素早く両足首を縛り、その縄を胸でつなぎとめる。形よいおしりが心もち持ち上がり、これみよがしに展開していた。

私はいつしか、小型のバイブレーターを手にとり上げていた。彼女がバイブに対して



どのような反応を示すだろうか——今、私の興味は、ひたすらその一点に集中していた。

電池をとり換えたばかりの小型バイブは、円軸を廻すと、かなり強い震動音を撒きちらして、私の掌中で激しく振動していた。しっかりと握りしめて、そっと近づけてゆく。触れた一瞬、俄破と女体は躍り上がって、



浩子の唇をついて、いきなりけたたましい驚愕と、感動の交錯した絶叫が、部屋の空気をふるわせてあがった。徐々に力をこめて押さえつけてゆくと、反応に比例して、絶叫は阿鼻叫喚とかわり、鋭くつんざく、悲鳴に近い嬌声に、思わず辟易して、振動をとめると、口中に深々と白布を押し込み、その上から更に大きく更紗の布切れで、しっかり猿轡を嵌めてしまった。

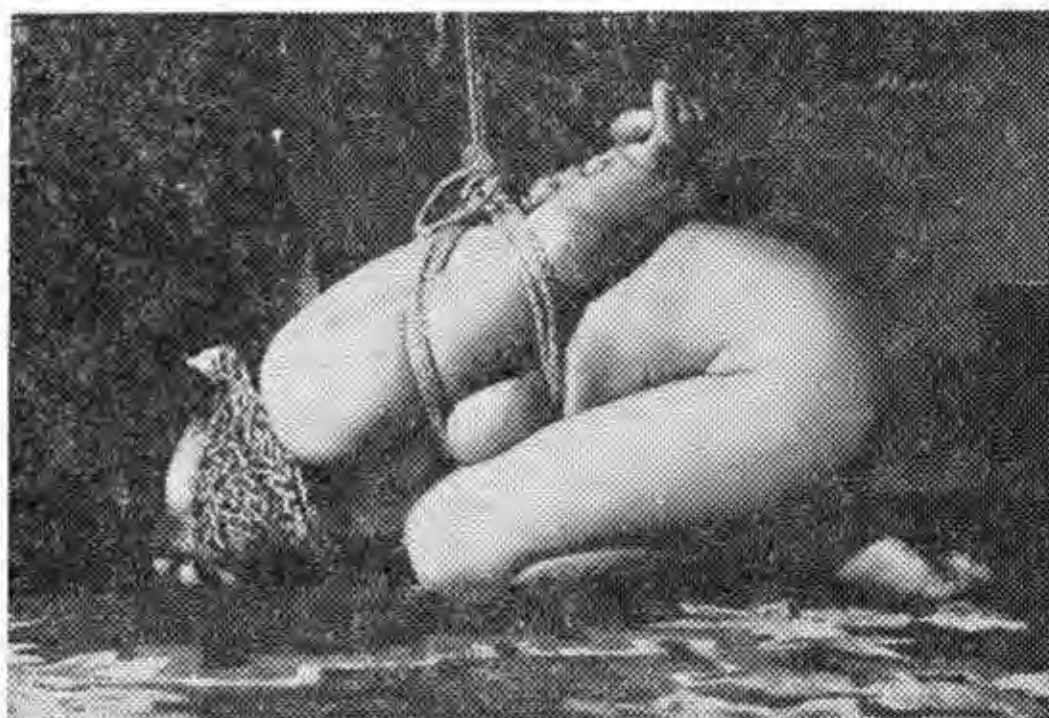
浩子にとって、パイプの体験は、おそらく始めてのようであった。若いお手伝さんと、坊っちゃん大学生の、恋愛ごっここの遊戯の中に、パイプレーターは介在しなかったようである。

女体の反応は余りにも敏感であった。女心を燃え上がらせるパイプの洗礼が、余りにも敏感すぎることで初体験を裏書きしていた。

しかし、私の行為に対して、拒否のいろは更になく、むしろありったけの声を張り上げてひたすらに、その甘美なる愉悦を全身で受け止めて、感潮の測に身を投げ出したがっている様に思えた。

浩子の余りの絶叫に驚き、猿轡で緘口令をしいて、再び私の作業は始まる。

電撃のショックの長びくにつれて、くぐも



る叫喚は激しさを増し、腰椎はくねりくねり、焦点を失った曖昧の双眸は、あらぬ方をみつめて、全身を貫く悦楽と愛虐の欲びに高村浩子はソーレツに、のたうち廻った。

ピクン、ピクンと、まるでケイレンを起したかの様に、屈曲した両脚が空を蹴って跳ねる。歓喜の測を幾度となく彷徨した果てに

彼女はカッと両眼を引きつらせ、けものめいた呻きと共に、一瞬ぐったりと死んだようにピタリと動きが止まってしまった。かりそめの失神に襲われて、全身の力が、俄かにぬけていったのであろうか。

目的を果たし終わって、冷酷に私はカメラに歩みよる。被虐の願望を果たしたとはいえハタチの娘にとって、それは余りにも華麗な衝撃であつたに違いなかった。

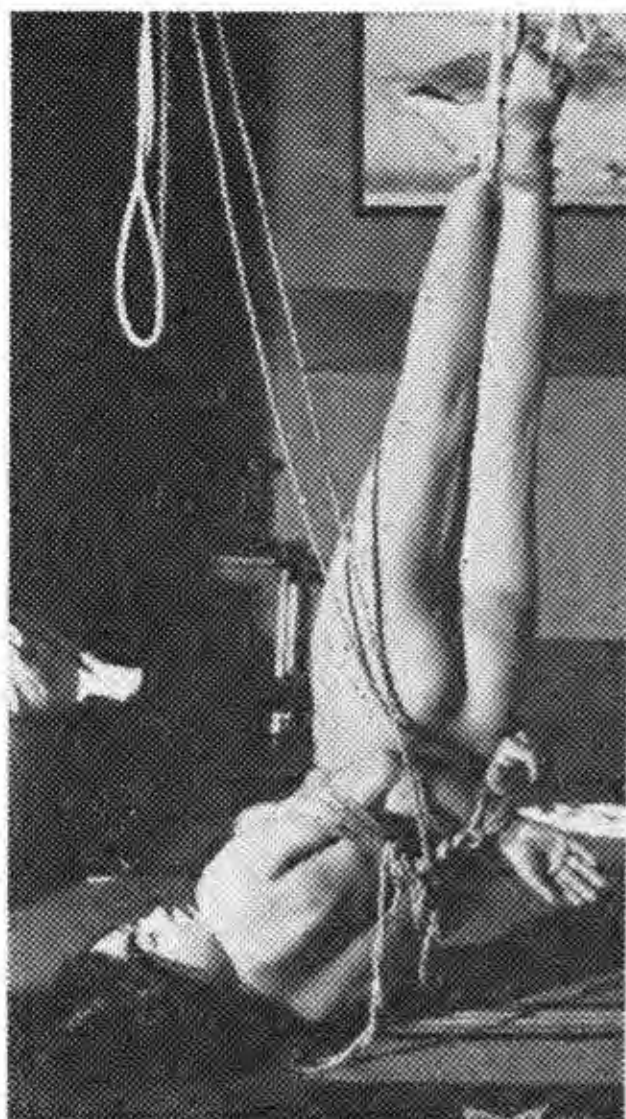
静かに、ゆるやかに、女体に生気が蘇ってきた。縛られた裸身が、微かに動き始めていた。

ぐったりとした体を抱え起こして、正座に坐らせる。縛られた両足首がねじれ、縄が引きつって苦しげであつたが、腿に密着した乳房を、大きくはみ出させて、浩子は魂を奪われたかの様に、易々としてポーズをとった。

横転しないよう、鴨居に縄を引いて体を固定させる。

のたうち廻った今の惑乱で、黒髪は藻と乱れて、放心した彼女の顔面の半ばを蔽っていた。

芯張棒をかうように、足首の縄で、パイプの底辺を支え、自動的に振動が伝わるようにして、私は再び浩子の反応を静観していた。



又しても甦る快感が、急速に全身に浸透してゆくのか、陶酔を双眸にみなぎらせて、彼女は愛虐の願望を満喫するかのように、猿轡の奥で呻き喘いで、豊満そのものの乳房を震わせて、眼前でうごめいた。冷徹なカメラが刻々変化する浩子の女体のうごめきを捉えていった。

その恍惚の姿態に、嗜虐の血は、けたたましく雄叫びを挙げて騒ぎ、思わず私は女体を足蹴にしていた。二度、三度——、鴨居でつなぎとめられた裸身は、グラリグラリと左右に揺れ、鴨居が激しく、きしむ。はずれたパイプが、カーペットの上で、けたたましく踊り狂って、跳ね上がった。腿に密着した雄大

な乳房の隙間にパイプを押し込むと、女は狂おしく不自由な胸をよじって、猿轡の奥から嚔り泣きが洩れてきた。

猛々しく見下ろす私の足が、彼女の後手の両手の上にのって、拍子をとってゆさぶっている。果ては鴨居にぶら下がり、両足を女体にかけて激しくゆさぶり続けるのであった。

疼く心が、私に逆吊りの慾求を持たせ始めていた。しかし、近頃の私の力では、一人では一寸、無理であった。それに近いもので満足するより仕方なく、咄嗟の思案で、鴨居の縄をゆるめると、乳房を驚揺みにして、上体を起こし、足首から胸に繋いだ縄をとくと、すかさず、足首の隙間に、新たな縄を挟み通して、両脚を抱くようにして鴨居に吊り上げてゆく。

双脚は直線に伸びて腰が浮き、敷居上の肩が、痛々しげに、辛うじて上半身を支えていた。ピクピクと指先が苦痛に耐えてケイレンしている。

宙に揺れ動く腰を抱

え、白くなめらかな臀部に、唾液を撒きちらして唇を押しつけてゆく。嗜虐の感情の昂ぶりは、愛撫のくちづけというよりも、むしろ愛咬に近い激しさで、吸いつき、歯を立てる白い肌に、ありありと紅斑の、愛虐の花が次々と咲いていった。

宙ブラリンの下半身が切なげにくねる。猿轡の外れた唇から、悦楽の妙なる楽が奏でられ、ソロの奏鳴は、高らかに愛欲をうたっていた。

春の若草の、新芽の柔らかさを貧婪に求めて、狂おしげに唇は移動してゆく。歓喜の極致に悶える浩子の口辺から、たらたらと唾液が流れ、一入激しい悦楽の、なまめいた狂奏曲が、こらえようもなく嬌々と流れた。

特有の女臭を舌端で嘔みしめ、

「どうだ、分かったか、プレイの味が……」

と喘いで叫ぶ私に、

「ああ、苦しい……もうやめてえ。いいの、嬉しいわ」

途切れとぎれに、めくるめく官能の靡れに酔った、愛欲のたわ言が、浩子の激しく喘ぐ唇から洩れていた。

× × ×

彼女の肉体は、春冷えて、かなりつめた



なっていたが、情欲にかり立てられた私は、一休みのいとますら与えず、堅くよくしまる太い麻縄で、心の乱れその儘に、滅多矢鱈に高村浩子を縛り上げていった。

使い終わった縄が部屋一杯に散らばり、次々と手を変え品を変えて縛ってゆく、私の激しい心の動きを示すかのように乱れていた。

既に自己を喪失した浩子は、一片の抵抗すら示さず、私の暴挙のままに裸身を残る限なくさらけ出して、すべてを投げ出していた。

願望の陶酔の極致の峠を幾度か越えた今、もう何をされてもいいような心に成り果て、若し仮に、私がその気になって挑みかかれば、

(セックスだけは許して)と洩らした言葉もおそらくは忘却の彼方へ追いやって、易々諾々、むしろ欣然と、桃源の門を開いて、私を受け入れ、快楽の深淵に溺れ込んでいったに違いなかった。愛虐の極致に到達した時、理性は麻痺し、刹那の快楽に流されてしまう。

もうどうなっても、どうされてもいい——。

M願望の究極の心理は、当然の帰結の様に総てを私の前に投げ出していた。いや、むしろ自ら投げ出したがって、女体を自由に翻弄されること自体、被虐の最高の悦楽につながっていた。

偉大に突出した乳頭にパイプが躍れば、浩子は快楽の余り、大声を張りあげて、その反応を如実に示した。

判つきり一匹の、マゾヒスティックアニマルと化した牝の本性は、飽くことなき愉悅を追求して、その女体は疼きに疼いていくようであった。

大声に辟易して猿轡を嵌めても、歓声を立てたい昂ぶりが、顔面を床にこすりつけて、いつの間にか外していた。

女の美德と考えて、激しく声を立てたい慾望を懸命に殺す女人と、歓びをむき出しにして、激しく愛欲に咽ぶ女人の、どちらが男性にとっていいとは一概に云えないにしても、今ここに見る高村浩子は、精一杯の魂切る嬌声を、こらえようもなく吐き出す、最右翼のように思えるのであった。結婚して、狭いアパートで暮した時、近隣は、浩子の愛欲の極みの涕泣、嬌声に、うんざりするに違いなかった。

たった一個の小型パイプが、かくも浩子に激しい感銘を与えるとは、そこまでは予想し



ていなかっただけに、彼女が如何に敏感な女体の持主であるかを、如実に見た思いがして若し彼女に、大人の玩具を総動員させたなら果たしてどの様な結末を招くだろうかと、私は内心、少々はあきれ気味で、そのくせ、振動の手はやめなかった。

縛られた女体を、狂おしく波打たせ、この一瞬に、すべてを投げ出しているかの様に浩子は激しく、のたうち廻った。最早、そこには羞恥のかけらもなく、あるものは被虐願望の本性をむき出しにした、赤裸々な露出を曝すことに歓びを見出す、生ま生ましい生感だけであった。

激しく悶えるうち、縛った縄の或る箇所はゆるみ始め、態位によって或る箇所は、必要以上にきつく締まって、白いふくよかな肌を暗紫色に変えていた。

腿を開かせるため、背へ回して引き絞った縄も、いつしかゆるんで、開股の太腿は、ずり下がっていた。

持論でゆけば、SMプレイの前提の手段に過ぎない緊縛も、浩子自身の激しいM性が、緊縛を悶々のプレイに変えていた。

縄は今や、すっかりSMプレイに融け込んで、凡そ緊縛美からは縁遠い、この縛りが、結構SMプレイに役立っていることを私は感じた。ポーズの折々を、時偶、気が向けば撮るだけで、私の心はカメラから離れていた。そのくせ、永年のカメラ、ハント根性が、やはりチョクチョクと顔を覗かせては苦悶の愛虐のポーズにカメラを向けていたのである。

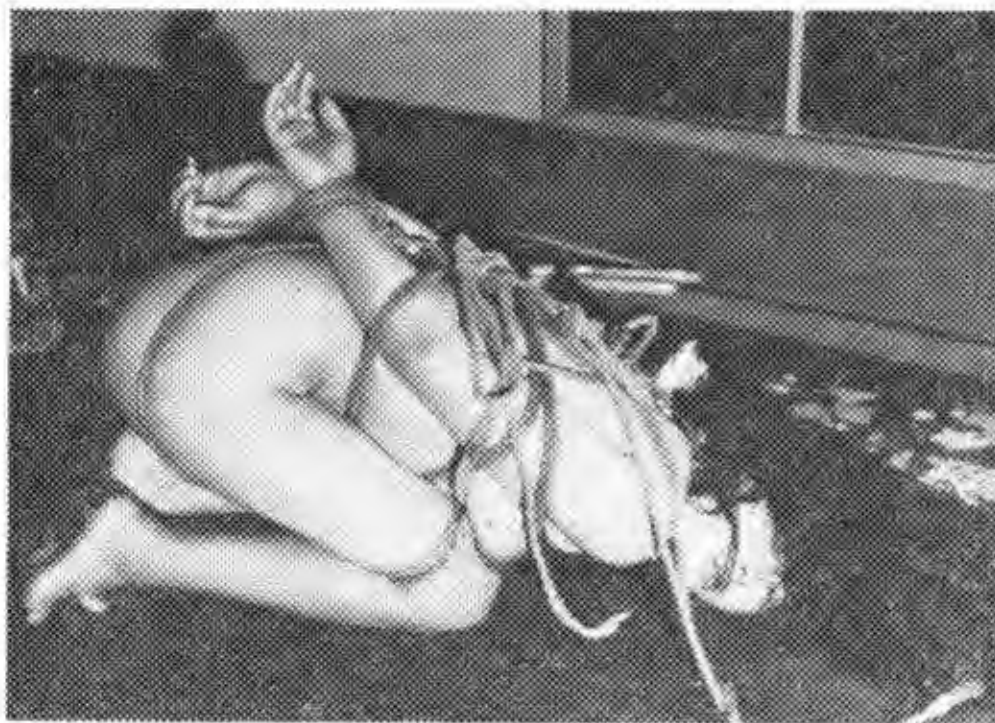
この若く張りきった女体は、ひたむきに愛虐のプレイを求めている。過去の私なら、それを見捨てて、次々とポーズを変えては、専らカメラへばかり心を走らせていたであろうに、世相が変われば、私の心もいつしか変わりつつある。

近頃の私のハントは、確かにカメラは従属

のものに過ぎなかった。

愛虐のプレイにかり立てられる私の心は、乱れた縄目に手をかけ、浩子の尻を持ち上げるようにして、比較的柔らかい、まだら縄を束にすると、愛虐の縄ムチを振るい始めていた。

苦悶と快楽のないまざった激しい呻きをあげて、浩子は蕩然と打擲の行為に酔い痴れ、



発止と打つ毎に括約筋がピクンと収縮した。見る見るピンクの条痕が、臀部の白さの中に鮮かな縞目模様を浮かび上がらせてゆく。縄鞭を甘受して、彼女は被虐の歓びを更に昂め痛撃の中にそれを望んでいた。

鞭の間に間に彼女は何かきれぎれに呟き、それが私に訴えかけているように思え、縄を捨てて、抱きすくめるようにして、そのうわ言に耳をすますと、

「あたし、どうなってもいいのよ……もっと虐めて……もう、どうなってもいいの……セックスもいいの……構わないの……ああ、もう死にそう……」

一と、M願望の果たされた歓びにたえきれぬかのように、あらぬことを、途切れとぎれに口走るのであった。

快虐に身をゆだね、恍惚の境地を夢心地で逍遙する、被虐を冀う女性の、それは本心であったことだろう。

所詮、悦虐の果ての、めくるめく陶醉とい、身も心もとろけそうな恍惚も、すべては性感の満喫と、充実と、飽和につながっているに外ならない。それが赤裸々な、女性本来の心のあり方ではなからうか。

M願望といっても、純粹のマゾヒストは、



案外、少ない。究極は性につながるのが、自然の成行き心理と思う私の信念は、高村浩子の口走る希求にも判っきりとそれを見出して、内心の自負は、かたまっていった。

理性が支配するプレイ前には、肉体の潔白を冀い、性への冒瀆の不安におののいていても、没我の境地に埋没した時、M女性の最高の悦楽は、性を度外視しては求められぬことは、既に幾多のハント女性で立証済みであった。若い高村浩子に於いてすらも、又その例外でなかったことに、私は秘かに快哉を叫びたい気持であった。

しかし、忘我の被虐の、快楽の酔いからさめた時、女は再び理性のかくれ蓑の中へ隠れ時によっては、悔恨にさいなまれる女性もあった。

高村浩子の妊娠の事実を知る私にとって、快楽の極致のたわ言に便乗して、S性の昂進する俚に性に走った時、甘美な酔いから、さめた時の彼女の心に、深い傷痕を残すことは紛れもない事実であった。

私の欲望を押さえることによって、被虐の淵から這い出して、自己をみつめた時、彼女は必ずや安堵の喜びと共に、一片の感謝の気持を私に残して、去って行くに違いない。

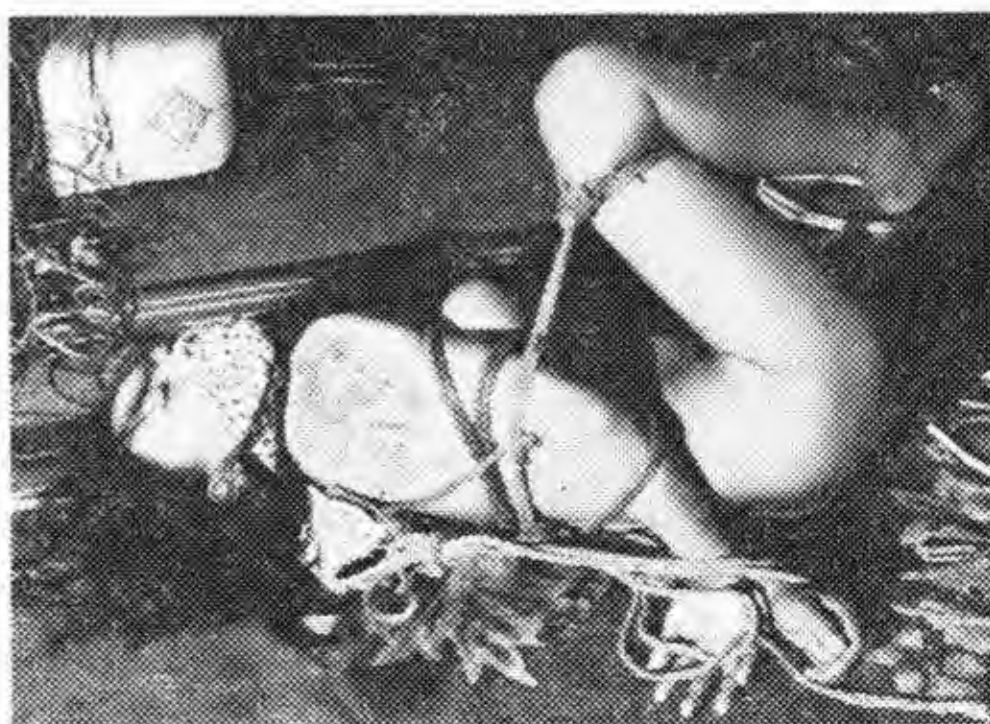
そう考えると、私の理性は辛くも働き、ともすれば逸り立ち、据膳喰わぬは男の恥的ないきり立つ神経を、ぐっと押さえて、それに替わる、強烈な、緊縛を伴ったSMプレイに終始しようと腹をきめたのであった。

被虐の増埒に身を投出し、打擲され、鞭打たれた浩子は、その苦痛の欲びをかみしめ、更に激しい、性につながる究極を求めるかのように、その俚、ぐったりとして動かなかった。三たびパイプも曲なしと、縄目をぐっと引き寄せ、指先がパイプにとって替わって、じりじりと蠢動を起こし始めていた。

× × ×  
構わないという彼女を、命じるようにバスへ行かせて、冷え切った体を温めさせる。

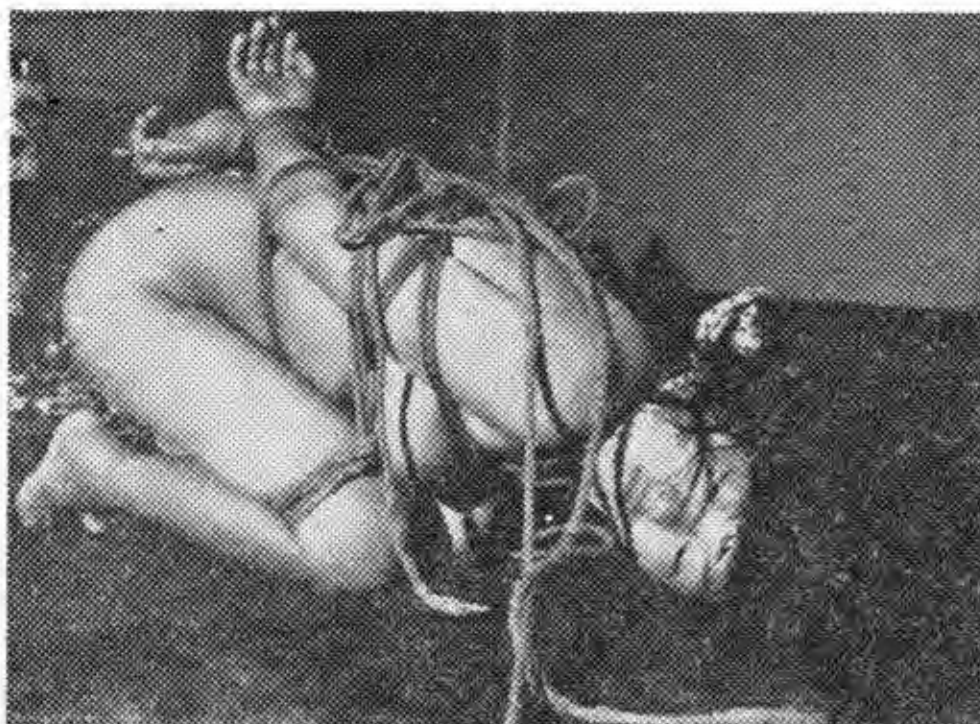
四月という時季は、暖房と冷房の谷間で、着衣で過ごすには快適であるが、裸身を曝す場合、長時間に亘ると、やはり全身に肌寒さを感じ、謂わば全裸のプレイには、中途半端な気温であった。ホテルもこの時季は、冷暖房をとめてある所が多い。

ゆっくりと煙草をくゆらせて、バスから上がってくる時間待ちの間、私は最後の段階の強烈なプレイの緊縛に、あれこれと思考を走らせていた。



感情のつながりの出来たハント女性とならこんな時、往々にして一緒に入浴するのであったが、何故ともなく、高村浩子にはそれが憚られたのである。心の奥底に、受胎の一事がこびりついていて、S男性とM女性との、素直な仲には、なり切れなかった。

気付かぬ筈のない、その厳肅なる事実について、彼女は未だに一言も触れない。私も敢



えて訊ねようとしなかった。そこにどこか心の通い合わせ隔りがあった。

所詮は、SとMというプレイだけのつながりで、その俤別れてしまう可能性の方が強そうであった。とすれば、SMプレイの最後の華を飾るべく、ヒイヒイ悲鳴をあげるまで、トコトン強烈に虐め尽してみたい、嗜虐の衝動にもかられてくるのであった。

バスの扉を閉める音がして、部屋に戻ってきた高村浩子はすっかり大胆になっていた。

桃色に染まった全裸の、湯のしずくを拭い乍ら、蔽いもせず、私の眼前に平然と立っている。きつく縛った縄跡が、未だに歴然と、彼女の二の腕や脇腹に残っていた。

ほんのひととき前、乱れに乱れて、あらぬうわ言を口走り、痴態に狂奔したことを、もはや忘れ果てたかのように、彼女はケロッとした顔付で、あらし放題の雑然とした部屋を見廻していた。先程までの一連のプレイが、まるで夢か幻の中の出来事のように思われるのであろうか。

「SMのプレイは始めてのようだね」

「ええ、生まれて始めてです」

「どうだった？」

「悪くありません」

「ということとは、とても満足したということかね？」

「ボーッとして、何だか分からないのです。

もう夢中でしたから……」

浩子は両手で頬を挟み込み一寸考え込むようにしたが、自分のこの感情をどう説明していいのか、適当な言葉も見付からぬ様子で顎を落として、甘いもの思いに耽っている。

「吊ってやろうか？」

猛々しい感情が湧然と起こって、そういうと、浩子は黙って、コックリとうなずいた。この若さで、どこまで被虐に耐えられるか、実験してみたい心に逸り、使い馴れた、まだら縄を手にとると、ぼんやり佇む彼女に近付き、鴨居の真下まで誘導して、上半身を、ぐいぐい力をこめて犇と縛り上げていった。白い布でしっかりと猿轡をはめ、背伸びするようにして、敷居際に直立させ、縛った縄の背に、別のロープを結んで、爪先立ちになるくらいまで引っ張って、鴨居でしっかりと結び終わる。

よろよろと爪先でよろめく浩子の臀部に、鮮烈な音を響かせて、平手打ちが炸烈する。ついで、片脚を握って、高々と上へかかげ上げ、グルグルと廻転させ乍ら、眩しい個所から眼を外らせて、私の掌は、内腿や豊かなおしりに、容赦なく飛んだ。くぐもる呻き、強烈につれて挙る叫喚が、私の嗜虐心を快く刺激する。

手を離すと、爪先立ちのポーズは、いつしか伸びて、浩子はタタミをふんまえて、大きく肩で息をし、眉間に受虐の愉悦がヒタヒタと流れていた。

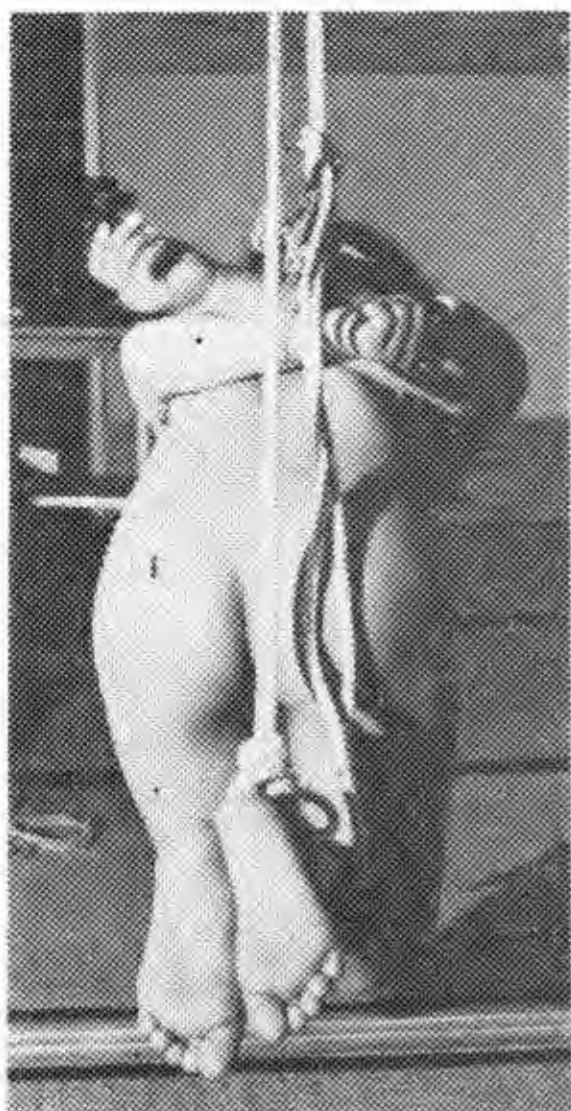


両足首を別の縄で縛り、じりじりと鴨居へ縄を引っ張り上げると、浩子の体は宙に浮き始める。頃合を計って縄を止め、この宙吊りを、前後左右から、しばしカメラに納めたあと、このすべての抵抗を失った女体を、じわじわと、いたぶることにした。

腹を縛った縄に吊縄が掛かっているの、胴縄は深々と腹に喰い込み、側面から見るとなんと横腹の縄の半分が、くびれた胴に陥没して、見るも無惨に締めつけている。

ポカッと大井のように飛び出した乳房の尖端にパイプをあてがい、腰を手で押して、ゆらゆらと空間に女体を泳がせて、柔縄の束で力をこめて臀部を打擲する。

猿轡を圧して、浩子の悦虐のわめきは、華



々しく私の耳朵をうつ。何か叫んでいるようである。苦痛の限界を訴えて、やめてくれというのかと猿轡を外してやると、どっと吐き出された願望の雄叫びは、さながら女獣の咆哮するように、けたたましく部屋中に轟きわたり、激しい涕泣と苦楽の欬極まった慟哭は鞭打つ音も、かき消すばかりに、凄まじく、その叫声が一層、私の嗜虐心を、あおり立ててゆくのであった。

「どうだ、降ろしてほしいか？」

ビシリと鞭縄になる。

「ヒューッ」

と、わめいて、

「ああ、息がつまる……死にそう」

喘ぐ、途切れ途切れの言葉に、甘美な悦虐に酔った匂いが、こもっていた。

「あと、一分だ」

「あ、あと、一分……」

つづけさまに鞭が飛び、パイプは五体で喰る。胴は、いよいよ締まってゆく。おそらく腸の蠕動運動は、この刹那、停止していたに

違いなかった。

ボタボタと、折れ曲った膝頭から、苦悶の液体が、尾を引いてカーペットを濡らしてゆく。我慢の限界で、女は必死と力み、下腹に力が入った結果、思わず洩らしたのであろうか。苦痛の原因は、極端にくびれ込み、陥没した腹をしめつける縄にあった。私はソクサと足縄をといてやると、ぐったりと伸び切って、足をタタミにつけたが、暫くは力が入らず、上体を吊られた俚に、気を失ったかのように、身じろぎもしなかった。

吊り縄を外すと、胴をしめつけた縄がゆるんで、浩子は後手の俚、ヘタヘタとその場に崩おれてしまった。

しつとりと濡れそぼったカーペットへ、浩子の顔をぐいぐい押しつけ、乱れた髪を驚掴みにすると、激しくこすりつけていった。

縄を解いても、死んだ様に動かない。ピシヤピシヤと尻を叩くと、次第に反応が戻ってきて、たゆたうように、女は五体をくねらせた。

「もっと虐めて欲しいか？」

感情をむき出しにして肩を掴むと、頬をケイレンさせて、浩子は微かにうなずいた。

最後のピリオドを打つ緊縛は、猪吊りとき

めた。短かめの麻縄をとり上げ、両手、両足を荒々しく、きつく縛り上げる。女はされるが俚に身を任せていた。肉に喰い込むこの麻縄で、じかに手足を縛って吊れるものかどうか——。勿論、吊り下げることが問題ではない。その吊り下げの激痛に耐えられるかどうかという問題であった。

縄が既に手首に喰い込んでいるのか、吊らぬ先から、浩子の両手は少し色が変わりつつあった。

座敷机を敷居のところまで引きずってくる、女体を抱き上げて、その上にのせる。

手足の合間へ、丈夫な白縄を通して、両手足をぐいと持ち上げるようにして、しっかりと鴨居に繋ぎ止める。

浩子は陶然とした面持で、やがて猪吊りに吊り下げられるその苦しさを、悦虐に酔い痴れて期待しているようにすら見受けられた。

私は徐々に机を引いてゆく。片手で女体を受け止めるようにして、思い切った体から机を離すと、数センチ重みで、ずり下がった女体が、鮮かに空間に、ゆらゆらとゆらめき、手首と足首だけにかかる全身の重みで両手はみるみる赤黒く、変色していった。

あわただしくシャッターがきられて、ゆら

めく裸身を、閃光と共にとらえ十枚近いフィルムが廻転していった。

普通のモデル女性なら、忽ち音を挙げるこの強烈そのものの吊りを、浩子は陶酔でこらえ、時偶、口をついて出る苦痛の呻きにも、どことなく甘さが滲っていた。

カメラを投げ捨てるように措くと、私は女体に手をかけて、前後に大きく揺する。ギイギイと鴨居がきしむ、悲鳴と叫喚がそれに合奏した。

タタミすれすれに垂れた黒髪が豊かに拡がり、サヤサヤと揺らいだ。

太い蠟燭をとり出し、点火すると顔面数十センチの高さから傾けてゆく。

ポタ、ポタと熱滴が、女の口辺に、頬に、顎に落下する。ううと大きく呻いて開いた口腔に、落滴は吸い込まれていった。

左手が、縋縄の束ねた筈となって、愛撫するかのように双丘を撫でていた。

縄を握った手で、ぐいと腿のあたりを強く押し、肩を押して、吊り下げた体を廻す。手

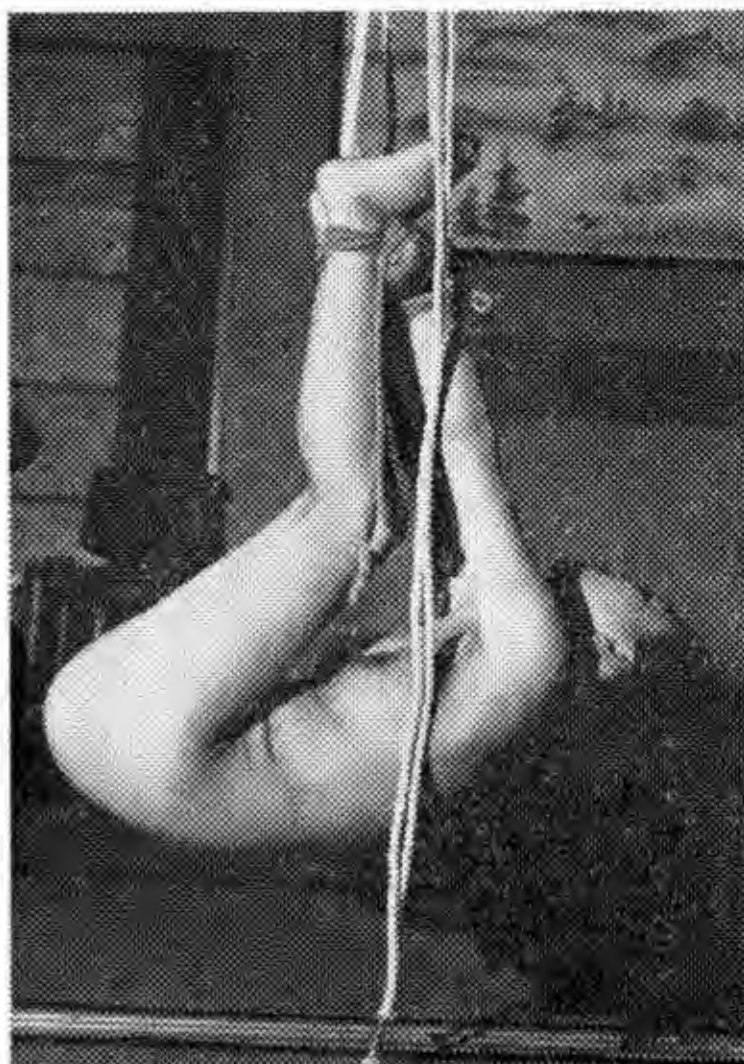


を離すと、女体はゆるやかに廻転を始め、その顔面に、腿に、双丘に、亀裂にと、適確に蠟涙が落下していった。

もう彼女の両手は、暗紫色になり、おそろく感覚は完全に麻痺している様に思われた。それでも浩子の口から、「やめて」という言葉は洩れない。ウンウンいいつづけ乍らも、必死の気力でこらえて、只管に猪吊りの、この緊縛の極致の、苦悶の快感に浸り切っているかにみえたのである。

蠟涙の落下点を、徐々に肉体に近くし、手にする蠟燭と女体の距離は二十センチぐらい





に狭まっていた。

敏感な個所に集中攻撃をかける熱涙弾に、浩子の呻きは一入昂まり、空間に身をよじらせ、号泣に似た嗚咽の激しさは、苦悶と官能の疼きをミックスさせた、Mの極致の歓びを如実に現わしていた。

火を吹き消し、作業を終えて、机で体を支えてやると、蠟にまみれた浩子は、ぐったりと息もたえだえに、大きく喘いでいた。

こぼれ落ちた蠟骸のあと始末に一苦勞し、肌にくびりついたのを、剥ぐように取り去ってやるあいだ、彼女は空虚なまなざしで、み

つめるでもなく、ぼんやりと眼を落としていた。余りに激しく迫った、悦虐のプレイに、彼女は思考力も失せて、忘然自失の態であった。

おそらく、これら一連のプレイは、時間の経過と共に、強烈に浩子の印象に刻み込まれることであらう。

プレイに気力をこめていただけに、それが一段落すると、流石に年令的な疲労がドツと襲いかかった感じで、私はベッタリとタタミに腰を落として、大きく呼吸していた。

手首の縄の跡が、深い溝を皮膚につくり、くびれて痛々しく赤く染まっているのに眼をやり、

「君が一向に降ろして呉れないものだから……。痛むかい？」

少しやり過ぎた感じにとらわれ、思わず弁解がましくいうと、

「いいんです。私気が遠くなりそうでした。顔や体一面に蠟燭のしずくを流され、自分も

遂々こんな経験を持てたのだと、辻村さんにおしりを叩かれ乍ら、そう思ったのです。すごく苦しく、手足がもげそうに痛むくせに、ジーンとしびれるような歓びを覚えました。SMのプレイって、これなんだなって……」

眸に光が射し、浩子は思いがけず、判っきりした口調で応えた。その言葉は、被虐願望の真髄をついていた。

「私とプレイして、もう懲り懲りしたのじゃないのかい？」

「そんなこと……」

「近頃は緊縛に余り情熱を燃やさなくなってきた。何かすべてやり尽したって感じでね。緊縛はSMプレイの前提条件みたいになって専らプレイに溺れているといった方が本音かも知れない。しかし、今日は珍しく、何かヤル気になったよ。あんたの若さと、被虐願望の女体に魅せられたのかも知れない」

「私がセックスを拒んだから、反動的に緊縛の方へ走られたのでしょうか？」

「かもね。しかし、それだけの原因でもなさそうだよ。その気なら、あんた先程、口走っていただろう、セックスも構わないって——夢中で叫んでいたからね。でも何だか、君とは、そうなりたくない気持なんだよ」



「どうしてなんでしょう。私、女としての魅力がないのでしょうか？」

視線を落として訊ねる浩子の、その口調はどことなく物足りなげであった。

「そうなのは、いけないと思う自制心の方が強いからだろう。いい換えれば、すべてを曝け出して、私に迫るあんたが、あとで後悔しないかと思って……」

「……………」

沈黙が流れた。浩子は深く何事か考え込んでいる。

「SMのプレイの果ては、結局はそうなるのね。信頼し合った男女がプレイすれば、それが当然の成行であることが、何だか分かるような気がして来ました。辻村さんは、いつか

ハントで書いていらっした様に、確かに

理性の強い方ですわ。でも裏返せば、その理性という言葉で次々とハントを続けてゆかれる心は、非情で、冷酷のようにも思えます。

その場限りの情熱を燃やされても、すぐ忘れて、又、次の女性をハントなさるでしょう。

でも一旦、体に火をつけられた女性側は、それで、そうあっさりと割り切って、忘れられるものでしょうか——」

高村浩子は、私の最も痛いポイントを適確に、鋭く剔抉してきた。それは、或る同好者からも指摘されたことであった。

ロマンチストだとか、フェミニストだとかいわれ、SMの甘美な嗜虐行為を、柔らかに包含し乍ら、その実、次々とハントを続ける

私という人間は、自己の感情を、理性という美名でくるんだ、非情人間だというのであった。

確かに一面、そうみえるかも知れない。しかし、私が今、理性を忘れて、一人一人の女性に感情を移した場合

どうなるだろう。

家庭の崩壊、本職の放棄、人間失格etc——。そのすべてが、カタストロフに繋がっているのではなからうか。

修養団体での長年の尊師の教えも、理性を保つ一つの手段であり、理性の確立が、カメラ・ハントを永続させる唯一の拠りどころではなかったか——。

しかし今、この若い高村浩子が、いみじくも指摘したように、時によって、その理性が大きいブレーキともなり、時には感情の齟齬を来たすこともあるのであった。

「私と、ハント女性とは、緊縛とか、SMプレイ、或いは夫婦プレイなども、SM的な行為による結びつきにしか過ぎないと割り切っているんだよ。だからプレイバシーは知らないし、努めて聞かないことにもしている。だから、その場限りでいいと割り切っているのさ。あんたとのプレイにしても、プレイだけでいいじゃないか。あんたの心の中まで、喰い込んでいったとしたら、むしろ困るのは、君の方じゃないのかね」

そういつて、私は黙って、白々とした乳房に、迷路のように血管の走る乳暈に眼をやった。彼女はハツとした様子で、そっと両手で



むき出しの乳房を蔽うようにした。

「問いつめない方がいい場合もある。そうじゃないかね」

重ねていう私に、彼女は愧らうように眼を伏せた。告白しようか、しまいかと、心は迷っているようであったが、思いきったように昂然と顔を挙げて、

「何もかも、辻村さんはお見通しのようすわ。実は私……」

「いや、いわない方がいい。かなり人よりは多く、女体探求して来た私だ。いえば、それにつれて、あれもこれも、言わなくてはならない。プレイは終わったのだよ。Sの男と、Mの女が、或る日、某所で出会って、お互いの心を激しく燃焼させ、SMのプレイに耽溺し、気持よく別れる。そして又明日からは、別々の道を歩く——それでいいじゃないか」

「分かりました。御縁があれば又ね、ということですね」

「私のことなど、ここを出たら忘れて、あなたの彼氏と、愛情をしっかりと確かめ合うことだよ。ハッピーエンドを切に祈っているよ、あなたの体の為にもネ」

高村浩子の顔が一瞬羞恥にまたたき、私に對する仄かな恋慕に似た愛惜の情は消えてそ

こはかとなき幸福感が泛かび上がってきた。

それでいいのだ、それで——。

私は一人の若い妊娠中の女性に、心の傷痕を残さなかったことで、私自身満足し、軽いかいた汗を流す為、バスに向かった。

部屋に戻ると、散乱していた縄やカメラ類が、黒革袋の傍に、一箇所に纏められ、彼女は既に服装をととのえて私を待っていた。

カーテンを開くと、陽は未だ高かった。

「家の近くまで送ろうか？」

「ええ、有難う——。本当は私、今日は夜までお休みいただいていたのです」

「もっと虐めてほしかったの？」

「或る期待はしていました」

「久し振りにハッスルして、かなり疲れたよ

私は——」

「私も何だか体中の節々が痛みます。でもこの痛みが、今日のことに繋がって、忘れられないと思います」

「君は、いい子だよ」

「恋愛は恋愛、こうした行為は、こうしたことと、割り切っているつもりです」

「抱いていい？」

彼女はポツと頬をそめてうなずいた。かかえるように抱きしめると、浩子の腕が私の首

にかかり、甘えるように唇が迫ってきた。

軽くくちづけして、体を離すと、女の眼が求めて燃えている。

別れる間際になって、プレイを通じて体得した心の触れ合いを見て、私の心は、ともすれば崩れそうになる。

年令の断層を一気にのりこえて、私は高村浩子にこの時、激しい愛情とジェラシーを覚えた。

告白しようとする彼女を押さえたのは、外ならぬ、この私である。SMプレイの極致から移行した、セックス感情を押さえきれずに迫る彼女に、私の心は大きく揺れる。

「さあ、帰ろう。余った時間は彼氏とでも過ごしたらどう」

無惨に振り切って、私は帰りを告げる電話をする。

一瞬、断たれた情念に、浩子の表情は怨めしげに変わり、さらに仮面の如く強ばって、私から視線をそらした。

再び会うこともあるまい——。そんな予感で私は静かに煙草をくゆらせていた。

カット・岡たかし



告 白

## 私の浣腸プレイ

並 原 新 一

私はこれまでにいろいろな浣腸プレイを楽しんできました。

最初、その不思議な魅力にとりつかれた頃は、イチジク浣腸の一、二本を注入しただけで、迫ってくる便意を楽しみ、あとはただ、トイレに走るだけという単純な、プレイともいえないようなもので、看護婦さんの手で無理矢理されているのだという空想や、サディスチックの女性に罰せられているという空想をするだけで満足していたのです。

尤も、多少は不満足であっても、不幸にして、いい女性の相手がみつからなかったのですから、独りでプレイする以外にしかたなかったのですが……。

そのうち、ある日のプレイで調子にのり、

三本一度に注入してしまい、もう我慢が出来なくなってしまうのでしたが、ついに間に合わずに途中で粗相してしまったことがありました。アッと思った時には既に手遅れだったのでしたが、あの、なんともいいのようない独特の感覚と、大の男が赤んぼのよううに、しかぶってしまったという、恥かしさで全身がしびれ上がってしまったことは忘れられません。そして、その瞬間から、私は生来、このズロース・マニアの性向とマゾ傾向が、この素晴らしい羞恥感覚に結びついてしまったようでした。

それから以後、私は、白いズロース、赤い

パンティ、黒のブルーマー、ピンクのメンスバンドなどを、便意の激しくなるのを耐えに耐らえた末にトイレには走らず、何十回、いや何百回、汚してきたことでしょうか。

大人用のゴムのオシメカバーを買って、幾重にも紙オシメを重ね、ふとんの上で、三〇〇ccのグリセリン浣腸を二、三回注入した効力に悶え抜いて、頭の中に居る美しいサディスチンに「もう我慢できません。許して下さい」などと哀願しながら、遂に迫りくる便意の激しさに耐えきれず、粗相をしてしまう瞬間の快感……。

私のプレイの時の空想はだんだん具体性を帯び、ときには浣腸をした上でメンスバンド



を穿き、オシメカバーをつけた上で、自分の手足を縛って、浣腸責めをされている気分を味わったり、ときにはオシメを当てた上からズロースとズポンを穿いて外にとび出し、人の行き交う通りを歩かされている自分を想定したりするようになりました。

そのうち、私の下着マニアの面もすすんできて、黒いストッキング、ガーター、コルセット、シュミーズ、ネグリジェなどがトランクの中に増えてきたのですが、それに負けなように、オシメカバーも絵ゴムのアメ色のものからビニール張りのナイロン製のもの、美しい模様のついたズロース型のものまで、いろいろと集まりましたし、その上、イルリガートルまでも、何時の間にか揃ってしまっていたのです。

浣腸プレイも自然と工夫を凝らすようになって、グリセリン、石けん水、ハチミツ、牛乳などを試み、街中での粗相気分を味わうために考えたのが、ミソ、コンニャク、ソーセージ、ゼリー、ウドン、チーズなどに依る人便でした。これは、感覚はあるが臭いがありませんので、電車の中や映画館の中で、美しい女性を見ながら、浣腸責めにされる自分を想定するのに大変重宝でした。

私の独りプレイの中に出てくる責められる私は、実に哀れな受刑囚です。

本当に薬をのんで三、四日、便通を止めておいて、苦しいぐらいに腹がはったところへ二〇〇ccのグリセリンが注入され、いよいよザンコクなお仕置が始まるのです。

こんな時の美女サディスチンは、私にわざとオシメカバーを与えてくれません。薄い純白のパンティ一枚だけになることを命じられるのです。そして私は、この美女の手で後ろ手に縛り上げられ、大きな鏡の前に引き立てられます。そこにはビニールを敷いたヒジ掛け椅子があつて、私はその椅子に大股開きに坐ることを命じられるのですが、その頃には既に二〇〇ccのグリセリンが私を苦しめ始めています。私は全身をガタガタと慄わせながら、美しいサディスチンに向かって「どうかお許し下さい」と哀願しますが美女は許してくれどころか、私を椅子に坐らせてハイヒールの踵で腹や太腿を蹴り上げたり踏みつけたりするのです。「ああ、もうもう駄目！」私はこのザンコクな責めに悲鳴をあげます。すると、鏡の中で縛られている男が同じように悲鳴をあげ、たった一枚だけ許されている白いレースのついたパンティが、見る見るう

ちに汚れて行き、男はガックリとうなだれてしまふのです。

又、私は、不良少女のグルーブに捕えられ、時もあります。その時の私は、パンティからコルセット、ガーター、シュミーズ、プリント模様のワンピースまで着て首から下だけは完全な女性なのですが、美女グルーブに抑えつけられて三〇〇ccのグリセリンが注入されています。そして彼女たちは、私を鏡の前で天井から下げた縄で両手吊りにし、足首をタオルできつく縛りつけてしまふのです。そして彼女たちは、この捕虜に対していろいろな、いたぶりを加え始めます。鏡の中の首から下だけの女は体の内外から同時に責めつけられて、吊られたまま身にくねらせて悶え抜くのですが、だんだんと体の中で暴れる悪魔の攻撃の方が強くなり、私と同体の彼女は哀願と悲鳴をあげながら、ジワジワと絹の靴下を流れ始める液体を感じ、差し込む激しい腹痛と同時に、どっと堤を切る汚辱に泣き出してしまわなければならぬのです。

私はこれらのプレイを、状況を変えて度々くり返しました。無理に美しいサディスチンを想定しなければならぬことは淋しかったのですが、浣腸による快美感がそれを上廻り

読者ギャラリー『吐いちゃダメ』矢川祥彦



ケツコウ、ある程度の満足はしました。

しかし、独りプレイのおかげで、状況の設定は自由に出来、女学生が下痢をしてブルーマーを汚すとか、逆立ちをさせられてスカートもスリッパも捲れたままで粗相させられるなど、いろいろと衣裳を変えては、浣腸責めをされる気分を工夫したものです。

そんな浣腸プレイを相当期間、繰り返して続けた末に思いついて、現在でもやっているのに「痔バンド・プレイ」と、私が名付けたのがあります。

痔バンドは、薬局で売っている脱肛予防のバンドですが、私は、やや濃いめにしたグリセリンを二〇〇ccぐらい注入して、このパン

ドをきつく締めこむことにしたのです。そしてその上から運動用のサポーターを穿き、更に、その時々気分に応じて、オシメカパーカメンスバンドを穿き、これもその時の気の向いたパンティやズロースを重ねて、ナイロンのネグリジェなどを着ます。

二〇〇ccのグリセリンとなると、いくら慣れた私でも、いつも呻いてしまいますが、このプレイには痔バンドが更に苦しみを増す役目を果たしてくれますので、私のような自虐的状况を望む者にはピッタリだと、この着想には満足しています。

とにかく腹の中が煮えくりかえるようになって、巾広いゴムのサポーターが、ぎゅっと締めつけているのですから、たまりません。たちまち、全身が汗びっしょりになります。

私のプレイはいつも、洩れそうなのを我慢するということが主力でしたが、このプレイでは排泄したくても出来ないというわけで、その苦しさは又、違ったものです。固い椅子に縛りつけられたまま悶え抜いた末に、今度はなんとか排泄しようと努力する実感は、浣腸を求める私にとっては最高のプレイだといえるのです。



創作

## 秘密クラブ “ヘル・ファイヤー”

長谷田 亀 治

カット・中 宮 栄



持ちだった。

TDTの新人養成期間は三カ月。この間、

奈美子たち三十人のフレッシュ・ガールたちは連日、キャルと呼ばれるレッスンの股ぐりの深い黒パンティが汗でぐしょぐしょになり、何枚も取り替えない

東京ダンシング・チーム(TDT)の第二期生の募集は例年どおり三月一日から始まったが、定員三十名に対して応募者実に二千五百余名という大変な競争率になった。この文字どおりの狭き門をみごとに突破して採用された桜井奈美子は、それこそ天にも昇る気

ければならないくらい厳しくしごかれた。このハードな特訓は伸縮性に富んだ分厚いウーリーナイロンのキャルでも破れるというところから「キャル破り」と呼ばれ、TDTの伝統になっているが、その代わり養成期間が終る頃にはアクロバットまがいの柔軟体操で

鍛え抜かれた彼女たちの肉体は見違えるほど引き締まり、弾力性を増して、みるからに踊り子らしくなっていた。

とくに十八歳になったばかりの奈美子は暖い春雨に誘われて花の蕾が日増しにほころびるように一きわすぐれた変化をみせた。刺激や誘惑の多い華やかな世界の空気に染まって高校時代の堅さが抜け、処女特有の清純さのなかに、なんともいえない性的魅力が発散していた。それによく発達した胸と腰、すらりとした伸びた脚、女優の浜美枝そっくりのスイートな美貌、ポイントをつかんだセンスのある踊りなど、

『二、三年先にはTDTのトップ・スターになるだろう』

と関係者の誰もが大きな期待を寄せた。

「夏の踊り」で三十人のフレッシュ・ガールたちは初舞台を踏み、スパンコールがきらめく肌も露わなレオタードでライン・ダンスを踊ったが奈美子の存在は正に「群鶏の一鶴」だった。その美貌と均整のとれたしなやかな肉体は観客の間で大きな話題を呼び、はやファン・レーターが舞い込むほどの人気を獲得してしまったのだ。

そのころから奈美子に毎日、美しい花束が届くようになった。チョコレートやクッキーケーキなど若い女性が喜びそうな食べ物が必要とされ、みんなをうらやましがらせた。名前の知られているスターならともかく、プログラムの中の隅に小さな活字で片付けられている「その他大勢」の新人に毎日プレゼントが届くという例は、ほとんどない。当然、楽屋スズメの話題になり

「どんな彼氏？ 紹介してよ」

「おナミも隅に置けないわねえ。おごりなさいよ」

などと岡田<sup>や</sup>き半分の同期生たちに、奈美子はさんざん冷やかされた。でも、こうした華やかな世界では話題になること自体が、一種の人気のバロメーターともいえるので、奈美子も悪い気がするはずがなく

「いったい、どんな人かしら……」

と、名前も告げずにプレゼントを欠かさない床しい彼氏に、ほのかな思いを寄せたのも無理はなかった。

ところが、いつもは、きちんと昼の公演中に届けられているプレゼントが「夏の踊り」がきょうで終わるといふ千秋楽の日には夜の共演が終わっても届かなかった。

「どうしたのかしら。きょうのような大事な日に届かないなんて……」

奈美子は信じ切っていた人に裏切られたようなさびしい気持ちになり、手早く着替えをすませると「打ち上げ会」の準備にいそがしい同期生たちの目につかないよう、そっと楽屋を抜け出した。

歩道へ一歩踏み出した奈美子は、飛ぶように走ってくる人影を見付けた。

「ああ。間に合ってよかった。奈美子さんが帰ってしまったわれないかと心配でたまらなかつた。ボク、岡田信次といいます」

自己紹介した青年は、にっこり笑って、びよこりと頭を下げた。手には、すっかりおなじみになった例の花束が抱えられていた。

「きょうの午後、親父が交通事故に遭いましてね。入院して手術をしたのでどうしても手

が抜けなかったのです。きのうまでは毎日、客席から舞台のあなたをみていたのですよ。たとえ一目でも会えないと苦しくてやりきれんのです」

大胆、卒直な愛の告白だった。一カ月に亘って続けられた好意に満ちたプレゼント、しかもその贈り主が、肉親の交通事故という不幸に遭いながらも寸暇を割いて駆けつけてくれた——岡田が野生的な魅力のなかにも折目正しいエチケットをわきまえたすばらしい青年であることを知った奈美子の胸に、生まれて始めて経験する熱い思慕の思いがこみ上げてきた。

「よろしかったら、軽い食事でもつき合ってもらえませんか。なにしろゴタゴタ続きでしてね、昼からなにも食べてないので、おなかガペコペコなんです。宿舎の門限までには必ずお送りしますよ」

一目で岡田に惹かれていた奈美子は、岡田が近くの駐車場から出てきたスマートなハードトップに、いそいそと乗り込んだ。それほど裕福ではなかったが、暖い家庭で、両親に愛されて育った世間知らずの奈美子は、人を疑うことを知らなかった。

好青年岡田の仮面の下に隠されたその正体



は、若い女性の生血を吸って肥え太る売春暴力団「血桜組」の婦女誘拐のエキスパートだったのである。車の助手席に乗せられた奈美子の前途には、もはや希望に輝く明るい太陽はなかった。待ち構えているのは底知れぬ恐ろしい地獄の闇——生きているのがいやになるような陰惨な売春婦の世界だった。

◇ ◇ ◇

人通りの途切れた暗いビルの谷間で、いきなりガーゼにひたしたクロロフォルムを押し当てられ、意識を失った奈美子は、そのまま「血桜組」組長山辺権造のアジトに運び込まれた。全裸にむかえたうえ、後ろに回された両手首には十センチばかりの短い鎖で連結された冷たい手錠がびっしり喰い込んだ。やがて意識を取りもどした奈美子は、そんな哀れな恥かしい自分の姿を、なめ回すような淫らかな目付きで眺めている数人の極道たちをみて愕然とした。

「岡田さん。助けて！」

恐ろしさと恥かしさで、魂切るような悲鳴を上げ、思わず岡田の方へにじり寄った奈美子を薄ら笑いをうかべながら見ていた組長の山辺は、  
「信次。そろそろ、組のしきたりを話して引

導を渡してやんな。それにしてもお前は相変らず凄腕だな。花や菓子など三万そこそのはした金で、こんなみごとなスケをこますんだからね。この顔と体じゃまず三年はみっちり客をとれる。二千万は稼ぐだろうて。ヘッヘッヘ」

山辺の言葉でおぼろげながら事情のわかった奈美子は、聞くものの心にしみ入るような悲しげな声ですすり泣き、美しい顔を涙でべとべとにして許しを乞うたが、人の皮をかぶった獣のような酷薄、非情な極道たちは、まるで歯牙にもかけなかった。奈美子は岡田の口から「血桜組」の経営する魔窟へ送られ、特殊な調教を施された売春婦として、変態的な客たちの慰みものにならねばならないことを告げられたのである。

「お初をいただく前に、びちびちした本格的な踊りをやらせろ」

山辺の命令で奈美子は後ろ手にはめられた手錠をはずされ、改めて全裸の体に黒いネットの靴下とハイヒール、そして首に黒いリボンをつけただけの姿にされて丸いテーブルの上に追い上げられた。恥かしさのあまり、豊かな胸の隆起を両手で隠すように抱きしめ、芋虫のように体をまるめてうずくまってしま

った奈美子に、岡田の激しい平手打ちが飛んだ。やがて鳴り始めたゴーゴーのリズムに合わせ、奈美子は腰を悩ましく動かし、脚を高々と上げ、極道たちのヤジを浴びながらTDの舞台では想像もつかないような猥褻な踊りを披露せねばならなかった。

「一身上の都合により退団致します」というTDへの退団届けと「好きな人ができました。わたくしの幸福のために探さないで下さい」という両親宛ての手紙を強制的に書かされた奈美子は、それから一週間、アジトに全裸で監禁され、可憐な草花が暴風雨にたたきつけられるような毎日を過ごした。最初の夜は山辺に処女を奪われ、二日目からは「血桜組」幹部の間をたらい回しにされてさんざ弄ばれた。男女関係の比較的ルーズな世界にいたとはいえ、まだ清純を誇っていた奈美子にとっては舌を噛み切って死にたいようなショックだったが、それでも「血桜組」経営の魔窟に送られてからの、この世のものとは思えない陰惨な毎日にくらべると、アジトでの経験などまるでプロとアマのちがいだった。  
「いつまでも未練たらしくもてあそばさず、早くゼニを稼がしな」

「血桜組」の魔窟は、「ヘル・ファイヤー」

(地獄の業火) という名前からして恐ろしい特種な売春クラブだった。山辺の命令で一週間後の深夜、全裸のままの奈美子は例によって後ろ手錠をはめられ、二十センチばかりの鎖で連結した金属の足枷を両膝関節の上にはめられて万一の逃亡をはばまれたうえ、口には絨口具をかまされた。体をレインコートでおおい、口には大きなマスクをかけてカモフラージュされたことはいまでもない。そして岡田と川上というチンピラに引き立てられ肉体の整形手術を受けるため、「血桜組」の息のかかっている婦人科へ連れていかれた。

◇ ◇ ◇

生れて始めてみる内診台を前にぶるぶるえている全裸の奈美子をいたまじげに見やった中年の医者は

『君たちの悪辣、残忍さにはほとんど愛想が尽きる。こんなに美しい娘を生れもつかぬ不具者にし売春させるなんて人間に対する冒瀆だ。ボクは、もう良心の呵責に耐えられない。手術はしないから、連れて帰って組長にそういい給え』

毅然とした態度で手術を拒否した医者をみて、奈美子は地獄で仏に会ったような気がした。ところが岡田は、ふてぶてしい笑いを浮かべながら

かべながら

『先生。今夜はどうかしてるんじゃないですか。さてはこいつに一目惚れですか。いや惚れるのも無理はない。こいつはことしのTDTの新人ナンバーワンでね。このわっしが一カ月も餌をまいたあげく、ようやくコマした飛っ切りのタマでさ。わしたちは思う存分楽しんだし、どうせこれからは何百人という男の慰みものになるんだ。先生も別室へ連れて行って、頭に昇った血を静めてきたらどうです。ヘッヘッヘ……。まだ経験不足でどこもないが、味は悪くないですぜ』

いきなり指で奈美子を押し開こうとした。

『バ、バカなことを……なんといわれても、いっさい君たちとの交際は、ごめんだ』

そのとたん

『ふざけるな!』

岡田のドスのきいたタンカが飛んだ。

『偽善者ぶるのもほどほどにしろ。てめえ、そんなきれいな口がきけるガラかよ。いままで何人の娘をカタワにした。え、れっきとした「人体損壊、売春幫助」じゃねえのかよ。つべこべご託を並べず、さっさとやりなよ』

本性をむき出しにした岡田の脅迫に医者はがっくりとうなだれた。かつて高い報酬に目

がくらみ、一回だけという彼等の甘言に乗って医師法に違反する破廉恥な整形手術をやったばかりに、その後は無料で二十人を越える誘拐された娘たちの恥かしい場所の整形を引き受けさせられているのだ。

やがて奈美子はすっかりあきらめきった医者の指示で内診台に上がり、両腿を左右に大きく割られたうえ、膝関節の上下をベルトでしっかりとポールに固定された。女性としてこれほど恥かしい、屈辱的なポーズはない。それに医者と岡田のやりとりから考えても想像を絶する浅ましい手術が行なわれるのにちがいないのだ。奈美子は口いっばいに、ほぼばらされた絨口具のなかで声にならない声を上げて泣き始めた。

まず最初、内診のためアヒルのくちばしのような腔鏡を使った医者は、思わず眉をしかめた。

『君たち、婦人科医に対するエチケットを知らんのか。失敬な……』

『ふん。そんなもの知るわけがねえだろ。川上のヤツが、ここへくる途中でせがむもんでね。まあそうがみがみ、いっこなしだ』

医者は苦り切った表情で黙々と病気の有無を調べていたが



『反応はすべてマイナス。病菌には侵されていない。いつものように例のところへ穴をあけるのかね』

『そのとおり。特殊な調教には絶対、必要なんです』

医者は注射器を手にして入念に局部麻酔を施した。そしておもむろに穿孔機の刃の切れ具合を調べた。イヤリングをつけるため耳環に穴をあける器具とよく似ており、細い金属の筒のなかに、錐状の鋭い特殊なメスが仕込まれている。ちょうど鍼を打つように筒を押すつけ、一気にメスを繰り出せばきれいに穴があく仕組みだ。やがて奈美子は岡田と川上が目を見張るような顔で、のぞき込んでいる前で左右の花弁の中心に直径四ミリの穴を一つずつあけたという手術をされた。薄っすらと血がにじんだが、麻酔が効いているので奈美子はびくりとも動かない。手早く、それぞれの穴に太い針金を通され、直径三センチほどの丸い輪が作られる。ちょうど牛の鼻輪のようなものが、ぶら下がった。

続いて医者はたくみにメスを使って包皮を切り取り、いつも神経露出しているように整形した。こうしておけば垢もたまらないし、もっとも鋭敏に反応する抜群の肉体に変貌し

てしまうのだ。

『君はよく知っていると思うが、このまま放置しておく針金を通ったまま癒着して抜けなくなるよ。痛がるだろうが、ときどき針金を動かして肉が巻かないように注意したまえ。まあ二、三日すればパンチで打ち抜いたような、きれいな穴になる』

岡田に念を押した医者は続いて脱毛に取りかかった。脱毛にはカミソリなどで剃る方法をはじめ、脱毛クリームで融かす方法、ワックスを塗り固めて引きはがす方法、オキシフルで漂白する方法などがあるが、これらは簡単だけが取り柄で、すぐ再生する欠点がある。ここではそんな一時的な姑息な手段ではなく、電気脱毛法といって毛根の発生組織を電気分解し、永久に不毛にしてしまう徹底的な方法が行なわれたのだった。

『さあ。いよいよ最後の去精だね。先生、早いとこやりましょう』

早手回しに催促する岡田のことばに、それでも医者は最後の抵抗を試みた。

『君。それはあまりにも残酷じゃないか。妊娠させないためなら、卵管結紮とか、子宮リングとかの方法ではどうかね。昔から「亭主の好きな赤烏帽子」という諺があるように、

生理期間中を好む男も多いんだから、せめてもの情けに女性の象徴ともいえる生理だけは残しておいてやったら……』

岡田のいう去精が、放射線（コバルト）の深部照射で機能を完全に破壊し、無月経にしていまうという、もっとも残酷で野蛮な不妊法だけに、医者としても娘盛りの奈美子が哀れで、良心がとがめたのにちがいない。それにホルモンの失調から、頭痛や目まい、悪感等の欠落症状を避けることができないのだ。

『ダメだね。組長の命令だから、どうしようもない。目的は不妊じゃねえ。第一、淫売にメンスほど邪魔になるものはねえよ。その度に休ませりゃこっちのアゴが干上がってしまう。こいつなら一日のノルマはまあ三万。月に三日も休めば年に百八万、三年保つとみりゃ三百万からの大損よ。泣こうがわめこうが一年、三百六十五日、ただの一日だって休まずに客をとらせるためには、厄介なメンスを止めてしまおうのが一番でっとり早いってことよ』

鬼畜のような酷薄な岡田のことばに、奈美子の魂は凍った。岡田にいかけらの人間らしさもないことを悟った医者は、すごすごと準備にかかった。

縛りつけられていた内診台からいったん解かれた奈美子は屠殺場にひかれる羊のように岡田にこづかれながら透視室に連れ込まれ、卵巣位置確認のための透視を受けた。ウテルスの両側に一つずつぶら下がった梅の実くらいのそれを確認した医者は、その上にマジックインキで×印をつけた。

「照射を始めると副作用で気分が悪くなる。本当は一日おきに、一週間くらいかけて少しずつ照射すれば副作用が軽くてよいのだが、そんなのんびりした方法では君たちは承知すまい。途中で食塩水を飲ませれば、多少は楽になるから、絨口具をはずしてやりたまえ」

岡田にアゴをしゃくられた川上は

「兄貴。大丈夫ですか？ こいつ大声を出したりしないでしょうな」そういうながらも響のように口をくびって後頭部の二カ所を締め上げていた細い皮ベルトをはずし、口いっばいに、ほぼばらせた大きな金属球を引きずり出した。

「お願いです。生理のときでも休みません。わたし、軽いタチですから……」

ムダとは知りつつも、薬にもすがらる思いで必死の哀願を始めた奈美子は

「つけ上がるな！」

一喝と同時に、ほほに飛んできた岡田の凄まじい平手打ちに、たちまち黙らされた。

「これからのお前にはメンスなんて邪魔になるだけよ。それより裸同然の姿でハデに踊っていた踊り子時代はどうやってたんだ？ パットは目立って使えねえから、タンポンとやらのご厄介になってたにちがいねえ。メソメソ泣かずに、きれいさっぱりとやってもらいな」

奈美子は「危険につき入室厳禁」とプレートのなかった照射室に引きずり込まれ、巨大な機械の下に、まるで死刑執行の電気椅子のようにすえられている内診台に固定された。

「心配はいらない。気持ちに楽にして」

医者はやさしく声をかけながら、機械の先端についている懐中電灯のようなものを、慎重な手付きでまず右の×印にぴったりと照準を合わせた。放射線は人体に与える影響が大きいため、患者以外は室外に去り、すべて遠隔操作で照射が行なわれる。やがて縛りつけられた犠牲者だけを残した深夜の照射室には十八歳という若さで、はや女性の象徴を断たれる悲しさに歯をくいしばって泣きじゃくる奈美子の嗚咽と、放射機の不気味なうなりが響き渡った。

五分照射しては五分中断し、再びそれを繰り返すという方法であるが、なにしろ、ガン細胞すら破壊する強烈な放射線だけに、副作用も大きい。何度も嘔吐した奈美子は、そのたびに食塩水を飲まされたが、照射が完了したときは、死人のように蒼ざめ、起き上がる気力もなかった。

「当分は、むかむかして食欲もないと思うから、あまり手荒らなことをせず、休ませてやりたまえ。それに欠落症がひどいようならホルモンの投与を行なうから連絡することだ。こんなことをいうと、また君たちは笑うかも知れんが、お互い人間なんだから、少しは相手の身にもなっていたわってやっても、罰は当たらんとするがね」

奈美子の悲しさがわかるだけに、医者は懸命に最後の忠告を試みた。しかし馬の耳に念仏ときき流した岡田は、激しい目まいと嘔吐感でふらふらになっている奈美子に、情けよくしゃなく、後ろ手錠と足枷をはめ込み、レインコートを着せかけると車へ押し込んだ。ついに奈美子はその名のとおり地獄の業火が燃えさかる恐ろしい魔窟「ヘル・ファイヤー」へ送り込まれるのである。

◆ ◆ ◆ ◆



「ヘル・ファイヤー」は、高い塀をめぐらせうっそうとした巨木に囲まれた古風な赤レンガの三階建てだった。そこでは組長山辺の舎弟梶原が支配人格で総てをとりしきり、その下に六人の極道たちがつけられていた。

地下室につながれ、夜毎、肉体をひさいでいる女性たちは全部で十二人。それぞれ個性のある美貌と、すばらしいプロポーションを持ち、そのうえ人間性を無視した浅ましい調教によって、どんな男でも有頂天にしてしまうテクニックを叩き込まれていた。

それだけに猟色家の間での評判はきわめて高く、クラブの入会金百万円、遊興費一夜三万円という法外な値段にもかかわらず、客は引きもきらなかつた。なにがぼろいといっても、これほどぼろい商売はない。「血桜組」の収入は月一千万円を軽く越え、彼女たちの肉体が日に日にむしばまれるのに比例して、ますます肥え太るという典型的な厳しい管理売春が行なわれていた。

奈美子を送り込まれたのは夜明けだったが、一カ所しかない小さな出入口のそばの小部屋では二人一組で監視に当たっている二人の極道が花札を引いていた。

「いよいよ。これがTDTの新人ナンバーワ

ンですか。すごい別嬪じゃないですか。可哀そうだが、当分は体が幾つあってもたりないくらい忙しい目に会いますぜ。梶原の兄貴が起きたら、さっそく報告しておきますから地下室へ、つないで置いてくださいよ」

あちこちの部屋から女性たちの悩ましい声が、かすかに聞こえてくる。

「相変わずだな」

「へい。うちのお客はみんな激しい方ばかりでさ。もっとも女たちが飛び切りの上玉ときているから、みなさん夜どおしハッスルなさるのも無理はありませんがね。ヘッヘッヘ」

下品な笑い声に送られ、奈美子はフロントの隅につけられた隠し階段から地下室へ降ろされた。そこは二十坪ほどの広さで、隅にはカイコ棚のような三段式のベッドが並び、裸電球が打ちっ放しのコンクリートの荒壁を寒々と照らしていた。どういう目的に利用するのか一方の壁際には十数本の柱が等間隔に立ち、それぞれの柱にはゴム製の突起物、時計のようなメーター、赤い電球などが取り付けられていた。天井にもフックや滑車が打ち込まれ、血を吸ったのかところどころ変色したロープがたれ下がっているのも不気味だった。地下室というものはもともと陰気なものだが

ここには始めて足を踏み入れたものの魂を凍らせるような、得体の知れない不気味な空気がよどんでいた。

「ここがお前の住む所だ。空いているベッドでしばらく休みな。朝になれば、いま客をとってる仲間たちが帰ってきて、いろいろ教えてくれるだろうよ」

岡田はベッドの支柱から伸びている鎖を奈美子の後ろ手錠に連結すると、まだ物欲しげに奈美子に視線を注いでいる川上をうながして出ていった。

どのくらい睡っただろうか。

「おい。起きろ」

という、どら声と同時に、髪をつかんで激しく揺ぶられた奈美子は、あわてて起き上った。整形手術を施された部分が、ずきずきと痛み、奈美子の表情がゆがんだ。

「ここへ出てきて、ちゃんと立ってみろ」

三人の極道を従えた梶原は椅子にどっかと腰をかけ、あごをしゃくった。全裸で直立不動の姿勢をとらされた奈美子の全身を強烈なスポットライトが、くっきりと照らし出した。

「なるほど。岡田が自慢するだけあって、こりゃ最高のタマだ。ちょうどいい。オープン三周年記念まであと三週間あるから、仕込み

上げてアトラクションに使おうじゃないか。客をとらせるのはその後のことにしよう」

梶原はよだれをたらさんばかりの好色な表情で奈美子の頭のとっぺんからつま先まで眺め回し、最後は俯伏位をとらせて手術の具合などを点検した。

「後ろはさっそく拡張にかからにゃならん。その前にこのしきたりを聞かせてやるから性根をすえて聞いておけ」

奈美子は梶原の口から信じられないような恐ろしくもおどましい「ヘル・ファイヤー」の規則を聞かされた。それは彼女たちが客の性欲を満足させるためのみに存在すること。そのために、徹底的な調教を受けなければならぬこと。三日続けてノルマを果せなければ残酷なリンチが加えられること。逃亡を図れば、なぶり殺しにされること——などが主なもので

「ここにつながれている女は総て消耗品だ。稼ぎが悪けりゃサジストの客に売り渡して責め殺させてでもゼニをしぼり上げてやる」という身の毛もよだつような脅迫のことばで、しめくくられていた。

やがて二、三階の個室で客と一夜を明かした女たちが、つぎつぎと地下室へ帰されてき

た。彼女たちは衣類らしいものは、いっさい許されず、身につけているものといえは首に巻いた幅三センチほどの黒いリボン、そして黒の靴下と、それを止める真っ赤なガーター黒のハイヒールという、外国の娼婦のような煽情的な女だった。

彼女たちはみんな奈美子と同じような整形手術をされ、完全に脱毛されていたが、その代りのようにクモやサソリやヘビなど不気味な昆虫や爬虫類などの、毒々しい極彩色の刺青を施されていた。

彼女たちは一晩中、あくどい、いたぶりに会い、さんざんに弄ばれたのであろう。その美しい顔には疲労の色が深くにじんんでいた。しかし、わずかのまどろみも与えられず、すぐさま、日課である朝の調教に励まねばならなかった。それは奈美子の目をそむけさすほど浅ましい光景だったのだ。

彼女たちは、いっせいに四つんばいになりヒップを、高々と上げた。柱に取り付けられたゴム製の突起物が隠れてしまうと、極道の一人が拇指大の氷砂糖の入ったコップを一つずつ彼女たちの目の前へ置いて回った。

「よし。始めろ」

梶原の号令がかかると彼女たちは犬が水を

飲むように懸命に舌を伸ばしてコップの底の氷砂糖をなめ始めた。と同時にそれぞれの柱に一つずつ取り付けられた度数計がカチカチと回数を刻み出し、そのたびに赤ランプが点滅した。

「明日からお前も、この調教の仲間入りだ。どういう仕かけになっているか、よく、見ておくんだナ」

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

その装置は圧迫力増強器ともいうべきもので、彼女たちが力を入れるたびに赤ランプがつき、その回数が度数計に記録されるという驚くべきものだった。それも普通の二倍に近い四十ミリバール以上という強い緊迫力が働かないと作動しないのだから、死者狂いで取り組まなければならぬ。

地下室のなかには、たちまち、なま臭い体臭がただよい、彼女たちの体には水をぶっかけてように汗が噴き出して、冷たいコンクリートの床を、ぼとぼと、ぬらした。

この調教には、いま一つの大きな役目が隠されていた。それは彼女たちがなめさされている氷砂糖の秘密だ。口のなかに含まず、ただ舌でなめるだけだから、すっかり融けてなくなるまで三十分もかかる。ときにはこの氷



砂糖がゴルフボールの様に小さなティの上に置かれることがあった。強くなめて落とせば、いっそう大きな氷砂糖に替えられるため、まるでは何物にさわる様に一時間近くも費やしてゆくる、やさしくなめなければならぬ。彼女たちはこうした訓練で徹底的に鍛えられ、「ヘルファイヤー」の女は、本場フランスの娼婦でもかなわない」

という客の評判をとっていた。

また氷砂糖と度数計の間にも切っても切れないつながりがあった。というのはコップの場合は氷砂糖をなめ尽すまでに千回、ティの場合は二千回以上の数字が度数計に記録されていないと、むごたらしいリンチが加えられるのだ。したがって彼女たちは懸命に舌と唇を働かせるかたわら、平均五秒に三回という大変な頻度で計器の数字を上げるようにしなければならぬ。

「お前たちの商売道具は随意筋とかいう結構な筋肉でできていて、鍛えれば鍛えるほど上等になるんだ。三週間後の開店記念日には全員のコンクールをやって成績の悪いものは犬や豚とのショーをやらせるからそのつもりでいろ。そら！　しっかりやれ」

梶原は、それぞれの赤ランプの点滅の頻度

を目で追いながら蜜声を張り上げた。

極道たちのねらいは、緊迫力を強めると同時に、梅干をみると唾液がわくように、条件反射で無意識のうちに収縮を繰り返すという状態を作り上げることにあった。そのため三日に一度は「特訓」と称して午後にも調教が行なわれ、そうしたときは彼女たちは夜がこないうちに精根尽き果ててしまうのであった。

度数計の数字を一つ一つ確かめ、巡視を続けていた梶原は、突然たち止まると

「亜紀子、お前さぼってやがるな。みんなもう五百回以上もやっているのに、まだ三百二十回とは、どういうことだ」

いきなり白いヒップを蹴り上げると同時に髪をつかんで、ずるずると引きずり出した。

亜紀子と呼ばれた女性は、おそらくファッションモデルの出身なのだろう。細そりとした体つきで、ハーフのようなエキゾチックな美貌だったが、恐怖に顔をひきつらせ

「許してください。昨夜は同時に二人のお客様で、一睡もできなかったのです。時間までにきつと千回やってみせます」

と泣き声で哀願したが、みせしめのために後ろ手錠をかけられ、左右に大きく割られた

足首には青竹がたまされた。

「奈美子。さばればどんな目に会うか、よくみておけよ」

梶原のことばと同時に、亜紀子のピンク色の両乳首は細い丈夫なピアノ線でくびられ、天井の滑車に通してかろうじてつま先で立てる程度までピンと引き上げられた。そしてむき出しにされた手術の穴にフックが引っかけられ、五百グラムもある分銅が、左右一つずつ、つるされたのである。

「キヤーツ」

という絶叫がほとばしり、重みに耐えかねて下半身が下がったため、くびられた乳首はよく熟したグミの実のように赤紫色に変わった。亜紀子の全身はおこりにかかったように痙攣している。

婦人科医の手術によってうがたれた穴の意味がやっとわかった奈美子は、鬼や悪魔でさえも考えつかないような残虐、無惨なリンチを目のあたりにみて恐怖のあまり失神してしまった。

「バカヤロー。こんなことで目を廻すやつがあるか」

バケツの水をぶっかけられて正気づいた奈美子は、まだ続けられているリンチを正視す

読者ギャラリー『目盛責め』志 羽 利 也



るよう命じられた。さらに五百グラムの分銅がそれぞれ追加され、亜紀子には二キロもの重量がかかった。極道たちは

『それ。もっといい声で鳴いてみな』

とからかいながら、分銅を前後左右にぶらぶら動かして亜紀子の苦痛を倍加させた。言語に絶する上下への引き伸ばし責めに亜紀子が恥も外聞もなく号泣し、涙と鼻水とよだれで体中を、べとべとにするまで続けられた。

『ようし。きょうは、そのまま引き続いでの特訓だ』

苛めない梶原の命令に、ようやく氷砂糖をなめ終わり、肩で激しく息づいていた彼女たちの口から悲痛な、うめきがもれた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

それから約一時間後、奈美子は血桜組から呼び寄せられた刺青師の前に素肌をさらしてさまざまなポーズをつけられていた。

『まったく、いい肌だ。たまねえな。第一踊り子だけあって肉の締まり具合が違う。これみてみなせい。押せばはじき返しますぜ。色素もしつとりと定着するにちげえねえ。梶原の兄貴、下腹だけなんてケチなことを言わず、せめて腹から乳房にかけて、思う存分、腕をふるわせておくんない。刺青師冥利に一世一代の仕事をしたいんでさ』

刺青師は舌なめずりをしながら梶原に頼み込んだ。

『お前がそれほど意欲を燃やしてるんなら任せてやろう。だが、あまり時間はやれねえ。特訓特訓で仕込み上げなきゃならねえし、三週間後の開店三周年のアトラクションのけいこにもかからにゃならんのだから……』

『へい。それじゃ、こいつは辛がるだろうが二日で仕上げて、ご覧に入れやしょう。でも開店記念のアトラクションとやらで、こいつに、なにをやらせるので？』

『いやなに、組長が飼ってるオランウータンを手ほどきして、こいつと、シロ・サル・シヨウをやらせるのよ。いいアイデアだろう』

『ひゃーあ。こりゃたまげた。お客が手を打って喜びますぜ。わっしも、なんとか拝ませてもらいてえもんで……』



『まあ刺青の出来ばえ次第で、みせてやらんでもねえが、とにかく早く仕事にかかんな』  
刺青師は奈美子を寝かせると、さっそく下絵を描き始めた。

それは青黒い四匹の蛇がウエストを、ぐるぐる締めつけ、すつくと鎌首を立てた二匹はくねり昇って、それぞれピンクの可愛い両乳首に噛みつき、あとの二匹は左右の腿の付け根を二巻きずつしたあと、一匹は鎌首を下腹にのぞかせ、一匹は、するするとヒップへ伸びているという、ぞっとする怪奇さのなかにも、身もすくむような淫猥さをたたえたものだった。

刺青は激しい苦痛をとまなうものだけに、人間が耐えられる限度というものがある。刺青師は奈美子が苦痛のあまり舌を噛まないよう分厚い布をしつかりと噛まし、さらに入念に猿轡まではめたうえ、人の字形のハリツケ台の上に身動き一つ出来ない様縛りつけた。しかし電動刺青器にスイッチが入れられ、パイプの震動によってノズルの中の針束が激しく上下に動いて雪のような真っ白な肌を突き破り始めると、猿轡の下から

『ムツ、ウームツ』

苦痛のうめきがもれ、奈美子は体中から脂

汗を流しながら、かなわぬまでも針の責苦から逃れようと懸命に体をうごめかせた。

『じっとしてろ。せつかくの彫り物が台なしにならあ』

刺青師はまるで馬を御すように奈美子の腹部をピタピタと叩きながら、情けようしゃもなく針をふるった。その日は昼すぎから夜の十一時までかかって約半分を彫り上げた。

翌日、乳首にかかったときも同様で、豊かな髪を助手をつとめた極道の手首にからめられ、しっかりと引きしぼられているのに、気が狂ったように涙でべとべとになった顔を動かし、夥しい髪が根本から抜けてしまうという目をそむけさせるような凄惨な光景を現出した。ハリツケ台のそばには噴き出す血を吸いとり、真っ赤になった脱脂綿が山のように積まれた。

二日目の夕方になって刺青は完了した。熱いタオルで肌を蒸し上げ、最後の仕上げともいうべき「色上げ」をすませた刺青師は梶原や部下の極道を呼び集め

『どんなもんです』

と鼻をうごめかせた。さすが自慢するだけあって、それは見事な出来ばえで、真に迫ったリアルさなど非の打ちどころがなかった。

正面、背面、開脚、俯伏せはじめ、まるでアクロバットのようなポーズをとらせたあげく全身をくねらせたり、激しい回転運動などをさせて、刺青の蛇がまるで生きもののようによれ動くのを、たっぷりと観賞した梶原は『さすが、たいした腕前だ。お前にまかせていちだんと引き立ったぜ。約束どおりアトラクションを観せてやろう』

上気嫌で刺青師をねぎらった。

放射線の副作用と、限界ぎりぎりまで強行された刺青のため、すっかり体力を消耗してしまった奈美子は、調教だけはまぬがれたがうがたれた穴の応着状態を調べられ、続いてアヌスの拡張を強行された。

『どうだい。気持ちはいまからそんなに尻をもじもじさせてるようじゃ、先が思いやられるぜ。完全に調教が終わるまで、毎晩オレが環の広がり具合を試してやろうじゃないか。ハッハッハ……』

梶原の下卑た笑いを聞きながら、奈美子は異物の不快感に体中、鳥肌がたってくるのだった。

やがて奈美子はこの浅ましい姿で地下室へ降ろされた。そこには十二人の哀れな女性たちが鏡に向かってアイラインを引き、アイラ

ッシュをつけ、アイシャドーをぬるなど、懸命になって美しく粧っていた。そして客の指名があるたびに、呼び出され、フロントで覚醒剤の注射を打たれて、それぞれの個室に送り込まれていく。客があふれて、女性の数が足りないときなど、リンチにかけられた亜紀子のように、同時に二人、三人の客にもあそばせられるという、獣さえ顔をそむけるようなことも演じなければならぬ。そのため彼女たちは恐ろしい中毒にかかることがわかっていても、疲労や睡気が吹き飛び、自らも恍惚状態となる覚醒剤の注射を待ちわびていた。

それに客室には、彼女たちを慄え上がらせるような恐ろしい掲示があった。

「当クラブはお客さまのどんなご要求にも応じられるよう十分な訓練、調教を施しておりますが、万一、不都合なことがございましたら、お手元のインターホーンでフロントまでご連絡なくご一報ください。必ずお気に召すよう善処させていただきます」

客にとっては実に行き届いたサービスだろうが、彼女たちにとってはこれほど恐ろしい掲示はない。命じられるまま、浅ましい奉仕をしても客の気まぐれ一つで、どんな残酷なリンチが加えられるかも知れないのだ。つい

二カ月ばかり前、ルミという女性が、酷使に疲れ切って客の相手をしながら、ついうたたねをするという失敗をしてしまった。客の連絡で引きずり出されたルミは、その夜一晩中例の上下からの引き伸ばし責めにかけられたまま放置され、翌朝、みんながそろったところで、電流責めにかけられた。そのとたん、吊られたまま、ぐったり失神していたルミの口から

『ギャーッ』

断末魔のような絶叫がほとばしり、硬直した体がバネ仕掛けの人形のようにはね上がった。よほどのショックだったのだろう。すでに紫色に変色していた両乳首は細いピアノ線（ピアノ線）で食いぢぎられ、重心を失ったルミは叩きつけられたように倒れた。乳首を失った乳房から噴き出す鮮血があたり一面飛び散って地獄絵図があらわになった。

ルミは、すぐさま車で運び出されたが、どう始末されたのか彼女たちは誰も知らない。この効果満点のみせしめによって彼女たちはより従順になり、客や極道たちの意をむかえるのに汲々とした毎日を送るようになったという。

奈美子に、信じられないような二カ月前の

出来ごとを話してくれた八重子という女性は『ここは名前のとおり、この世の地獄よ。あなたも可哀そうに、そんな恐ろしい刺青のある体にされてしまった——拡張中のね。わたくしも覚えがあるけれど、それ、ずいぶん気持ちが悪くて痛いでしょう』

両腿に喰い込んである細い鎖を、いたわりのこもった、まなざしで見つめるのだった。

◆ ◆ ◆

やがて彼女たちにとっては地獄ともいえる夜が訪れ、ヘル・ファイヤーの窓という窓には残らず、ほのかな灯りがともった。今宵も中国明代の『豹房』で繰り広げられたような顔魔をきわめた乱痴騒ぎが夜明けまで繰り返され、哀れな彼女たちは、疲労の極限に達した肉体にムチ打って献身的な奉仕をささげなければならぬ。

彼女たちが出払ってしまったあと地下室に一人ぼつんと取り残れていた奈美子は、間もなく梶原の部屋へ連れ込まれた。

『前の通路は組長のアジトで経験済みだろうから、今夜はじっくり後の通路の使い方を教えてやる。いいか。始めは少し痛いが辛抱するんだ。なあにすぐ馴れて器用に二刀流が使えるようにならあ』



おぞましさと情けなさ。それに引き裂かれるような痛みに泣きながらも奈美子は梶原のアドバイスを受け、生まれて始めての経験をした。

『よし。そのコツを忘れるな。始めてにしちやまずまずというところだ。明日からお前は午前中は例の調教、午後はアトラクションのショーのけいこをしなきゃねえ。へっへっへ……。どうでい。飛び切り別嬪のお前とでっけえオランウータンとの実演でえのは、おそろく前代未聞。さぞ観たえがあるだろう』

聞くなり奈津子はあまりの恐ろしさと浅ましさに声を上げて泣き始めた。刺青を入れられるとき、そのような極道たちのやりとりを聞いたような気がしたが、そのときは気持が動てんしていたので、なんのことかわからなかったのだ。

『お願いです。ほかのことなら、どんなことでもします。ですから、それだけは許してください』

土下座して涙を流し続ける奈美子を上から見下ろした梶原は

『うちのお客はみんな目の肥えたお方ばかりだ。ありきたりのショーなんざ見向きもなさ

らねえんだよ。そのお客たちに、この梶原が『開店記念日には、きつと皆様方をアツといわす趣向を考えます』って約束したんだ。今さらできねえでは男が、すたるってもんよ。それよりお前、この規則を早や、忘れたんじゃねえだろうな。忘れたのなら思い出させてやろうじゃないか』

爬虫類を思わす冷酷な梶原の一にらみに射すくめられた奈美子は、嗚咽をもらしながらも、総てをあきらめて、がっくりとうなだれてしまった。

翌日、奈美子は始めて例の度数計の調教と取り組まされた。それは奈美子の想像をはるかに上回る苦痛と労力を必要とした。空気はいっぱい入ったインサーターは経験のない奈美子の弱さを、あざ笑うかのように苦もなくはね返し、体中の力をしぼり尽さない限り、度数計は、ぴくりとも動かないのだ。左右にずらりと並んだ女性たちが

『ハッ、ハッ』

と軽く気合いをかけながら正確に赤ランプを点滅させ、度数計の回数を刻んでいるのを横目に見て、奈美子はいまさらのように彼女たちが経てきた苦しみが、並み大抵ではなかったことだろうと悟った。

『やいやい奈美子、しっかりしろ。そんなお上品なこと、このランプがついてたまるかよ』

手下の極道が、革ムチをいきなり奈美子のむっちりとしたヒップに打ち下ろした。

『ヒューッ』

悲鳴を上げた奈美子をみた梶原は

『奈美子は昼から例の実演のけいこがあるんだ。ちとは大目に見てやんな』

と声をかけた。そのためか他の女性たちがきっちりノルマの千回を消化させられている間に、奈美子はどんなにがん張っても百回余りしか消化できなかったのにもかかわらず、罰としてのリンチをまねがれた。

地下室に運び込まれた檻のなかのオランウータンを見た女性たちの表情に、不安の影が走るのをみた梶原は、いち早く

『心配するねえ。このお猿さんは奈美子の彼氏になるんだ。へっへっへ……美女と野獣、似合いのコンビというものよ』

一人で悦に入っていた。そのオランウータンは高さ百六十センチ余り。小柄な梶原より背が高く、全身が鮮かな赤栗色の体毛でおおわれたみごとに成熟した雄だった。ほおに円盤のような隆起を持つ、醜怪な顔をみたとな

ん奈美子の全身を悪感が貫き、激しい慄えが襲った。いくら覚悟はしているといっても、好色な男たちの劣情を刺激するため、こんな醜怪な獣に、と思うと、舌を噛み切って死んでしまいたい衝動にかられた。

『いやです。いやです。いっそ殺してください』

とまるで気が狂ったように泣きわめき、リンチの恐ろしさも忘れて、側にいた極道にむしゃぶりついた。

◇ ◇ ◇

それから約三十分後、執拗な脅迫に、ついに屈服し、ようやく興奮の納まった奈美子は花岡と組んでオランウータンの演技指導に当たることになった亜紀子とともに、フロントの隣の小部屋で、梶原からショウについて説明を聞かされていた。オランウータンを組長宅から受け取ってきた花岡は、

『兄貴、こりゃ組長のことばの受け売りですが、チンパンジー、オランウータン、ゴリラの三種を類人猿とかいうんです。人はチンパンジーが一番賢いと思ってるが、このオランウータンはだんまりやで、のそっとしていてバカのように見えるが、なかなかどうして決まった行動を教え込む場合はチンパンジーよ

り覚えがいいということですね。だから今度のショウは大成功疑いなし——と組長も大乗気で、必ず観にいくとおっしゃってました。それに、奈美子が目を廻すんじゃないかなんて、ちょっぴり心配もされてましたぜ』

『そうか。しかし、いくらいいアイデアでも実行できなきゃ絵に書いたモチよ。あんまり日がねえから、急いでけいこにかからなきゃならねえ』

けいこはまず、見せることから始めた。オランウータンはすっかり落ち着いてあたりをものうげに見回していたが、助手の花岡が亜紀子を相手に熱っぽい演技を始め出すと本能的に、その行為の本質を悟ったとみえ、明らかに興奮の様子を呈し始めた。

フレンチ・キスから始まり、目をそむけたくなるような恥かしいポーズをとり合う二人の演技を、奈美子は凍りついたような表情で見つめていた。亜紀子の場合には相手が人間だが、自分は醜怪なオランウータンとコンビを組まされ、目の前で繰り広げられている狂宴を、そっくりそのまま演じてみせなければならぬのだ。

オランウータンはすっかり熱演にあふられて奇妙なうなり声をあげ、体をゆすり、いまに

も花岡と亜紀子に飛びかかって行きそうな様子を示した。

『ありがてえ。案ずるより生むが易しとは、このことよ。お猿さん、すっかり頭にきてるぜ。そろそろ本番といくか』

梶原はホクホク顔で奈美子をオランウータンの側へ押しやり、早くやれ、といわんばかりに、けしかけた。ようやく奈美子が相手だと悟ったらしいオランウータンは、さも嬉しげに歯をむいて小躍りし、いきなり奈美子に飛びかかった。

優美な素肌を、ぞっとするような剛毛でこすり上げられた奈美子は、悪感で歯をがちがち噛み鳴らしながらも、すっかりあきらめ切ってたがままに翻弄された。それはこの世のものとは思えない落花無残な光景だった。人間と同じように智慧の働くオランウータンは、ぐったりと半ば失神状態に陥っている奈美子を、ネコがネズミをもてあそぶように軽々と転がし、さも得意気に、さまざまに弄び方をしてみせた。あふれ返るような、たくましい野性本能のあまりのすさまじさに、さすがの梶原や花岡もあきれ返り、引き離すのに一苦労したほどだった。

『とんだ大骨を折らせやがった。それにして



ものすごいじゃねえか。残念ながら午前中の調教を中止しなきゃ、奈美子のヤツが保たねえな」

檻に入れられたオランウータンはまだ奈美子を求めて猛り狂い、手本役の亜紀子は部屋の隅でぢみ上がり、真っ青になってぶるぶる慄えていた。

「どうだい。お前も奈美子と組んでオランウータンとタッグマッチをやるか」

と梶原に声をかけられると、まるで米つきバツタのように頭を下げ、それだけは許して欲しいと哀願するのだった。

「よし。お前は奈美子が伸びてしまったときのピンチヒッターということにしておこう。しかし、いまのようじゃあ猿につかまった女というだけで芸がなさすぎるというもんだ。畜生相手にやさしく甘い彼氏のすることを教え込まなきゃならねえのだから骨の折れることだて……」

梶原は、ぶつぶつこぼしながらも虚脱したような表情でようやく起き上がった奈美子に「しっかりしろい。お前のリードがへたクソだからひどい目に会うのよ。それに人形じゃあるめいし、猿のなすがままに任せておかずもっと、積極的にふる舞わなくちゃお客は沸

かねえ。いいか。今度からは童貞の彼氏にイロハから教えるつもりでやるんだ」

と離かしい注文をつけた。花岡までが調子に乗って

「おめえがうまくやってくれるということ覚えたら、猿も『ウフアッウフアッ、喜ぶだよ』」

と、テレビのコマーシャルをまねた軽薄な口調で、からかうのだった。

そのあと奈美子は、毎日二ミリずつ太いものに替えられる拡張棒を一躍、四段階飛び越して三センチのものに替えられ、やっと地下室へ帰された。

オランウータンの爪に引っかけられ、体に無数の赤いミズバれを作って泣いている奈美子を彼女たちは介抱してくれたが、人間ならともかく獣に蹂躪された浅ましい奈美子の肉体を軽侮している気配がありありと感じられ、奈美子は恥かしさと、口惜しさで、いたたまれぬ思いがした。

その夜、珍しく組長の山辺が、可愛がっているオランウータンの調教を観るため、ヘルファイヤーにやってきた。そのため奈美子は再び呼び出され、苦痛と屈辱に満ちたショウを演じなければならなかった。組長山辺に敬

意を表するためか、奈美子は踊り子時代のように濃厚な舞台化粧を施されヘルファイヤーのユニフォームともいうべき煽情的な例の衣装を着せられた。

ぴったりと吸い着いた黒の靴下がカモシカのようにすらりと伸びた優美な脚線をより強調し、首に巻かれたプレーンな黒いリボンもしゃれたアクセサリーとして奈美子の美貌をみごとに引き立たせていた。しかし山辺が感嘆の声を上げたのは恐ろしくも淫らな刺青だった。

「たいしたもんだ。よくこれほどまでに墨が入ったな。まあこれだけの上だまだ。せいぜい長持ちするように使って、うんと稼がせることだ。オランウータンに引っかかれてずいぶんみずばれを作っているが、これは客にいい感じを与えねえ。これからショウのけいこをさせるときは、オランウータンの手足にボクシングのグローブをはめな」

「なるほど。そこまで気がつきませんで申しわけない。それじゃさっそくグローブをはめて、けいこにとりかかると致しやしょう」

梶原は山辺にペコペコ頭を下げると、手下の極道に命じてオランウータンの檻を運ばせてきた。オランウータンは、奈美子を認める

とたちまち思い出したとみえ、奇声を上げて喜び、檻の戸をがたがたゆさぶって跳ね廻った。

「ヘッヘッヘ。どうでいこの喜びようは……奈美子、組長がみえてるんだ。昼のオレの注意を忘れず、うまくリードしていくんだ。失敗すりゃ一晩中、猿の檻へたたき込むぞ」

梶原の注意を聞いた奈美子は、人身御供に捧げられる生贄のようにあきらめきった心境で、檻の戸が開かれるのを待った。

極道たちにグローブをはめられたオランウータンは歯をむき出して怒ったが、寄りそった奈美子が真っ赤なマニキュアを施した白魚のような繊細な手を伸ばし始めると、たちまち、おとなしくなった。

「いいぞ。その調子だ。そろそろフレンチへ進みな」

梶原に指示された奈美子は、すっかり覚悟を決めた。

それから約三十分、奈美子は意志に反して文字どおり「人猿一体」のショウを繰り広げた。とくに涙を流しながらも懸命につとめたことが、サディスティックな極道たちの加虐感を強く刺激したとみえ、目の肥えている山辺まで

「すごい迫力だ。てえしたもんだ」

すっかり、ご満悦だった。

「この調子で一週間もけいこすりゃ完璧というところだ。奈美子もどうやら要領がわかりかけたようだし、お猿さんがこれほどもの覚えが早いとは思ってもよりやせんでしたぜ。こりゃ演技賞ものだ」

梶原もホクホク顔で、恥かしそうに身をすくめている奈美子を見やった。

オランウータンはまだ物足りないのか、奈美子にまつわりつき、果ては身体をこすりつけ、執拗にせがむのだった。

「畜生だけあって、味を覚えりゃ自制できねえとみえる。梶原、今夜は一つ、奈美子を檻へ入れてやりな。そうすりゃいっそう愛情がこまやかになって、非の打ちどころのねえコンビになるにちげえねえ」

非情な山辺の命令で哀れにも奈美子は首に巻いたリボンと靴下をぬがされて檻へ追い込まれた。

「ヘッヘッヘ。一晩中、おむこさんに、たっぷり可愛がってもらいな」

檻の戸が閉じられ、ピンと鍵がかかった。

そして鉄格子の間から一束の紙が差し込まれた。

「兄貴。一束じゃ足りねえって、いってませう。それに夜中に腹がへるといけねえ。お猿さんの好物のバナナや、精力剤も差し入れてやったらどうです」

「なるほど。お前たちも、たまにはいいことをいうじゃないか」

極道たちは声を上げて笑い合い、早や檻の中でオランウータンに抱きすくめられている奈美子を最高に卑猥なことばで、からかうのだった。

奈美子はどうして極道たちの思うがままに調教され、ヘル・ファイヤー呼び物の実演スターとして日に日に変貌していった。

そして開店三周年記念日には、わんさと詰めかけた会員たちの前で、彼等の度肝を抜く「アニマルショウ」を、羞恥と媚態の交錯した、すばらしい肢態で演じて、ヤンヤの喝采を博した。

その夜以来、奈美子は群がる指名客をつぎつぎとあてがわれ、ヘル・ファイヤーのドル箱として、この世の生地獄に呻吟せねばならなかった。



## S M写真構成家としての辻村隆③



## 辻村隆研究

「伊藤晴雨の後継者こそ、この道一筋に生きて来た辻村さんですよ」

「藤本義一」サロン楽我記第五十四回「昭和四十三年 十二月号」

夫 紀 悠 吹 絹

## (二) 沈潜期—愛川悦子時代—

昭和三十年十月号より同三十五年十一月号までが、それにあたる。

辻村氏には昭和三十年五月号に、あの傑作『桃源境』を発表されて以来、四カ月空白期間があった。原因は奇クの休刊によるものである。その理由は氏の『カメラ・ハント楽我記』（昭四十五・十二）臨時増刊号女体緊縛写真集（）に精しいので、それを是非、参照されたい。

私は、ここでは奇クの編集子から説明して

いただこう。左の文章は、ひとり奇クのみならず、日本の文化史的にみて、なかなか興味があり、且、重要な資料なので、少し長きにわたるが、引用してみよう。

○

本誌五月特大号（私註、辻村氏の『桃源境』が掲載された号）の巻末、編集手帖にて述べました通り、昨年十月号より連続特大号を発行しましたので六月号あたりから普通号にして頁数据置のまま、定価を百円に値下げしようかと心積りしておりましたところ、五月号の編集後記を読まれた多数

の皆さまから、定価は据置のまま、増頁せよとの御意見が有力でありました。従って六月特大号は、定価は百四十円のまま口絵本文共、更に増頁して堂々五百頁に近いものとして企画したのであります。然るに、折からやかましく云われた悪書追放運動の余波を受けて、配本機構が根本的に崩壊するに至り、遂に印刷途上に於いて発行中止のやむなきに至ったのであります。

○

ちなみに昭和四十六年三月号は頁数二六四頁で三五〇円である。この際、値段のことは

言うまい。しかし、辻村氏を先頭に仰いだ編集部カメラ陣の数多くの写真で巻頭を飾り、しかも五百頁になんなんとする奇ク！我々オールド・ファンが何時も、あの黄金時代を懐しむのも、決して、ひとりよがりな回顧趣味ばかりではないのである。

それはさておき、昭和三十年十月号で辻村氏は次の諸作品を発表されている。

○ポリューム（モデル加賀利江子）

黒い背景に白いシュミーズ一枚の女が横坐りにうなだれている。両手は水平に近く後手に廻され、三筋のやや細目の縄で豊かな乳房の上と下をはさむように固く縛られている。グラマーなこの女の腕のくびれが、如何に厳しく縛られているかを示して余りがない。

横坐りで、やや前に投げ出し加減の足には膝下まで靴下をはかせてあり、そのナイロンの光沢が、この写真に極めて官能的な色彩を与えている。

うつ向いた顔には鼻を掩う辻村方式の猿轡がはめてあり、女はただ黙って、暗闇の中に縄目の固さをかみしめているばかりだ。

辻村氏の、『ニューモデルのプロファイル』

（昭三十・十）によると、加賀嬢は身長五尺二寸七分、体重十四貫五百というグラマー美人

愛川悦子



である。

辻村氏は素早く加賀嬢の特性をキャッチすると、それを引き出し、この作品にみる如き崩れのない気品さえ感じられるSM写真を、ものされたのである。

○うつぶせ（モデル同前）

加賀嬢が縛られて、うつぶせに横たわっている。縛り方は『ポリューム』とは一寸異なり、大きな乳を上下から、しぼるように三筋の縄で縛っており、それが、ほぼ水平に組まれた後手へと、のびて結んである。更に縄は丸い彼女の肩口から胸部へまわり、先の腕を縛った三筋の縄に、つながっている。ポリュームのある尻はシュミーズに隠されて、その曲線が見えぬのが残念であるが、股を少し開き加減にした両足には、脱がされなかった靴下があって、エロティックである。

しかし、それ以上にこの作品の価値を素晴らしいものにしてゐるのは、実に猿轡である。完全なる辻村イズムの猿轡は、この女の顔半分を掩い、観る者をして、この女に愛撫的な責めを加えて、くぐもり声をたてさせたくないような感じを持たす。女は今目を閉じ、ただ縛者のなすがままに十四貫五百の体を横たえている。余韻ある名作である。



この写真は、本号における最優秀作品である。それはグラマーな女が精一杯に水平に組まされて縛られた後手と、女の美しい眉を更に印象的なものにさせた、顔半分の猿轡の効果的使用によるものである。いずれも辻村イズムに則っており、今さらのように氏の緊縛理論の完全さに感嘆せずにはいられない。

○ながし目（モデル須川令子）

○朝日を浴びて（同前）

この二枚は同一場所で撮った模様である。

ともに野外での縛り写真で、『ながし目』の方は洋服、『朝日を浴びて』の方は派手な腰巻一枚の姿である。

両者を比較すると『ながし目』の方が優れている。正面横坐り、三筋の縄による後手の緊縛と公式的なポーズであるが、表題の如きモデルの、ながし目が、なかなかコケティッシュで、それがこの作品の官能的な感じを出すのに大いに役立っている。縛られて自由を奪われた女の流し目は、しきりにS的男性の心をとろかし、その性的興奮を高めずにはおかない。このような男女の心理的な動きを、辻村氏はその構成力で見事に一瞬の間に凝縮させている。

『朝日を浴びて』は、腰巻一枚の上半身裸体

で、四筋の縄が二筋ずつ乳房の上と下とを締めつけて縛っている。女は正面を向き両足は前へ投げ出し気味に揃えて、膝の所で、くの字なりに折っている。

この写真の致命傷はカメラ・アングルにより、いやに大きく写った女の両足ではない。猿轡なのである。一体どうしたのか、辻村イズムとは全く反対の、何か大きな布をゴワゴワ一巻きしたという感じなのである。極めて残念なことであった。

なお『ながし目』と『朝日を浴びて』は二頁に並べて掲載してあるのだが、足をくの字に曲げた女の横坐りが逆で、二枚が対称形になっているのは面白いレイアウトである。辻村氏と、そしてこれは奇巧編集部の健在ぶりを示す小粋な掲載の仕方であった。

この須川嬢は、なかなか積極的に協力してくれたモデルであったとのことである。

（「ニューモデルのプロファイル」）

「例えば」と辻村氏は言われる。「縛者が縄を持って立ち上がったときの彼女の両手を後手に組む早さは全く堂に入ったものである。猿ぐつわの布片を持ったときもそうである。まだ布片を口先へ持っていないのに、大きな口を開いて待っていてくれるといった調子

である」

しかし、何故かこのモデルは、その割には本誌上で活躍しなかったようである。これは私個人の感じかもしれないが……。

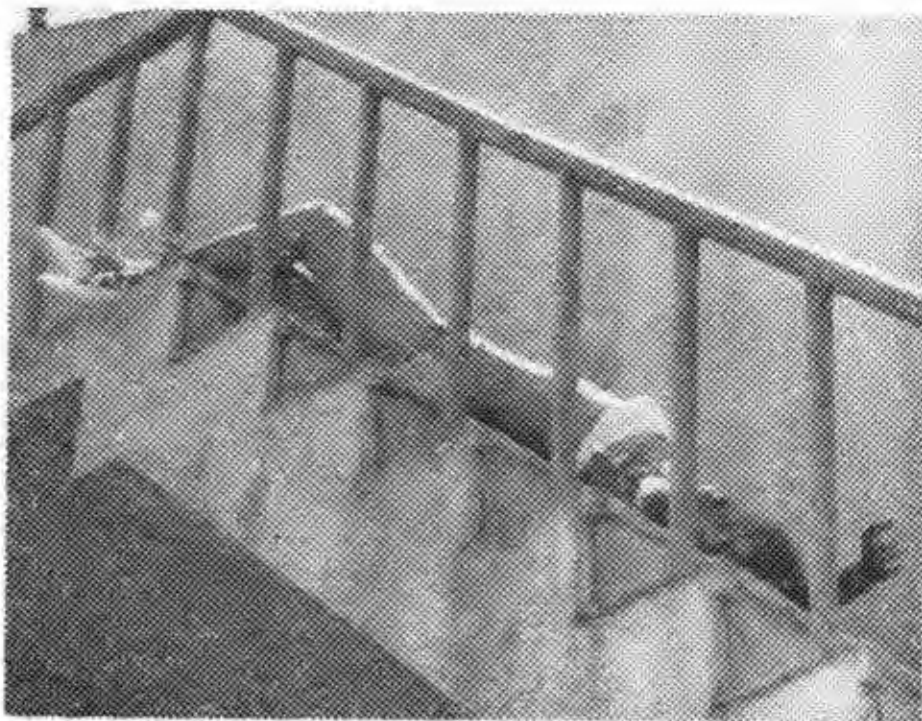
○着物（モデル藤田節子）

紺の着物に帯つきで正装をした女が縛られている。彼女は素足で横坐りし後手である。この女の手を縛る紐は、ただ一本、ぐいと両腕を締めて、その勢いで背後に廻してある手を縛る。女の髪は心持ち乱れ、生まれてはじめて味わう縄なのであろう。驚愕と諦観、そして悦虐の目差しで、やや伏目がちに一点を凝視しつつ、女はひっそりと坐っている。縛られたまま――。

この作品の基調は華やかな静寂である。それは辻村氏がモデルに、きちんと着物を着せたこと、そして横坐りにさせた結果、わずかに裾が乱れたことなどにより、まず見事に表現された。

更に氏はモデルの素足を一つのアクセントとし、そこから発する色気と、その足の上にある肉感的な極めて肉感的な尻、及び太ももなどを共鳴させて、ここに清潔なエロティシズムを一面に撒き散らしているのである。少しの乱れも見せぬこの女の襟元は豊かな乳房

萩 千恵子



を包んで息づき、丁度、乳の下あたりであらう、女を縛っている一筋の腰紐が、そのくびれから、かなりの固さであることを示している。

辻村氏の『ニューモデルのプロフィール』によると、この写真は、藤田嬢がはじめて編集部スタジオを訪れた時に撮影されたものだという。もと宝塚映画のニューフェイスの藤

田嬢は「顔は下ぶくれの男好きのする美貌、近代的な姿態の持主」で、辻村氏をして「機会があったら、もう一度、思うさま、彼女を縛り上げてみたい」と回想せしめた女性であるが、何故か彼女も『奇ク』では短命に終わったモデルであった。

○『ニューモデルのプロフィール』中の作品これは、五月特大号の『緊縛モデルの素顔（その三）』に続く原稿、即ち萩千恵子嬢を中心とした（その四）が休刊事件で機を逸したため、稿を新たにして発表された新人モデル紹介記である。登場人物は加賀利江子、藤田節子、須川令子の三人。それぞれの記事に一枚ずつ写真が発表されている。

『加賀利江子嬢の緊縛ポーズの一つ』と題する写真は、先の『ポリューム』に於ける横坐りの加賀嬢を仰向けに寝かせた構図である。故に縛り方や縄目の固さは、すべて同様であるが、水平に近い後手で仰向けにされたため、厳しい縄目によって上下を締められた乳房が一層、強調され、それが辻村イズムの猿轡やシユミーズから、こぼれる太股と相まって、清らかな中にも肉感的な雰囲気、かもしでいる。

『藤田節子嬢の緊縛ポーズの一つ』

この作品は『着物』に於ける藤田嬢を立ひざで斜下方を見つめさせたものである。立ひざのため、着物の裾の乱れは大きく、腰巻が彼女の色気たっぶりの足にかかって艶めかしい効果は、より一層高められている。着物の袖によって分明には解らぬが、彼女の後手は相当高く組まれ、縛られている模様である。しかし藤田嬢の場合『着物』の構成の方が優れている。

『須川令子嬢の野外にて初めての緊縛ポーズの一つ』

夏のワンピース姿の須川嬢が、木に立ったまま縛られている。彼女は先ず後手に縛られその上、二筋の縄で木に密着して縛られている。柔かい腕に喰いこむ縄が、その固さを物語っている。

藤田嬢の写真は、やはり『ながし目』が数等、優れている。

昭和三十一年 四月号

○『手首が痛いから、早く解いてエ……』（モデル加賀利江子）

この作品は、構成者として辻村氏の名前は何処にも記してなく、又、氏の作品であると証する、何の資料もない。しかし私は確信する、この写真は、紛れもなく辻村氏の作品で



あるということ。

それは加賀嬢の着衣、及び緊縛の状態が三  
十年十月号の『ポリニウム』『うつぶせ』と  
全く同様であるからだ。

作品の価値は本号の方が、一頁大の明細な  
ものであるだけに、十月号のそれよりも美し  
さにおいて又、SM味において、はるかに迫  
力のあるものとなっている。

ポーズは『ポリニウム』の加賀嬢を真横か  
ら撮ったものである。彼女は、そのふっくら  
した腕を完全水平に後ろで縛られている。ま  
さに一点非の打ちどころのない緊縛である。  
四筋の縄は二本ずつ束になって、この女の腕  
と乳房を締めつけ手首も固く結ばれている。  
辻村イズムの美しい縛り方が、ここにある。

縄目が固いたためであろうか、力なく握った  
加賀嬢の指の表情が可憐である。

後手に縛った手首のあたりから襟へ向かう  
背筋の美しい曲線は、黒髪に続く所で布の結  
び目によって中断されている。猿轡がはめて  
あるのだ。しかも、それは鼻の上から顔半分  
を掩う、あの辻村型の猿轡なのである。彼女  
の形のよい鼻の線をそのままに描いて、その  
ため生じた幾筋かの猿轡のひだが、大変に官  
能的である。

黒いバックに白い加賀嬢の縛身は、捕われ  
た白鳥のように美しい。彼女の写真では結局  
本号のものが一番、優れている。それは改め  
て指摘するまでもなく、完成された辻村イズ  
ムの写真化だからである。そして、その結果  
緊縛美が、いやその範疇を超越した永遠の美  
が、見事に描き出されているからである。

### 昭和三十三年 一月号

○腰元折檻（モデル村井知可子）

辻村氏は村井嬢を使用して何枚かの『腰先  
折檻』を連載されている。まず、本号での発  
表作品は二枚である。

床の間に見事な軸の掛かった和室で、典型  
的な腰元スタイルである、矢絣の着物を着た  
一人の女が縛られている。

一枚は正面から撮ったもので、腰元は四筋  
の、だんだら紐で後手に縛られ、鼻から下を  
掩う、あの辻村型猿轡をはめられている。も  
うかなり、折檻されているのだろう。高島田  
に結い上げた髪は乱れ、猿轡の上に、はらは  
らとこぼれている。着物の裾も大きく捲れ上  
がり、右足は、ももから露あらわにされて、足首の  
あたりにかかる腰巻が艶めかしい。

主人の意に逆らったがための折檻か、或い  
は又、腰元に身を変えた敵方の女間者が発覚

したのか、この女の折檻は、まさにたけなわ  
である。

もう一枚は横向きのポーズで、着物がはだ  
けて露出された両足を、大きく横坐りにして  
いる。両手は帯状のもので一卷にして縛って  
あり、猿轡ははめていない。髪も乱れておら  
ず、今この部屋に連れ込まれて、何らかの折  
檻が行なわれようとしている状況である。腰  
元に突きつけた刀が鋭く光る。

以上、二枚の写真でとるべきは、やはり猿  
轡をはめた方であろう。全体的にこの女の様  
子から、かなりの折檻の進行していることが  
納得され、それ故に責められる女の哀しさが  
よくにじみ出ている。そしてこの女は、如何  
なる運命をたどるのである——と観る者を  
して、しばしの空想に更けらせる迫力を持っ  
ている。傑作と言うべきであろう。

### 昭和三十三年 六月号

○腰元折檻（モデル同前）

撮影場所、及び服装等、すべて先の一月号  
と同様である。発表作品は二枚で、正面から  
のものと斜背面からのものである。

先ず正面の写真であるが、腰元は、しごき  
で二筋、胸から後手を縛られている。着物を  
通しても、よくわかる豊かな乳房——特に左

——の上下を締めつける、しごきが作るくびれが、極めて艶めかしい。

しかし二枚の中で、より優れているのは、斜背面からの写真である。正座した腰元は、後から刀の鞘で、ぐいと前に押しつけられた為、かなり、こごまった恰好にされている。丸い肩口から後に回した腕の線、くつきりと現われた尻の線、そして、しごきでくびれた丸い乳房の線等、正面からの作品よりは、かなりエロティックな味を、かもしている。女というものの可憐さと肉感が見事に引き出された、辻村氏の腰元シリーズでは最高の作品ではなからうか。

しかし、この『腰元折檻』も、実は力なく見えるのを如何ともすることが出来ないのがある。というのは『三味線』という一頁大の傑作が隣頁に掲載されているからだ。

### ○三味線（モデル愛川悦子）

この作品は、目次にも又、写真頁にも構成者として辻村氏の名前は記されていない。私は当時、この作品を一見して、この縛り方、この雰囲気、まさに辻村氏のものだと直感したのを覚えている。しかし、しばらくそれを証明するのは不可能であったが、三十四年十二月号の『話の屑簞』を読むに及び、自分の

直感が的中したことを知り非常に嬉しかった思い出がある。

氏はその文中で「昭和三十三年六月号掲載の口絵フォト『三味線』は私の構成によるものだ。近代的

な感じの女に、古風な三味線の配合と長襦袢の乱れが、反って非現実の美しさを浮き彫りにしている」と言われている。

さて上記の要を得て簡潔な辻村氏の解説ですべてが髣髴とするのであるが、敢て蛇足を加えると、ひっそりと静かな和室の中に一人の女が縛られている。彼女は大きな尻を畳につけるようにして、両方の足を崩して坐っている。女は粋な長襦袢一枚の姿で、大きく乱れて捲れ上がった裾からは、太ももまでが露である。丸い膝頭が、可憐で娘らしさを添えている。裾ばかりではない、襟元も、ぐっとはだけて、両の乳房と肩が剥き出しである。そして、そのあたりに色濃い頰魔的気分が漂っている。

女は、やや太目の縄で胸と腕を厳しく縛られている。縄と縄との間から大きくくびれて



館典子

飛び出した乳房が極めてエロティックだ。縄は更に交叉して肩口から背中へ回る。

女は横向きのポーズであり、又、長襦袢の袖に邪魔されて、後手の様子は本来ならば定かでない筈である。しかし、この『三味線』は心憎い演出をしてあるのだ。即ち、後ろに鏡台が置いてあるため、後手の様子が、よくわかるのである。

やはり、そうだ。——女は後手を実に美しく、そして固く縛られている。厳しい縄目がありありと鏡に写し出されている。

その上、この女には猿轡がはめてある。鼻の上を掩う式のものではないが、ただ、お座なりの、はめ方ではないことは頬に喰い込むような布の緊張感により、よくうかがわれる。

女は伏目のまま、じっと動かない。女の膝には一張の三味線が、弾くことを強要するか



のように置いてあるが、縛られたこの女にはどうすることも出来ない。只、弾かない罰の我が身に迫るのを、じっと待つより仕方がないのだ。

この『三味線』には、辻村氏の主張する頽廢的緊縛美が見事に、うたい上げられているといっても、少しも過言ではない。

特に照明の効果的使用により、女の丸い膝腿、乳房から官能的光沢が発散され、それが観る者をして性的興奮を起こさせるのに充分である。その上、この女は、辻村イズムで縛られているのだ！

又、写真構成上の道具立ても無駄がなく、そのため三味線、行燈、畳、女体、長襦袢、縄、猿轡等、すべてが頽廢的緊縛美を描き出すことに、ひたすら協力し、全力を出している感を受ける。

重ねて言うが、この写真は頽廢的緊縛美というものが如何なるものであるかを、見事に示した作品である。かねがね頽廢的緊縛美を追求されている辻村氏は、まだ一言も、それを追求し得たとは言われていない。しかし、この時、この瞬間、氏は遂に頽廢的緊縛美の殿堂に足跡を印し得たのである。

### 昭和三十三年 七月号

○腰元折檻（モデル村井知可子）

発表作品は四枚。今までの『腰元折檻』が全部、室内であつたのに対し、本号のは野外での縛り写真である。

今、仮に四枚中、上段の右からA B、下段の右からC Dとしよう。

Aは二筋の太目の縄で後手に縛られた腰元が、若侍によって木に縛りつけられている立姿である。腰元の両足も二筋の縄で縛ってある。苦しいのか腰元は少し体を曲げるようにしているため、侍の体に押しつけ気味の腰の曲線が艶めかしい。

Bは、すっかり木に立姿で縛られた腰元の足元に、侍がしゃがみこみ、多分、足を縛っているであろう。そのようなポーズの写真である。腰元のおきらめの表情がいい。

Cは、四筋ほどの縄で胸と後手を縛られた腰元が木に吊り下げられている構図である。何故か足の縄は、とかれていた。しかし、それがかえって、吊り責めにあつて揺れること以外に何も出来ぬ女に、如何なる愛撫的責めが行なわれようとしているのであるかということをおぼろげに、妖しい気持にさせられる。

Dは二筋の縄で縛られた腰元が立木の所へ

連れてこられて今、縛りつけられている所であろう。侍は腰元の背後で、しきりに縄を結んでいる。まだ女の足は縛っていない。

以上四枚の写真ではAとBが優れている。特にAの肉感とBのおきらめの表情を見逃すことが出来ない。

しかし一月号からの連作『腰元折檻』は、辻村氏の作品中にあつて必ずしも秀逸なものとは認め難いのである。例えば、本号にしても、見ようによっては腰元が侍に縛られているとも、縛られた腰元が侍に助けられているとも、受けとれるからである。モデルに表情が不足しているのである。又、室内の作品では、武家時代にふさわしくない近代的な、じゅうたんが敷いてあつた。あまり趣向に走りすぎて迫真力を欠いてしまったと言ふべきであらう。

実は、辻村氏自身それを認めて、次のように批判されている。

○

既に『腰元折檻』のグラビアで紹介の通り、かつらや腰元の衣裳まで一揃い整えて彼女に、美女折檻の構図を求めたのであるが、之は残念乍ら、失敗と云わねばならない。

村井嬢が、カリブスタイルで、全然着物の着付すら知らなかったこと。顔容が古風でない為、水に油の如き洋装の腰元が出来上がった事。不馴れな日本式化粧が、緊縛の途中崩れて、化粧直しはしたが何とも奇妙な様相に一変した事。一読者は彼女のこの写真を見て、男の交装だと云って、がえんじない。何とも情けない事である。相当の費用を使つての撮影だっただけに、箕田氏もカクンと来て、改めてもう一度とは申されない。これが成功しておれば、奇クに画期的な責め写真が載るのであるが、何時かは、純日本式のモデルを駆使して、今ひとたび、昔風の美女の責めを撮らして貰いたいと考えている。（『話の肩籠』昭三十三・七）

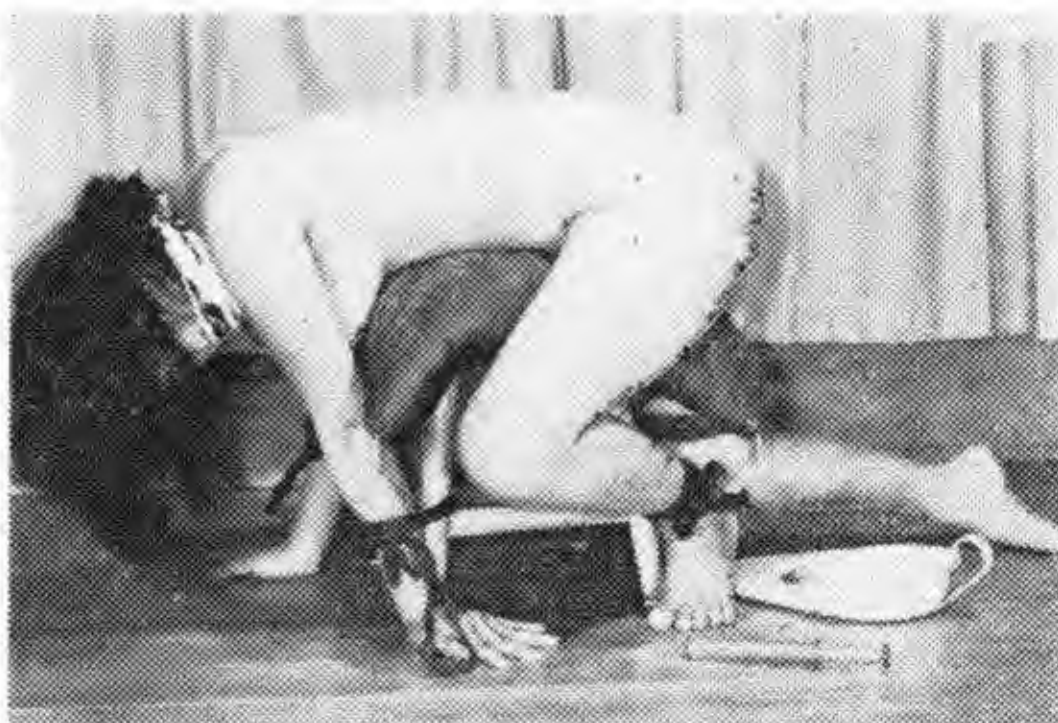
# ○囚衣の女（モデル大塚啓子）

発表作品は三枚で、構成は確かに辻村氏であるが、撮影は違う。当時の編集長、箕田氏である。その理由は後述しよう。

さて作品であるが、いずれも素肌に白色の囚衣一枚の大塚嬢である。

最初の作品は正面から撮ったもので、黒色の縄で、きっかり菱形縛りにしてある。白い囚衣に蛇のように、まといつく黒縄が非常に

桜井葉子



S的な印象を与え、はだけた胸から少しこぼれる豊かな乳房がエロチックである。菱形縛りに後手を縛った黒縄は、さらに腰から下へのびて、肉感的な両足を二筋、きつく縛り上げてある。少し立膝気味にした縛られた二本の足は、無駄のないアクセントとなつて、こ

の作品の画面を引き締め、且、欲情的ムードをかもしている。巧みな構成である。

二枚目は一枚目の大塚嬢の両足の縄をとき足を崩させて横坐りにさせたポーズである。後手の縛り方は前と同じ。大塚嬢は目を伏せて縄目の固さを噛みしめる。この作品は一枚目の写真より、官能的な点において優っている。というのは、大塚嬢は股を開き加減にして横坐りしているため、短い囚衣は大きく捲れ上がり、むっちりした両足が、惜し気もなく露呈されているからだ。特に、彼女の右足の太腿から丸い膝頭のあたりは、強烈なエロティシズムを発散する。開かれた股に、わずかに布を垂らした構成は、観る者に刺激的な想像を、たくましくさせる。

三枚目の作品は、二枚目の大塚嬢を体を仰向けせ寝かせ加減にしたものである。丸い乳房は三枚中、一番はっきりと写り、その上部を通る、彼女の咽喉で交差した黒縄が印象的である。大塚嬢は長い黒髪を床に垂らし、身動き一つ出来ない我が身をどうしようもないといった表情である。

この『囚衣の女』についても辻村氏は興味深い思ひ出話をされているので一寸、紹介しよう。



責めに徹したもの——これは云うは易く難かしい事であるが、編集の箕田氏は、私の言をいれて、先日、髪の毛の長い大塚嬢子嬢をモデルとして、白衣の責折檻を撮る事になった。

U氏の裏の離屋を借り、前日から、はりつけの材木、十露板木の代用品、吊柱等いろいろに準備して、コンテもちゃんと書いておいて、いざ撮る段になると、そうそう大塚嬢の体が云うことを聞かない。

そろばん責め、はりつけは、痛い痛いの連続のうちに、何とか撮り終わったが、逆吊りとなると、始めから拒んでしまつて、挺子でも動かない。コンテの五分の一も進行しないうち、この日はチョンとなったがそれでも、まあ初期の目的の、幾分かは達成したと、私は二人が帰った後、撮り終えた35ミリのフィルムをとり出そうとするとなんとフィルムが全然、廻っていない。落着いたつもりでも、矢張り、あがっていたのか、完全にフィルムを装填せず、あれでもない、これでもない、空廻しのフィルムを散々に、ひねくり廻していたのである。啞然、呆然、落胆……。

○ 箕田氏のは間違ひなく撮れている筈であるから、何れ誌上で見て戴こうが、かくて私は三時間と云うもの、独りりきみ、張り切り、写らぬカメラを振り廻していたのである。（『話の屑籠』昭三十三・七）

○ 辻村氏が『囚衣の女』の構成のみで撮影をしなかった理由、以上の如しだ。

### 昭和三十三年

#### 臨時増刊号 SADO 特集号

#### ○ 拷問（ソロバン責め）

モデルは大塚啓子。

発表作品は五枚で、いずれも同様なポーズである。即ち、あの白色囚衣を着た大塚嬢が江戸時代ソロバン責めに使用した如き、鋸状の木の上に正坐させられているのだ。更に彼女の体は後の柱に固定されている。

大塚嬢は後手にされ、亀甲型に両腕、腹、ももを縛られている。彼女の咽喉の前で結ばれ胸部の中心から腹部へ通っている二筋の黒縄がS的な興奮を、もたらす。

五枚中、優れているのは、竹竿で頬を、ぐいと小突かれ、大塚嬢が顔をのけぞらしている写真である。彼女の、両肩にかかる豊かな黒髪の乱れに頹廢的雰囲気、うかがわれ、

肉付きのよい頬、官能的な鼻などが、更に男からの責めを誘いかけるように、エロティックに写っている。

この作品の隣頁にある、大塚嬢が顔を仰向けているのも、捨てがたい味のある傑作である。彼女を責める竹竿は、ふっくらした乳のあたりを、しきりに、いじめている。大塚嬢は苦しさ快感に、もだえつつ、黒髪を口に噛んで体を、よじる。――

彼女に、その長い黒髪を噛ませた構成が、極めてSM的で成功している。

#### ○ 囚衣（モデル同前）

これは『囚衣の女』の時の作品であろうか大塚嬢の縛り方は、それと同じで、菱形である。作品は八枚で、いずれも大塚嬢のグラマ―な肉体を見事に写し出している。

この八枚の中に、幸いな事に背面が三枚、ふくまれている、辻村氏の縛り方が詳細に解るのである。大塚嬢は両手を完全に水平に後に回し、少なくとも三筋以上の縄で厳しく縛られている。その縄は、この女の両腕を縛っている縄と結ばれ、更に上部へのびて咽喉にかかった縄に掛けられて、ぐいと締められている。もうこの女は完全に縛られて、どうする事も出来ない。彼女は、ただもだえるのみ

## 大塚啓子



で、膝で立つと、我々に豊かなヒップを示し正面をみせると、大きな丸い乳房を男達の見るがままにまかせる。そして羞かしいのか、体を横向きにすると、髪の毛を噛んで、うつ向く。

## ○懸崖（モデル同前）

大塚嬢の着衣及び、縛られ方は前と同じ。一本の梁に滑車を使用して略、平行に両手両足を吊り下げた写真が三枚、後手だけで吊ったのが三枚、後手菱形縛りで坐っている作品が二枚である。

この一連の写真集が「懸崖」と題している所から、辻村氏の主眼とされ、又、一番発表しなかった作品は、梁と平行に吊り下げた写真であろう。しかし、この写真は結論から言う実験的意義しか認められぬのが残念であ

は少しも見えず、為に、官能的感觉に乏しい結果を招来した。大塚嬢の面白そうな笑い顔も、いたく迫力を、そぐ。

後手を吊った作品も同様の事がいえる。我々は過去に辻村氏構成になる極めて迫力に富んだ吊り写真を知っている。例えば二十九年三月号の川端嬢を使用した作品の如き……。

しかし上述の欠点も、大塚嬢が緊縛モデルとして必ずしも適当でなかった事、又、辻村氏が「大塚嬢を川端嬢のように、まだ使いこまれていなかった事等に、その原因を探る事が出来よう。

要するに、この「懸崖」の頁では、後手菱形に縛られて坐っている作品が一番秀逸である。白い囚衣と、その上から、まといつく黒縄のコントラストの妙、大きな乳房の持つエ

ロティシズム、一寸、ふてぶてしい表情等、SM味にあふれた写真である。

## ○蠟滴（モデル愛川悦子）

発表作品は四枚で、いずれも乳房を中心としたクローズアップである。

愛川嬢は乳房——実に素晴らしい丸く豊かな乳房である——の上と下を、太目の縄で二筋ずつ縛られている。彼女は、それだけでは許してもらえず、更に胸の上部も二筋の縄で縛られている。腕のくびれ、乳房の下のかくびれ等が、縄目の固さを明確に示している。腕の下から、わずかに見える指の位置により、愛川嬢の後手は完全に水平以上に持ち上げられている事が分かる。見事な辻村イズムの縛り方である。

さて、以上の構成だけでも、これらは緊縛美の名作品として鑑賞できるのであるが、加うるに表題の如き蠟滴なのである。豊かな二つの乳房に点々と蠟滴が、こびり付いているのだ。愛川嬢が口を、かすかに開いたもの、又、口を閉じたものが上下に掲載されているのも面白い。乳房の蠟滴と口の開き具合を交互に繰り返し見ていると、愛川嬢の悦虐のうめきが聞こえて来るような気がする。心憎いばかりの構成である。



この作品は、一年ほど後に発表された辻村氏の随想『話の肩籠』（昭三十四・十二）により、氏の構成になる写真である事が判明したものである。氏は文中「蠟涙の激しさは今でも、まざまざと臉に残る程の強烈さであった」と回想されている。

なお、辻村氏は素晴らしい傑作を発表されながら、しばらくしてから「実は、あれは私の作だ」と、さりげなく明かされる事が多い。私もそのお蔭で、後になって何枚かの辻村氏の作品を発見する事が出来た。汚穢の世にあつて、辻村氏の美しい謙譲という人間性が、氏の構成されるSM写真の、所謂、辻村トーンともいべきロマンティックな味わいに、見事に反映しているのを改めて思い知るのである。

### 昭和三十五年 一月号

○撮影会風景ポーズ集（その一、その二）  
モデルは館典子。

（その一）は五枚（その二）は四枚である。

本号掲載の記事、撮影会兼読者座談会『緊縛モデル撮影風景と女体責めの種々相について』によると、この写真は昭和三十四年十月十五日に撮影されたものである。

（その一）の館嬢は華やかな模様の体の線が

よく出ているタイトのワンピース姿である。

一枚目の写真は、立木によりそうように立ったポーズである。手拭いで鼻の上から顔半分を掩う久びさの辻村型猿轡が、まずS的興奮を観る者にもたらず。乳の上下をはさむように、館嬢の体に巻きついた縄は、ほぼ水平に組み合わされた彼女の両手首を、固く固く縛り上げている。館嬢は左足を曲げて庭石に足をかけているため、さらでだに体に、びったりしたワンピース、肉付きのいい尻から太ももの曲線が、くっきりと描き出され、目を伏せる館嬢の猿轡姿と相まって、サディスティック且、エロティックな傑作である。

二枚目は、その館嬢を大きな石に腰かけさせて、斜背面から撮ったものである。そのため後手に縛られた様子が、よくわかり、腰掛けたためにつぶれて、かえって生々しく見える彼女の柔らかそうな尻、力なく握った後手のひら、少しふり返るようにした、苦しそうな辻村型猿轡等、一分の隙もない名品である。

三枚目は、その館嬢が足を組み体を倒したポーズで真横から撮ってある。鼻の形から、あごの線まで、はっきりと描いて、しっかりと、はめた猿轡。彼女は、すっかり観念して

目を軽く閉じている。襟元から、ゆるやかな背の曲線は、すんなりと丸い尻に続いて、その上を掩うタイトのワンピースのしわが、エロティックである。ぷくっとした腕は略、水平に後ろに組まされ、黒縄が、容赦なく二筋三筋、締めつけ縛り上げている。館嬢が身にまとうタイトのワンピースは、かえって次の愛撫的責めを縛者に挑発するようである。確かに、そうだ。この女の、清らかな、静かな美しい表情は、本当は充分に猿轡を、縄を楽しんでいることを示している。辻村氏は、不敵にして清純という、相反する、それだけに妖しげな雰囲気、見事にキャッチされた。何時まで見ていても飽く事を知らぬ傑作である。

四枚目と五枚目は、タイトのワンピースと同じであるが、猿轡が豆しぼり、縄が普通の太目のものになる。二枚とも敷石に腰かけた館嬢が、その脚線美を誇るかのように足をくの字にして、後手に縛られたものである。彼女を身動き出来ぬように縛っている縄は四筋で、乳房を中心に、その上下に二筋ずつである。腕のくびれがS的興奮を、もたらず。

普通、撮影会などでは、なかなか自己を表現することは、むづかしいのであるが、辻村

氏は、その作品に、いずれも氏独特の調子を打ち出すことに成功されている。それは氏の技術上の完全さもさることながら、あくなき緊縛美追求心の賜物であり、又、猿轡、緊縛等、辻村イズムの輝かしい勝利なのである。

(その二)は、猿轡をしていない写真一枚を除き、皆、猿轡——勿論、辻村型の——に主題が置かれている。猿轡をはめられた館嬢は或いは顔を突き出し、或いは顔を仰向け、或いは恍惚と中空を凝視する。彼女の美しい目の表情は、いかに辻村型猿轡によって生かされていることだろう。辻村型猿轡のみが持つ美的効果である。かつて、奇くには猿轡をはめると俄然、妖艶な美人に一変するモデルがいた。そして館嬢にも又、世の女性達にも、この原理は通用する。猿轡——勿論、辻村型の——とは、何と不思議なアクセサリーなのであろう。

(その二)四枚中、一番優れているのは三枚目の作品で、ももに平行に折り曲げた上体は三筋の黒縄によって無造作に縛られている。乳房のふくらみや腕を締めつける縄に強烈なS的雰囲気があり、洋服に描かれた腰から太ももの曲線、揃えて曲げた脚線に清潔なエロティシズムが溢れている。大きく猿轡をはめ

られた顔は、何事かを訴えるような女の目差しを、いやが上にも強調して、そこにM的興奮を漂わせている。美しい中にも凌辱的な妖しい名作品である。

私は、この一連の館嬢をモデルに使用した写真で、辻村型猿轡のもたらす美的効果を繰り返し指摘した。そこで、辻村氏と館嬢の猿轡の、面白い楽屋話を紹介しよう。辻村氏の『緊縛モデル撮影風景と女体責めの種々相について』に次のような文章がある。

○

豆しぼりの手拭で猿ぐつわをかまして、庭石の上に坐らせて、さまざまポーズをとらしてみる。ああでもない、こうでもない、と四方から声がかかると、典子嬢は、その度にイヤな顔もせず、不自由なタイトの膝をよじらせてポーズを変える。

「ああ、猿ぐつわがとれるわ!」

余り鼻の上をきつく締め上げたので、手拭いがずり下ってしまったのだ。十九の娘の口から「猿ぐつわ」という言葉が吐かれると妙に艶っぽく聞こえるから不思議だ。この娘、猿ぐつわなんて言葉、いつ頃から覚えやがったのかな、と思ったりする。

今度は鼻の上から咽喉元まで大きく掩っ

て力いっぱい締めつけて猿ぐつわを、し直してから……(略)

○

上記、辻村氏の文中、最もSM的興奮に富んだ個所である。

○『緊縛モデル撮影風景と女体責めの種々相について』中の作品(モデル館典子)頁毎に、ほぼ一枚ずつ、写真が掲載されている。

(一)は猿轡なしで四筋の縄で後手に縛られ庭石に腰かけたポーズである。辻村氏を以てしては、習作程度のものであろう。

(二)は樹木を背景にした立ち姿で、館嬢は猿轡をされている。縛り方はオーソドックスで只、立っていますといった感じの作品で、これも氏にしては、カメラならし程度のものである。

四は今までは格段の相違を持つ秀作で、辻村トーンが、みなぎる緊縛美写真である。館嬢は三筋の縄で厳しく縛られ、豆しぼりの手拭いで辻村イズムに則った猿轡をはめられ悦虐の目差して正面を凝視する。タイトのワンピースのタイトなるが故に腹部から腰による皺、そして短い裾から、すんなりと出た両足等がS的官能味を、しきりに発散させてい



## 愛川悦子



る。何故グラビア頁に大きく発表しなかったのかと、惜しまれる傑作である。女を縛るとは、こうやるものなのであろう。

(四)はポーズ集(その一)の一枚目。あの素晴しかった——と、ほぼ同様の構成である。同じ時に写したものであろう。ポーズ集の方が左足を石にかけて、くの字なりに曲げているのに対し(四)はその足を降ろし、上体を少し前へ傾けている。故に、彼女の肉体の線はポーズ集の方が、より濃厚に出ており、それだけに官能味も強いが、(四)とても、うつ向いた顔に、しっかり、はめられた辻村型猿轡や厳しい縄のかけ方にS的興奮は満喫できる。特に館嬢が上体を倒したため、彼女を縛っている縄が彼女の体の丸みを、はっきりと描き出

しているあたり、やはり捨て難い辻村氏の名品である。

(六)は豆しぼりの手拭いで猿轡をはめられ四筋の縄で無造作に、しかし厳しく縛られた館嬢が庭石に腰かけているポーズである。前に揃えて投げ出された足を上へたぐっていくと、かすかに見える下着と、くっきり出た丸い腰の線が、よく強調されて、清潔なエロティシズムを感じさせる。鼻の上から咽喉元まで掩う猿轡は固く、結び目の布が肩口に垂れているのも極めてS的である。さて、観念したらしいこの女に、どのような愛撫的な責めを加えてやろうかと、そんなことを思わせる佳品である。

(七)は(六)よりも大きな石に腰かけている。そのため館嬢の上体はシャンと立っているが、それだけに丸い尻からスナリと揃えて、くの字に曲っている足に至る線は、観る者をして飽かしめない。辻村イズムの猿轡と緊縛がエロティックの中にもS的なアクセントをつけ、一分の無駄もない名作品である。これも

何故、グラビア頁にしなかったのだろう。

(八)大木の根かたに、館嬢は縛られて、しゃがんでいる。美しい顔は勿論、辻村型猿轡で掩われ、五筋の縄で後手に縛られている。フワッと開いた洋服の襟から大きく見えるシュミーズが豪華である。猿轡をはめられた館嬢は、つぶらな瞳で何事かを言いたげに、しきりに、こちらを見ている。何を言いたいのかは、わかる。もっと愛撫的な責めをして、と言うのだろう。ボーイフレンドと、お嬢さんのSMプレイといった軽やかな作品である。

## 昭和三十五年 十月号

○顔枷の装着(モデル桜井葉子)

私は「顔枷」なる物が、責具として如何なる効果をもたらすものか、浅学にして知らない。しかし、この写真が発表されている前頁に「防声具と乳房責め」と題して、やはり桜井嬢が全く同じ「顔枷」を着けているところから考えると、これは防声を主眼とした猿轡の変型であると思われる。成程、そう思うとよく観察すると、顔を動かさないように留めるのであるから、もし完全に装着されたら、少しも声を発する事は不可能であらう。

発表作品は七枚で、先ず一枚目から三枚目までは椅子に半枷で坐っている桜井嬢に、顔

枷を装着している写真で、第一と第二は最後の尾錠を締めつつある所、第三は装着し終わり、その様子を点検している所である。桜井嬢は水平以上に後手を組まれ、やや細目の縄で咽喉元から両腕へ、そこで一巻きされて乳の上と下を縛られている。咽喉元を縛った縄は乳の上下を締めつけている縄と連結され更に腹部から下へ、即ち、この女の股へ回されている。両手が、ぐいと後ろへ組まれて、それが水平以上になっているため、桜井嬢の左右に、張った肘の線が強烈なS味を出している。あとの四枚は顔枷をされた桜井嬢の立膝姿と立姿で、いずれも前手縛りである。腕は依然として喉元と乳の上下を縛られてはいるのだが、両手首は、やや開いた間隔で皮手錠をはめられ、足首にも、同様な皮足枷に細縄で結んであるのだ。確かに、これでは桜井嬢は助けを呼ぶことも、逃げることも出来ない。しかし、この一連の写真は、只それだけという感じなのである。頽廢的緊縛美など、少しもないのである。何故か。

それは、辻村氏が構成されていながら、氏が自ら確立された、あの輝かしい辻村イズムを一切、否定されているからだ。我々は辻村イズムを、もう一度、考えてみよう。緊縛美

の基調として辻村氏は「緊縛の美感が、そこはかとなく、ただよう」のは「長い太目の綿ロープで、スツキリと柔肌を形よく緊縛した場合」(「緊縛に関する十二章」)であると言われ、又、猿轡については「口と鼻を蔽う大幅なものがよく」外国式の器具を使用する方法を排斥されていた。(「緊縛の構成と責めのアイデア」)だからといって私は、この公式に、はずれたものの総てを拒否するものではない。事実、辻村氏は緊縛美追求のために種々の実験的作品を発表され、例えば荒縄を使用した川端嬢の場合の如く、非常に成功した写真も多くあった。ただ、その場合は辻村イズムの精神をふまえての前進的実験だったのである。それ故の成功であったのだ。しかるに本号の「顔枷の装着」には、何故かそれがなく、辻村氏自身の手で辻村イズムを無視した場合、いかなる結果に終わるかを実証するような皮肉なことになったのである。

沈潜期、最後の三十五年十一月号には、氏の作品は発表されていない。

以上、沈潜期を要するに、あの躍動に満ちた黎明期に較べると、実験的作品の多かった事が、その特色として挙げられる。しかし、それは殆どが必ずしも成功したとは言えない

と言うのは、氏の実験が頽廢的緊縛美追求途上の、更に次の高次の階程に昇るための必然的努力でなく、何かをやって、閉ざされた現狀を打開しようとする一種のあがき——精神的な——と、とることも出来るからである。当時の氏が官憲の調査の対象となつて、如何に精神的ショックを受けられたか、氏の活動からも、よく理解し得るのである。

しかし、ショックと心機一転を計つてのことであつたろうが、既述の如く、辻村イズムを犠牲にした実験は、すべて失敗に終わってしまった。けれども一方において「三味線」や館典子にみるように、全く辻村イズムに則つたものは依然として傑作ぞろい、黎明期の如くに、どれも粒よりという状態は少なくなっているが、それだけに、沈潜期の傑作は一際、輝いているのである。又、この期の最後で館典子を使用した作品により、氏が辻村イズムの感を充分、取りもどしてくれたことは嬉しく、さながら不死鳥のように大きく羽ばたこうとする、氏を感じるのである。

なお、沈潜期のみならず現在までの辻村氏の作品中、逸することの出来ない傑作「三味線」を氏に産ませたモデル愛川嬢を顕彰する意味でこの期を「愛川悦子時代」とした。



カット・須坂 旭

## 六回完結S小説

△その五▽

パ

ノ

ラ

マ

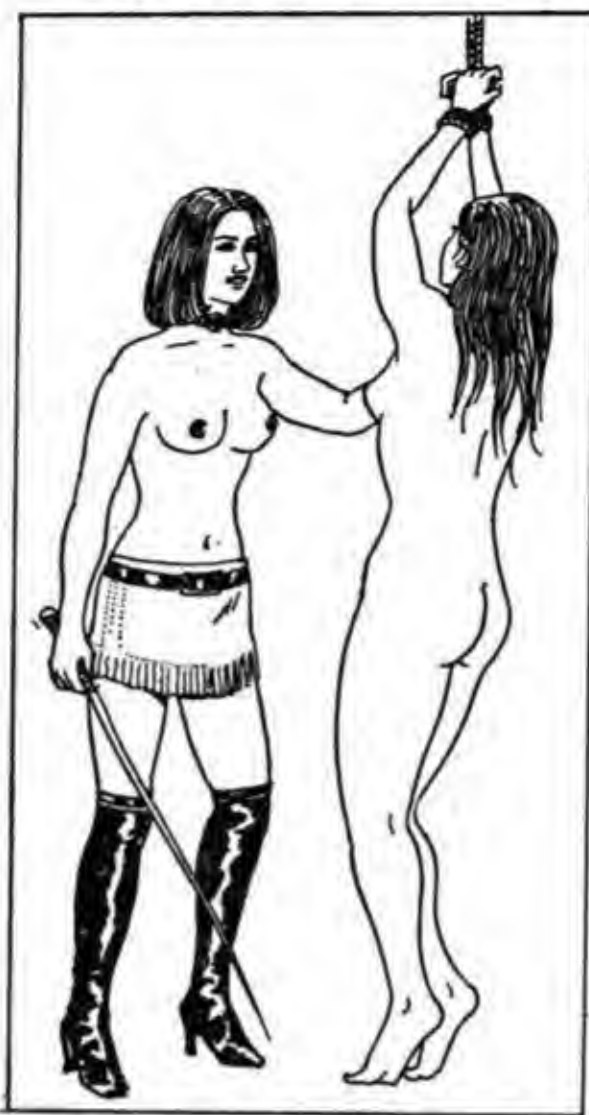
島

秘

譚

藤 見

郁



## あまい臭気

美香は、だれかの吐く息を頬のあたりに感じて、眠りからさめた。だが、まだはっきりと目はあかない。

男くさい息が唇のすぐ前にせまり、美香は

本能的に顔を反対側にむけた。それからだれかの手が、自分の髪の毛をまさぐる気配に、ようやく目をあけた。

目の前に微笑している大きな顔は、Qのものであった。Qの背後には、めがねをかけたシコがいた。

美香は反射的に身をおこして逃げようとした。しかし、それは無駄だった。美香は両手と両足をバンザイ型に、ベッドの金具にくくりつけられて眠っていたのだった。わずかに胸と腹を動かして、美香は逃げる姿勢をとっ

ただけだった。

はっきり目をさました美香は、自分の股間にあてがわれているオシメが、かなりぬれてるのをさとして、顔を火のように赤く熱くさせた。両手首と足首をベッドに固定されている身では、排尿はオシメのなかでするよりしかたがなかったのだ。

Qの大きな唇が、這うように美香の顎のあたりにせまった。

「いや、やめて、やめてください」

美香は無意識のうちに、そんな声をあげてうめいていた。肩をひねると、乳房が愛らしくゆれた。

「フフフ、まだなにもしていないよ。どうか

ね、よく眠れたかね。オシメの締めぐあいはどうだったかね」

Qは、美香のわずかに乱れている髪や、やわらかい小動物のような耳たぶを、指のさきで注意ぶかく、いじりながらいった。もう、かわいくてかわいくて仕方がない、といった愛撫である。

ネグリジェの胸もとから、少女のあたためられた、かすかになまぐさい体臭が、におい出てきて、Qの鼻さをくすぐった。

Qは、もうがまんができなかった。

「オシメはどうかかな？」

といいながら、毛布の下に右手をそろそろとさしこみ、オシメの状態をさぐった。オシメカバーの下に指を這わせて、湿りぐあいをたしかめるのである。

「いやッ、いやッ」

美香は尻をよじり、早くも痛切な泣き声をあげた。

Qの指は、しつこく美香のオシメの最もぬれているところを這いまわるのだ。

「ほほう、だいぶぬれているね。こんなにぬらしてしまったくせに、よく眠っていたね。かわいそうに、すぐとりかえてあげるよ。静かにしているんだよ」

Qは、背後にひかえているシコに、目で合図した。

シコはうなずいて、替えオシメが載っている移動テーブルを、ベッドのそばへ運んでくる。

Qは、美香のからだの上にかけてある毛布をはねのけた。

「ひいッ」

という小さな悲鳴をあげてのけぞったが、Qの手を払いのけることはできなかった。さらにネグリジェを裾から大きくまくりあげられた。

オシメをつけられ、さらにオシメカバーで包まれた羞かしい腰部が、Qの目の前にさらけだされた。

「さあ、とりかえてあげようね。こんなにぬれては、さぞつめたかっただろう。それとも自分のものだから、そんなにつめたくは感じなかったかな……」

微笑しながら、Qはオシメカバーのマジックベルトをはがした。

オシメをひらくと、淡い湯気が、ふわりとたちのぼり、同時に、かすかな臭気が、ただよい流れた。

Qは鼻を大げさにひくひくさせて、また微

笑した。

「フフフ……美しい少女のオシッコというものは、そんなに臭くないね。惚れてしまえばアパタもエクボというが、美香のオシッコのにおいは、まるで香水のようだね」

「いや、やめて、羞かしい！」

美香は、腰をくねらせて泣いた。そのたびに、手首と足首をしめつけている革紐が、くいこんだ。

Qは視覚と触覚でじつくりと楽しみながら美香の股間からぬれたオシメをはずし、乾いたガーゼで湿った皮膚をていねいにふいた。

それは、美香にとって、たしかに気持ちのよい感触であった。ぬれた部分が空気に触れるだけでも爽快だった。

しかし、その快感よりも、やはり羞恥の心のほうがはるかに強く、美香は目をとじ、尻をよじるようにして、むせび泣いた。

「こちら、そんなに腰を動かしては駄目だよ。じっとしていなさい。おとなしくしないと、罰をあたるよ」

Qは、美香の内腿を軽く掌でたたきながらいった。

シコが、Qの手にパフを渡した。

Qはそのパフを美香のまだ湿っている肌に



あてて、静かにたたきはじめた。

パフからは、ぜいたくな香料のはいったパウダーが、間断なく豊富に溢れでた。

「どうかね、気持がいいだろう。このパウダーでよくたたいておくと、美香の肌はもっと美しく、すべすべになるのだよ」

真珠をこまかく砕いたような色をしたパウダーは、美香の皮膚を覆いつくすように必要以上に、ていねいにたたかれるのだった。

「ああ、いや、いやッ。やめて、やめてください。羞かしい」

美香は、のどの奥のほうから泣き声をふきあげ、肩や腰を左右にふって、いやらしいパフの攻撃からのがれようとした。

「あばれても無駄だよ。手首と足首が痛くなるだけだ。もうあきらめて、静かにしていなさい」

いいながらも、Qは美香のその抵抗を内心では楽しんでいるのだった。

美香が完全にあきらめて、死んだ人間のようになっちゃったら、もうつまらない。

Qはパフをたたきつけ、美香の魅惑的な腰は香りのいいパウダーで白くおかわれた。

するとQはつぎに、新しいガーゼのオシメをあててのだった。

「さあ、新しいオシメだよ。いい気持ちだろう。だめだ、そんなに腰をひいては、オシメをお尻の下にさしこむことができない。もっとお尻を浮かさなくちゃ駄目だ。そら、もうすこし、上へあげるんだ」

「ああ、もうゆるして、羞かしい」

「羞かしいことなんか、ありやしない。美香は、赤ちゃんなんだからね。赤ん坊は、どんな格好にされても、羞かしいなんて言わないよ」

「羞かしい。ああ、ああ、やめて！」

美香は声をふるわせてうめく。しかし、どうにもならないのだった。ガーゼのオシメでおおわれ、小さな花模様のついたオシメカバーがその上にかぶせられ、ようやく美香はホッとした。

オシメ替えの作業が終わったと見て、シコがお世辞をいうように、猫なで声でいった。

「よかったわねえ、美香さん、さっぱりしたでしょう。それでは、朝御飯にしましょう」

Qが、ひきついで言った。

「そうか、まだ朝御飯前だったのか。それはうっかりしていたな。それでは、これから、わたしが美香を風呂にいれてあげよう。もっとさっぱりしてから、朝食にするといい。お

なかをすかしたほうが、おいしくたべられるよ。シコ、浴室へ行く用意をしなさい。私も一緒にはいって、この大きな赤ちゃんのからだを洗ってあげよう」

「かしこまりました」

シコは、うやうやしく頭をさげた。

## 地獄の浴室

その浴室は地下一階の西側にあった。

どこもかも広く、余裕たっぷりできていて、ぜいたくな浴室だった。内部はいくつかにわかれていて、さまざまの凝った形をした浴槽が設備されていた。

床に敷いてあるタイルもコーナーの雰囲気に合わせて色彩やデザインで、あかるく統一され、陰惨なところはひとかけらもない。

ここは、この「夢の城」へつれてこられた女たちに全身美容術をほどこすためにつくられた浴室なのだった。

美香は脱衣室でオシメをはずしてもらってから、あたたかいピンク色の照明にいろどられた浴室へ足をふみこんだ。というよりも、追いこまれたのである。

しかし、ひさしぶりに両手両足の自由を得

た美香は、思わず深呼吸をしたほどの解放感をおぼえたのである。

「さあ、こっちへおいで。わたしが美香のからだのすみずみまでを、きれいに洗ってあげるからね」

Qもまた、ガウンやシャツを、すべてぬぎすてていた。

美香はQのたくましい裸体をみて、思わずうつむいた。男の動物的な体臭が目の前においかぶさってくるような錯覚にとらわれ、両手で顔をおおった。

しかし、Qはかまわずに美香に接近し、その手首をとった。

「こわがることはないよ。こんなお風呂のなかで、乱暴なことはいない。安心して、わたしのいうとおりにしなさい」

Qは、おだやかにいった。

しかし美香は顔を赤くしたまま、固くうつむいていた。

男と一緒に風呂へはいった経験など、過去に一度もない。父親とだって、はいったことはない。

美香の筋肉は恐怖と羞恥に青い果実のように硬直した。左右の太腿を、こすりつけるようにして閉じ合わせた。

紫色のブラジャーとパンティ一枚になったシコが、Qと美香のそばへやってきて、マットを敷いたり、シャンプーや石鹸を並べたりして、こまかい世話をやいている。

バスタブのなかに、すでに湯はなみなみとたたえられていて、乳白色の湯気がたちのぼっている。

美香はタイルの上に敷かれた青いマットレスに坐った。その美香の肩へ、Qはポリエステル製の手桶の湯をやさしくかけてやる。ハンドシャワーを使えばかんたんなのに、わざわざ浴槽の湯を手桶に汲んでかける。こんなことが、Qには楽しくてしかたがないのだ。

十七歳の若いなめらかな裸身が、湯をはじいて、つやつやと光った。

「ほら、いい気持ちだろう。そんなに固くならないで、気を楽にもてばいいんだ。わたしが裸で、美香も裸だ。裸同士のご対面というわけだ。フフフ……。ふつうの男だったら、妙な気をおこして、美香にいやらしい真似をするかも知れないが、わたしはだいじょうぶだよ。わたしは、そんなケチなことは絶対にしない。わたしは、もっと美香を磨いて、もっと美しくしてから、ゆっくりそういうことをしようと思っている。美香のほうから、どう

か、してください、というまでは、わたしは美香のからだを、たいせつに、そっとしておくよ」

Qは、美香の肩にやさしく、すこしずつ湯をかけながら、楽しそうにいった。

湯をかけ終わると、手で洗いはじめた。

美香は低いうめき声をあげ、全身をくねらせながら、Qの手の接触による不快感を耐えた。

「さあ、はいるうか」

いいながら、Qはシコに目で合図した。

シコはうなずいて、美香の手をとり、立たせた。

羞かしさのために、左右の太腿をびたりと密着させ、なかなか立とうとしなかったが、シコに手首をねじられて、ようやく美香はマットレスの上から腰をあげた。

美香のために用意されたのは、透明風呂だった。それはバスタブがすべて透明プラスチックになっていて、

「さあ、おはいりなさい。いい気持ちよ」

シコは、美香の耳もとにささやいた。

「美香はおそろおそろ浴槽の縁をまたいで湯のなかに足をいれた。それから、静かに腰をかがめて、胸まで湯に浸った。



自分の全裸の肉体を、Qの目からすこしでも隠すために湯のなかにはいったのだが、バスタブは透明であり、湯も当然のことながら透明だった。しかも、浴槽の底には、淡いピンク色の照明が設備されていた。

湯のなかでかかんでも、羞恥をかくすことにならなかった。美香は背中をまるめて、両手でおおえるだけ前身を、おおった。

そんな美香を観察しながら、Qはすこしのためらいもなく、同じ浴槽のなかへ、はいってきたのである。

Qのたくましい肉体が沈むと、湯は勢いよく浴槽の外へあふれた。

「ああ、いい気持だ」

Qは、天井をむいて大声でいうと、両手でざぶりと顔を洗った。

それから、美香の右手首をとると、浴槽内に装置されているプラスチックの手枷に、パチンとはめた。同じように、左手首もパチンとはめた。

Qの手つきはあざやかだった。美香は身をひねるひまもなかった。鳥が翼をひろげたような形になって、美香は両手をひろげたまま湯のなかで固定された。両手首の高さは、ちょうど肩のあたりである。

さらに両足も、やや左右にひろげた形で、片足ずつ、べつべつに浴槽の底についている足枷にはめられてしまった。

美香は中腰になって湯に浸ったまま、立つこともできなくなってしまったのである。

美香の表情が、また悲しくくずれた。

「乱暴はしないとおっしゃったのに……」

乳白色の湯気のなかから、怨みのこもった目を、Qにむけた。

「乱暴はしないよ。これはただ、美香の手をちよっと動けなくするためのものだ。こうしないと、美香は自分のいちばん美しい魅力的なからだを、隠してしまうからね」

といいながら、Qはあらわになった美香の乳房や、中腰になって浮いているからだのすみずみを、いまさらのように好奇の目でみつけるのだった。

湯の底からの照明の作用で、少女の裸体はところどころがデフォルメされ、いっそう妖しく刺激的にみえるのだった。

「ああ、もうゆるして、かんにんして！」

美香は湯のなかで腰を泳がせながら哀願した。

湯がさわいで、浴槽の外へこぼれた。両手を左右につなげられているので、腰をのぼし

て立ちあがることができない。湯のなかで、ふたつの乳房が、なにかとちがう生きもののよう息づき、妖しくふくらんでゆれた。

Qは、屈辱と羞恥にもだえてくねる湯のなかの美しい肉体を、目を細めて観賞した。その目は、しだいにあらわな欲望をむきだしにして、ぎらぎら燃えてくるのだった。

しかし、Q自身の肉体には、美香の心をおびやかす、なんの変化もおきなかった。健康な男だったら、だれでも起こす反応が、Qにはなかった。Qが自分で言ったように、その意味では、たしかに「だいじょうぶ」だったのである。

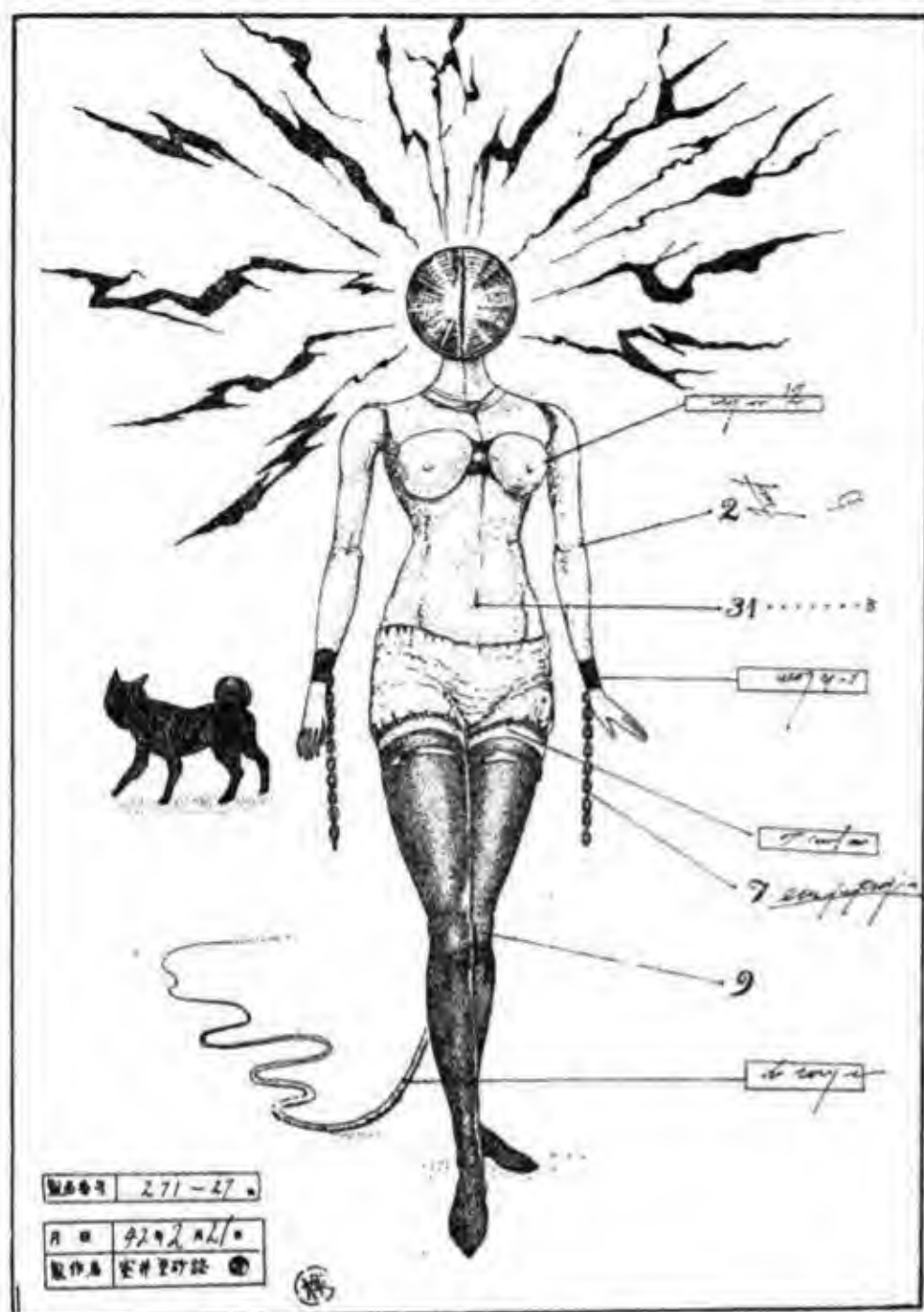
美香の白い肌が、バラ色に変化してきた。湯はぬるいのだが、長くはいつていると、のぼせてくる。美香の肉体が完全に美しいバラ色に染まったとき、Qが手枷と足枷はずした。そして言った。

「さあ、あがりなさい」

シコが手伝って美香のからだを湯のなかからひきあげた。

浴槽の縁につかまったまま、美香は大きく呼吸した。皮膚のすべての部分があざやかなバラ色に染まっている。ことに尻から太腿にかけての色が、たべてしまいたいほど、なめ

僕のイメージ『人工美女青写真』室井亜砂路



らかで美しい。

シコは、そのバラ色の裸身を、スポンジマツトの上に横たえた。

「よく静かにしていたわね。これからもおとなしくしているのよ。あばれたりしたら、すぐに手錠と足錠をかけますからね」

意地の悪い口調で、シコが注意した。

Qもまたスポンジマツトの上にどっかりと

腰をおろし、あぐらをかいだ。そして、逃げ

ようとする美香のからだを引き寄せ、膝の上に抱きあげた。

「ああ、もうゆるして。かんにんしてください！」

美香は祈るように両手を前に合わせ、全身を縮めて哀願した。

「洗ってあげようというのだ。こわいことは

なんにもない」

尻ごみをする美香の腕をつかんで、Qは強引に自分の前へ引きすえる。そして、スポンジに石鹸を、ぬりたくり、美香の乳房の周囲から洗いはじめるのだ。

洗うというより、それは愛撫に近いものだった。美香の全身の皮膚は石けんの泡で、たちまち白くなった。その泡のなから、美香の魅力的な肌が顔をだしている。

「ああ、いや、いやッ。やめてください！」

美香は泣き声をあげ、泡に包まれた肩や腰をくねらせた。

しかしQは楽しくて楽しくてたまらないという表情で、念入りにスポンジをすべらせるのだ。

肩や肉、腹部や背中、そして尻から太腿、ぷりぷりした、まるい弾力を指で押してたしかめながら念入りに洗いつづけるのだった。ピクッピクッと反応する、その手ごたえが、なんとも、たまらない愛らしさなのだ。

しかし、美香にとっては、気が狂いそうになるほど、いやらしいQのスポンジだった。

「ああ、ああ、もうやめて……ああ、もうもうそんな……うう、うう、うう、お願いです、そんなに強く、ああ、こすらないで……」



もう、もう結構です……あ、やめて……ああ  
いやッ、いやッ、いやッ

美香の裸身はしだいにぬるぬるしてきて、  
つかまえにくくなっているのだが、Qにはそ  
れも楽しいらしく、石けんのついたスポンジ  
で、なおも執拗に洗いまわすのだった。

「子どもだ、子どもだと思っていたが、結構  
おとなみたいなのところもあるんだね。もうす  
っかり一人前だ。いや、一人前以上かな、フ  
フ……。そろそろ動かないでじっとしてい  
なくてはいけないよ。りっぱなからだをして  
いても、美香はやっぱり赤ちゃんなんだから  
ね。赤ん坊は、どこを洗われても、静かに、  
にこにこ笑ってはいくれないからねよ」

「ああ、もうゆるして……うッ、うッ……や  
めてッ、かんにんして！」

美香は、白い泡のなかで、もたえる。

「だめ、だめ。そんなにあばれると、また手  
と足を縛ってしまふよ。せっかく清潔にして  
あげようというのに、そんなわがままを言っ  
てはだめだよ。わからない赤ちゃんだねえ」  
興奮してくると、妙に女性的な口調になる  
のが、Qの癖だった。美香には、それがいっ  
そう気味悪く、いやらしい。

「う、う、う、やめて……ああ、やめてッ！」

「あばれちゃだめだと言ったのが、わからな  
いのかい。ほら、手がすべった。あばれるか  
らだよ。ほらほら、また手がすべった」

「ああ、もう、もうやめてッ。ああッ」

「ほんとうに美香はかわいいねえ。これも、  
これも、このところも、みんなかわいい」

ビニール製のダッチワイフをひっくり返す  
ように、Qは美香のからだを裏にしたり、表  
にしたりして洗うのだ。それは、かなり腕力  
のいる仕事だった。Qの額から、汗が流れは  
じめた。

「あ、あ、う、う、う、もうやめて。ゆるし  
てください。もう放して。ああッ！」

「だめだよ。不潔にしておく、いやなお  
いがしみついてしまうからね。ほら、また手  
を出す……そんなことをしてはいけないと言  
っただろう。そんなに、羞かしがることはな  
い。わたしは美香のお父さんだよ。赤ちゃん  
は父親のことをきかなければいけない」  
「もうやめてください、お願いです。もうや  
めて。ああッ、あれッ！」

美香は、せつない声をあげてのけぞった。

「本当に、なんというきれいな、すべすべし  
た肌なんだろうねえ。この石けんは、一個千  
円もする高級品だから、こうして念入りに洗

うと、美香の肌はもつとなめらかに美しく輝  
いてくるよ。女の子は、やっぱり美しいこと  
が一番だ。美しくない女の子なんて、この世  
に存在価値はないからね」

「うッ、うッ、うッ、やめて。ああ、やめて！」

「フフ……もうやめるよ。すみからすみま  
で、すっかり洗ったからね。これで美香のか  
らは女神さまのように清潔に、美しくなっ  
たよ。さあ、シコ、美香とわたしのからだの  
上に湯をかけておくれ」

Qの全身も泡だらけになっていた。

シコが、ハンドシャワーの湯を、Qと美香  
の肩から、そそいだ。こまかい泡は、みるみ  
るうちに二人の皮膚からすべり落ちて、また  
もとの裸体が現われてくる。

「さあ、もう一度、お湯のなかにはいって、  
さっぱりしようね。洗ってもらって、いい気  
持だったろう。わたしは、汚い女の子は、き  
らいなんだ。わたしに氣にいられようと思っ  
たら、まず清潔にすることだ」

Qは美香を立たせようとした。しかし美香  
は肩をまるく縮め、うつむいて泣いていた。

「シコ、美香を風呂のなかへいれなさい。あ  
んまり力をいれて洗ったので、わたしは、す  
こし疲れた」

やや不機嫌な声になって、Qはいった。本  
当に疲れたのだ。とくに右腕が痛い。

Qにかわって、シコが美香の肩に手をかけ  
た。

「またお湯のなかにはいるのよ。あら、どう  
したの。立てないの？ 困ったわねえ。また  
わがままが始まったのね。どうしても立てな  
いのなら、私の銀のムチを持ってきましょ  
うか？」

銀のムチときいただけで、美香の首すじが  
ピクリとふるえた。あのするどい突き刺すよ  
うな痛みが、美香の臀部から背髄にかけてよ  
みがえったのだ。

美香は、よろよろと立ちあがった。タイル  
の上に両足をふみしめる。Qが疲れたように  
美香も疲れていた。Qよりも美香のほうが数  
倍も疲労を感じていた。Qは楽しみながらの  
労働だったが、美香は羞恥と屈辱とたたかい  
ながらの、つらい長い時間だった。

バスタブのふちをまたいで、美香はふたた  
び湯のなかにはいった。つづいて、Qがはい  
った。そして、美香と向きあって坐った。

美香の首すじに鼻をおしつけて、Qはクン  
クン、においをかいだ。

「石けんの香りが肌のなかにしみこんで、あ

あ、いいにおいだ。石けんのにおいばかりで  
はない。この湯のなかにはね、あまり強い香  
りではないが、女の肌を美しくする高価な薬  
が混入してあるんだよ。湯から出てすこした  
つとわかるが、美香の肌は前よりもいっそう  
やわらかく、すべすべになり、上品なおい  
を発するようになってはいるはずだ。うれしい  
かい、美香」

いいながら、Qはさっきと同じように、美  
香の左右の手首をつかんで、浴槽の内部に装  
備されているプラスチックの手枷につなぎと  
め、両足も同じように足枷にくくりつけた。

美香はまた中腰の不安定な姿勢になって、  
湯のなかに沈んでいなければならなかった。

首から上だけが、湯の表面に出ている。乳  
白色の湯気に包まれた美香の、屈辱と恐怖に  
耐えている表情が、神々しいような美しさで  
Qの目にうつった。

Qの表情が、欲情のためにふくれあがり、  
あえぐように唇をひらいた。しかし、ふくれ  
あがったのは顔の筋肉だけで、他は反応を示  
さなかった。

Qは右手のさきで、湯のなかに浮いている  
美香の淡紅色の乳首をつまんだ。

「ああ、いやッ！」

という美香の嫌悪の声も、もう弱かった。  
わずかに首を左下にねじった。湯がゆれて浴  
槽の外にこぼれた。

Qはつぎに左手をのばすと、こんどはもう  
片方の乳首をつまんだ。つまんでおいて、指  
さきに力をいれると、左右同時に強く手前へ  
ひっぱった。

「ひいッ！」

美香は、のどを天井にむけて泣いた。

泣いた表情も可憐で美しかった。泣きなが  
ら美香は、首を前後左右にふって、Qの手を  
はずそうしたが無駄だった。左右の手首は浴  
槽内部の手枷に固く、くくりつけられている  
のだった。

美香の目から涙があふれ、汗とまじりあっ  
た。あまりのなさけなさに、美香は顔をふる  
わせて、むせび泣いた。涙は、あとからあと  
から、あふれ落ちた。

「ごめん、ごめん。乱暴しないと約束したの  
に、悪かったね。だけど、あまり美香がかわ  
いいもんだから、つい、手が出てしまったん  
だよ。美香があまり美しすぎるからいけないん  
だよ。美しいものに手をのばしたくなるのは  
人間の本能だからね」

Qは、左右の乳首から指をはなした。



たしかに、それは愛撫だった。しかし、美香にとっては、苦痛と屈辱でしかなかった。

美香の肌の色が、湯にあたためられて、また透明なバラ色になった。

そのあざやかな色彩が、湯を透してQの目の前三十センチほどの位置に、甘美な香りを発しながら、ゆれていた。

「痛い思いをさせたおわびに、これからシコに頼んで、美香の顔にお化粧をしてあげようね。美香をもっともっときれいにするんだ」

少年のように声ははずませてQはいった。

「いやです、私はお化粧なんかしたことがありません。お化粧は嫌いなんです」

泣きながら、美香は首を横にふった。

「そうだね、美香の顔は、お化粧なんかしたくても美しい。しかし、もう十七歳なんだから、すこしぐらいお化粧してもいいだろう。」

ここにいるシコは、他人の顔にメーカーシップをすることが、非常に得意なのだ。シコにやってみようと、信じられないくらい美しくなる。自分でも気がつかなかった美しさが発見できて、とても楽しいよ」

「いやです、そんなこと」

美香の目から、新しい涙があふれた。これではまるでオモチャではないか、人形では

ないか。

しかし、美香の拒否を承知するようなQではなかった。いやがれば、いやがるほど、楽しみの感度もまた、増えるというものだ。いつまでたっても従順にならないところが、またうれしい。案外、シンは強情な娘なのだ。この強情なところが、育ちのよさを証明しているようにも思える。

シコが、そばからいった。

「そうですよ、お嬢さま。これから私が、きれにお化粧してあげます。美香さんは、もっともっと美しくならなくてははいけないわ。安心して、私におまかせなさい。朝ご飯は、それからにしましょう。お化粧するって、とても楽しいことなのよ」

シコの脳裡には、意地の悪いアイデアがひらめいたのだ。

美香の顔に化粧しながら、じわじわといじめてやろう。自分たちのことをQに密告した腹いせに、チャンスをねらって、できるだけ苦しめてやろう。

このままでは、すまされない。私たちの復讐のおそろしさを、たっぷりと思い知らせてやろう。

シコは、陰険な微笑を胸のなかにうかべ、

めがねの奥を光らせた。

「そうだ、きれいになった美香と、むかい合って朝食をとろう。しかし、待てよ。その前に私は、反省室へ行かねばならない」

Qは、上気した顔でいった。

肉体そのものには、あまり変化を示さないのだが、美香と一緒に入浴したQは、あきらかに欲情していた。がまんできないほどであった。

しかしQは、その欲望を美香にむけて性急に爆発させるということはしない。美香という貴重な素材は、でき得るだけ、大切に扱いたかった。

欲情したときに、Qが脳裡に思いうかべたのは△反省室▽に放置してある四人の女のこどだった。

監禁したまま、すでに一時間以上たっている。ふくれあがっている欲望を始末するには、適当な女たちであった。

「シコ、わたしはこれから反省室へ行行って、女たちのようすをみってくる。美香はお前にまかせから、親切に、やさしくお化粧してあげなさい」

と、Qはいった。

「かしこまりました」

## 読者ギャラリー『花に吹く嵐』岡 たかし



シコは忠実に頭をさげた。

Qがなぜ急に、反省室へ行くと言いだしたのか、シコにはわかっていて。Qの心の動きを、シコはほとんど直感的に推測することができる。

シコはQの秘書であり、片腕であり、ある意味では分身でもあった。

シコにとって、Qのいないほうが具合がいい。美香を思う存分いじめられる。あとでQに叱られない方法で、堂々と苦しめることが

できる。

Qは浴室をでると、手早くガウンをひっかけた。下着は一枚もつけない。素肌の上に、絹のガウンをひっかけ、紐を前で軽く結んだだけである。

そして、廊下へ出ると、地下二階にある反省室へおりていった。

地下一階にある浴室から反省室までは、エレベーターに乗るほどの距離もない。Qは足早に階段をおり、廊下を歩いた。

## 絶妙の技巧

Qは、反省室のドアをあけた。

同時に、四人の女の苦悶にうめく体臭が、ムツと鼻さきにおった。

それは、女の深部からにじみ出ているような、なまなましい臭気だった。

A子は、あぐら縛りにされて、背中を柱にくくりつけられていた。

B子は両手首を天井から吊られ、両足は極限までひらいたまま、細い金属棒に縛りつけられていた。両足とも宙に浮き、かすかにゆれている。

C子は、B子と同じように白い金属棒で両足首をひらいて縛りつけられ、天井から逆に吊るされていた。つまり、足を上に、頭を下にして、吊りさげられているのである。しかも両手は背後に革紐で縛りつけられていた。

D子は、うしろ手に縛られた身を、責め馬マシンの上にくくりつけられていた、D子のまたがっている馬は、忠実に震動をつづけていた。頭から水をかぶったように、D子の全身はぬれていた。自分の皮膚からふきでる汗であった。



馬の背中に装備してある、乗りてを責めつける突起物が一時も間断のない責めをつづければ、あぶら汗が流れるのも当然だった。

D子は失神寸前の状態におちいついていた。反省室にはいったQは、まず責め馬マシンのスイッチを切った。

馬は震動を停止したが、馬の背中の柱に縛りつけられているD子は、ぐったりと目をとじ、動かなかった。

革紐に締めつけられ、巨大な白桃のようにくびれあがっている左右の乳房が、あらあらしい呼吸をみせてゆれている。

おびただしい汗は、D子のはいている水色のパンティをびっしょりぬらしていた。

A子は赤いパンティを、B子は黄色いパンティを、そしてC子は緑色のパンティをはかされていたが、そのほとんどが汗にまみれて光っていた。

馬の震動をとめたQは、つぎに、逆さ吊りにされているC子のロープをゆるめて下におろした。このままあと三十分も放置すれば口や鼻から、血をだして死んでしまう。

C子は、縛られたまま、ながながと床の上に横たわった。両足をひろげた金属棒は、そのままである。

つぎに、B子をおろす。これは両手首をひとつに拘束されて天井から鎖で吊られているだけだったが、全身の体重を一カ所にかかれて、手首のさきは紫色にふくれあがっていた。これも足は金属棒によって極限までひらかれたままである。

最後にQは、A子をくくりつけた柱の縄を解いた。

背後の支えを失ったA子は、あぐら縛りのまま、ごろりと床の上に横転した。えび責めの形は、そのままである。

激しい拘束の苦痛をやわらげられた四人の女は、いっせいに哀願するような切実なうめき声をあげた。なまぐさい、ぬらぬらした女のおいが、また、どっとあふれ出る。

「よく辛抱したな、女たち」

その臭気に顔をしかめながらQはいった。

「お前たちが、どういう理由で、そんな目にあっているのか、そろそろわかっていいころだ。だが、それをしつこく訊くまい。そのうちに、お前たちのほうから、かならず言いだすにちがいないからな」

いいながら、Qは部屋の隅においてある椅子へ腰をおろした。そして、いま充滿している自分の欲望に奉仕する女を選択した。

Qが坐った椅子は、この「夢の城」のたいていの部屋に常備されているものだった。

この椅子は、勿論、Qだけしか坐ることが許されない。よりかかる背中の部分は、たっぷりと余裕があつて、しかもスポンジを貼りつけたようにやわらかい。よく長距離バスなどに使われるリクライニングシートに似ていたが、あれよりも更に弾力と余裕があつた。

ただし、腰をおろす場所がやや浅く、しかも、丸くえぐれこんでいた。たとえば、人間の顔がすっぽりはまるような大きさに、くりぬかれているのである。さらに、坐ったままで楽に移動できるように、四本の脚に車がついていた。

Qは、ひじをかけるところに両腕を軽くのせ、楽な姿勢で女たちの汗にぬれた顔を眺めた。

苦痛にゆがんではいるが、それぞれに美しい。奉仕をさせるには、D子がいいだろう、とQは思った。

あの女だけ、すこしひどい目にあわせすぎたようだ。めずらしく、D子に対して、憐憫の情が、わいた。

ひとつ、なぐさめてやろう。

Qは椅子から立ち、責め馬マシンの上から

D子を解き、かつぎおろした。D子は、ぐったりとして床の上にくずれ落ちた。

Qは、椅子をそのD子の前に引いてくる。

「D子、奉仕をさせてやる。起きろ」

その声に、D子はのろのろと顔をあげた。

疲労の濃い、濁った、にぶい目でQの顔をみあげ、それから足をひろげたQのポーズをみた。

「奉仕をさせてやる。こい」

また、Qがいった。そして、さらに足をひろげた。

D子は四つん這いになり、下半身をひきずるような格好で、じりじりとQの足もとへ進んだ。

血の気を失っているD子の表情に暗い灰色の情念が生まれた。

D子は、さらに犬のように前へ近寄った。

**四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る  
団鬼六作『花と蛇』特集第四弾**

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しません。只今、若干在庫がありますので、未入手の向はお早いに是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。

略号「花」 定価五〇〇円

そして、低いうめき声をあげながら、その奉仕をはじめた。

Qは両足をだらしなく投げだし、椅子の背に深く、からだをもたせかけた。

D子のテクニクは、巧妙なものだった。

すべて、Qとシコが仕込んだのである。

新しい汗がD子の額からにじみだし、それが鼻の両側に大粒のしずくとなって流れ始めた。D子は一心不乱になって、その奉仕に埋没した。

Qは顔を天井にむけて、はじめのうちはなにかに耐えるような表情をしていた。が、その表情は、たちまち変化した。

Qもまた、唇をひらいていた。

いま、Qのまぶたの裏側には、美香の面影がよみがえっていた。

全裸で、あの浴槽のなかに手足をくくりつけられ、屈辱にあえいでいる美香の白い愛らしい顔が。さらにまた、オシメの交換を待っている魅力的な美香のポーズが。

Qは放漫な姿勢で、夢幻の世界をさまよっていた。自分の四肢はだらりと力なく投げだしたまま、まったく動かさない。動かす必要がないのだ。

Qは眉をしかめた。それは不快からくる表

情ではなかった。不快とは正反対の感情だった。QはD子のテクニクのなかに、完全に理性を消滅させていた。

D子の絶妙といえる奴隷的奉仕にもてあそばれて、Qは恍惚の海のなかへおどりだしていった。どこまでも広く、官能的な乳白色の海だった。乳白色は、美香の肉体そのものだった。Qは全身を包まれてあえいだ。陶酔の波が急激におおいかがぶさってきた。D子はのどを鳴らしていた。

Qはかすかに声をあげて吐息した。

D子は四つん這いのまま、犬のように舌を出して唇の周囲をなめまわしていた。

A子とB子とC子が、濁ったガラス玉のような目で眺めていた。濁ってはいいるが、その奥底に、どこか血走った嫉妬と羨望の光があった。

三人の女が、三方からみつめるなかで奉仕を受けることは、Qの快楽をいっそう強める効果をもっていた。しかも、三人とも革紐やロープで強く縛りあげられていて、この部屋から逃げる自由はないのである。

QにもD子にも、羞恥はなかった。純粋な快楽主義のなかに没入していたのである。

——(未完)——





## 流れる雲に身を託して

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

荒<sup>あら</sup>尾<sup>お</sup>慶<sup>けい</sup>子<sup>こ</sup>

私は、七階にあるマンションの一室から窓の外を眺めてペンを走らせています。東側の窓からは一〇〇メートルほど先に走っている高速道路の上を玩具のように自動車が動いているのが見えますが、音は聞こえません。

南側の窓を眺めると、目を遮るものは何もなく、青空に浮かんだ白い雪が、窓の四角い空間の中を流れてゆきます。

白い雲の流れをぼんやり眺めていますと、

雲が動いているのか、自分のいるこの部屋が動いているのか、わからなくなってしまいました。電車の窓から眺める外の景色が動いているのではなく、電車が走っているのだということとはよくわかります。でも、地球という大きな物体が自転しているため、宇宙に浮かんでいる雲が流れているように見えるのか、無知な私には、よくわかりません。

このマンションに移り住んだ当初、私は七階建ての最上階のこの部屋の窓から下界を眺めて、ふと妙な気持ちに襲われたのです。

自分ひとりが宇宙の中に浮かんでいて、そして自分のまわりを下界がぐるぐると廻って

いるように思えたのです。そんな錯覚と共にもう一つ恐ろしい誘惑が、私の心を捉えました。南側のアルミサッシを開けると、そこは幅一メートルぐらいのベランダになっていて物干しに使ったり植木を置いたりするのに使っているのですが、胸の高さのフェンスを越えると、百何十メートルかの高度から簡単に宙に浮いてしまわれるのです。

私は幾度となく、そんな誘惑に強く、かられる自分の心を恐ろしいと考える反面、過去一カ年に起こった自分の運命の激変を思うとノイローゼになるのも無理はないと自分に言い聞かせるのでした。

私は二十三才になったばかりですが、過ぎ去った一カ年は私にとっては、十年にも相当する長い長い年月だったような気がします。二十二才の春、私は遠縁に当たる夫と見合結婚しました。

夫は脱サラリーマンというのでしょうか、今まで五年間勤めていた会社をやめて、独立して事務用品文房具複写機などの卸を始めていたのですが、電話の取次などで、どうしても家の留守番が必要だということで急に結婚の話が持ち上がったそうです。

遠縁といっても姻族なので直接血のつながりはなかったのですが、身元を調べるというような手間も省け、見合即結婚というあわただしさで、私も勤めていた商事会社を予告もなしに退職して、近くの神社で結婚式を挙げたのでした。

夫は商売を長く休むわけにはいかないというので新婚旅行もたった一泊、日帰りでも行ける近かしの温泉へ行ったきりでした。

そんなわけで旅行から帰った日から、私は大忙しでした。

夫は退職金や貯金に父の援助をたして一軒の家を買って店にいましたが、商品を所かまわず積み上げて足の踏み場もないくらい

で、その整理がまた大変でした。

「この商売が成功したら、郊外に大きな家を建てて住まわせてやるから頑張ってくれよ」と夫は言っていました。なにしろ、たった二人きりですから、朝は毎日五時に起きて私は食事の仕度を始め、夫は配達する荷物をオートバイに積み込むのです。とても、新婚の甘いムードなんて、あったものではありませんでした。それでも私は、夜おそくまで伝票の整理を手伝ったり、時には集金に走り廻ったりしました。

仕入先のT文房具株式会社の社長が先代のあとを継いだ若い人でしたが大層理解のある方で資力の乏しい私達を助けて金融面でもよく面倒を見て下さいました。しかし、得意先が増えるに従って仕入れの資金も不足勝ちになり、私もよく銀行通いをしました。

でも、そうした苦しい時期も永くは続かず固定した得意先が次々と増え、この調子だったら、目抜通りに店舗を借りて店員の二、三人も雇って商売が出来るかと夫と二人で話し合っていた頃のことです。

私はその日のことを思うと、胸もはり裂けるばかりの悲しさに襲われ、泣いて泣いて、泣きつくした筈の涙が、またひとりでに溢れ

出てくるのです。

窓の外を流れる白い雲をぼんやり眺めていると、少しは心が落ちついてくるのですが私にはとても、その日のことを思い起こしたりペンにしたりは出来ません。

朝、元気でオートバイに乗って出かけた夫が交通事故に遭ったというのです。

気も動揺して駆けつけた病院のベッドで夫は私の手を握り「慶子、慶子」と、そう二言三言いったきりで、あとは何か、いいかげんしたが、かすかに口を動かしただけで息を引きとってしまいました。

葬儀、商売の後始末、それに賠償の交渉。

私は、そのあわただしさの中で、ゆっくり泣いている暇もなかったのですが、すべてが終わって、夫のいない家で、たった一人、ぼつんと坐っていて、始めて慟哭しました。

夫の使っていたお箸、お茶碗、ライター、手垢の残っている机。私はそれらを見る度に涙を新たにしました。夫の体臭のまざまざと残っているその家に、とても住んでいる気はしなかったのです。

一週間ばかり泣き暮した末、私は夫の両親に、この家はお返ししますと申し出ました。残っていた商品は仕入先の会社に引取って



頂いて融資して貰った弁済に当てましたが、未収もありましたが売掛金の回収が約三百万円はありました。それに交通事故の加害者が一方的に違反をして起こした結果だったためその賠償金や私に対する慰謝料が示談で七百八十万円ばかり入りました。

それで私は、せめて、この家だけは夫の御両親にお返ししたいと申し出たのです。しかし、義父は、「敏夫が慶子さんに残した家だから、住むのが嫌だったら、売るなり貸すなり自由にしなさいよ」と言ってくれました。

家は平家でしたが、土地の値段が上がっているからということとで五百八十万円に売れました。私はマンションの権利金にするためにその中から百万円だけ頂き、あとは夫の御両親にお返ししました。

「それでは、その中から敏夫のお墓を作る費用を出させて貰いましょう。あとはお預りしておきますから、必要なときは、いつでも言っして下さいよ」

そう言って下さいました。

私がこのマンションに移ってきましたのは結婚して丁度十カ月目でした。

夫と半年住んでいた家を引きはらって、少しは悲しみが薄らぐかと思ったのですが、実

際は、落ち着けば落ち着くほど、悲しみて胸が痛んでくるのです。

「私は一体、どうしたらいいのでしょうか。」

夫が自分の命と引替えに、私の手に残してくれた金が一千万円以上もあります。

利息だけでも、私は遊んで暮してゆけるかもしれません。3DKの、このマンションの一室で朝風呂に入りながら、何不自由なく暮すことの出来る結構な身分なのです。

そう思いながらも、この心の淋しさ、心の空虚さは、なんとしたことでしょう。

私は一生、夫との想い出を胸に秘めて暮してゆかねばならないのでしょうか。

僅か六カ月に満たない夫婦生活だったのですが、それは何も知らなかった私を大きく変えていたのです。

若し一年前のOLのままでいたとしたら、私は相変わらずあの商事会社に勤めて平凡な娘の生活を続けていたに違いないのですが、彼との結婚によって私の人生は大きく激変してしまったのです。

もう大分前から奇クの愛読者だった彼によって私は縄の味を教えられたのです。彼は決して粗暴な行為や暴力

を揮うといったことは少しもなかったのですが、いつも、しなやかな縄を準備していて、私をいろいろな方法や形で縛り上げました。

縄を用いたとき、彼は殊の外元気で活々としていましたので、私もいつとはなしに、そんな行為を歓迎するようになっていました。やがて、縄を見るだけで興奮するようにさえなりました。縛り方もいろいろに変化しましたが、責め方（私には責めという感じはなく、愛撫という方がよかったのですが）も、いろいろに変化しました。

私の好んだ縛り方は股間縛りであり、責め





方は剃毛とかパイプ責めでした。

肌に傷をつけたり、痛い目にあわすといったことは彼も私も好みませんでしたので、専ら羞恥責めに類した行為が工夫されたのですが、奇クが私達の教科書として大いに活用されたのも事実です。夫の残した蔵書の中で私が大切にこの部屋まで持ってきた奇クは、今も私の手元に保存されています。

私が始めて彼の手によって剃毛された夜のことを、私は今でもはっきりと覚えているのです。狭いながらも、一軒の家に二人っきりで住んでいた私達ですから、忙しい仕事の合間を盗んでプレイを楽しんだのです。

ゆっくりテレビを見る暇もなかったくらい忙しかったのですが、やはりこの道だけは別

です。それに疲れを知らぬほど二人は若かったのしょうか。夫は商品の整理が終わり、私が帳簿の記入を終えたのは、もう十二時を過ぎていました。

「もう寝ようか」

どちらからともなく、そう言いあって奥の寝室へ向かったときです。彼は

「今日は少し変わった責め方をするよ」

そう言って私に手に握っているものを見せたのです。いつの間に持ってきたのか、それは夫が鬚剃りに使っている電気カミソリなのです。ケゲンな顔付きでいる私の耳元に口を寄せてきた夫の囁きを聞いて、私は思わず

「いやよ、いやよ」

と叫んで逃げていました。でも拒否した格好の私は、自然と蒲団の上

にうつ伏せに倒れていたのです。迫ってきた夫は忽ち私を裸にすると直ちに後手に縛り上げたのです。

といっても簡単に裸にされたり縛られたものではありません。私も極力抵抗しましたし拒否もしました。そうして二人で揉みあうのが又

楽しかったのです。

操られたり、軽く抓られたり、その合間にキッスや頬ずりを繰り返され、ぐったりとなつた私は、いつの間にやら、しなやかな縄で縛られていました。

私のジャングルは比較的濃い方なのですが夫の手にした電気カミソリがブーンという軽快な音を立ちはじめますと、端の方から奇麗に刈りとられてゆきます。彼は時間をかけて、ゆっくり楽しみながら、丹念にその剃毛の作業を続けてゆきます。

私は限らない羞かしさの中に彼の強い視線とリズムカルな振動を感じて、消えいりたような衝動を感じたのです。

彼はその行為の間中、何度も何度も「美しい、美しい、素晴らしい」という言葉を口から出していました。

私は「後手に縛られているのだから、どうしようもないのだわ」という諦観の気持が、一層自分の気持を昂めているのを知って、その心の昂まりを如実に現わしている個所を夫にあらわに見つめられるのを、たまらなく羞かしく思ったのですが、そんな羞恥心が更に一段と私の心を昂ませたのです。

それから後で行なわれた二人の接触は、そ



それはそれは素晴らしいものだったのです。そうした連想が私をして剃毛を大好きにさせたのでしよう。昼間、そんな事を夢にも考えていなかったときでも、一寸した動作のとき、チクチクと生えかけの刺戟を受けると、あの夜の激しかった行為のことを思い出して、思わず頬を赤らめるのでした。

「チクチクと痛くって、イヤ！」

私はそう文句を言いますと、彼は安全剃刀を用いて丁寧に剃ってくれました。

次に私を魅了したのはパイプ責めでした。

勿論、後手小手に縛られた上で、両足は左右に八の字に開いたままで固定されるように膝頭のところで縛られます。そうして身動き出来ないように縛られて責められるのが私にとってよいのです。縛られないままだったら興味は半減するような気がします。

口には、猿ぐつわも何もされていませんから、私は自由に喘ぎ呻き声を上げることが出来ますと、お膳を中心とした腹部が、大きな波のうねりのように悶えますが、彼はそんな私の姿を眺めるのが好きだと申しました。

夫のパイプの操作は巧妙をきわめていました。いろいろな角度から、或は強く、或は弱く、時には深く、時には浅く、執拗な責めを

加えられますので、いつも私は悶絶の苦しみを味わって、あらぬことをくちばしりながら昇天してしまいました。

窓の外を相交わらず、白い雲が悠々と流れています。

あの頃は、ゆっくり空の雲なんかを眺める暇なかなかったのですが、それでも充実した生活だったように思えます。

私はまだ二十三才。もう一度OLの生活をやってみようかしら、と思ったりします。

実家の両親は、一人暮らしは淋しいだろうから、帰ってきたらどうだと言ってくれますが傷心の私の姿を見ると、強くすすめることもなく、気持が落着くまで、気ままに暮しなさいと、なぐさめてくれます。

一人で部屋にこもっていても気がめいってしまっていけない。旅にでも出てはどうだろうと考えたり、また、死んだ彼のことを追憶するのは、せめてもの供養になるのだと考えたり、私は南向きの日当たりのよい部屋で物思いに沈む日が多かったのです。

権利金八十万円で借りた、このマンションはエレベーターで七階まで昇り、踊り場から一曲りすると私の部屋です。

ドアを開けると玄関になっていて、左側

に下駄箱、スリッパに履きかえて上がると、居間兼食堂。向かい合わせに台所と浴室。トイレは浴室の隣についています。

その奥が南側と東側が開いた明るい部屋で今、応接セットを置いていますが、一番ゆつたりした広い部屋です。右側は寝室になっていて、ベッドを置いてあります。

エヤコンがよくきいていますので、薄着のままですることが出来るのが私には気に入っています。朝起きるなりシャワーを浴びて、バスタオルを腰に巻いたままの姿でぼんやりと物思いに耽っているのが好きなのです。

七階にある部屋なので素裸でいても、窓ガラスの向こうから覗かれるような心配はありません。春の陽が明るくさし込んでいても、この部屋は外界より孤立した密室なのです。いわば、私の城なのです。一日中遊び暮していても誰に文句を言われる筋もないのです。外部との連絡は一台の電話が十分その役を果たしてくれますから物思いに耽った私が少しも外出しなくても不自由はないのです。

そうです。私がこのマンションに引っ越してから外出したのは、数えるほどしかないのです。陽に当たらないで入浴ばかりしているのですから一層色が白くなったように自分

でも思えてくるこの頃です。

こんなとき、私の心の中に一つの妖しいときめきが起こってきたのです。ベッドでの一人寝のひととき、うつらうつらと転寝して、醒めるでもなし眠るでもない、半睡の状態で考えたことは、奇クの巻末に広告してありますハモデル募集Vのことだったのです。

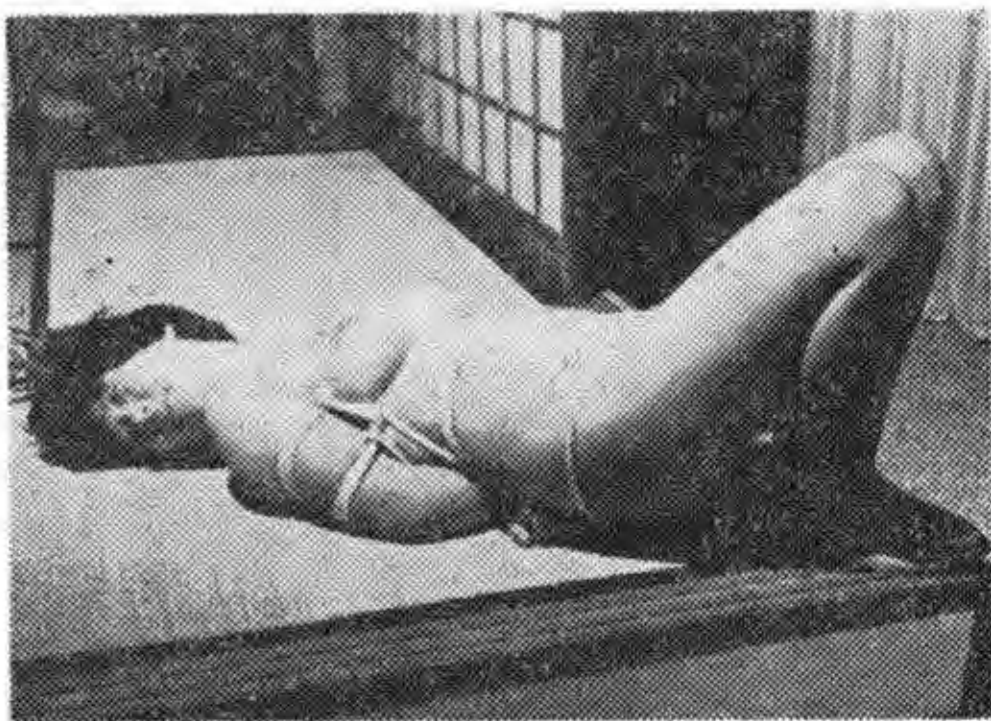
私の今のこの心の空虚さ、そして、もやもやとしたこの心のかげりを慰やしてくれるのはモデル志願しかないと考えたのです。

幸いにして私は今、何の職業も持っていない。自分の心のもやもやを吹き飛ばして、それ、その上、多額のモデル料まで貰えるのですもの、こんな好条件でないでしょう。

未亡人といっても、まだ二十三才なんですもの、子供を生んだ経験もないんですから、娘だといっても十分通ると思います。出来るだけ、よい条件で売り込もうと考えました。

私は早速、奇クの編集部へ宛て手紙を書きました。

住所、氏名、年令、身長、体重、バスト、ウエスト、ヒップ、これは本当のことを書きました。また股間縛りや剃毛、パイプ責めが好きなのことも、ありのまま書きました。ただまだ未婚で恋人と、そういう経験があったよ



うに書き、今はその恋人とも別れて一人であること記しました。

やっと決心して手紙を投函したのは、三月の末の風の強い日でした。ポツンと手ごたえの心強い音がしてポストの底に自分の手紙が落ちたのをたしかめて、始めて私はホッと安堵した気がしましたが、自分の写真を入れているのに気づき、少し不安にかられまし

た。そういえば、あれだけ夫と緊縛プレイをしておきながら、一度も写真撮影をされていなかったのです。

でも、そんな私の心遣いにも拘らず、四日目に奇クの編集部から速達の返事が届きました。モデル料に交通費を支給するとありましたので私はマンションの前にハイヤーを呼んで指定された処まで行こうと考えました。どうせ交通費を払ってもらえるのなら、その方が楽だと思ったからです。その上、土地不案内の所で自分で探す手間も省けますから。

日時が三回分と、出頭する場所と連絡場所の電話番号が書いてありましたが、私は一番近い日を選んで出頭すると電話で返事しました。指定の日は三日あとなのです。私はその日まで、それはそれは永く感じました。

毎日、部屋にとじ籠って本や雑誌を読んだりテレビを見たりしているのですから、待つ時間を永く思うのも無理ありませんでした。

その日、私は入浴のあとで念入りに化粧をして頼んであったハイヤーを待ちました。

指定された場所は大阪の北郊にあるM観光ホテルでした。万国博のおかげで高速道路が四通八達しているので私の住んでいるマンションからは距離にしたら相当あるのですが、



車で飛ばしたら一時間半ぐらいで行けるのではないだろうか。

M観光ホテルは緑の樹々が茂る丘の上に建った地上八階の豪華な近代的ホテルでした。

私が着いたのは指定の時間より三十分ばかり早かったので、フロントに伝言を頼んでおいて一階のコーヒールoungeで待っていました。コーヒーを飲んでいましてフロントの人が呼びにきて、八階の予約してある部屋の番号を知らせてくれました。

その部屋は特別室でツインのベッドのある洋室と十畳の和室、それに広いベランダがついていました。カーペットを敷きつめた廊下の向こうにはシャワーのついた浴室とトイレ鍵の手になった出入口に沿って洋服箆笥や下駄箱がついていました。浴衣やスリッパなど四人分あるところを見ると、定員が四名の部屋なのかもしれません。

ベランダに出てみますと、大阪の街が見はるかす遥か彼方に一望で見下ろすことが出来ます。私は部屋に落ちてから、今の今まで落ちておられた自分の平静な心が急に波立ってきたのを押さえることが出来ませんでした。これから自分が生まれてはじめて責めのモデルになるのだと思うと、知らず知らずの

うちに肩口が、がくがくしてくるのです。落ちて、落ちて——

自分で自分の心に、そう言いかせていても、自然に腰掛けて揃えている両の膝頭が、ふるえてくるのを、どうすることも出来ませんでした。

それから約三十分のち、私は洋間のカーペットの上に縛られてころがされてしまいました。あれほど自分で望んでおきながら、いざ縛られてみると、私は恐ろしさの方が先に立って自分でもよくわかるほど身体がふるえているのです。

今、自分の部屋の机の上でペンを走らせながら、その時のことを追想してみますと、結構楽しかったと思えるのですが、実際にその時は、そんな余裕はありませんでした。

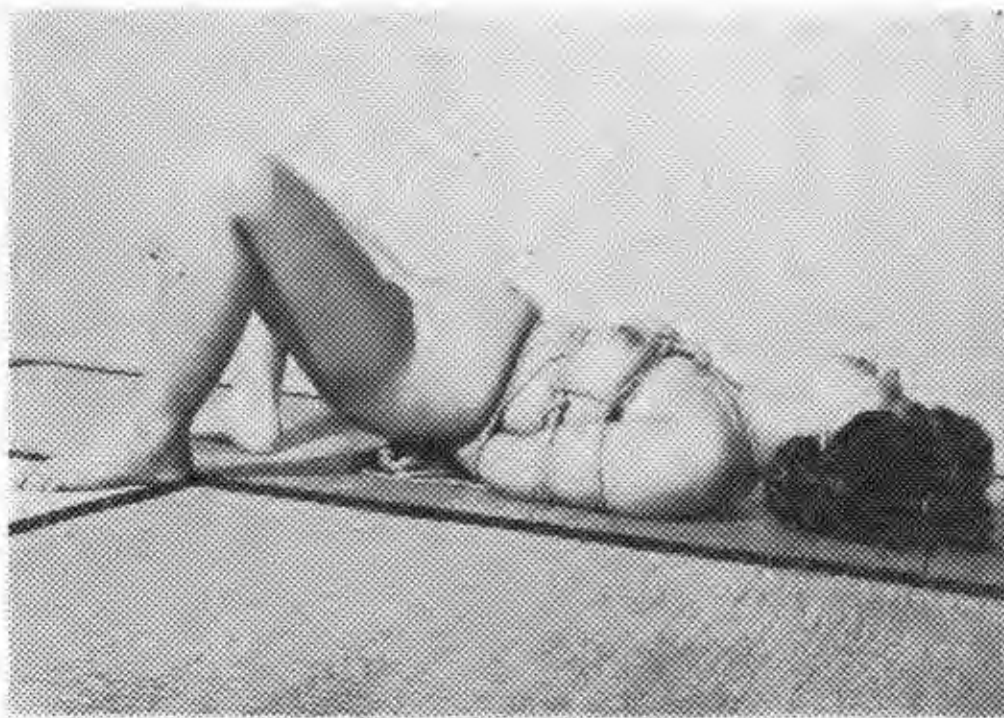
それで、今から丁度一週間前に当たるその日の責めモデル体験の中から、殊に私の印象に残ったことを断片的に書いて御報告にかえたいと思います。

私が一番刺戟を受け、そしてそれだけ感激も深かったのは、やはり私が手紙でも書きました剃毛責めです。

高手小手に縛られた上で、いろいろなポーズをとらされて写真撮影をされたあとのこと

ですから、私も大分慣れてきていて、膝頭や肩口の、がくがくふるえるのもおさまって、全身がリラックスしている頃でしたので、素直にベッドの上で剃毛を受けることが出来たのだと思います。

真白い毛布の上に散乱する纖毛をチラチラと視線に止めますと、ああ、私はもうすでに八責められる女になってしまったのだと





いう諦観の念がひしひしと胸に迫ってきて、やるせない気持ちになります。

実際その十数分間は、私は処上に横たわった鯉同然で、人身御供になった自分が、いとおしくて仕方がありませんでした。また、それだけ、痺れるような刺激がありました。

「刺っておくと、あとの写真撮影が楽だから助かるよ」

と、そう言って丁寧に剃り落としないように電気カミソリを使って下さいました。

ああ、これで私は完全に生え揃ってしまふまでの幾日間かを生地獄の中で過ごさなければ

ばならないのかと考えると、一層心の昂まりが激しくなってくるのです。

女性にとって、一体、これほどの甘美な羞恥責めってあるでしょうか。

剃毛前と剃毛後の接写大写しを数枚宛撮影されました。

次に入った責めは、やはり私が手紙でお願いしておきました股間縛りでした。

第一回目は、太股の付け根から両側に締めつけられる縛り方でしたが、この縛り方自体余り痛いものではありませんでしたが、若い女性にとっては、身体を動かすたびに次第に連結された縄が締まってきて、あらわになるという羞恥に満ちたものでした。殊に完全に剃毛されていますので、鋭いカメラの目を逃れることは出来ませんでした。

身体の中心部を咽喉の下から臍の上を通して、真つ二つに割り裂いてゆく股間縛りはポーズをとるたびに喰い込んできますので、たしかに痛い縛り方でした。とうとう、途中で辛抱することが出来ず、縄をゆるめて頂いたほどでした。

女だてらに、何故股間縛りなどを望んだのだらうと自分でも不思議に思うくらいですが『好みの趣向』と改めて聞かれてみますと、

経験の浅い私にとっては股間縛りにしてほしいという答えが出てきたのかもしれない。

若し、亡き夫が生前に私に対して、『浣腸責め』や『笞打ち』を施してくれていたならば、或は私は、それを好きになっていたかもしれません。こうしてペンを走らせていても心の奥底の片隅で、そうした変わった責め方をされてみたかったと考える私です。

私が自分から志願して責めのモデルになってよかったと、しみじみ思うようになったのは、やはり八パイ責めVを施されてからでした。縄の種類を変えて縛り方を変えて、何度となく写真撮影をされました。その中の幾枚かを、出来るだけ数多く私は焼付けして頂戴したいとお願いしておきました。

写真電球が皎々と照らし出しているベッドの上で高手小手に縛られた私は仰向けに寝かされていました。揃えて縛られた両手首は背中の下敷きになっていましたが、ベッドのクッションがよくきいていますので、余り痛くはありませんでした。

両肢は八の字に開くために両の膝頭を縄で



括って背中との縄と連結されていましたが、仰向けに転がされたので、両肢は一層、大きく左右に拡げる格好になってしまいました。

パイプの魔手は、そんなあられもない私の花芯に、執拗にしかも巧妙に、あくなき暴虐をほしいままにしました。

そのときの私の表情の変化は幾枚となくフィルムに印されました。カメラが狙っていると考えただけで、私の昂まりは一段と激しくなるのを覚えました。

感極まった悲鳴や涕泣はカセットテープでレコーディングされ、悦慮に悶絶する表情はカメラに捉えられました。

そのときの写真は今、私の手元にありますが、速達で送って貰ってから二日間、私は自分のそんなポーズを何度眺めたことでしょうか。この写真を手にしたことで、私は自分で告白の文章を書こうと決心したのです。

生活の苦勞をしなくてもよい私が、有り余る暇をもてあまして、過去の思い出に耽っていたのが、告白の文章を書くということによって、心の寄りどころとしたのです。

私はこれからも、幾度となく縛られたり、写真をとられたりするでしょうが、今回のように新鮮で強い感激を受けた責めのモデルは

二度と経験できないだろうという気がしてならないのです。

私は六カ月足らずでしたが、すでに結婚生活を経験した女性です。正直いって、一人暮らしの淋しさは空闊の淋しさにつながっていることも、よく承知しています。

私の前に、もし、こんな私でもよいという素晴らしい男性があらわれたら、私の抱いている感傷も消え去ってしまうかもしれません。

窓から眺めた青空の白い雲も、次第次第に茜色に変わってきました。

いつもの習慣で、夕食の仕度をしなければと思い、そして、ふっと数カ月前の家庭を持つていた頃のことを、なつかしく想い出し胸が締めつけられるように痛むのです。

「ああ、私は今は一人だったっけ」

そう思い直して、起ち上がりかけた腰を、もう一度、下ろすのでした。

たそがれ時になると、あれ以来、そうした物思いが幾度となく私を襲ってきました。

責めのモデルを経験したなら、そうした発作も消えてなくなるのではないかと考えていました。が駄目でした。

夜が訪れて、赤い灯や青い灯が目の下に輝いてくると、私の孤独感は一層、深まってくるのです。

男性だったら、こんなとき、きっとお酒を飲んで騒いだりするのでしょね。

でも、私はお酒をたしなめませんし、女性一人がお酒を飲む場所なんてないでしょう。

『剃毛責め』や『パイプ責め』のことを想い出しますと、私は全身が身ぶるいするような激しいショックが足先から迫ってきます。

これからの私は、一体どのように暮したらよいのだろうか。

そう考えて、薄暮にうす墨を流したような下界の街並みを眺めました。

明日は、久しぶりに実家の両親を訪ねてみよう。

そう決心して、私は静かにベッドに横になりました。

すっかり暮れてしまった空には、白い雲が残り陽に映えて、浮かんでいるのが窓のガラス越しにチラリと見え、忽ちに闇の中に消えてゆきました。

七階の空間に浮かぶこの部屋は、至って静かです。

私は夢を見ていました。  
楽しい夢を――。